

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第55集

燒 場 遺 跡

A 地 点

平成4・5年度 東駿河湾環状道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第55集

燒 場 遺 跡

A 地 点

平成4・5年度 東駿河湾環状道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



「平安・鎌倉古道」に伴う溝状遺構



第三スコリア帯黒色带1下面検出土坑1断面

序

焼場遺跡A地点は、箱根西麓から愛鷹山南麓の広大な裾野を横断する東駿河湾環状道路建設に伴う緊急調査として、建設省沼津工事事務所から委託を受け、平成4年4月から平成5年3月まで現地調査を行った。本遺跡では旧石器時代から江戸時代はじめまでの遺構、遺物を検出した。本書はその調査報告書である。

焼場遺跡A地点の調査は東駿河湾環状道路建設に伴う最初の調査である。この路線内には三島地域に限っても30以上の遺跡が分布し、特に旧石器時代から縄文時代の遺跡が多い。さらに焼場遺跡では旧石器時代・縄文時代はもとより、箱根越えのいわゆる「平安・鎌倉古道」と考えられる遺構をも検出することができた。この焼場遺跡の立地する尾根の南側には江戸時代の東海道（現国道1号線）が通つており、中世から近世、近現代の交通の基幹を考えるうえで重要な資料を提供したといえるだろう。また縄文時代においては、東海と関東の境界として古くより注意されてきた地域であるが、特に早期の終わりから前期のはじめにかけての関東地方と東海地方それぞれの特色をもった土器が豊富に出土しており、両地域の比較も含めて当地域の編年を考えるうえでも貴重な資料と考えられる。

旧石器時代、静岡県では磐田原台地とあわせて日本の他の地域に比べて多くの遺構が造されていることが知られているが、焼場遺跡でも約2万7千年前と考えられる土坑が2基検出された。同様な遺構は隣接した初音ヶ原遺跡群でも列状に並ぶ形で検出されており、後期旧石器時代はじめ、すでに統合された集団関係が成立していたことを示すものとして注目される。現在、東駿河湾環状道路建設に伴う調査が下原遺跡や加茂ノ洞B遺跡でも行われているが、同時期の土坑が次々と検出されており、その土坑掘削の當力の大きさを考えると、これまでの日本旧石器時代観を見直す発見といえるだろう。

調査ならびに本書の作成にあたっては、建設省沼津工事事務所・静岡県教育委員会・三島市教育委員会をはじめとする関係機関各位に多大な援助・協力をいただいた。この場をかりて深くお礼申し上げたい。また、調査を温かく見守っていただいた地域の方々、現地および整理にあたった研究所の職員や助言、指導をいただいた多くの方々にも感謝いたしたい。

1994年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

例　　言

- 1 本書は三島市川原ヶ谷に所在する焼場遺跡A地点の発掘調査報告書である。
- 2 調査は平成4年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部建設局沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成4年4月から平成5年3月まで現地調査を実施、平成5年4月から平成6年3月まで整理作業を行った。
- 3 平成4年度の調査体制
所長 齊藤忠、常務理事 鈴木勲、調査研究部長 山下晃、調査研究3課長 佐藤達雄、
調査研究員 伊林修一・横山秀昭・笠原芳郎
- 4 平成5年度の調査体制
所長 齊藤忠、常務理事 鈴木勲、調査研究部長 植松章八、調査研究3課長 佐野五十三、
調査研究員 笠原芳郎・厚地淳司
- 5 本書の執筆は笠原が行った。
石器の火測・トレースは、(南)アルカ、笠原芳郎、小野千賀子、鈴木里江、高橋裕子が行った。
土器の実測・拓本・トレースは、村川裕子、山下洋子、高橋元子、鈴木洋子、高山みゆき、鈴木輝美が行った。
遺物写真撮影は湊嘉秀、石器石材の観察は森嶋富士大が行った。
- 6 調査では次の方々、団体に御指導、御助言、御協力を賜った。厚くお礼申し上げる。
芦川忠利 安藤政雄 池谷信之 池谷初恵 伊藤恒彦 長田実 谷谷昌彦 鈴木忠司 鈴木敏中
瀬川裕市郎 関野哲夫 高尾好之 高橋豊 辻真人 辻本崇夫 前島秀脈 山下秀樹 山本恵一
向坂鋼二 三島市立山田中学校 三島市老人福祉センター（敬称略、個人名はアイウエオ順）
- 7 平成4年度に概報を刊行している。概報と本書の記述に差異がある場合は、本書の記述を以て報告とする。
- 8 資料は全て静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 9 本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所が当たった。

凡　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一をはかった。

- 1 調査方眼設定は、国家座標（平面直角座標図系）の軸線を基準に、任意に設定した。
- 2 方位は上記のX軸に従った。
- 3 出土遺物の取り上げは、各方眼区ごとに通し番号を付して行った。
- 4 遺構実測図の基本は、1/40であるが、状況によって縮尺を変えている。
- 5 石器の実測は原則として第三角投影図法に従った。
- 6 出土遺物実測図は、小型石器4/5、中型石器1/2、大型石器1/4、土器1/2の縮尺を基本に、状況によって縮尺率を変えている。
- 7 標準上層の色調は、新版『標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修1992）を使用した。

目 次

序	石斧の出土状況	30
例言	2 遺 物	60
凡例	石 器	60
目次	有舌尖頭器	60
	石 鐸	60
	石 七	61
第Ⅰ章 調査の概要	削 器	61
1 調査に至る経過	楔形石器	61
2 調査の方法	石 核	62
試掘調査	磨製石斧	62
本調査	打製石斧	62
	礫 器	63
第Ⅱ章 地理・歴史的環境	石 盆	63
1 地理的環境	台 石	64
2 歴史的環境	磨石・敲石・凹石	64
3 基本上層	砥 石?	67
第Ⅲ章 中・近世の遺構と遺物	土 器	99
1 遺 構	1 群	99
道路状遺構	2 群	104
道路状硬質遺構	3 群	114
溝状遺構	4 群	124
十坑・ピット	5 群	128
2 遺 物	6 群	130
土器（陶磁器類）	7 群	134
土器（土師質）	8 群	135
瓦	9 群	135
土製品・砥石		
金属器		
錢 貨		
第Ⅳ章 繩文時代（富士黒土層）の	第V章 旧石器時代の遺構と遺物	168
遺構と遺物	第1節 休耕層内の遺構と遺物	168
1 遺 構	遺 物	168
豎穴状遺構	細石器に関係すると	
土 坑	思われる遺物	168
倒木痕跡	槍先形尖頭器	169
集団遺構	ナイフ形石器	169
石皿の出土状況	台形石器	169
	搔 器	170
	右刃状剥片	170

剥 片	170	第IV章　まとめ	183
敲 石	170	平安末～近世初頭	183
第2節 第I 黒色帯中の遺構と遺物	174	縄文時代	183
遺物出土状況	174	旧石器時代	186
遺 物	174	休場上層の石器群	186
第3節 第II 黒色帯中の遺構と遺物	175	第I 黒色帯中の文化層	186
遺 構	175	第II 黒色帯中の文化層	186
遺 物	175	第IIIスコリア帯	
第4節 第IIIスコリア帯		黒色帯1下面検出の土坑	187
黒色帯1下面検出の遺構	175		
土 坑	175	付 編	
その他の遺構	177	焼堀A遺跡の基本層序・古植生とローム層中の 土坑のしゃへい物について	
第5節 中部ローム層内出土の遺物	177		

パリノ・サーヴェイ株式会社

挿図目次

第1図 調査区	3	第24図 倒木痕	36
第2図 周辺の遺跡	5	第25図 縄文時代遺構	37
第3図 周辺地形図	7	第26図 石斧出土状況図	37
第4図 現況地形図	8	第27～70図 各区遺物出土状況図	38～59
第5図 標準土層図	10	第71図 有舌尖頭器・石鏃1	68
第6図 土層断面図	11	第72図 石鏃2	69
第7図 中・近世遺構全体図	14	第73図 石 七	70
第8図 道路状遺構1	15	第74図 削器1	71
第9図 道路状遺構2	17	第75図 削器2	72
第10図 中・近世遺構	19	第76図 削器3	73
第11図 中・近世陶磁器1	21	第77図 楔形石器1	74
第12図 中・近世陶磁器2	22	第78図 楔形石器2	75
第13図 中・近世陶磁器3・土師質土器1	23	第79図 石 核	76
第14図 中・近世土師質土器2	24	第80図 磨製石斧	77
第15図 中・近世土師質土器3・近世遺物	25	第81図 打製石斧1	78
第16図 屋 瓦	26	第82図 打製石斧2	79
第17図 中・近世遺物	27	第83図 打製石斧3	80
第18図 錢 貨	28	第84図 打製石斧4	81
第19図 縄文時代遺構全体図	31	第85図 打製石斧5	82
第20図 竪穴状遺構	32	第86図 打製石斧6	83
第21図 土坑(1)	33	第87図 穰 器	84
第22図 土坑(2)	34	第88図 石核・石斧・砥石?	85
第23図 土坑(3)	35	第89図 石皿1	86

第90図	石皿 2	87	第121図	3群4類土器4・3群5類土器	156
第91図	石皿 3	88	第122図	4群土器	157
第92図	石皿 4	89	第123図	早期後半の土器1	158
第93図	石皿 5	90	第124図	早期後半の土器2	159
第94図	台石・磨石1	91	第125図	5群土器	160
第95図	磨石2	92	第126図	6群A類上器1	161
第96図	敲石	93	第127図	6群A類上器2・6群上器1	162
第97図	磨石・敲石	94	第128図	6群土器2・前期以降の土器	163
第98図	磨石・凹石・敲石	95	第129図	2群1類土器・3群4類土器	164
第99図	磨石・凹石・敲石	96	第130図	口縁突出部・底部1	165
第100図	磨石・凹石・敲石	97	第131図	底部2	166
第101図	磨石・凹石・敲石	98	第132図	休場上層の石器分布図	167
第102図	1群1類土器	137	第133図	細石器	168
第103図	1群2類土器1	138	第134図	休場上層の石器1	171
第104図	1群2類土器2	139	第135図	休場上層の石器2	172
第105図	2群1類上器1	140	第136図	休場上層の石器3	173
第106図	2群1類土器2	141	第137図	第I黒色帯中の分布と石器	174
第107図	2群2類・3類土器1	142	第138図	第II黒色帯中の分布と石器	176
第108図	2群3類土器2	143	第139図	第IIIスコリア帯黒色帯1下面 検出土坑配置図	178
第109図	2群3類上器3	144	第140図	第IIIスコリア帯黒色帯1下面 検出土坑1	179
第110図	2群3類・4類上器	145	第141図	第IIIスコリア帯黒色帯1下面 検出土坑2	180
第111図	2群土器	146	第142図	第IIIスコリア帯黒色帯1下面 検出土坑2・土層	181
第112図	2群上器	147	第143図	第IIIスコリア帯黒色帯1下面 検出の遺構	182
第113図	2群上器	148	第144図	中部ローム層出土の遺物	182
第114図	2群上器	149	第145図	縄文時代石器出土頻度グラフ	184
第115図	3群1類土器	150	第146図	縄文時代土器出土頻度グラフ	185
第116図	3群2類・3類土器1	151			
第117図	3群3類土器2	152			
第118図	3群3類土器3・3群4類土器1	153			
第119図	3群4類土器2	154			
第120図	3群4類土器3	155			

図版目次

- 図版 1 (1)遺跡遠景
(2)調査前状況
- 図版 2 (1)馬頭觀音
(2)中・近世土坑2
- 図版 3 (1)道路状遺構
(2)道路状遺構東側土層図

- 図版 4 (1)道路状遺構に伴う溝状遺構検出状況
(2)道路状遺構に伴う溝状遺構
- 図版 5 (1)中・近世焼土土坑
(2)中・近世の骨片を含むピット
- 図版 6 (1)縄文時代遺構完掘状況およびトレンチ
掘削状況

- (2)縄文時代土坑群（南斜面）
- 図版7 (1)竪穴状遺構1
(2)竪穴状遺構2
- 図版8 (1)縄文時代土坑II土層
(2)縄文時代土坑II
- 図版9 (1)集疊遺構
(2)集疊遺構
- 図版10 (1)石皿出土状況
(2)石皿出土状況
- 図版11 (1)縄文時代遺物出土状況
(2)石斧出土状況
- 図版12 (1)倒木痕2 土層断面
(2)倒木痕2
- 図版13 (1)第Ⅲスコリア帯黒色帶1 下面土坑1 検出状況
(2)第Ⅲスコリア帯黒色帶1 下面土坑1 土層
- 図版14 (1)第Ⅲスコリア帯黒色帶1 下面上坑2
(2)第Ⅲスコリア帯黒色帶1 下面土坑配置
- 図版15 (1)第Ⅲスコリア帯黒色帶1 下面炭化物集中域
(2)中部ローム層遺物出土状況
- 図版16 (1)中・近世陶磁器
(2)中・近世遺物
- 図版17 有舌尖頭器・石鏃1
- 図版18 石鏃2
- 図版19 石 七
- 図版20 削器1
- 図版21 削器2
- 図版22 削器3
- 図版23 楔形石器
- 図版24 石 核
- 図版25 磨製石斧
- 図版26 打製石斧1
- 図版27 打製石斧2
- 図版28 打製石斧3
- 図版29 打製石斧4・礫器
- 図版30 石核・砥石?・石皿1
- 図版31 石皿2
- 図版32 (1)磨石
(2)磨石・敲石・川石
- 図版33 縄文土器1
- 図版34 縄文土器2
- 図版35 縄文土器3
- 図版36 (1)2群1類土器
(2)3群4類土器
- 図版37 休場上層の石器1
- 図版38 休場上層の石器2
- 図版39 (1)旧石器時代の石器
(2)調査風景

第Ⅰ章 調査の概要

1 調査に至る経過

三島市は、新幹線を利用するならば首都圏へ1時間の距離にある。近年はこの首都圏のベットタウン化により箱根山麓に住宅が進み、それに伴って多くの開発行為が行われてきている。またこれらの影響により幹線道路の混雑、渋滞が深刻な状況となっている。東駿河湾環状道路は、この沼津、三島の市街地を通過する国道1号線およびそのバイパスの混雑を解消するために、沼津市原から浜名町間宮にかけて愛鷹南麓・箱根西麓の標高約100m付近を通過する路線が計画された。これにともなって、三島市川原ヶ谷に所在する焼場遺跡がこの道路の路線上に存在することから、この遺跡を記録保存することが必要となった。

箱根西麓は愛鷹南麓と並んで旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が集中する地域であり、焼場遺跡から山田川を挟んだ対岸にあたる尾根の同様高上には、旧石器時代の重層遺跡であり後期旧石器時代初期の上坑が13基検出された初音ヶ原遺跡群など、旧石器時代から近世にいたるまで多くの遺跡のがこされている。東駿河湾環状道路はこの箱根西麓および愛鷹南麓を横断する形で計画されていて、各台地上には遺跡が存在する可能性が高い。このため平成2年9月10日から14日まで三島市教育委員会の芦川学芸員により三島市内の予定路線内の遺跡確認踏査が行われた。この結果、計31地点の遺跡が確認されている。この内、第13から17地点を平成3年9月4日に静岡県教育委員会文化課、三島市教育委員会と踏査を行い試掘調査の内容を協議した。

2 調査の方法（第1図）

遺跡全体を把握するために、国家座標X=-96,100、Y=40,200を原点0とし、原点をA1に設定。数学座標系にあわせ、X軸を北に10m進むごとに+1増加させ、Y軸を10m東に向かうごとにアルファベットを進める方眼を設定した。図版においても方位および方眼表記（グリッド名）はこの国家座標に準拠する。

試掘調査では、この方眼を基準に10m四方にランダムに配置するように7カ所の試掘坑を設定し、遺跡の範囲および深度を確認した。

本調査では、遺跡全域にひろがると予想された中・近世、および縄文時代に関しては、全域調査を行った。さらに、範囲が限定されると予想された旧石器時代の各文化層は、方眼設定および地形に沿ったトレンドチと3m四方形の縦坑を均等に配置し、文化層が確認された時点でそれらを拡張する方法をとった。

なお、今回の焼場遺跡の調査範囲は、遺跡全体の南側半分なので焼場遺跡A地点と呼称したい。

試掘調査

焼場遺跡（第15地点）の試掘調査は、第16、17地点（下原遺跡）とともに行われた。調査期間は平成3年12月1日より平成4年3月27日まで行ったが、焼場遺跡は平成4年3月4日から27日までである。

焼場遺跡の現況は、市道山山20号線によって、ほぼ北西側、南東側に二分される。この北西側は植林された松林で、南東側が落葉広葉樹を主とした雜木林である。北西側の半分は未賀収地であったため、試掘調査の対象は南東側半分で行っている。

試掘調査の結果、焼場遺跡の試掘坑のすべての富士黒土層（FB）から縄文時代早・前期の遺構・遺物および休場層（YL）より旧石器時代のナイフ形石器が出土したため、その時期の遺跡が予定地のほぼ全域に広がっていることが予想された。この結果を踏まえて平成4年4月1日より本調査の準備を始め、5月13日より現場調査を開始した。

本 調 査

本調査は4月より建設省との協議をおこない、4月末に基準杭を設定、5月上旬に調査事務所を設置した。現地調査は5月13日から開始した。現地は雜木林であり比較的大きな樹木は切り倒されてあったが、低木類や背の高い草などが繁茂しており、これらの伐採に時間がかかってしまった。

試掘調査の結果から、表土除去等に重機を使うことができないため全て人力でおこなった。その結果、この表土除去中に「平安・鎌倉古道」と考えられる遺構を検出したため、この遺構の精査を7月中旬より開始し下旬に写真・尖測を完了した。この道状遺構を解体後、さらにこれに伴う溝状遺構を確認したため8月下旬まで精査を行った。

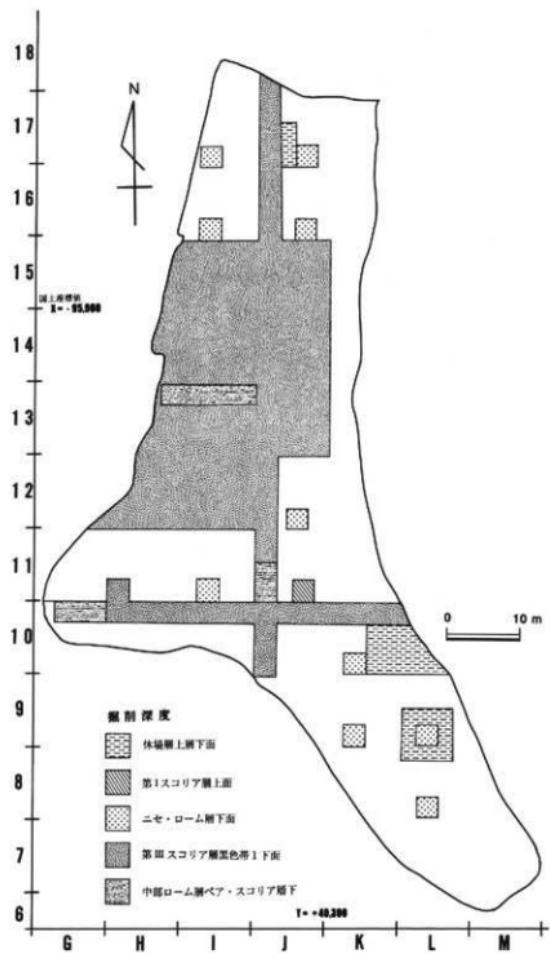
道状遺構の精査と同時に、縄文時代の包含層である富士黒土層aの精査にも7月中旬より開始している。縄文時代早期末の遺物出土が調査区全域にわたり、その型式も多岐にわたるため全分布を記録した。とくに石器では石斧や石皿、磨石などの生産具が多い点が特徴である。

9月いっぱいまで富士黒土層aをはずし終えると、富士黒土層b上面にて縄文時代早期の遺構を確認した。その多くは土坑であったが、堅穴状遺構等も確認された。

また、当初、隅丸方形状の落ち込みが5基確認されたので、これを住居跡と考えたが、半蔵して断面を観察したところ半球状に上層が堆積しており、下層のスコリア層が上方にまきあげられていたことから倒木痕と判断した。これらの遺構確認および精査は2月中旬まで行った。

11月下旬、斜面という立地上、地形を把握するためにグリッド調査と同時に幅3mのトレンチを南北に1本、東西に2本設定した。これにより旧石器時代の調査も開始した。旧石器時代の遺物は富士黒土層a中より縄文早期の遺物と混在して遺跡のはぼ全域で検出されたので、当初は調査区全域に文化層が広がると考えていた。しかし休場上層（YL_u）においてはJ17区で小規模な石器ブロックと、J14区でナイフ形石器を1点確認したのみであり、第I 黒色帯（BB I）で石刃状剥片1点と礫、第II 黒色帯（BB II）で石器及び礫の混在したブロックを1基検出したにとどまった。これらの文化層を掘り下げる過程で、2月中旬、14列トレンチが第Ⅲスコリア帯スコリア4層まで達したところ、直徑約1.5mの円形プランを持つ落ち込みを確認、旧石器時代の土坑を検出した。初音ヶ原遺跡群で検出されたものと非常に類似しており、同様に群を成している可能性を予想して、この土坑周辺約20m四方を第Ⅲスコリア帯黒色帯1の下面で面的に広げた。これによって南西部に約6m離れて2つ目の土坑を検出した。またJ14区で小土坑と、J15杭を中心炭化物集中域を確認した。

これらの遺構の理化学分析を行い、実測が完了した後、土坑1の覆土のはぎ取りを行った。これらの作業が終了後、トレンチ、グリッド坑を重機によって埋め戻し、廃土置場と調査区内の法面養生、資材置場の撤去を行い、3月末に調査を完了した。



第1図 調査区 (1/600)

第二章 地理・歴史的環境

1 地理的環境（第2図・第3図・第4図）

焼場遺跡は三島市街地の北東部、狩野川と黄瀬川によって形成された田方平野を望む箱根西麓の丘陵上に立地する。箱根山は約40万年前から活動し約4万年前にはほぼ鎮静化した火山であるが、山体の各部分で温泉が噴出している点からも地下的エネルギーはまだかなり活発なようである。2度の箱根カルデラの形成と山体が消失するほどの数度の大噴火や河川による開拓により複雑な地形になっているが、西斜面側の三島市・函南町部分は比較的緩やかな斜面となっており、現在でも畠地や住宅地として利用されている。

焼場遺跡はこの緩やかな斜面を構成する尾根の一つにある。この尾根の南側は山田川、北側は沢地川によって開拓されている広い尾根であるが、末端部では加茂の集落となっている谷で浸食されており、焼場遺跡が立地する部分は非常に狭い馬の背状となっている。

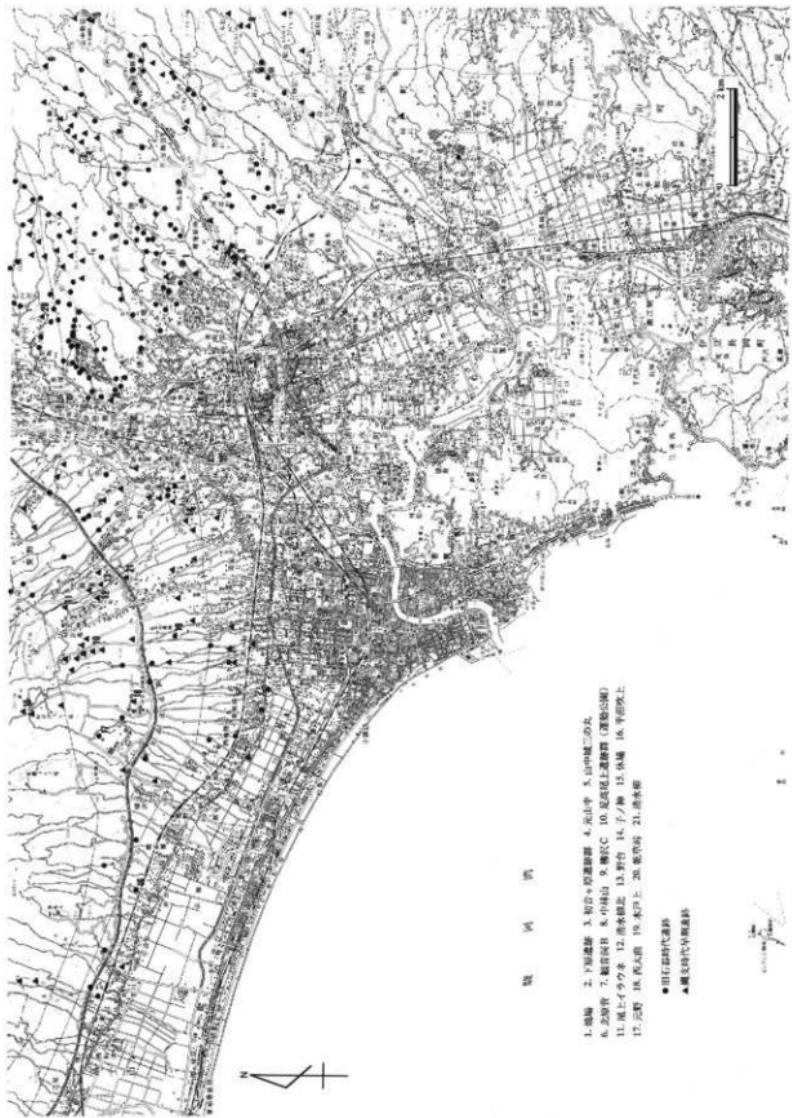
2 歴史的環境

箱根西麓は、現在においても国道1号線や新幹線が通過しており、古くからの東海地方と関東地方を結ぶ重要な地域であった。それゆえ旧石器時代から近世まで連綿と遺跡が遺されており、静岡県内の他地域にくらべて遺跡密度が非常に高い（第2図）。

現在のところ、箱根西麓で最も古い遺跡は初音ヶ原A遺跡（第3図）の第Ⅲスコリア帶中から検出された台形様石器と磨製石斧を特徴とする石器群である。愛鷹南麓で、この石器群に類似するものは中見代I遺跡や清水柳北遺跡、二ヶ洞遺跡でも検出されている。これらの石器群は日本の後期旧石器時代初期に特徴的な石器群であり、箱根西麓は約3万年前の後期旧石器時代が始まった段階ですでに人が生活していたことがわかる。しかし、それ以前のいわゆる前期旧石器時代と呼ばれる時代の遺跡は箱根西麓、愛鷹南麓どちらの地域でもみつかっていない。これから調査に期待したい。

上記した台形様石器と打・磨製石斧を特徴とする石器群のあとは、初音ヶ原A遺跡 BB III文化層や中見代II遺跡 SC III b 1文化層、中見代I遺跡 BB III下文化層、清水柳北遺跡 BB III文化層などで検出されている、縦長指向ではあるが石刃技法に擬らない、一側縁のあるいは刃部側のプランティングが顕著でない二側縁ナイフ形石器を特徴とする石器群（背部のプランティングは上下から頻繁におこなわれ、嵩高な点も特徴的である）と、中見代I遺跡 SC III b 1文化層、菅原沢IV遺跡 SC III b 2文化層などの石刃技法を基盤とした二側縁ナイフ形石器や先端基部加工ナイフ形石器を特徴とする石器群が出現する。この2種の石器群の傾向は次のBB II層中の石器群まで続く。現在のところ、この二つの石器群が共存した例はない。初音ヶ原A遺跡 BB III文化層に石刃素材かと考えられるナイフ形石器があるものの、それぞれの石器群は独立して存在するかのように地点を違えている。なお、初音ヶ原A遺跡では上層のBB II文化層に石刃技法を基盤とした石器群も存在し、あたかも交互に石器群が変遷しているかのような状況がみられる。この時期の石器群が出土する層はスコリアが頻繁に降下しており、こまかい層位編年が可能ため、このような石器群の構造を理解するために資料の蓄積が期待される。

約2万5千年前に九州の姶良火山が大噴火した。この火山から噴出したテフラである姶良・丹波広域火山灰（通称A.T.）が当地でも確認でき、これを基に全国の編年が組み立てられている。この縫層を日安として周辺地域との関係を見渡すと、約2万年前以降、主に関東や中部高地の石器群との関連が強い



第2図 周辺の遺跡 (1/100,000)

ことが考えられるが、在地的な様相も強い石器群が検出される。

愛鷹・箱根上部ローム層の休場層（通称YL）から検出される石器群は、それ以前の遺跡が台地上で局所的な占地をしていたのに対し、台地全域に広がる分布をするようになり、遺跡の規模、遺物量ともに急激な増加を示す。箱根西麓では、調査がおこなわれた遺跡のほとんどからこの時期の文化層が検出されている。また、休場遺跡や野台遺跡、柳沢C遺跡では、旧石器時代では希な石開炉が検出されており、この時期にこの愛鷹・箱根地域が列島内においても重要な地域になっていたことを示すものと考えられる。

約1万3千年前より、土器を製作する文化がこの地域にも出現する。近年まで、丘陵上の遺跡では、有舌尖頭器などの当時期の特徴的な石器群が見つかっていたが、土器が検出されることはなかった。近年、大仁町仲道A遺跡で多縄文系土器が多量に検出されたことを発端に、河川流域や谷部などから多くの遺跡が確認されるようになってきている。特に、葛原沢第IV遺跡では構造のはっきりした堅穴住居跡が検出されており、縄文時代の萌芽を感じられる。

縄文時代早期に入ると、この箱根西麓では遺跡数が大幅に増える。後の時代を考慮にいれても、もつともこの丘陵が利用された時期であると考えられる。特に早期の終わりから前期の初めにかけてピークを迎へ、かなり大きな集落が乾草峠遺跡などでつくられている。

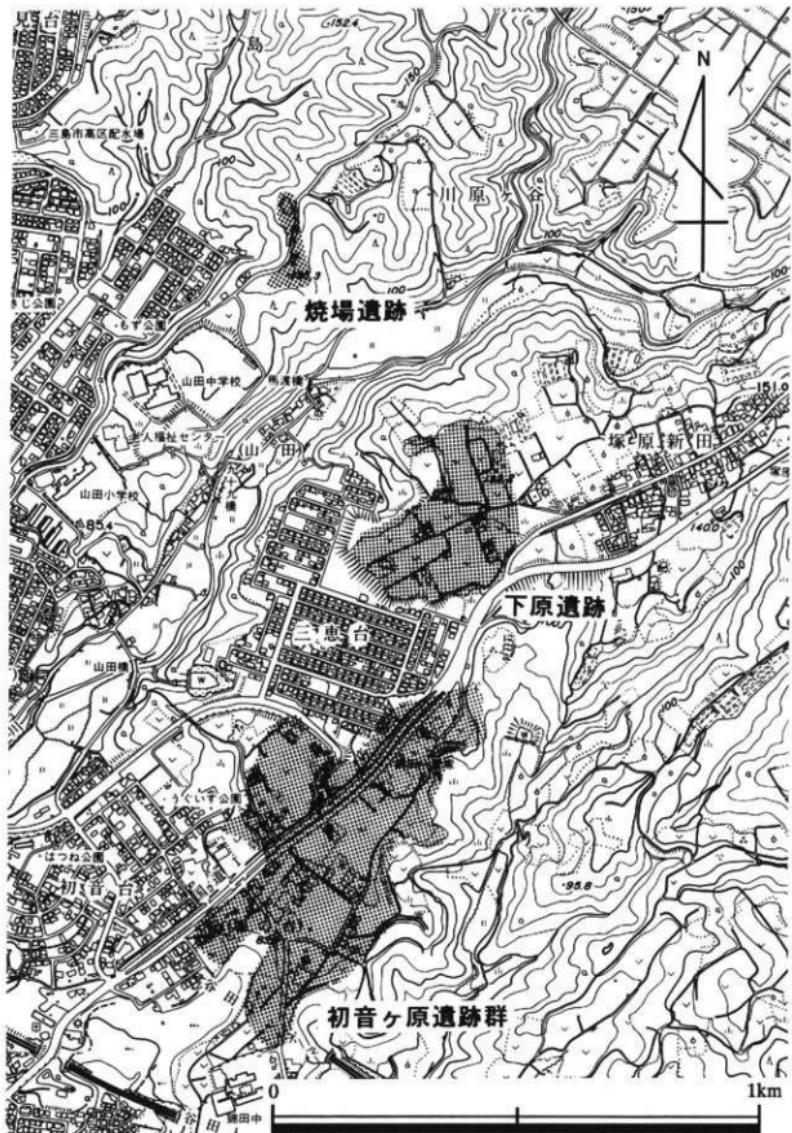
縄文時代前期から中期にかけては遺跡数が減少するが、千枚原遺跡のような比較的大きな集落も形成されている。しかし、中部高地地域のような拠点集落が多く検出されるような状況ではなく、人口も比較的粗な状況であったと思われる。縄文時代後期以降になると、さらに遺跡数が減少する。北山遺跡等、敷石住居跡などが検出されているが、このような遺跡は伊豆中央部の狩野川流域に多くみられ、箱根西麓は主体的には利用されていないようである。この傾向は田方平野で稲作が始まるころまで続く。

九州や近畿地方で稲作が始まつたころ、当地域の状況はよくわかっていない。当研究所が調査した御殿川流域遺跡群の調査では、弥生時代中期中葉の遺物より古く遡るものは検出されていないので、田方平野で稲作が盛んになるのは、弥生時代中期以降ということになるのかもしれない。弥生時代中期後半からは、長伏遺跡や鶴喰遺跡など、集落と考えられる遺跡も多くみられるようになる。長伏上塙辛田遺跡や奈良橋向遺跡などでは、水田跡と考えられる構造も検出されており、この地域の生活の拠点が狩野川等、河川が形成した沖積地に移っていくことがわかる。

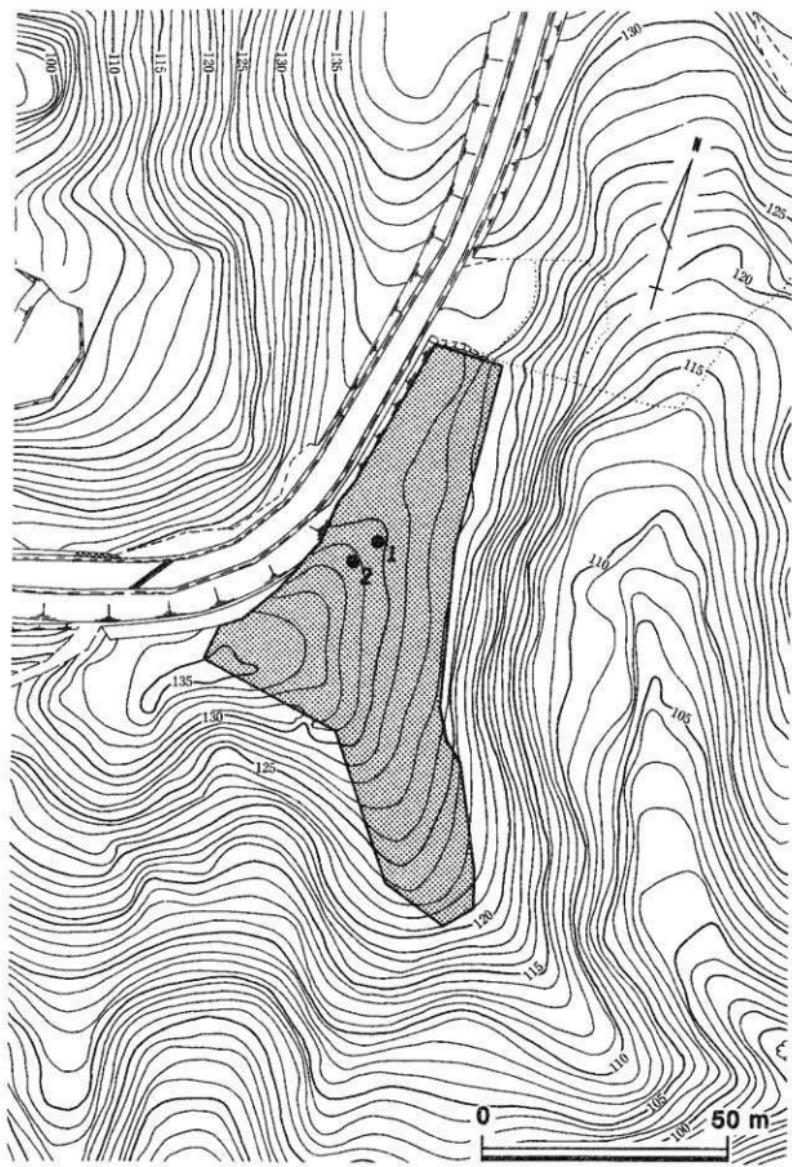
中世、近世にかけては、伊豆の玄関口であり、東海と関東を結ぶ地域であることから、数多くの歴史的事象の跡が遺されている。焼場遺跡の立地する箱根西麓に関しては、後北条氏の構築した山城が長年の調査によって、その内容が明らかにされ有名であるが、戦略的な利用や、東海道箱根往還などの交通流通の場であつて、この時代の丘陵部のほとんどは山林と畑に利用されていたものと考えられる。

古代末期に足柄峠越えの古道が廢れていくにしたがい、鎌倉時代以降、箱根往還が主体になっていく。この初期の街道の跡が、元山中遺跡や焼場遺跡でも検出されたが、詳細は後述したい。

近世になって、江戸に幕府が興されると箱根往還は大規模に整備される。経路は現在の国道1号線にほぼ重複し、現在の交通網の基本となっている。この箱根往還の整備状況は、現在も遺る一里塚や石畳、三島市教育委員会が行っている街道の調査によって、その規模の大きさには計りしえないものがある。このような労力のかけ方から、当時、この箱根往還の重要度がいかに高かったかが十分に類推される。そして現在の国道1号線の交通量や道路整備の状況から、当時以上に現在もその重要度は益々高くなっているといえるだろう。



第3図 周辺地形図（ドットは旧石器時代土坑配置）



第4図 現況地形図（網羅内調査区、●は旧石器時代土坑、尺1:1,000）

3 基本土層（第5図・第6図）

箱根西麓の土層は、基盤となる箱根火山の安山岩、玄武岩の上に周辺火山（箱根火山も含め）のテフラが堆積して形成されている。考古学上で主な対象となる上部ローム層は、富士山起源のテフラが主体となっている。

焼場遺跡は、斜面に形成された遺跡であることや、山林（雜木林）であったことから、耕作による影響が少なく、表土からほぼ完全に土層が保存されていた。しかし、斜面という立地から流失している層もあり、平坦地ほど安定してはいない。

箱根西麓は、愛鷹南麓よりも若干であるが、テフラの供給源である富士山から距離が離れているためか、比べて層分けが困難である。しかし基本的には同じ層序を示し、多分に全体が圧縮されたような感がある。それゆえ、層名は愛鷹南麓に準じたものを用いる。

表土は、黒褐色土であり、樹木の細根が縦横に走っている。遺跡の北半は表土部分が厚く堆積し、数層に分離された。この表土の中ほどに硬質の部分があり、後述する平安・鎌倉古道と考えている。

栗色土層（Ku）は、愛鷹南麓の栗色土層に対比したが、ローム質でなく黄褐色のバミス質土である。

富士黒土層a（FBa）は、黒褐色土で黒味が強い。カワゴハバミスと考えられる白色バミスを含んでいたため、上部の層も混在している可能性もある。縄文時代早期の包含層である。

富士黒土層b（FBb）は、暗黄褐色土層で、下部の休場層へ漸移的に変化する。この層の上面が縄文時代早期の遺構の確認面である。部分的に縄文時代早期の遺物が混入する。

休場上層（YLu）は、明黄褐色ローム層で、柔らかく粘性があり、ややパウダー状である。この層より、旧石器時代遺物の包含層であり、C14年代測定で $14,300 \pm 700$ 年 BP という年代が与えられている。当遺跡でも、ナイフ形石器や台形様石器が検出されている。

休場中層（YLm）は、黄褐色ローム層で、橙色のスコリアを含んでいる。

休場下層（YLI）は、黄褐色ローム層で、橙色、黒色のスコリアを多く含んでいる。

第0黒色帯（BB 0）は暗褐色硬質ローム層で、漸移的に下層の第1スコリア層に変化する。

第Iスコリア層（SC I）は、赤褐色スコリア層である。

第I黒色帯（BB I）は、硬質の黒褐色のスコリア質層で、C14年代測定で $18,030 \pm 450$ 年 BP の年代が与えられている。少量であるが、遺物も出土している。

ニセ・ローム層（NL）は黄褐色スコリア層で、層の中央よりやや下部に始良・丹沢広域火山灰（A.T.）が複認できる。これは全国規模の鍵層となる。

第II黒色帯（BB II）は、黒褐色スコリア質層である。石器ブロックが1基確認された。

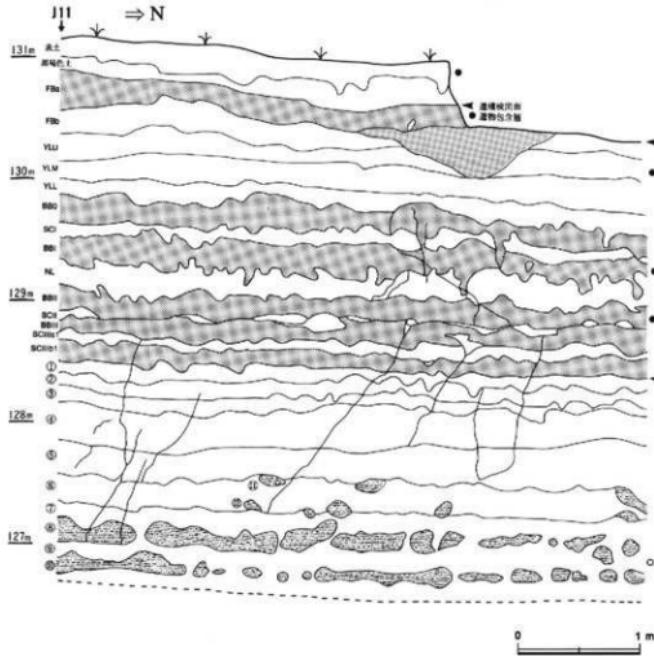
第IIスコリア層（SC II）は、赤褐色のスコリア層。ブロック状に分布する。

第III黒色帯（BB III）は黒褐色スコリア質層で、上部ローム中では最も黒味が強い。C14年代測定では、 $27,200 \pm 2,200$ 年 BP の年代が与えられている。

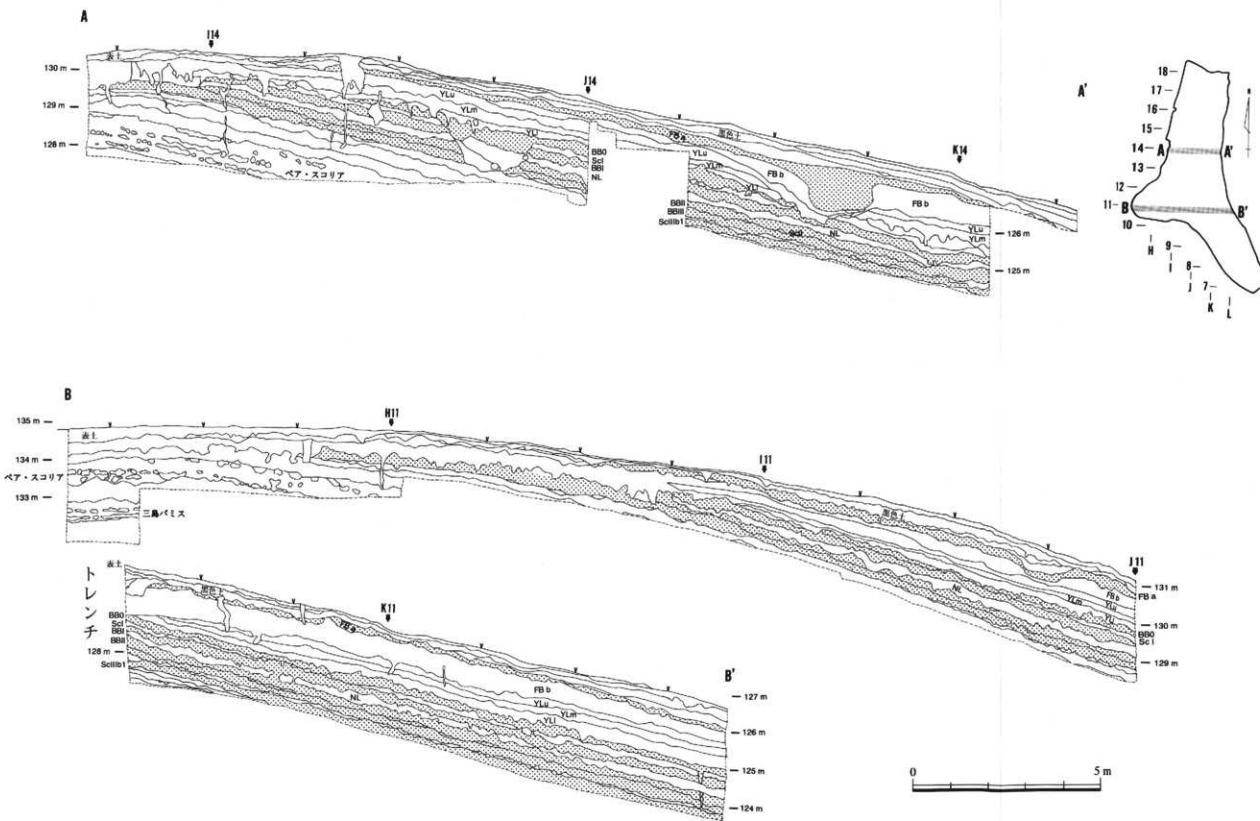
第IIIスコリア帯スコリアI（SC III s 1）は、黄褐色スコリア層で、非常に薄い。

第IIIスコリア帯黒色帯1（SC III b 1）は、黒褐色スコリア質層で、BB IIIよりやや黒味が薄い。この層のすぐ下には、SC IIIスコリア帯中でもっとも硬質なSC III s 4があるため、愛鷹南麓のSC III s 2とSC III b 2を識別できないと考えられる。このSC III b 1の直下が土坑の確認面である。

SC III b 1以下については、SC III s 4が愛鷹南麓の土層と対比できるが、愛鷹南麓では発達するSC III下半部の黒色帯が、箱根西麓では未発達で、焼場遺跡においては中部ローム層と区別できないほどである。対比の鍵層として中部ローム上部のペア・スコリア（焼場遺跡では3層確認されている）を基準に考えると、ペア・スコリアの上位にある黒色スコリアを含む硬質ローム層が上部ロームの下限となるだろう。



番号	土色	土質	備考記録
1	褐色	褐色の風化土。表面は多少の白色風化を示す。	表面は多少の白色風化を示す。
2	褐色風化上	褐色風化上	褐色風化上
3	褐色風化上	褐色風化上	褐色風化上
4	FBB	褐色風化上	褐色風化上
5	FBL	褐色風化上	褐色風化上
6	YLU	褐色風化ローム	褐色風化ローム
7	RBL	褐色風化ローム	褐色風化ローム
8	RL	褐色風化ローム	褐色風化ローム
9	NL	褐色風化ローム	褐色風化ローム
10	129m	BCH BBL SCB1	褐色風化ローム
11	128m	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫	褐色風化ローム
12	127m	褐色風化ローム	褐色風化ローム
13	131m	褐色風化ローム	褐色風化ローム
14	130m	YLU RBL RL NL	褐色風化ローム
15			透水性泥炭 ● 腐物汚泥層
16			
17			
18			
19			
20			
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			
28			
29			
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			
38			
39			
40			
41			
42			
43			
44			
45			
46			
47			
48			
49			
50			
51			
52			
53			
54			
55			
56			
57			
58			
59			
60			
61			
62			
63			
64			
65			
66			
67			
68			
69			
70			
71			
72			
73			
74			
75			
76			
77			
78			
79			
80			
81			
82			
83			
84			
85			
86			
87			
88			
89			
90			
91			
92			
93			
94			
95			
96			
97			
98			
99			
100			
101			
102			
103			
104			
105			
106			
107			
108			
109			
110			
111			
112			
113			
114			
115			
116			
117			
118			
119			
120			
121			
122			
123			
124			
125			
126			
127			
128			
129			
130			
131			
132			
133			
134			
135			
136			
137			
138			
139			
140			
141			
142			
143			
144			
145			
146			
147			
148			
149			
150			
151			
152			
153			
154			
155			
156			
157			
158			
159			
160			
161			
162			
163			
164			
165			
166			
167			
168			
169			
170			
171			
172			
173			
174			
175			
176			
177			
178			
179			
180			
181			
182			
183			
184			
185			
186			
187			
188			
189			
190			
191			
192			
193			
194			
195			
196			
197			
198			
199			
200			
201			
202			
203			
204			
205			
206			
207			
208			
209			
210			
211			
212			
213			
214			
215			
216			
217			
218			
219			
220			
221			
222			
223			
224			
225			
226			
227			
228			
229			
230			
231			
232			
233			
234			
235			
236			
237			
238			
239			
240			
241			
242			
243			
244			
245			
246			
247			
248			
249			
250			
251			
252			
253			
254			
255			
256			
257			
258			
259			
260			
261			
262			
263			
264			
265			
266			
267			
268			
269			
270			
271			
272			
273			
274			
275			
276			
277			
278			
279			
280			
281			
282			
283			
284			
285			
286			
287			
288			
289			
290			
291			
292			
293			
294			
295			
296			
297			
298			
299			
300			
301			
302			
303			
304			
305			
306			
307			
308			
309			
310			
311			
312			
313			
314			
315			
316			
317			
318			
319			
320			
321			
322			
323			
324			
325			
326			
327			
328			
329			
330			
331			
332			
333			
334			
335			
336			
337			
338			
339			
340			
341			
342			
343			
344			
345			
346			
347			
348			
349			
350			
351			
352			
353			
354			
355			
356			
357			
358			
359			
360			
361			
362			
363			
364			
365			
366			
367			
368			
369			
370			
371			
372			
373			
374			
375			
376			
377			
378			
379			
380			
381			
382			
383			
384			
385			
386			
387			
388			
389			
390			
391			
392			
393			
394			
395			
396			
397			
398			
399			
400			
401			
402			
403			
404			
405			
406			
407			
408			
409			
410			
411			
412			
413			
414			
415			
416			
417			
418			
419			
420			
421			
422			
423			
424			
425			
426			
427			
428			
429			
430			
431			
432			
433			
434			
435			
436			
437			
438			
439			
440			
441			
442			
443			
444			
445			
446			
447			
448			
449			
450			
451			
452			
453			
454			
455			
456			
457			
458			
459			
460			
461			
462			
463			
464			
465			
466			
467			
468			
469			
470			
471			
472			
473			
474			
475			
476			
477			
478			
479			
480			
481			
482			
483			
484			
485			
486			
487			
488			
489			
490			
491			



第6図 土層断面図(1/200)

第三章 中・近世の遺構と遺物

焼場遺跡は斜面に形成された遺跡であることから、全体的に土層の堆積が薄い。特に中・近世の文化層に関しては、当初、想定していなかった。しかし、表土除去を人力で行っていたところ、道路状に硬質部分が検出されたことから、この時期が存在することが判明した。遺物は、表土および黒色土中から樹木の根に絡んだ状況で出土している。

1 遺構 (第7図 等高線は現況地形図を使用)

道路状遺構 (第8図・第9図)

道路状硬質遺構

北 I 18区から南 J 13区まで、表土上面から数センチから数十センチに硬質部があり、細長く帯状に延びる。幅広で硬度が高い部分は I 18区から 16区までで、それより南はやや軟質になる。I 15区より南東に延びる部分は枝道と考えられる。流失してしまっているが、本道は南西部の丘陵上に上っていたものと考えられる。本道部分の硬質部は表土直下にあるが、枝道は表土中位に硬質部があり、枝道部が本道部より新しくできたものと考えられる。

幅は約3mで、枝道まで含めて約58mを確認した。枝道は幅約2mで、硬度も本道部よりも柔らかい。

溝状遺構

硬質部を除去し、富士黒色土層上面を精査したところ、灰肌色の硬質な覆土をもつ並行する二条の細い溝状遺構を検出した。この二本の溝状遺構は、溝1が道路状硬質遺構の下になり、溝2が側溝状に並行して走向する。I 13区から I 14区にある溝3は、本来、溝2の延長部分であり、本道は尾根の丘陵部にむかっていたものと考えられる。

平均で、溝1は幅約30cm、深さ約10cm、長さ約13m。溝2は幅約50cm、深さ約15cm、長さ約23m。溝3は幅約60cm、深さ約8cm、長さ約4.2mである。

土坑・ピット (第10図)

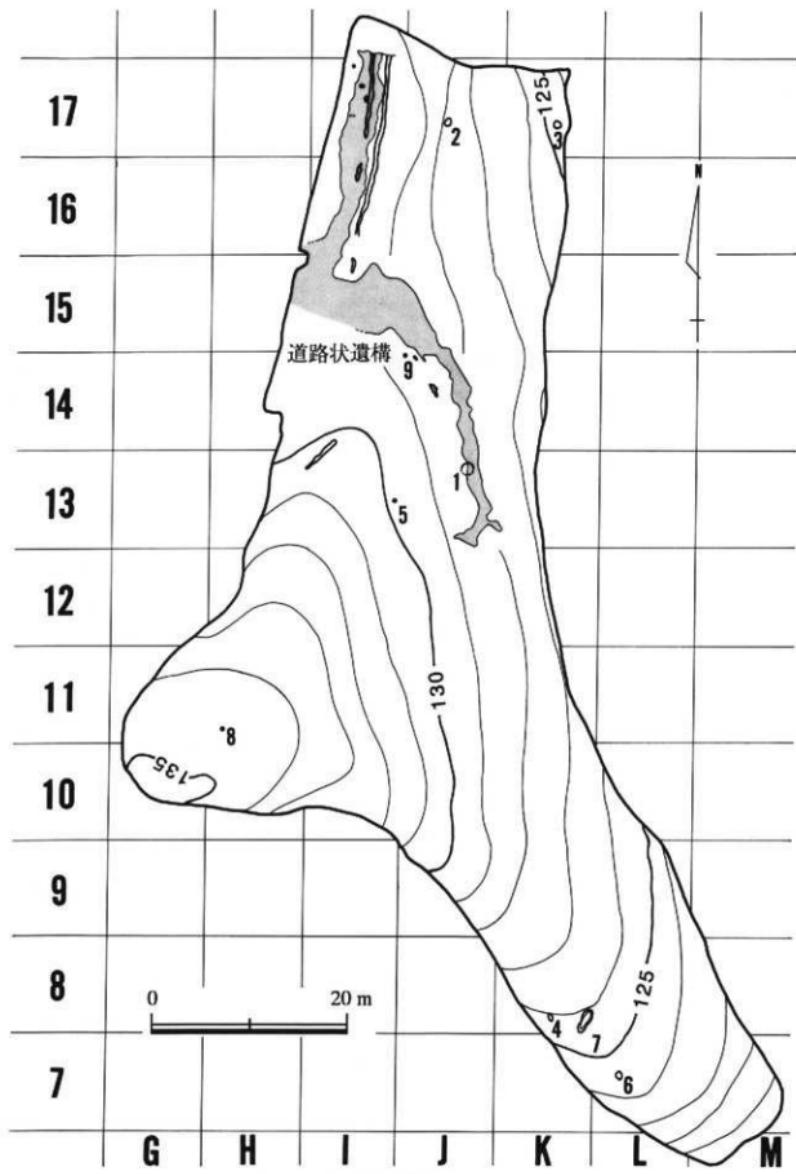
遺跡名の焼場という名称は、調査区の西側や南斜面に火葬場があったことから命名されたとのことである。調査区内においても、その事実に関連すると思われる遺構が検出されている。

1～3は近隣の遺跡でもよく検出される、黒く空気を多く含む脆弱な覆土をもつ土坑である。従来より中世のものといわれてきている。伴出する遺物もなく、時期は不明だが、1の覆土より上位に道路状遺構硬質部(枝道部分)が形成されているので、近世以前の所産と考えても良いかもしれない。

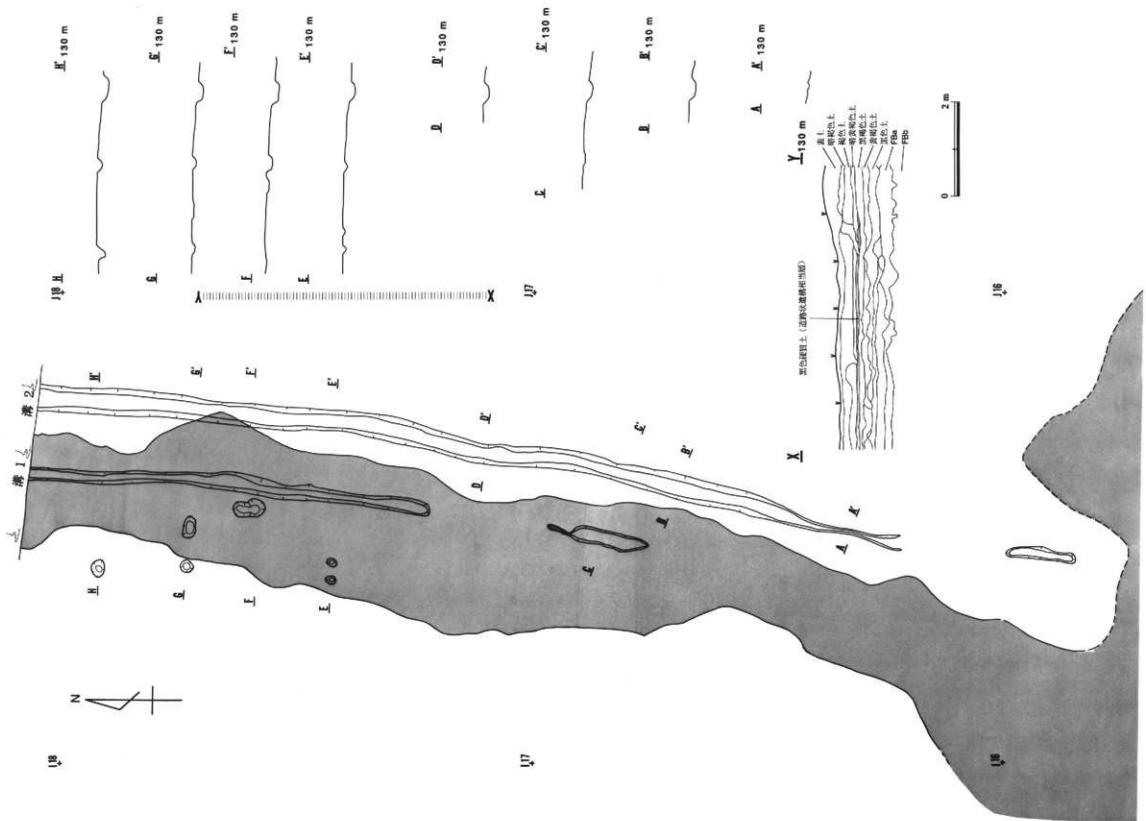
4～7・9は、覆土に焼土や炭化物を含む遺構である。7は覆土中に多量の焼土を含み、覆土中位には鮮やかな赤化を呈す焼土の純層が形成していた。

8は覆土中に焼かれた骨片が多く含まれていた。骨片の大きさが細かいため、ヒトか動物か判別できなかった。

遺構からは遺物が検出されなかったため、その所属時期は設定できなかった。しかし、表土および黒色土から、中・近世の遺物が検出されているので、遺構も同時代につくられたものであると考えたい。

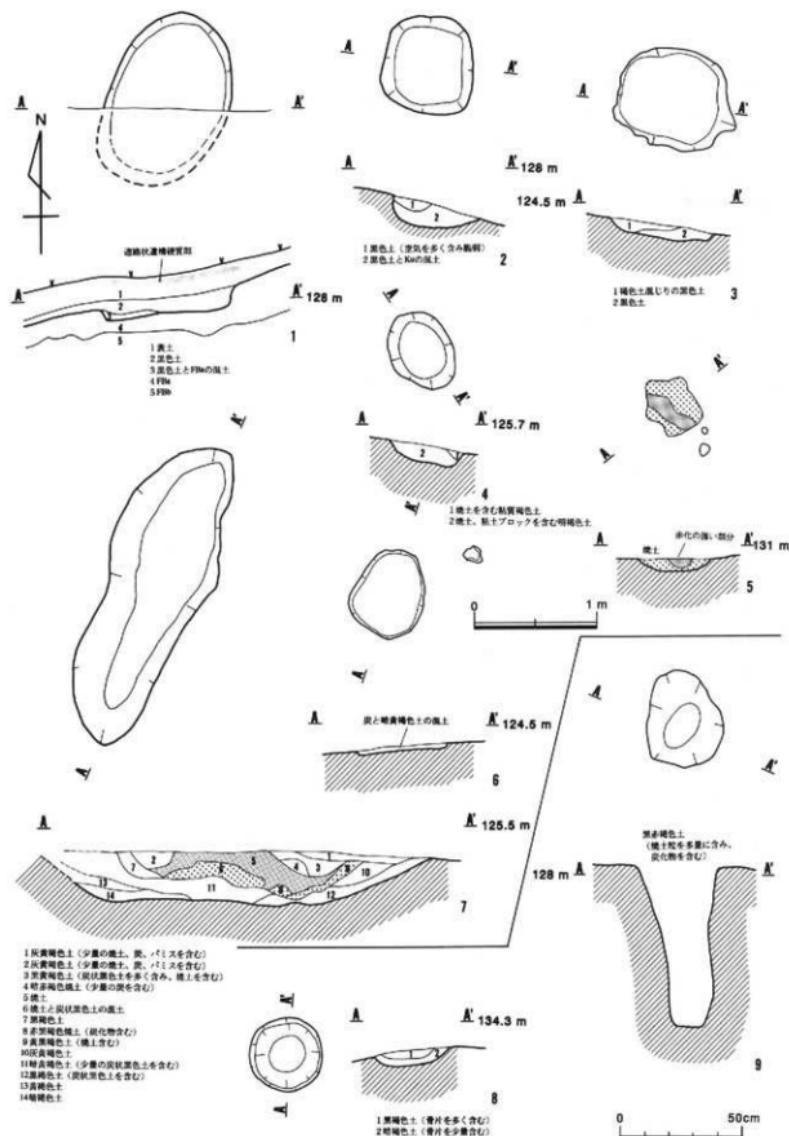


第7図 中・近世遺構全体図 (1/500)



第8図 道路状構造 1 (1/80)





第10図 中・近世遺構 (1/40・1/20)

2 遺 物

中・近世の遺物は、表土および黒色土から検出されている。ほとんどの遺物が数cmの小破片での検出であり、固化されているものも、部位がある程度わかるものをかなり強引に推定復元している。それゆえ法量等は不確実であることを了承されたい。

土器（陶磁器類）（第11図～第13図・第15図）

1は湖西産の大平鉢、2・3は厚手の県内産と考えられる鉢である。4は県内産の山茶碗。12世紀末から13世紀はじめのものと考えられる。

5は明の白磁で14世紀のもの。

6は瀬戸・美濃産の碗で15世紀のもの。

7～9は明の染め付けで、7が16世紀中葉から後半。8・9が16世紀末のものと考えられる。

10～16は瀬戸・美濃産の志野焼で連房初期の大窯の時期で、16世紀末から17世紀はじめのものと考えられる。

17～24は瀬戸・美濃産。18は唐津の形写しである。17が17世紀前半、18が17世紀代、19が17世紀中葉から後半、20・21が17世紀後半、22～24が17世紀後半から18世紀初頭のものである。

69は19世紀以降の瀬戸産の擂鉢の破片を、砥石に転用したものである。

25～29は志戸呂焼。25は碗？の削り出し高台部で、内面に厚い灰釉がかかる。26は香炉の底部。27～29は擂鉢である。25は16世紀末から17世紀末、26は17世紀代、27～29が17世紀第2四半期である。

土器（土師質）（第13図～第15図）

30から61までが土師質の土器である。30は菱形土器、31～35が鉢形土器、36～60が碗・皿類と思われる。62～61は器種はわからないが、底部を実測した。これらの時期は不明であるが、前記した陶磁器類とほぼ並行するものと考えている。

瓦（第16図）

1～6までは伊豆国分寺類似の瓦である。1～5までが平瓦、6が丸瓦で、すべてに布目が認められる。1～4の裏面には方形のたき目が施されている。2～4、6の表面は明灰色で内部は明橙色を呈し、焼成は良好である。1は暗灰色で焼成は悪い。5は表面は黒色、内部は灰色で、二次焼成を受けたらしく脆弱になっている。時期は平安時代であると考えている。

土製品・砾石（第17図）

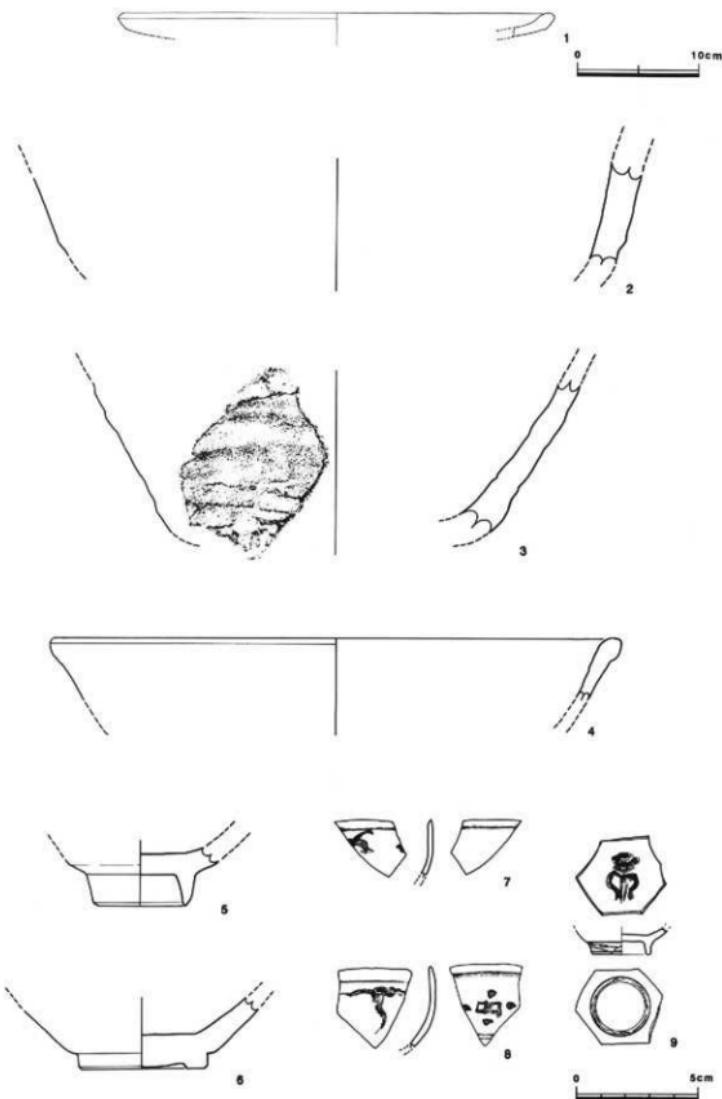
1は土製円盤、2は土製の紡錘車である。両者とも焼成の良好な土師質で土質も類似している。3～6は砾石である。5が石英安山岩で、それ以外は流紋岩であると思われる。

金属器（第17図）

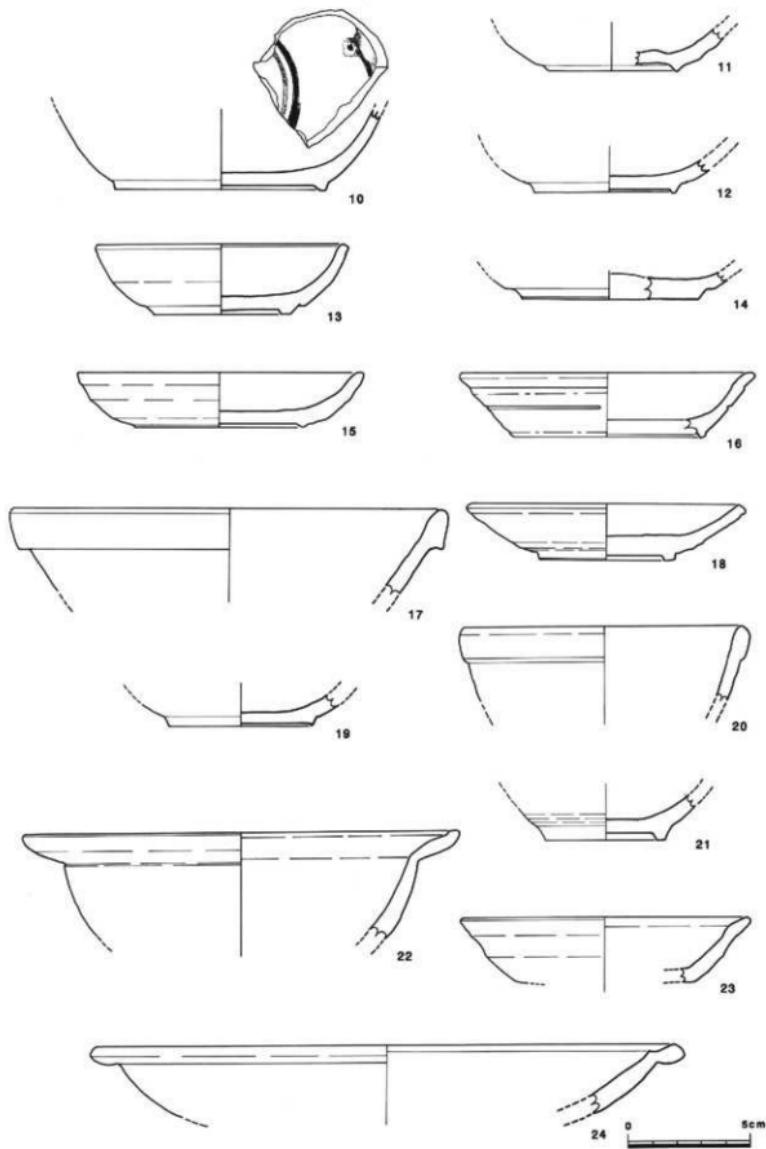
1は鉄滓で底部（側面？）が炉壁に接していた部分であると思われる。2、4、5は用途不明の鉄製品。3は断面が方形の釘状の鉄製品である。6、7は銅製のキセルの雁首の部分である。塗金は不明。

錢貨（第18図）

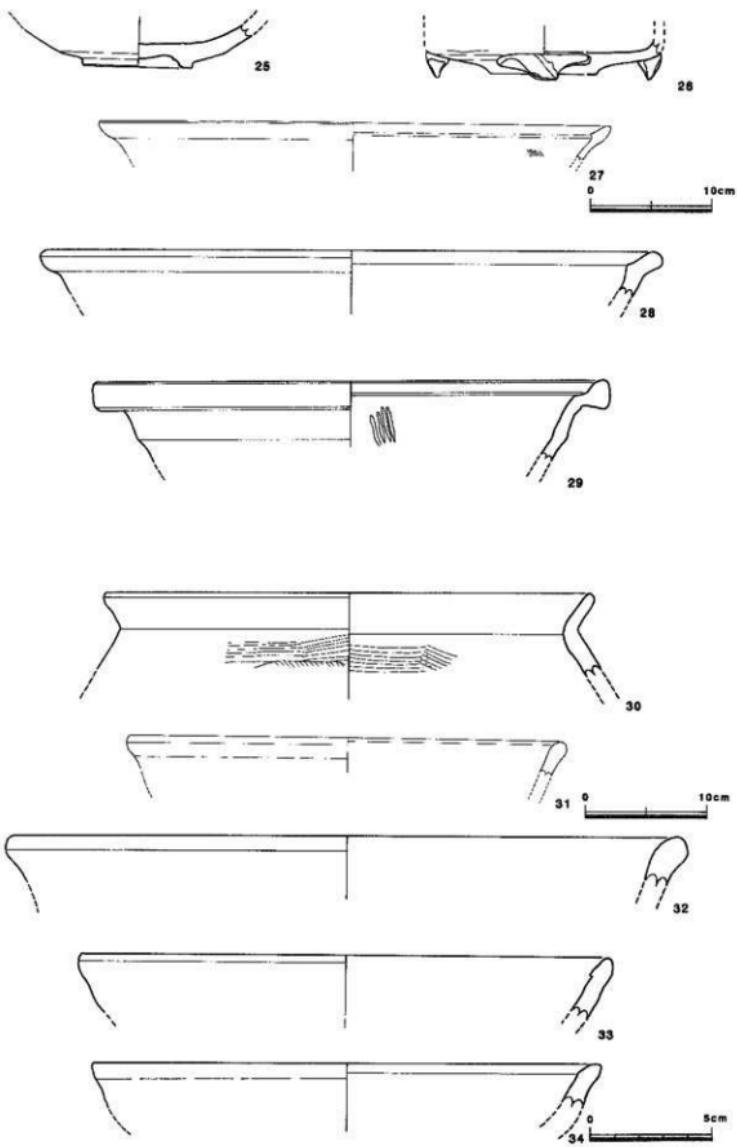
錢貨は全部で9点出土している。1と2は北宋の元祐通宝（真書）。3は明の洪武通宝。5～9は寛永通宝である。5は裏面に「文」があるので江戸亀戸鑄である。4は腐食が酷く、銭名は不明である。



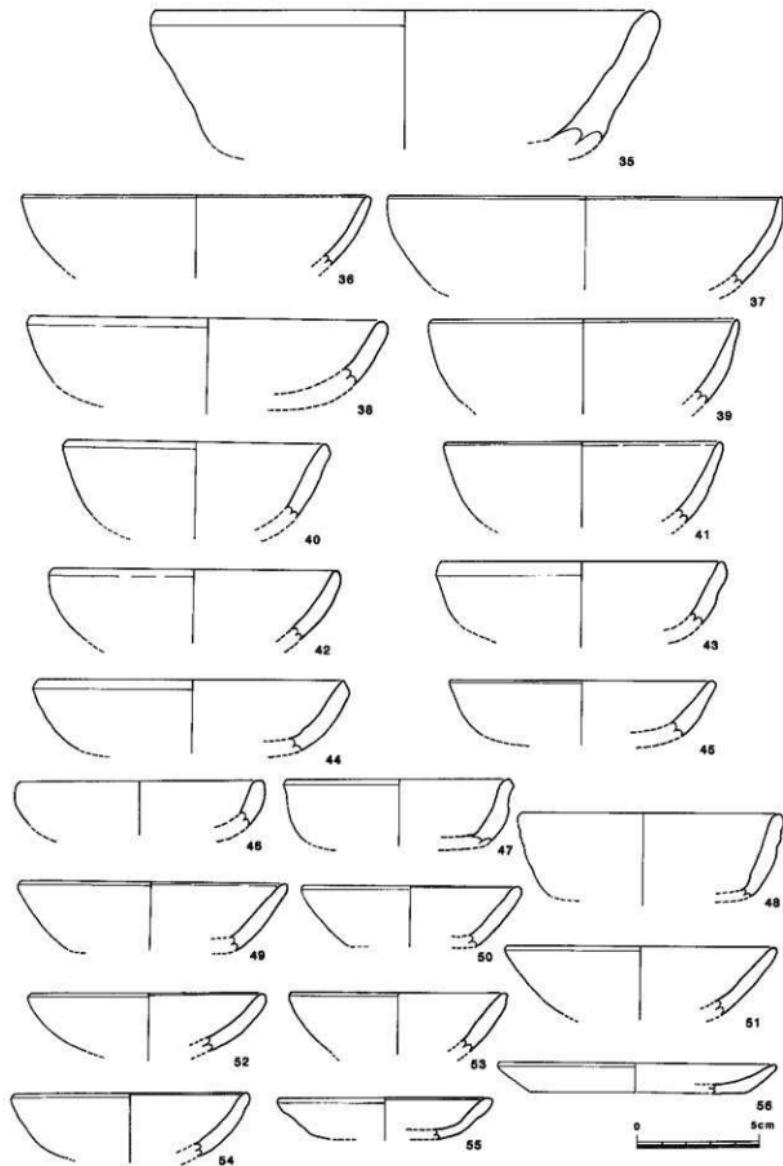
第11図 中・近世陶磁器 1



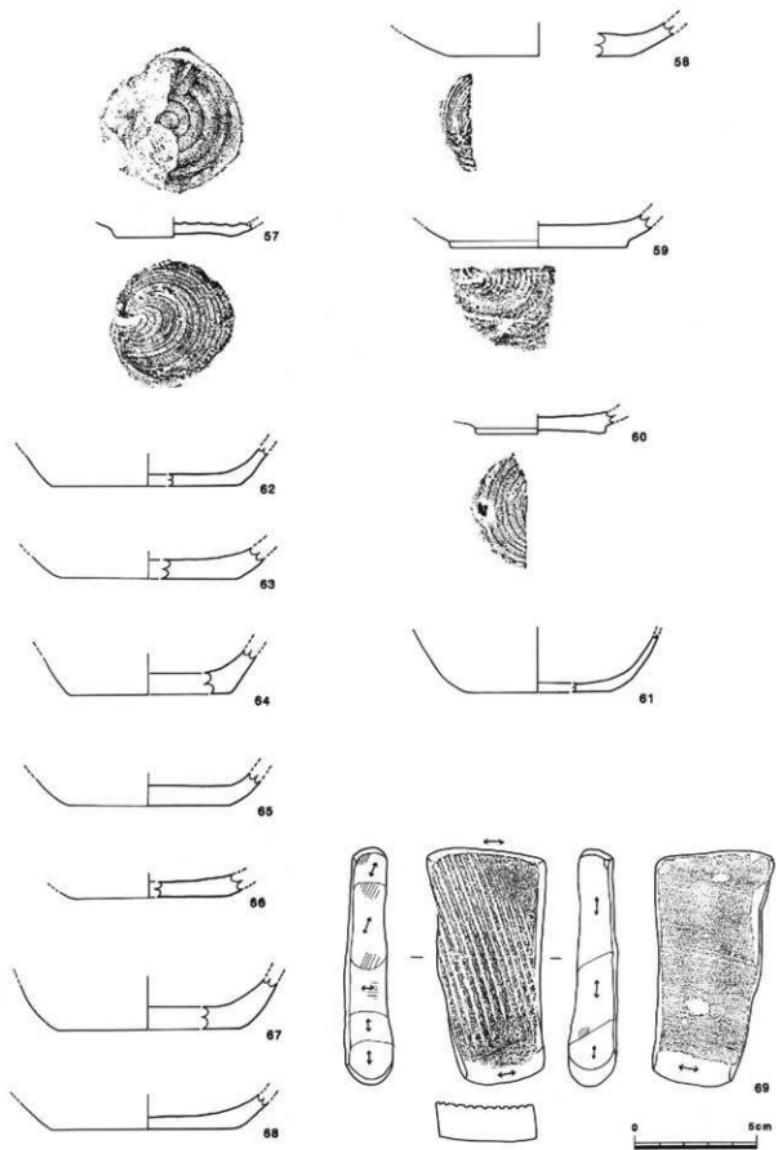
第12図 中・近世陶磁器2



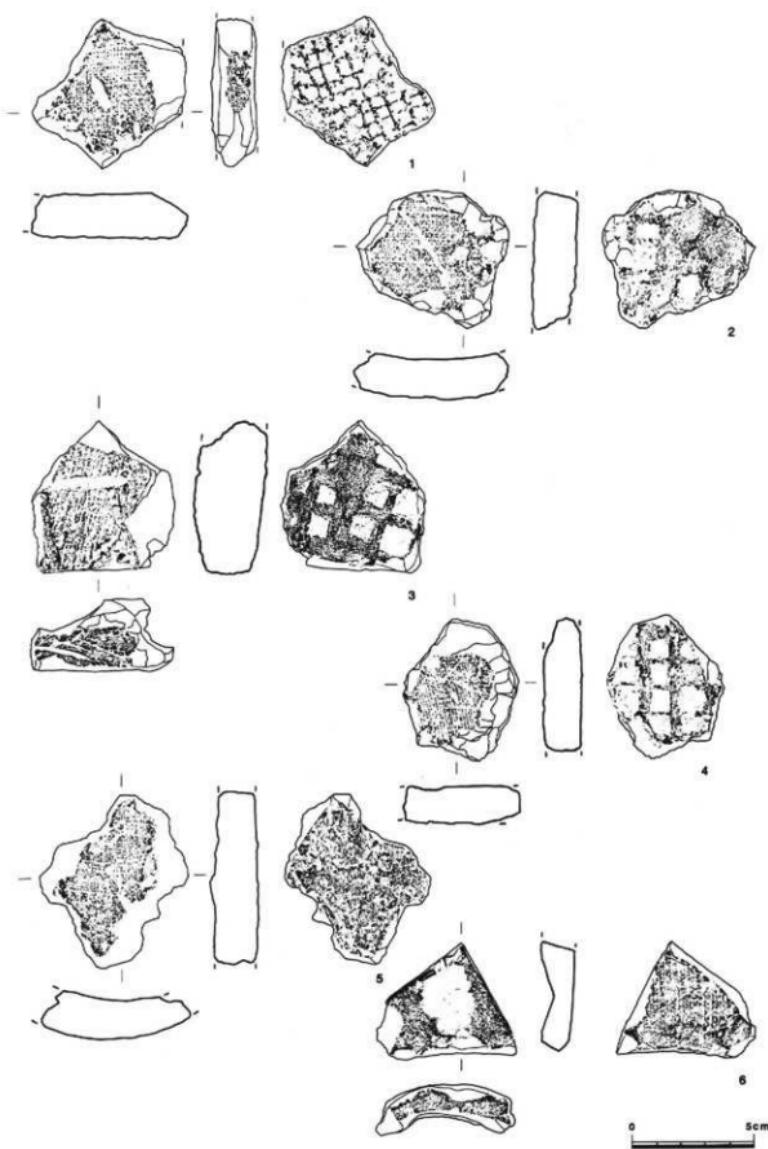
第13図 中・近世陶磁器 3・土師質土器 1



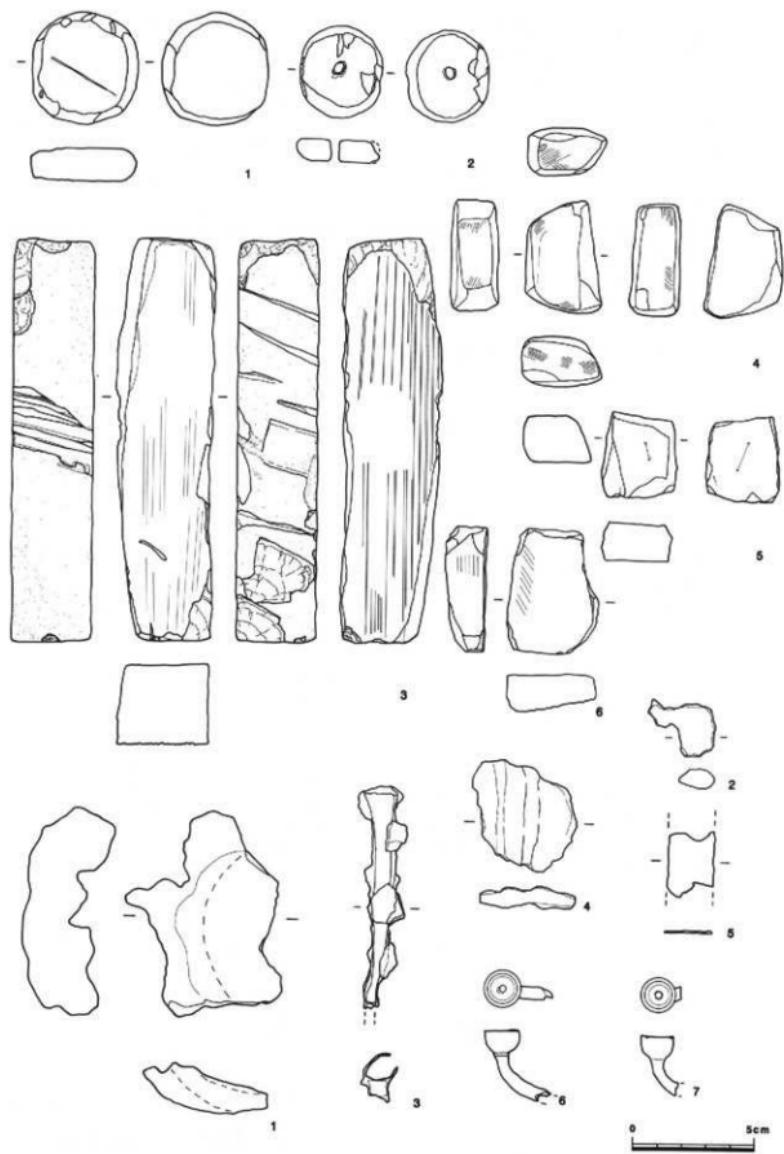
第14図 中・近世土師質土器2



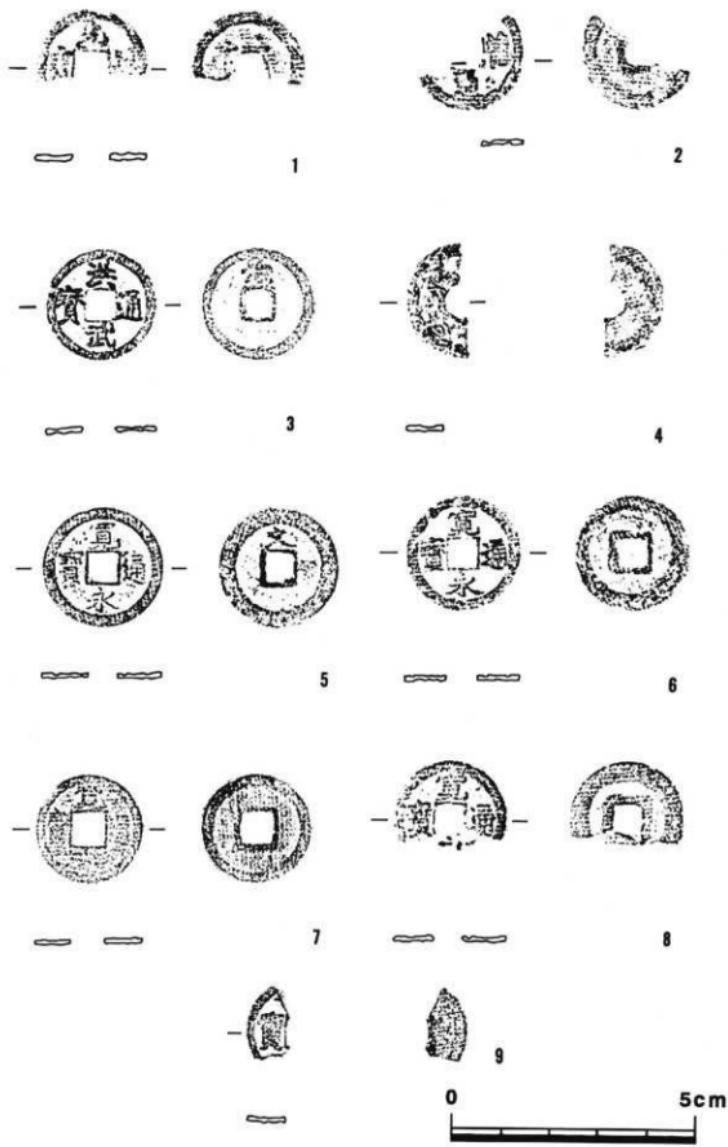
第15図 中・近世土師質土器3・近世遺物



第16図 屋瓦



第17圖 中・近世遺物



第18図 鉄貨

第IV章 繩文時代（富士黒土層）の遺構と遺物

1 遺構（第19図）

第19図が縄文時代の遺構全体図である。番号が付されているものが竪穴状遺構と土坑で、網線部は倒木痕である。それ以外はピット及び焼土範囲等である。遺構検出面は、富士黒土b層（FBb）の上面である。主な遺構としては、竪穴状遺構と土坑であるが、ほぼ調査区全域にランダムにひろがっている。遺構の傾向として、掘方は浅く、定型的ではない。また、底部より遺物が検出されているため、自然要因ではあるが、倒木痕も調査の対象とした。

これらの遺構は底部に富士黒土層a（FBa）が堆積していることから、縄文時代早・前期につくられたものと考えている。

なお、全体図の等高線は富士黒土層b上面の測定によっている。

竪穴状遺構（第20図）

J 16区とJ 13区で方形の竪穴状遺構が検出されている。1がJ 16区で、2がJ 13区に位置する。

1は長軸2.6m、短軸2.4m、深さ約40cm。東側にピット状の落ち込みが多くみられた。覆土内より、礫器（106）と縄文早期と思われる無文の土器が出土している。

2は長軸不明（確認状況では2m）、短軸は2.1m。東隅と西隅にピット状の落ち込みがある。

どちらの遺構も覆土は富士黒土層aが覆土の主体である。

土坑（第21図～第23図）

土坑は25基検出している。基本形態は長椭円形といえるが、多くは不定形なものである。覆土のおおまかな状況は、底部に富士黒土層aが三角堆積を形成し、その上部を栗色土層と呼んだバミス質黄褐色土がレンズ状堆積をする。

3は長軸1.3m、短軸1.2m。M 7区北西に位置する。

4は長軸1.05m、短軸0.4m。両端にピット状の落ち込みをもつ。M 7区南半に位置する。

5は直径1.0mのほぼ円形を呈する。K 8区北東に位置する。

6は長軸1.6m、短軸1.0m。二基の土坑の切り合いと考えられる。L 8区南西に位置する。

7は長軸1.2m、短軸0.75m。L 8区のはば中央に位置する。

8は長軸1.5m、短軸1.0m。L 9区のはば中央に位置する。

9は長軸1.4m、短軸0.9m。K 9区の南半に位置する。

10は長軸1.25m、短軸0.7m。二基の切り合いと考えられる。K 9・10区の境に位置する。

11は長軸2.1m、短軸1.3m。K 10区南西に位置する。

12は長軸1.15m、短軸0.75m。K 9区北側に位置する。

13は長軸1.0m、短軸0.5m。J 9区南東に位置する。

14は長軸2.35m、短軸1.4m。I 11区西半に位置する。

15は長軸1.7m、短軸1.3m。J 12区南半に位置する。

16は長軸0.9m、短軸0.68m。J 11区南半に位置する。

17は確認できた長軸2.1m、短軸（半存）0.7m。J 13区西半に位置する。

- 18は長軸1.1m、短軸1.0m。J 14区北西に位置する。
- 19は長軸3.5m、短軸1.1m。I 14区南半に位置する。
- 20は確認できるところで長軸1.7m、短軸（半径）0.75m。I 13区北半に位置する。
- 21は長軸1.5m、短軸1.2m。J 14区南西に位置する。
- 22は長軸1.0m、短軸0.7m。I 15区北半に位置する。
- 23は長軸0.93m、短軸0.45m。I 16区南端に位置する。ピット状の落ち込み2ヶ所あり。
- 24は長軸0.9m、短軸0.3m。I 16区南端に位置する。ピット状の落ち込み2ヶ所あり。
- 25は長軸1.45m、短軸0.75m。I 17区北半に位置する。
- 26は長軸1.65m、短軸1.25m。I 17区南端に位置する。
- 27は長軸1.3m、短軸0.55m。I 17区東南に位置する。

倒木痕跡（第24図）

倒木痕は、自然形成のものであるが、底部およびそれに近い位置に富士黒土層が堆積しており、遺物も出土していることから、図示しておきたい。土層の堆積状況から考えると、焼場遺跡にヒトが活動していた時期においても、大きな穴が開口していた可能性も高いと考えられる。

ほとんどの倒木痕は、覆土上部にまでニセ・ローム層が巻き上げられており、丘陵頂部の土層の薄い地点では、第Ⅲスコリア層まで巻き上げられている。

集礫遺構（第25図）

集礫遺構はM 8 グリッド坑の50 cm 北で検出された。礫はほぼ斜面に沿って分布しており、構築のため削平等は行われていないようである。また、下部も精査してみたが、掘り込み等の下部構造も確認されなかった。すべての礫は、箱根川体と同じ安山岩で、すべて赤化しており、タール状の付着物がついているので、被熱されていたものと考えられる。

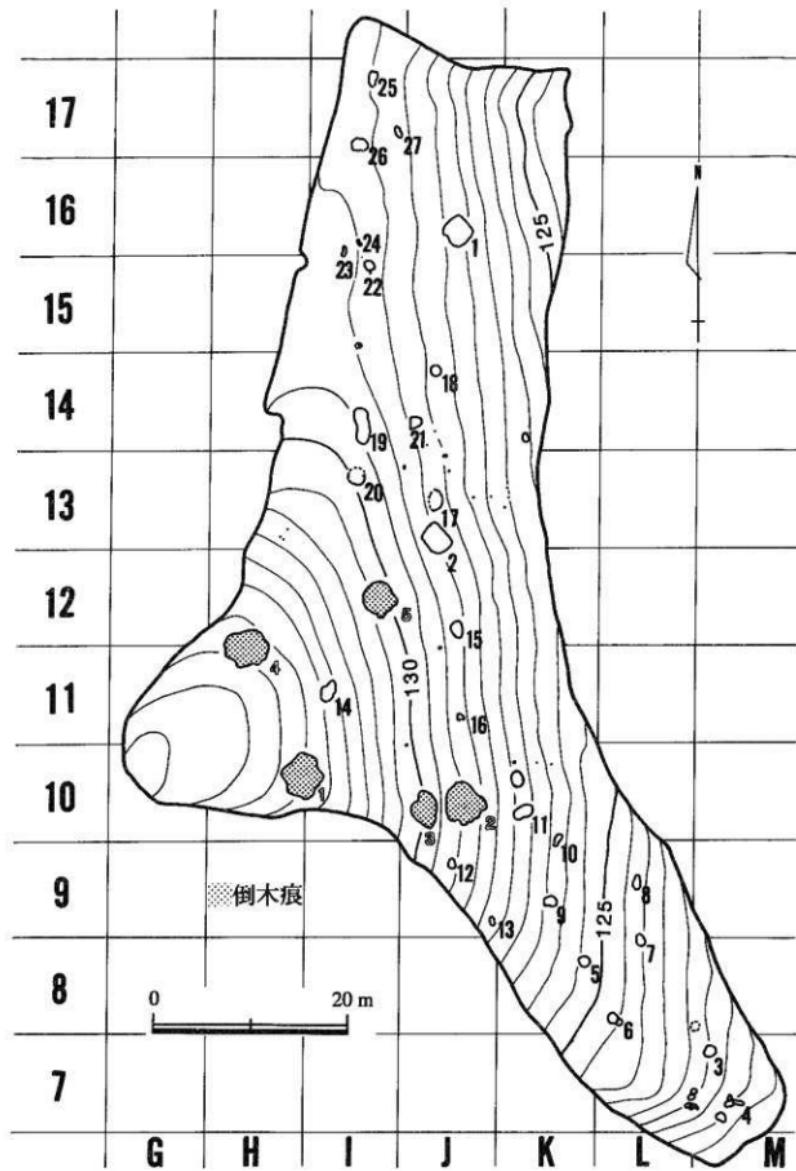
石皿の出土状況（第25図）

L 9 区で三つの石皿が重なりあうように出土している。意図的なものと考えられるが、土坑等の施設内ではなく、包含層中で検出されている。

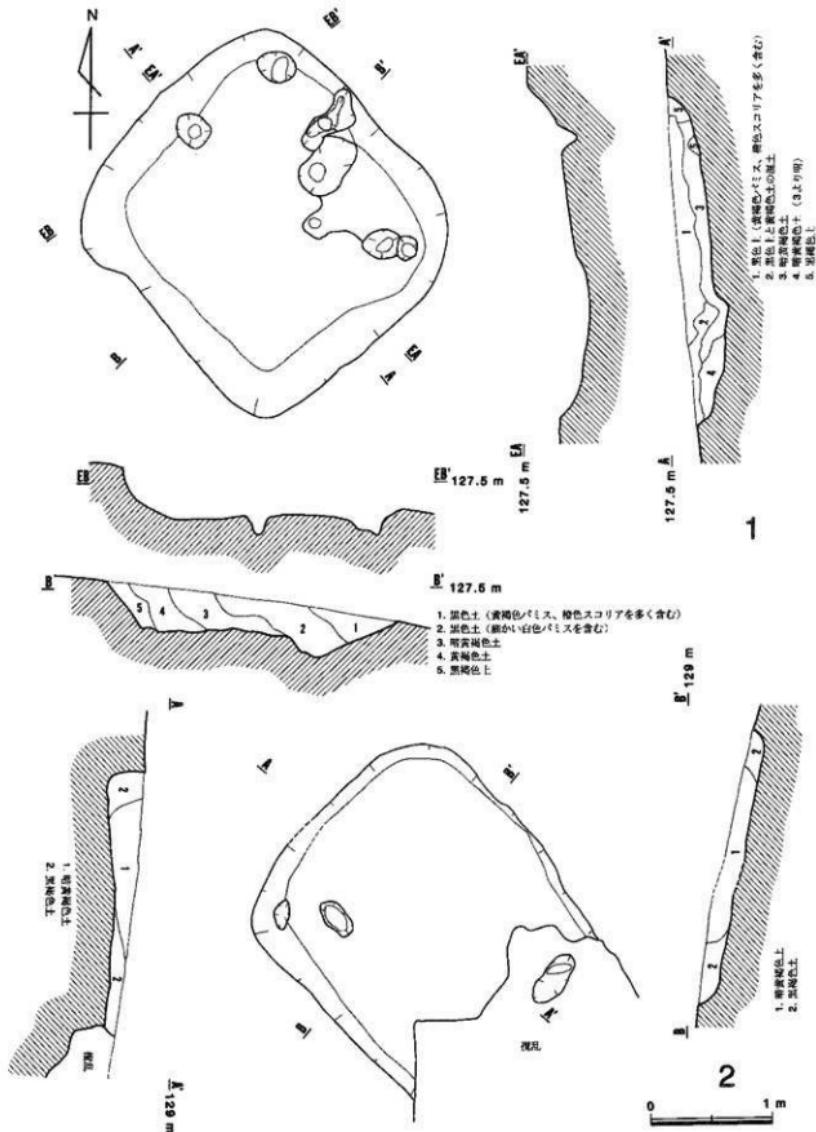
石斧の出土状況（第25図）

I 14・J 14区から4点の石斧（73, 77, 78, 89）が集中して検出されている。

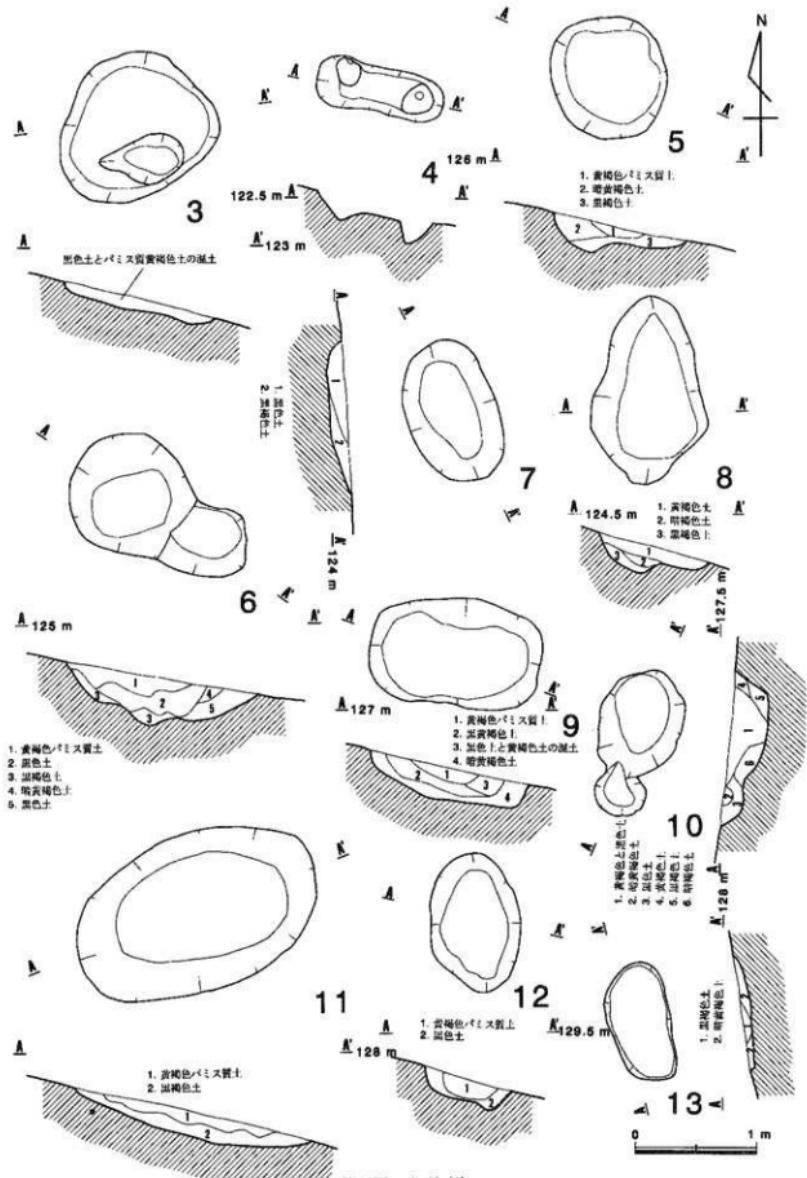
出土レベルにかなりの差があるため、現位置を保っていない可能性があるが、この周辺の区も含めて石斧の出土が多い。



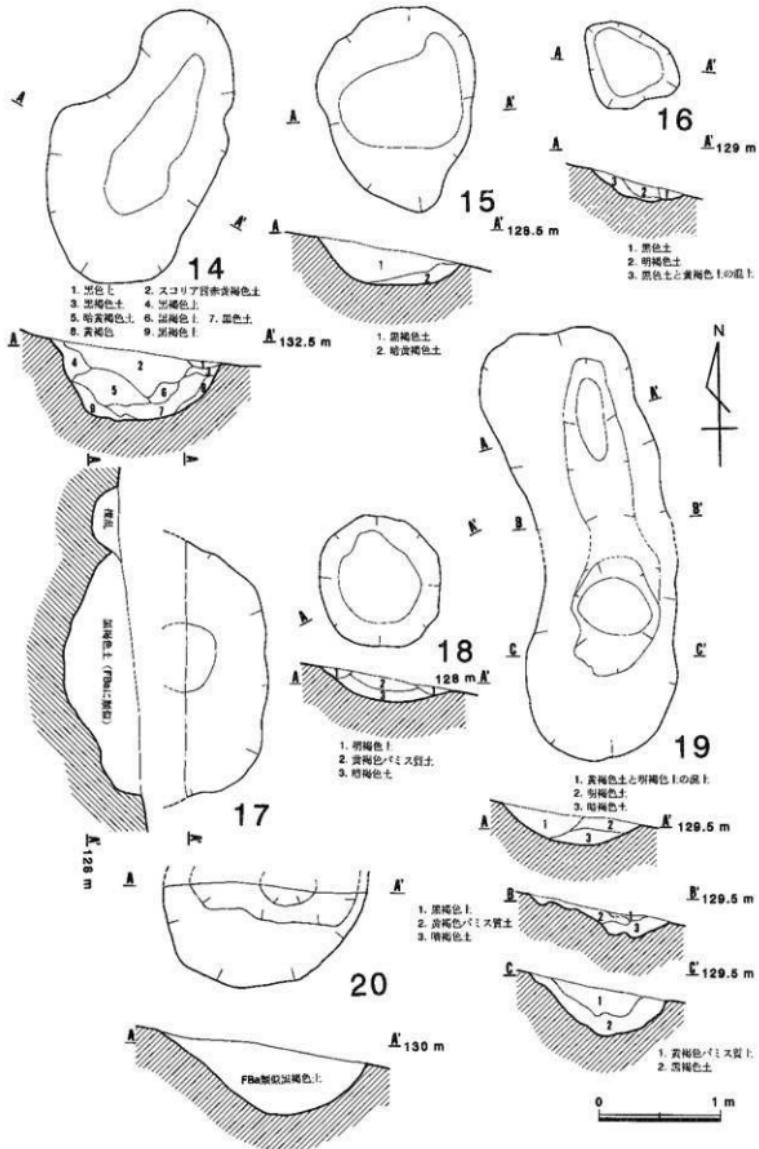
第19図 縄文時代遺構全体図 (1/500)



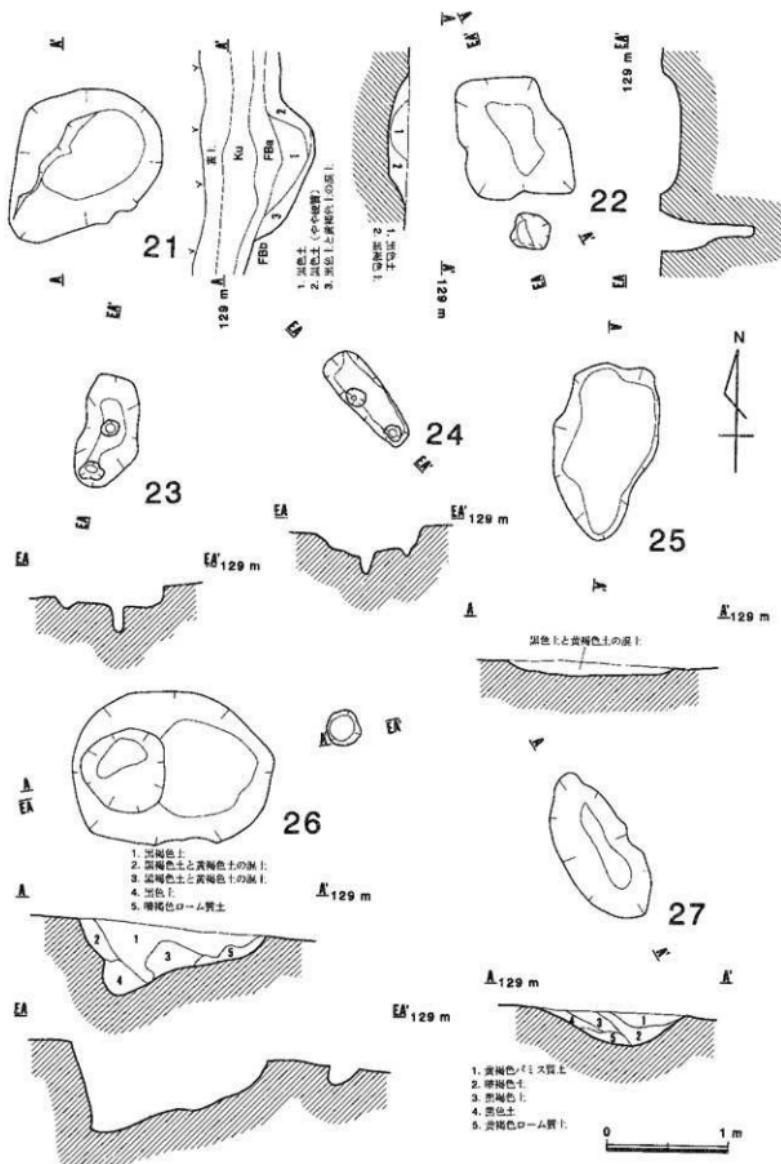
第20図 堅穴状遺構



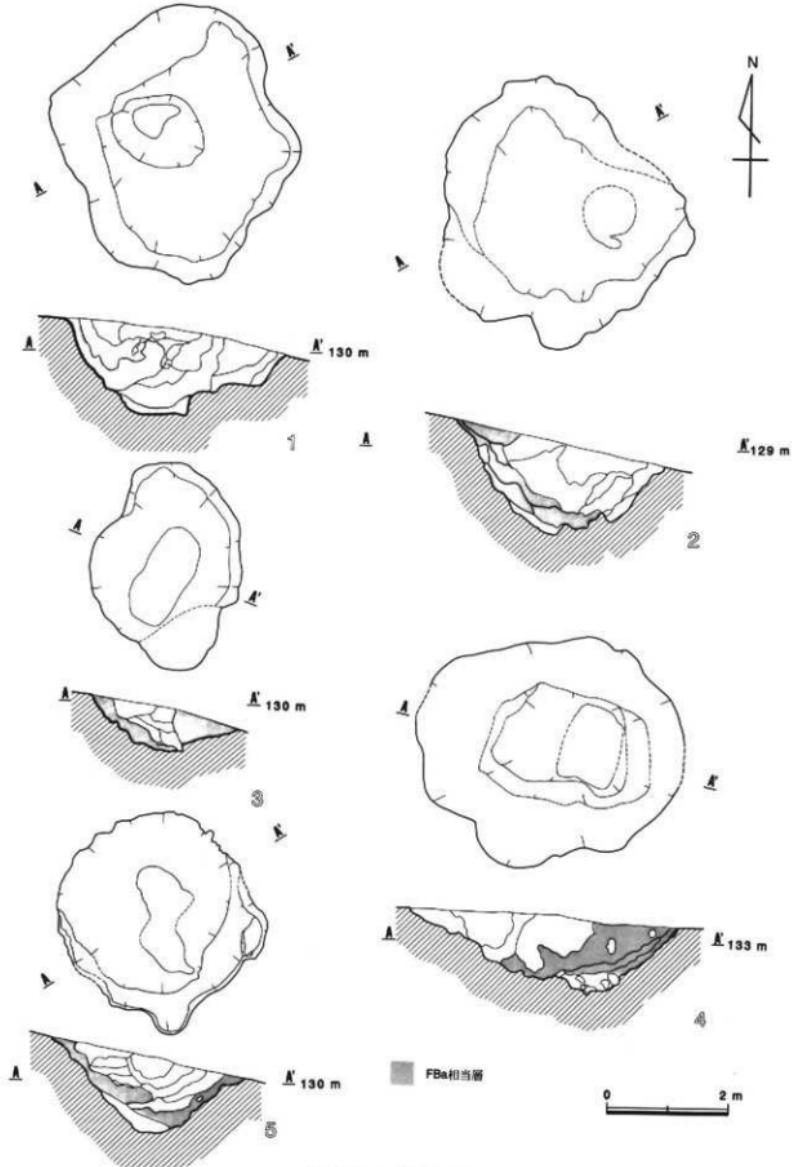
第21図 土坑(1)



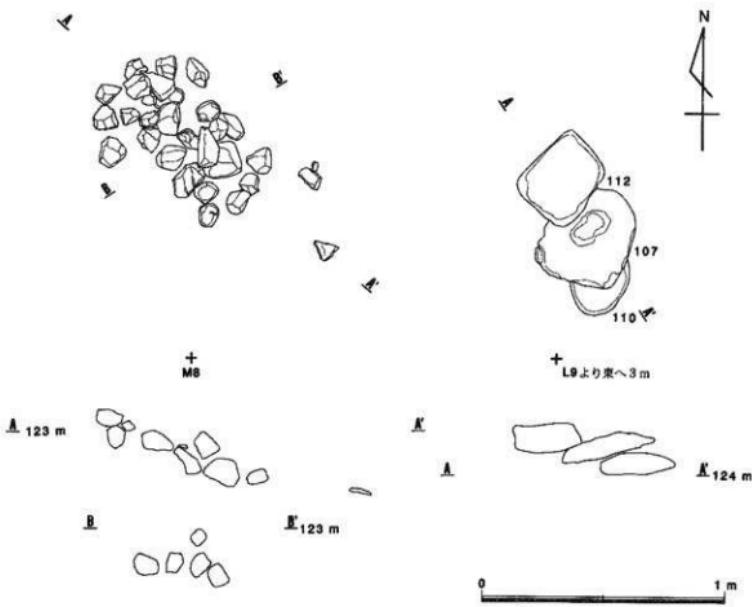
第22図 土坑(2)



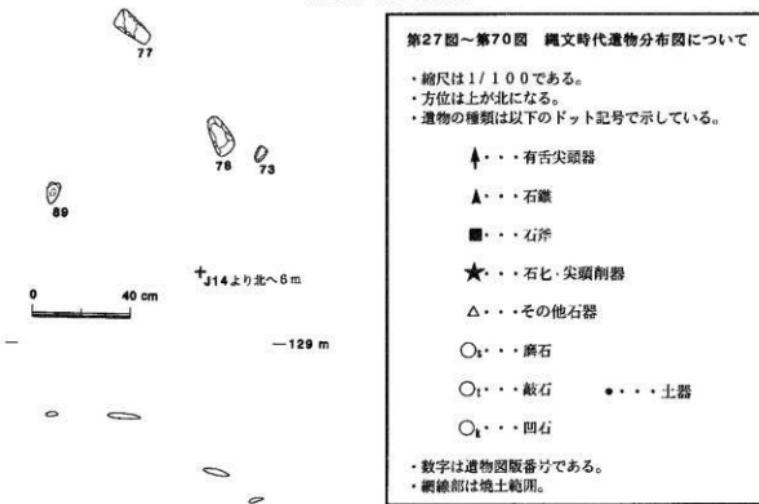
第23図 土坑(3)



第24図 倒木痕 (1/80)

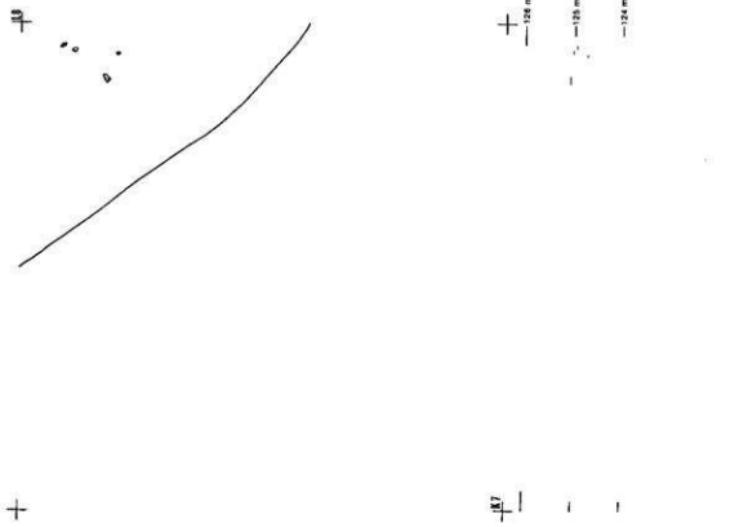


第25図 縄文時代遺構

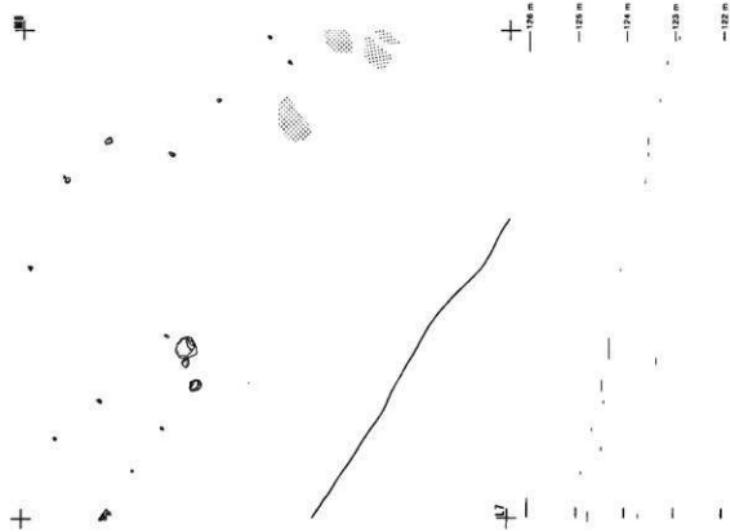


第26図 石斧出土状況図

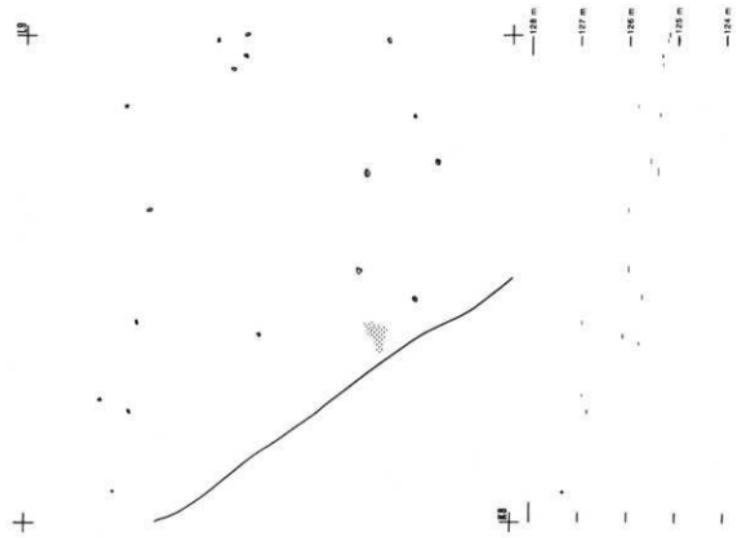
第27圖 K7區遺物出土狀況圖



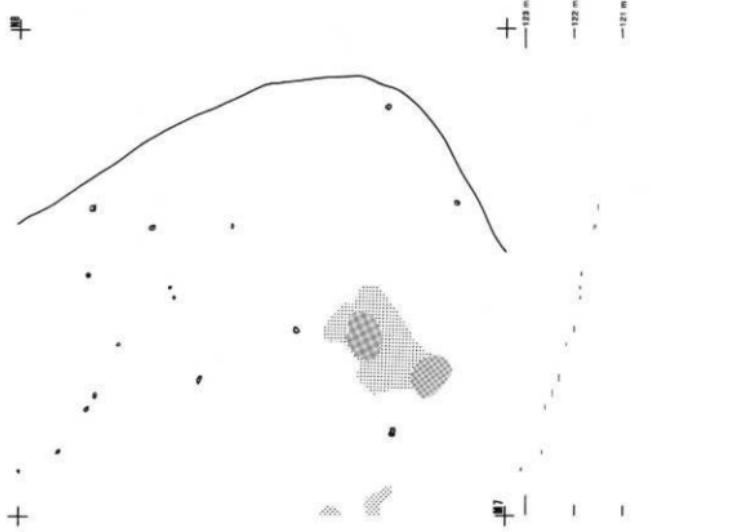
第28圖 L7區遺物出土狀況圖



第30圖 K 8區遺物出土狀況圖

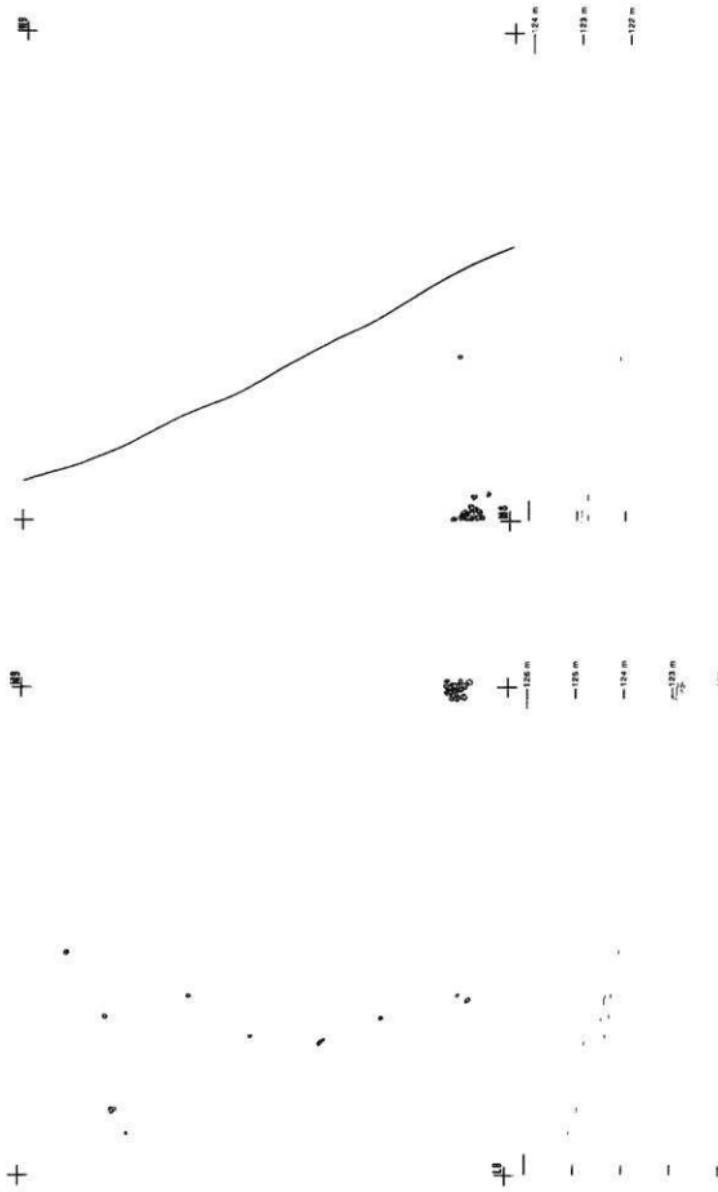


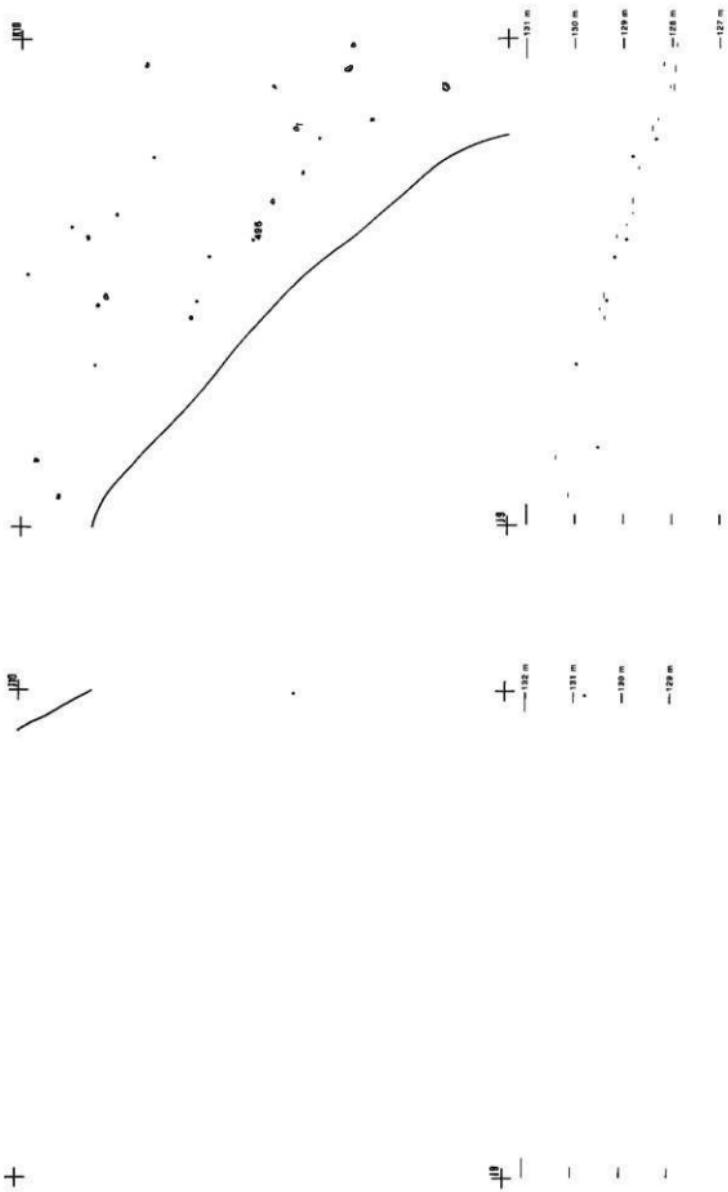
第29圖 M 7區遺物出土狀況圖



第32圖 M 8區遺物出土狀況圖

第31圖 L 8區遺物出土狀況圖





第33圖 19區遺物出土狀況圖

第34図 J9区遺物出土状況図

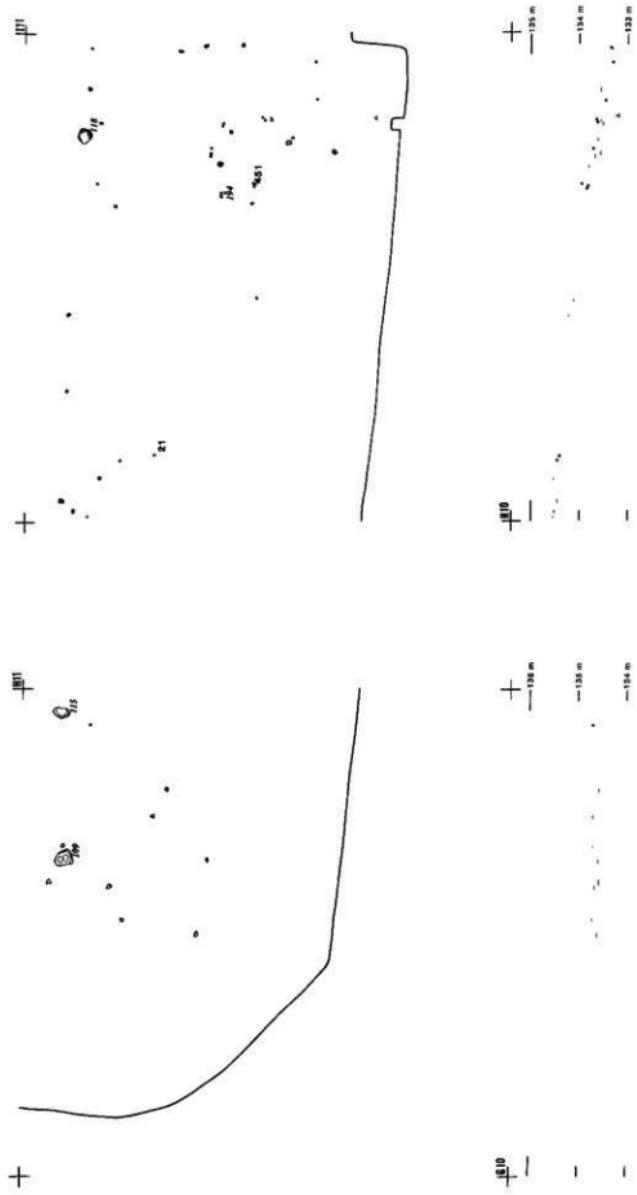


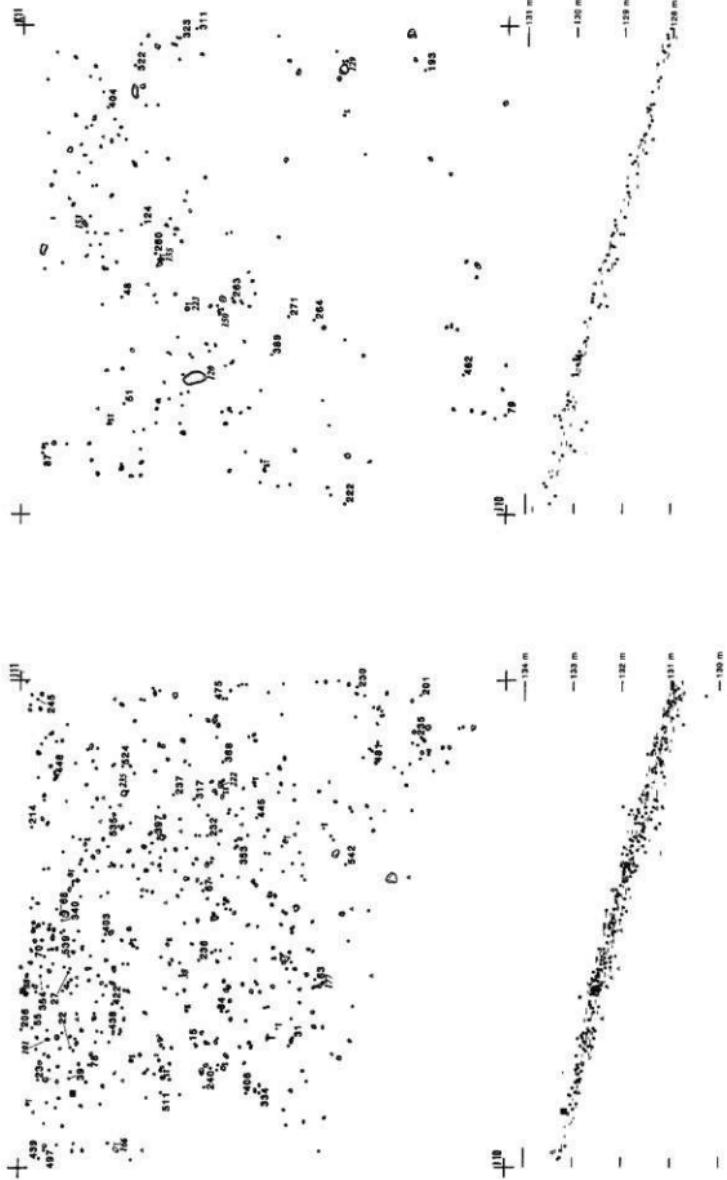
第35図 K9区遺物出土状況図

第26回 一 9区爆発事件と其の原因

第38圖 H10區遺物出土狀況圖

第37圖 G10區遺物出土狀況圖

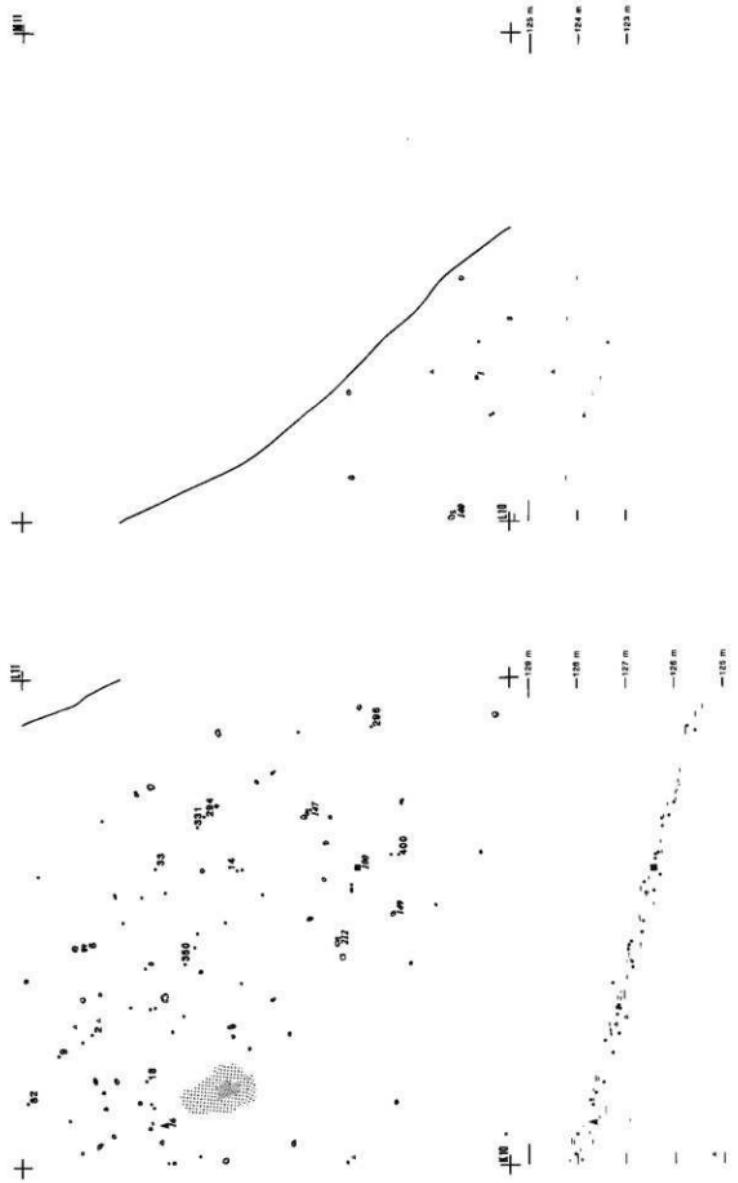




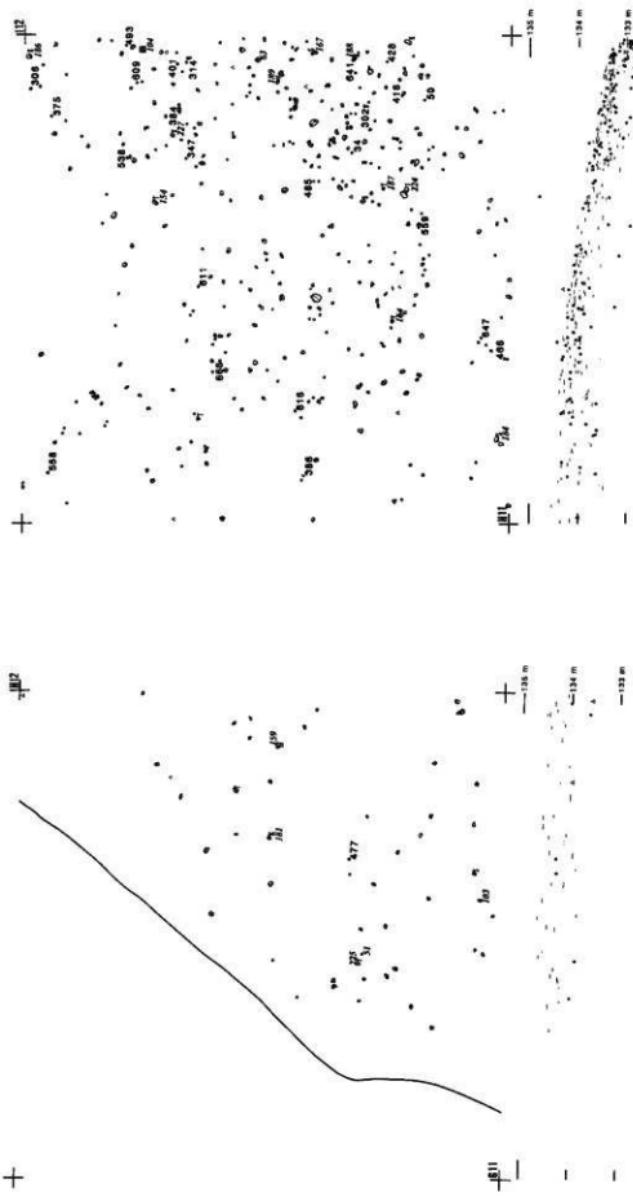
第39圖 J10區遺物出土狀況圖

第40圖 J10區遺物出土狀況圖

第42圖 L10區遺物出土狀況圖

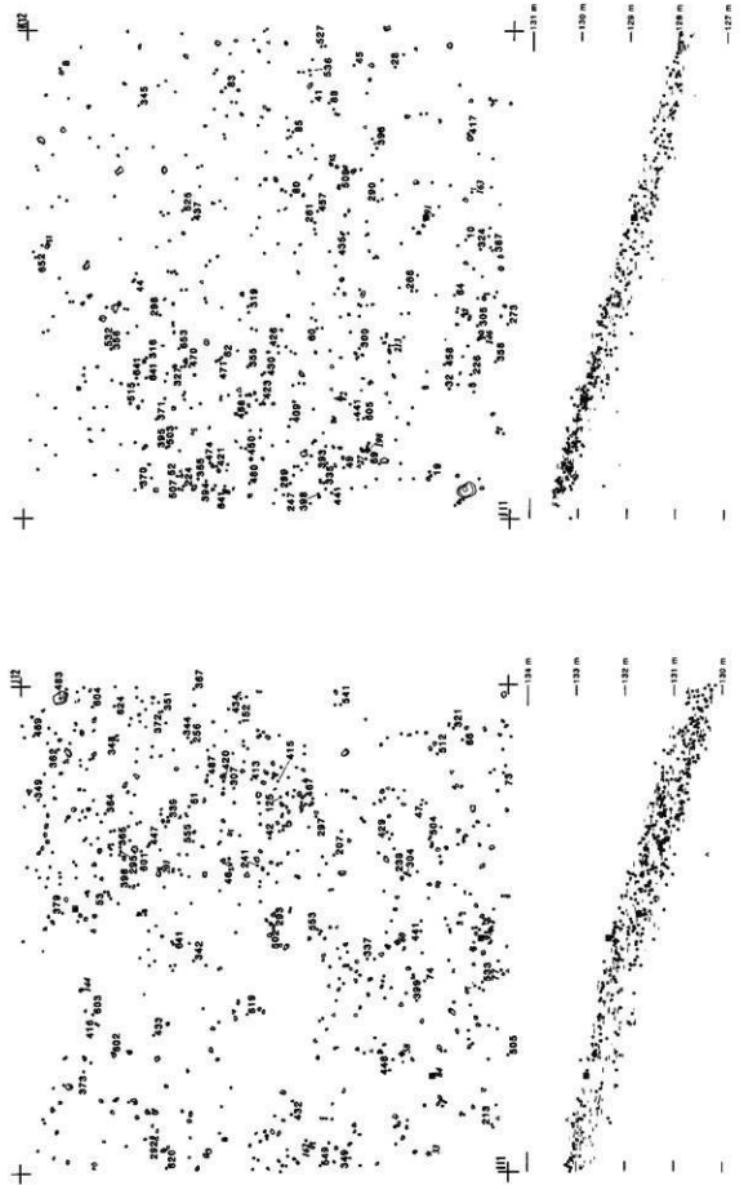


第41圖 K10區遺物出土狀況圖



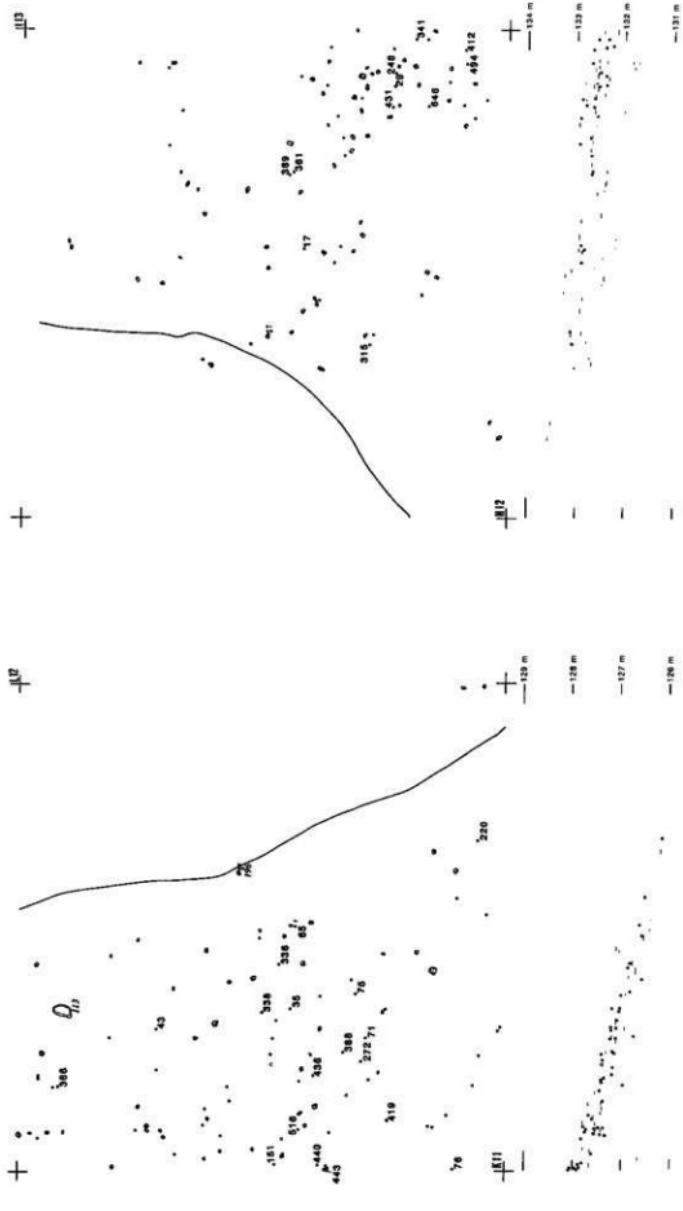
第43圖 G11區遺物出土狀況圖

第44圖 H11區遺物出土狀況圖



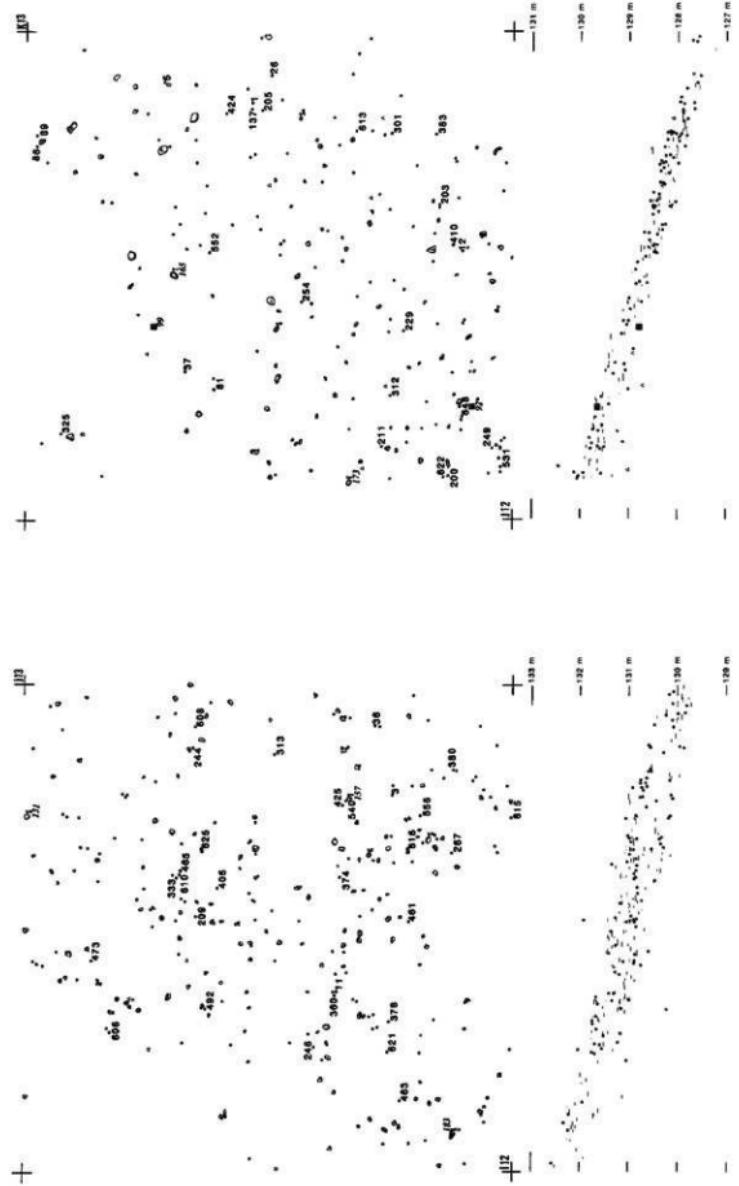
第45回 111区遺物出土状況

第16回 - 111区連動出走+サブ回



第47圖 K11區遺物出土狀況圖

第48圖 H12區遺物出土狀況圖

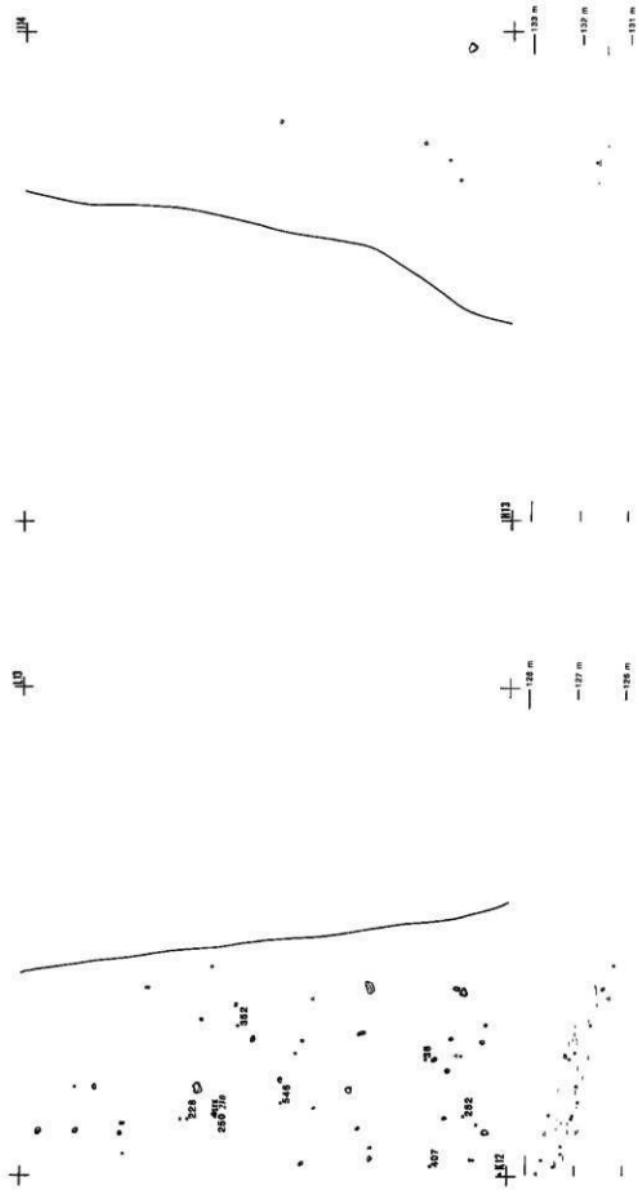


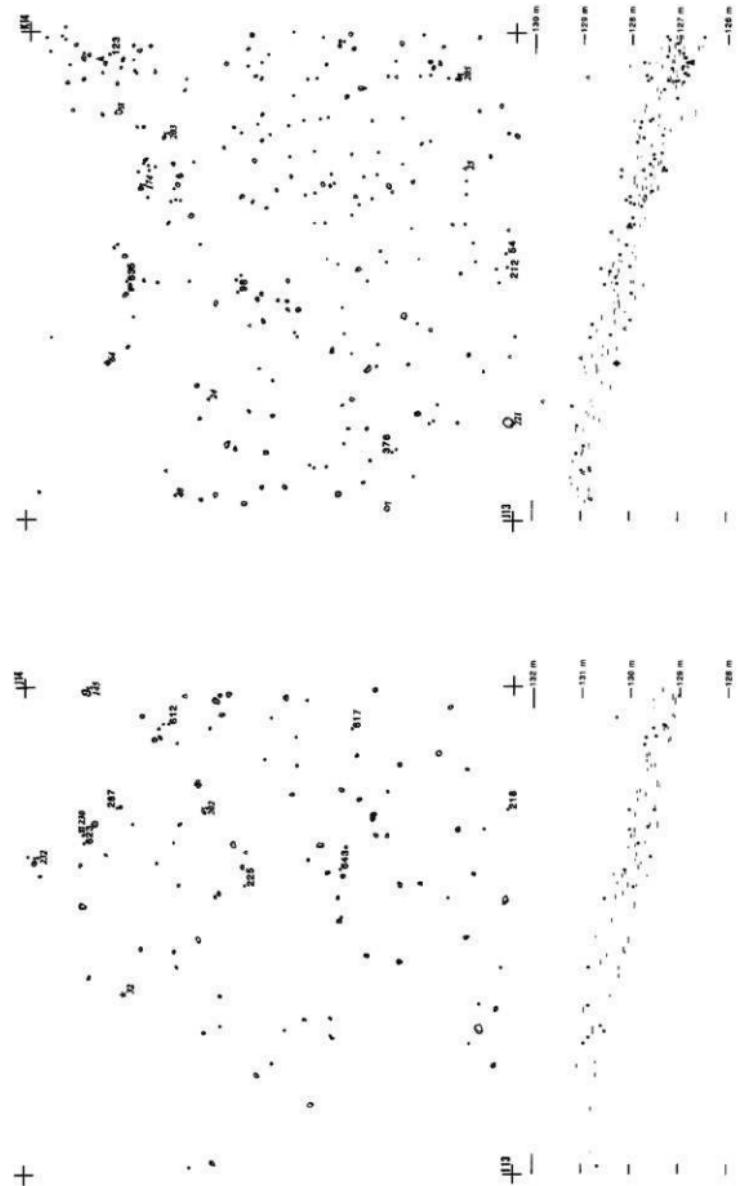
第49图 J12区遗物出土状况图

第50图 J12区遗物出土状况图

第51圖 K12區遺物出土狀況圖

第52圖 H13區遺物出土狀況圖

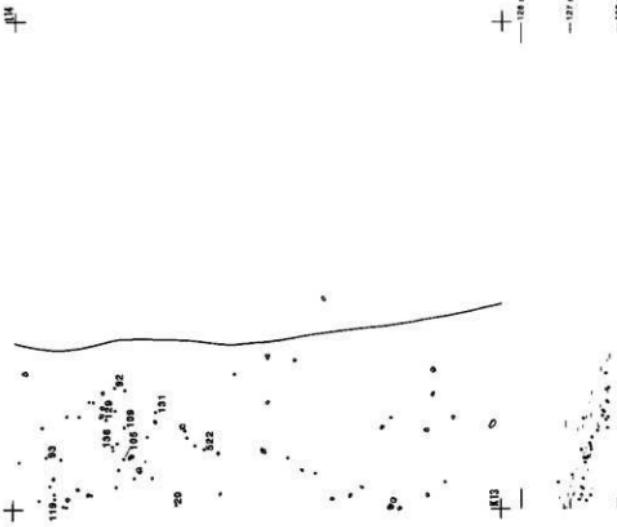




第53回 113区遺物出土状況圖

第54圖 J13區遺物出土狀況圖

第55圖 K13區遺物出土狀況圖



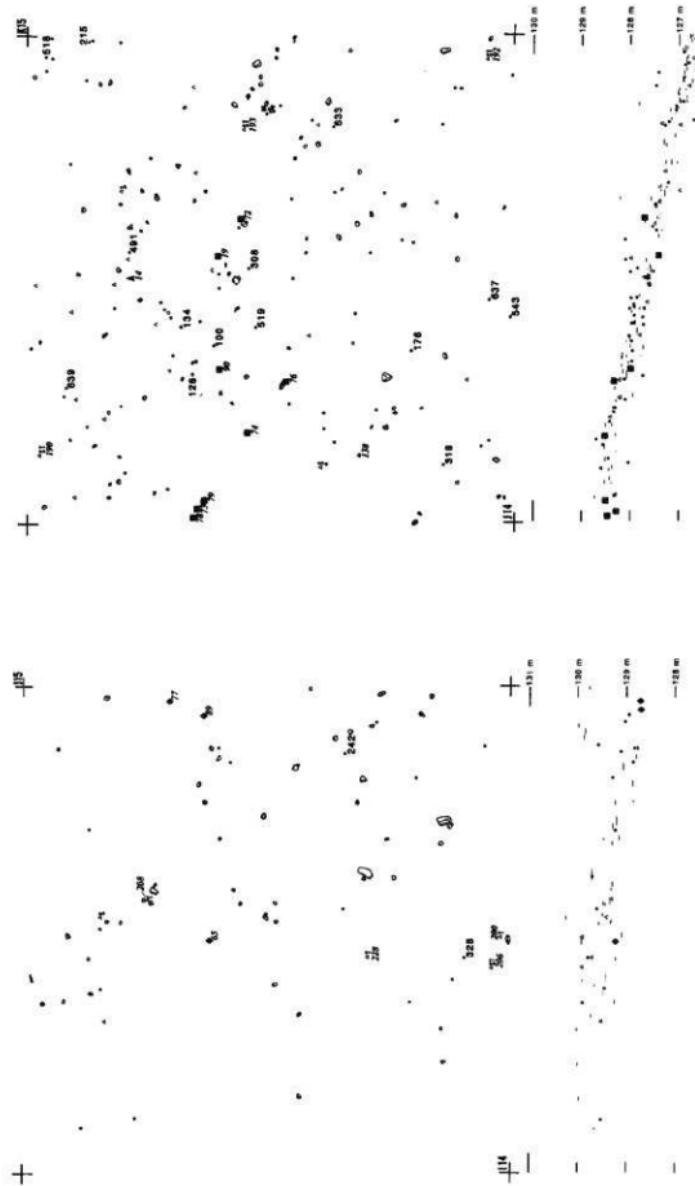
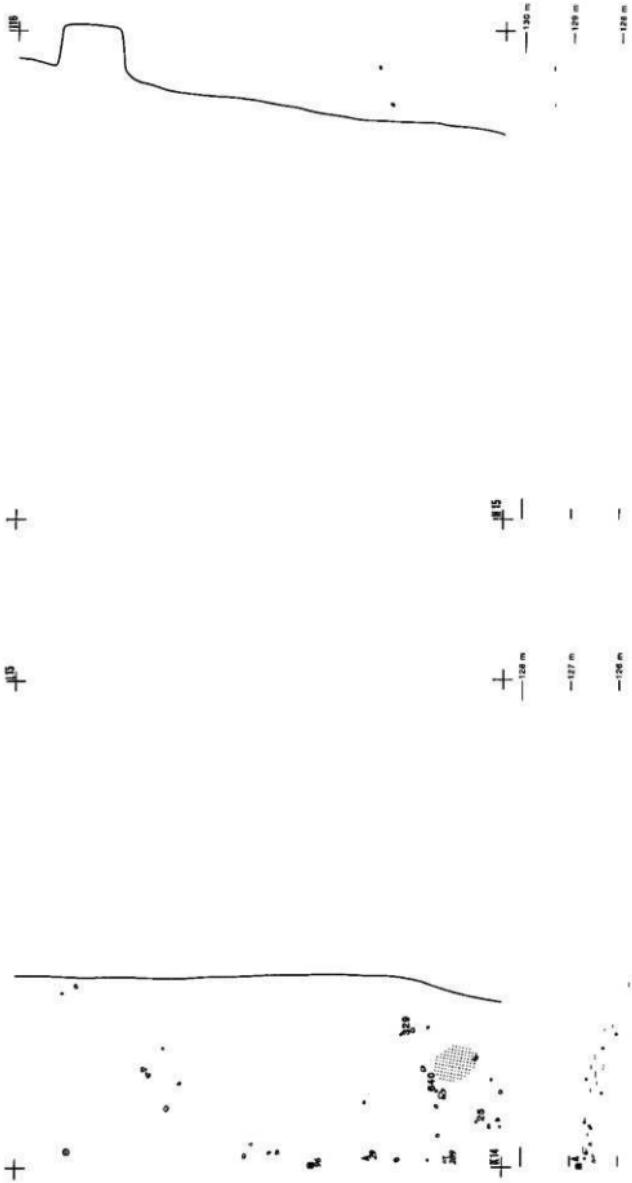


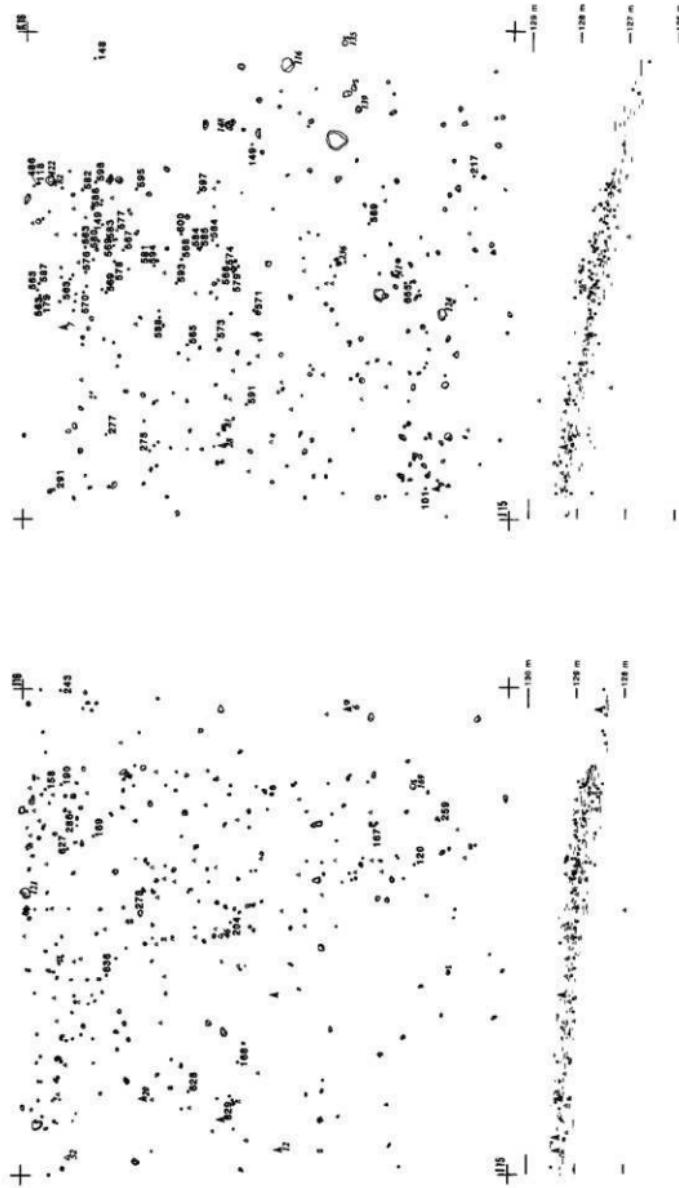
圖57-1-14遺物出土狀況圖

第58圖 114區譜物出十號泥圖

第59圖 K14區遺物出土狀況圖

第60圖 H15區遺物出土狀況圖



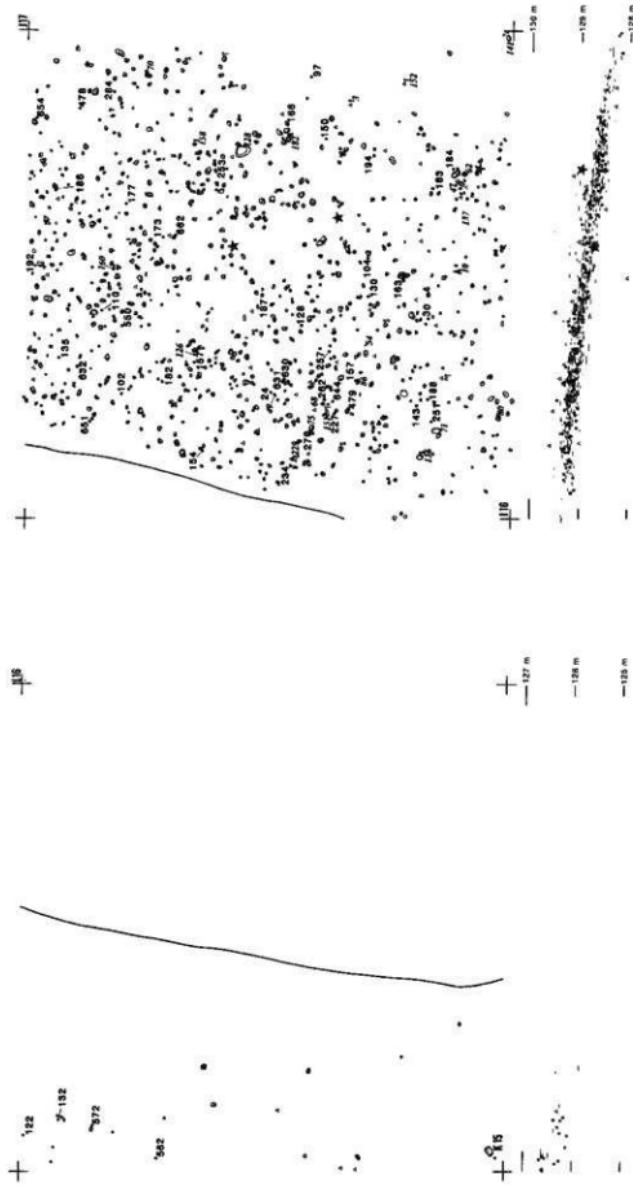


第61圖 115區遺物出土狀況圖

第62圖 J15區遺物出土狀況圖

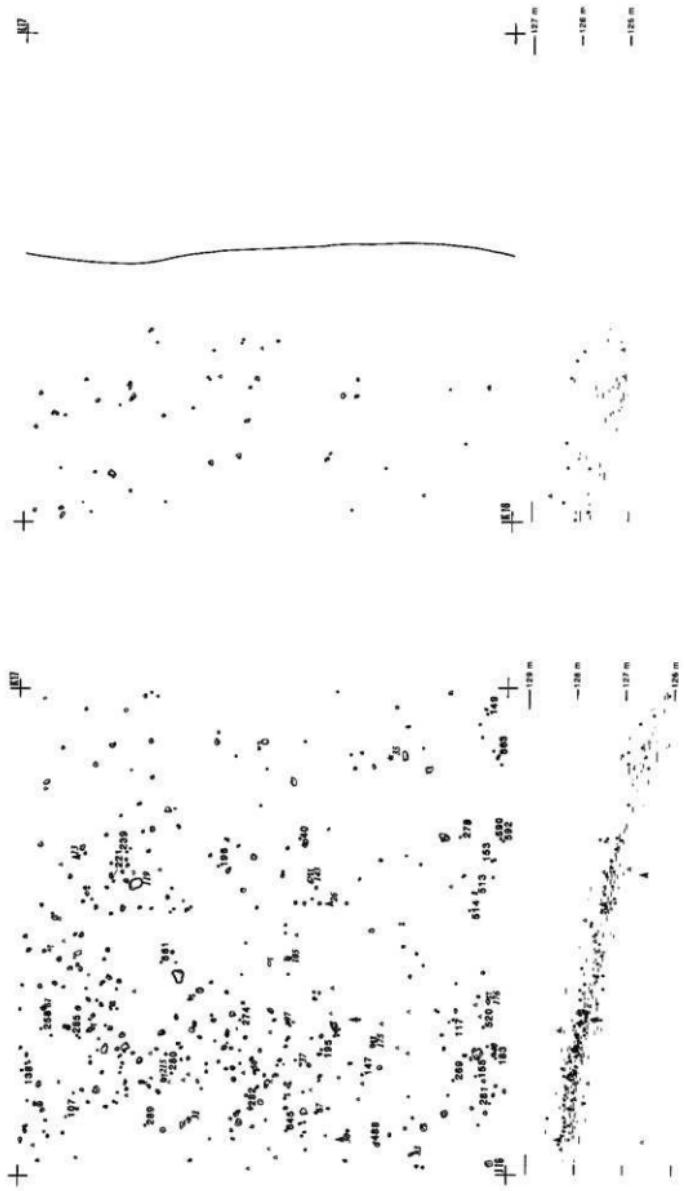
第64圖 | 16區遺物出土狀況圖

第63圖 | K15區遺物出土狀況圖

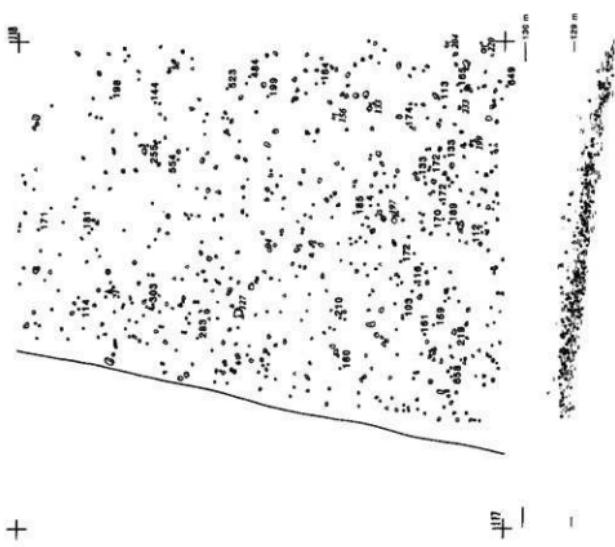


第66圖 K16區遺物出土狀況圖

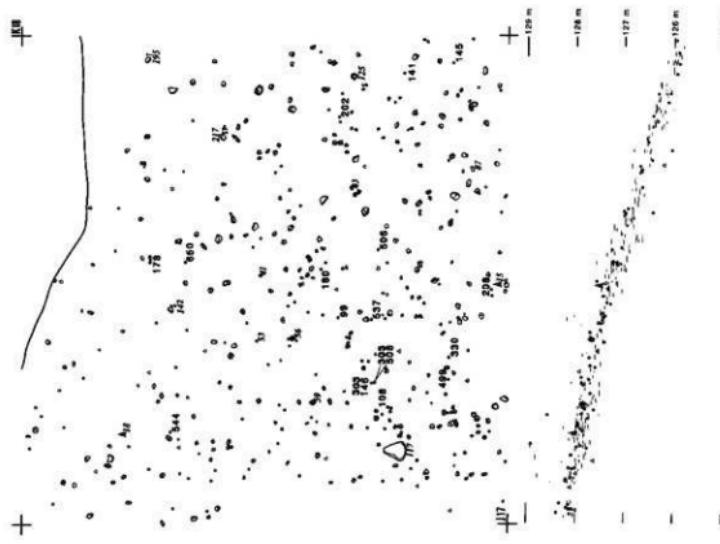
第65圖 J16區遺物出土狀況圖

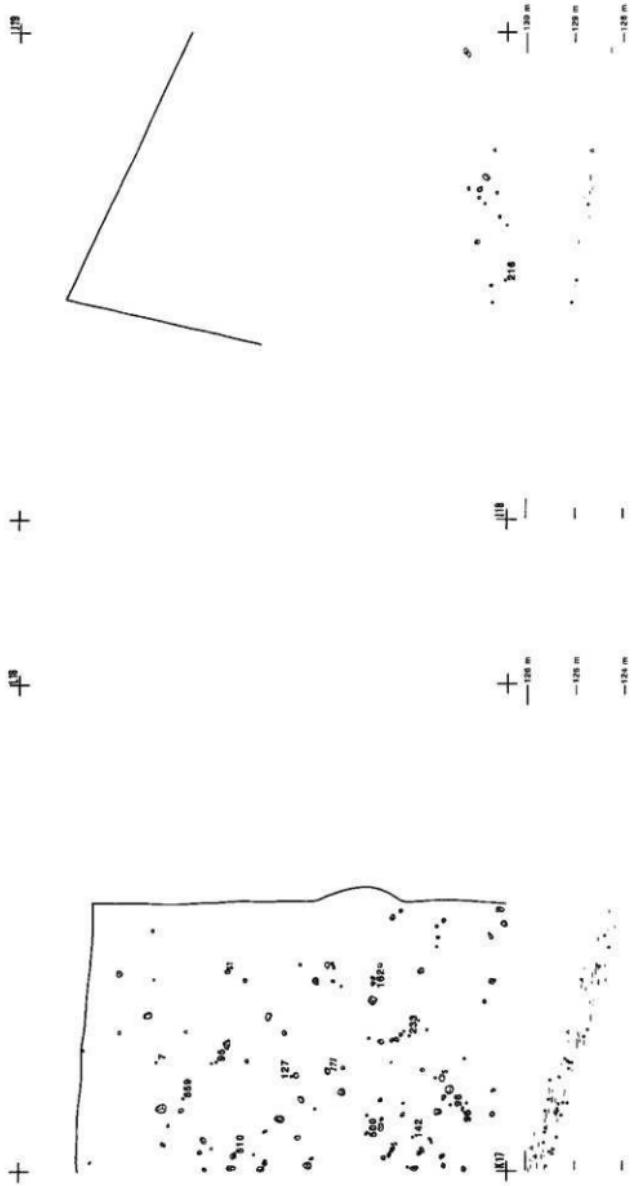


第67图 I 17区遗物出土状况图



第68图 J 17区遗物出土状况图





第69圖 K17區遺物出土狀況圖

第70圖 118區遺物出土狀況圖

2 遺 物

石 器

有舌尖頭器（第71図1～4）

4点出土している。1～3までは富士黒土層から出土しているが、4は休場中層（YLm）から出土している。形態は、柳葉形から有茎石錐的な短形のものまであるが、「逆し」は少ないものである。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
1	L 10	FB	a 2	有舌尖頭器	黒色緻密安山岩	53	19.5	5.5	5.5	
2	J 11	FB	a 12	有舌尖頭器	黒色緻密安山岩	78	13.5	5.5	5.1	
3	I 16	FB	b 7	有舌尖頭器	黒色緻密安山岩	18.5	15.5	5	1.8	
4	J 10	YLm	1	有舌尖頭器	黒耀石	17	18	5	1.2	

石 錐（第71図5～第72図30）

25点出土している。5の有茎のものや、16～18の長脚のものがあるが、主体は三角錐に近い、着柄部の抉りが小さいものである。未成品と考えられるものや、小型の尖頭削器の可能性があるものも図示している。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
5	K 8	表土		石錐	黒耀石	15.5	18	5	1	焼土坑近く
6	I 15	FB	a 72	石錐	黒耀石	35.5	19	5	2.4	
7	J 15	FB	a 15	石錐	黒耀石	18	14.5	3	0.4	
8	J 13	FB	b	石錐	黒耀石	(24)	(18.5)	5.5	(1.9)	
9	J 15	FB	a 73	石錐	黒耀石	19	17.5	4.5	0.9	
10	I 16	FB	a 96	石錐	黒耀石	20	16.5	5	1.1	
11	J 15	FB	a 61	石錐	黒耀石	24	16.5	5.5	1.3	
12	I 15	FB	a 7	石錐	黒耀石	16.5	15	4	0.6	
13	J 16	FB	b 16	石錐	黒耀石	15.5	10.5	4	0.4	
14	J 14	FB	b 2	石錐	黒耀石	15	16	5.5	0.6	
15	J 17	FB	a 3	石錐	黒耀石	13	12	4	0.5	
16	K 10	FB	a 1	石錐	黒耀石	18.5	(12.5)	2.5	(0.3)	
17	I 15	Ku		石錐	黒耀石	(15.7)	(16.3)	2.3	(0.4)	
18	J 17	FB	a 30	石錐	黒耀石	18	15	4	0.5	
19	J 14	FB	b 1	石錐未製品	黒耀石	22.5	16.5	4	1.1	
20	I 15	FB	a 23	石錐	黒耀石	24.5	17	14.5	1.4	
21	I 17	FB	a 12	石錐	黒色緻密安山岩	15.5	14.5	3	0.4	
22	I 16	表土		石錐	黒耀石	21	7.5	4	0.7	
23	表土			石錐	黒耀石	14	12	5	0.5	
24	J 13	FB	a 1	石錐	黒耀石	17	16	6	1.1	
25	J 13	FB	b 1	石錐	黒耀石	11.5	9	5.5	0.3	
26	J 16	FB	a 48	石錐	黒耀石	23.5	17.5	7.5	2.4	
27	J 11	FB	a 17	石錐？	黒耀石	19	11	12	1.5	

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
28	J 15	FB	a 11	石鍬未製品	黒耀石	22	19.5	7	2.4	
29	K 14	FB	a 2	石鍬未製品	黒耀石	20	14	6.5	1.2	
30	J 16	FB	a 22	石鍬未製品	黒耀石	24	16	8	2.3	

石 七 (第73図)

6点出土している。31が縦形で、それ以外は横形である。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
31	J 16	FB	a 10	石匕	黒色緻密安山岩	50	32.5	8	9.6	
32	I 13	FB	a 10	石匕	珪岩	47	43	12.5	17.8	
33	I 11	FB	a 21	石匕	珪岩	31	45	6	6.7	
34	表土			石匕	黒耀石	30	63	10	10.4	
35	J 16	FB	a 4	石匕?	黒色緻密安山岩	43.3	55	8.8	21.1	
36	表土			石匕	黒色緻密安山岩	46	76	20.5	34.4	

削 器 (スクレイパー) 等 (第74図～第76図)

剥離による刃部をもつものを16点集成した。37～39、43、48は尖頭削器といえるかもしれない。52、53は抉入削器的な用途を推定している。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
37	J 16	FB	a 45	尖頭削器	黒色緻密安山岩	40.5	25	9	8	
38	I 10	FB	a 23	尖頭削器	黒色緻密安山岩	34	32.5	7	6.3	
39	L 9	FB	a 1	尖頭削器	黒色緻密安山岩	22.5	19	6	2.1	
40	J 16	FB	a 1	削器		77.5	78	23	118	
41	J 17	FB	a 25	削器	黒色緻密安山岩	42	30.5	9.5	11.2	範状石器?
42	H 10.I	FB	a	削器	黒耀石	42	37	9.5	11	倒木痕跡
43	J 17	FB	a 1	尖頭削器?	緑色凝灰岩?	36	63.5	14.5	34	
44	H 10	FB	a 倒木	削器	黒色緻密安山岩	47	45.5	12	22.5	
45	表土			削器	黒耀石	51	15.5	7.5	5.3	
46	I 15	FB	a 55	削器? 握器?		26	11	6	1.3	
47	I 16	FB	a 52	握器? 削器	黒耀石	36	27	9	9	
48	J 13	FB	b 3	削器	黒耀石	33	15	7	2.9	
49	I 16	FB	a 28	削器? 横形石器?	黒色緻密安山岩	(21.5)	(42)	(10)	(6.3)	
50	J 16	FB	a 51	削器	黒色緻密安山岩	63.5	43.5	17.5	38.8	
51	G 11	FB	a 5	尖頭削器・石核?		39	37	20	25.3	
52	I 15	FB	a 8	抉入削器	黒色緻密安山岩	40.5	19	10.5	4.8	
53	J 17	FB	b 5	削器? 右核?	珪岩	65	36.5	19	21.3	

横形石器 (第77図～第78図)

14点出土している。材質は黒耀石が多いが、黒色緻密安山岩などのガラス質の石材を選択的に用いているようである。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
54	I 16	FB	a 39	楔形石器	黒色緻密安山岩	34	14	10	4.4	
55	表土			楔形石器	黒耀石	22	11	10	1.8	
56	J 17	FB	a 21	楔形石器	黒耀石	22	12	7	1.2	
57	表土			楔形石器	黒耀石	28	18	13	3.7	
58	I 11	FB	a 23	楔形石器	黒耀石	21	17	9	3.3	
59	J 17	FB	a 24	楔形石器	黒耀石	19	15	9	2.5	
60	I 11	FB	a 2	楔形石器	黒耀石	26.5	21.5	8.4	4.9	
61	J 16	FB	a 57	楔形石器	黒耀石	18.5	24.5	7.5	2.6	
62	I 16	FB	a 94	楔形石器	黒色緻密安山岩	28	19	8	4.4	
63	H 11	FB	a 7	楔形石器	黒耀石	32	32	16	13.3	
64	J 13	FB	b 5	楔形石器	黒耀石	40	35	10.5	11.6	
65	I 14	FB	b 1	楔形石器	黒耀石	29	33	12	14.4	
66	I 11	表土		楔形石器	黒色緻密安山岩	26.5	25.3	10.2	7.6	
67	J 16	FB	a 21	楔形石器	凝灰岩	66	44.5	9.5	30.7	

石核 (第79図・第88図234)

5点出土している。打面の転移を頻繁に行い、目的とする剥片は幅広の貝殻状を呈すと考えられる。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
68	I 16	FB	a 3	石核	黒耀石	51.5	87.5	32.5	142.7	
69	J 17	表土		石核	黒色緻密安山岩	53	47	27	75.8	土層帶
70	I 16	FB	a 113	石核	黒色緻密安山岩	39	50.5	38.5	50.4	
71	I 16	FB	a 21	石核	石英安山岩	61	223	70	549.7	
234	H 107	FB	a	石核	頁岩	70	90	69	314	

磨製石斧 (第80図)

4点出土している。72、74は部分磨製。75は擦り切り技法によって製作されており、側面部に擦り切り痕が残存している。被熱のためか軟弱化しており、胸部にタール状の付着物がある。73は軟玉製の定角式玉斧である。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
72	J 14	FB	a 16	磨製石斧	砂岩	167	75	35	535.2	局部磨製
73	J 14	FB	a 29	磨製石斧	透角閃石(軟玉)	81	42.5	13	61.5	
74	J 14	FB	a 2	磨製石斧	砂岩	89.5	50	21.5	128.8	
75	I 16	FB	a 11	磨製石斧	透角閃石岩	92.5	47	20.5	112.5	被熱

打製石斧 (第81図～第86図・第88図235)

29点出土している。形態は大型で長楕円様(76～78)、ばち形(79、80)、短冊形(81～87)、その他は不定形な形態である。89は扁平な円錐の一端を打ちかいて刃部を作り出しているのみであるが、凹石にも転用している。また、99～104は石核の可能性も多い。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
76	J 14	FB	a 5	石斧	砂岩	165	72.5	35	455	
77	I 14	FB	a 11	石斧	シルト質砂岩	144	71.5	30	390	
78	J 14	FB	a 28	石斧	砂岩	139	72	34	335	
79	J 14	FB	a 1	石斧	砂岩	99.5	65	26.5	162	
80	I 16	FB	a 16	石斧	硬砂岩	124	74	25	225	
81	J 15	FB	a 12	石斧	緑色凝灰岩	127	47	20	127	
82	J 15	FB	a 20	石斧	シルト質砂岩	131	46.5	21	135	
83	J 16	FB	a 38	石斧	頁岩	104	50	19	112	
84	I 11	FB	a 22	石斧	石英安山岩	102	56	18	139	
85	表土	FB	a	石斧	石英安山岩	114	52.5	16	107	被熱
86	I 16	FB	a 99	石斧	緑色片岩	87	46.5	15	80	
87	J 17	FB	a 36	石斧	砂岩	91	42	11	50	
88	I 10	FB	a 77	石斧	シルト質砂岩	90	54	29	130	
89	J 14	FB	a 12	石斧	輝綠岩	89.5	54	21	120	圓石に転用
90	J 14	FB	a 12	石斧	輝石安山岩	81.5	52	9	76	
91	J 11	FB	a 29	石斧?	硬砂岩	69.5	54.5	18	65	
92	J 12	FB	a 11	石斧	硬砂岩	72	61	21	120	
93	I 11	FB	a 34	石斧	硬砂岩	69	65	30	166	
94	I 17	FB	a 25	石斧?	砂質粘板岩?	59.1	43.8	15.7	46.8	
96	K 14	FB	a 1	石斧?	石英安山岩	(96)	85	22	(193.2)	
97	J 16	FB	a 37	石斧?	黒色緻密安山岩	78	48	18	78	
98	表土			石斧?	硬砂岩	(83)	60	45	(211)	
99	J 12	FB	a 4	石斧	黒色緻密安山岩	(71)	68	41	(195)	
100	K 10	FB	a 7	石斧? 石核?	黒色緻密安山岩	65	52	34	125	
101	I 10	FB	a 14	石斧? 石核?	黒色緻密安山岩	83	48	30	115	
102	表土			石斧? 石核?	石英安山岩	68.5	32.5	23.5	56	
103	G 11	FB	a 7	石斧? 石核?	黒色緻密安山岩	(57)	38	23	(52)	
104	H 11	FB	a 6	石斧? 石核?	黒色緻密安山岩	77	(44)	29.5	(75)	
235	I 10	FB	a 32	打製石斧	硬砂岩	(49)	(47)	(32)	(83.9)	

礫 器 (第87図)

2点出土している。105は被熱された石皿の破片を再利用して礫器としている。106は盤状節理の角礫の一端を表裏から打ちかいて、刃部をつくり出している。106はJ 16区の空穴状造構の覆土より検出された。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
105	J 16	FB	a 8	礫器	石英安山岩	149	92	54	708.3	元石皿?
106	J 16	豊穴		礫器	石英安山岩	146	122	30	759.4	盤状節理。

石 盔 (第89図～第93図)

19点出土している。破碎されて、焼け礫として使用されたものもあるので、儀のなかにふくまれて判らないものもあると思われる。

107～110、112～116は表裏を使用している。また108、109は表裏に2つの縫み、計4つの縫みをもつている。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
107	L	9	FB	b 11	石皿	374	464	76	15500	
108	L	9	FB	b 10	石皿	360	296	134	18600	
109	G	10	FB	a 1	石皿	368	312	79	11400	
110	L	9	FB	b 13	石皿	325	325	93	12100	
111	J	15	FB	a 不明	石皿	443	375	121	31800	
112	L	9	FB	b 12	石皿	384	266	120	20400	
113	K	11	FB	a 1	石皿	383	228	100	13500	
114	J	14	FB	a 不明	石皿	231	185.5	132	8000	
115	G	10	FB	a 2	石皿	307	222	66	6800	
116	J	15	FB	a 29	石皿	287	262	98	12100	
117	J	17	FB	a 10	石皿	362	260	86	12400	
118	H	10	FB	a 9	石皿	268	265	96	9700	
119	J	16	FB	a 18	石皿	268	210	85	7550	
120	J	10	FB	a 15	石皿	220	130	88	15500	
121	I	15	FB	a 63	石皿	172	207.5	67.5	3250	
122	J	15	FB	a 6	石皿	(162)	(189)	73	(3200)	
123	I	13	FB	a 13	石皿	144	134.5	55	1250	
124	J	15	FB	a 62	石皿	212	157.5	93	3500	
125	J	17	FB	b 22	石皿	154	118	93	3000	
126	I	16	FB	b 2	石皿	130.5	103.5	57	936	
玄武岩										

台 石 (第94図127・128)

2点出土している。どちらも石皿の転用と考えられる。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
127	I	17	FB	a 6	台石・石皿	161	204	63.5	3590	
128	I	16	FB	a 90	台石・石皿	305	226	105	10400	

磨石・敲石・凹石 (第94図～第101図)

178点出土しており、その内、図示・計測可能なものの104点を呈示する。

ほとんどのものが、磨石・敲石・凹石の各機能を共有しており、単機能の痕跡の場合でも、他の痕跡が観察されないだけの可能性が高い。また、本来は石皿であったものも含まれていると思われる。

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
129	J	10	FB	a 1	磨石?	153	141	148	4750	真珠状
130	L	9	FB	a 3	磨石	80.5	77.5	41	393	
131	I	12	FB	a 11	磨石	100	89	42.5	560	
132			表土		磨石	120	111	45.5	839	
133	I	17	FB	a 43	磨石	74	63	48	236	
134	L	9	FB	a 2	磨石	100.5	84	67.5	753	

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
135	J 15	FB	a 70	磨石	輝石安山岩	107.5	99	68.5	920	欠番
136	I 16	FB	a 15	磨石	玄武岩	118	95	55.5	866	
137	I 16	FB	b 3	磨石	輝石安山岩	47	41	32	18.6	
138	J 14	FB	a 6	磨石	輝石安山岩	52.5	47	42.5	133	
139	J 15	FB	a 25	磨石	多孔質玄武岩	156	115	63	1335	
140	L 10	FB	a 1	磨石	玄武岩	116	85.5	73	1024	
141	I 16	FB	b 4	磨石	玄武岩	104	87.5	41	429	
142	J 17	FB	b 4	磨石	輝石安山岩	109	73	48	519	
143	J 16	FB	a 3	磨石・敲石?	輝石安山岩	134	75	62	923	
144	I 11	FB	a 18	磨石	石英安山岩	(74.5)	49.5	34	(114)	
145	I 13	FB	a 4	磨石	多孔質玄武岩	53.5	51.5	48	452.5	
146	J 11	FB	a 24	磨石	玄武岩	82.5	(38.5)	60	(224)	
147	K 10	FB	a 8	磨石	玄武岩	(65)	87	48	(322.7)	
148	J 15	FB	a 30	磨石?石皿?	輝石安山岩	166	(124)	81	2500	
149	K 10	FB	a 6	磨石?石皿?	輝石安山岩	110	87	51.5	600.5	
150	J 10	FB	a 17	磨石?石皿?	輝石石英安山岩	(67.5)	(62)	50	(308.7)	
151	I 16	FB	a 7	敲石	砂岩シルト岩	133	31	14	95	
152	I 16	FB	b 5	敲石	長石質砂岩	126	40	28	169	
153	J 10	FB	a 12	敲石	輝石安山岩	128	64	38	330	
154	H 11	FB	a 11	敲石	輝石安山岩	106.5	55	37	252	
155	J 10	FB	b 2	敲石	玄武岩	135	55	38.5	267	
156	I 17	FB	b 1	敲石	輝石安山岩	83.5	47	37.5	185	
157	I 12	FB	b 1	敲石	輝石安山岩	62.5	36.5	36.5	96	
158	I 16	FB	a 88	敲石	輝石安山岩	54.5	42.5	40.5	109	
159	G 11	FB	a 4	敲石	玄武岩質溶岩	62	47	44	142	
160	I 16	FB	a 103	敲石	輝石安山岩	56	46	30	95	
161	表土			敲石	輝石安山岩	51.5	37.5	29	69.5	
162	I 11	FB	a 12	敲石	玄武岩	60	55	34	161	
163	J 11	FB	a 31	敲石	輝石安山岩	40.5	27	24	39	
164	H 11	FB	a 4	敲石	輝石安山岩	53	50	38.5	123	
165	J 12	FB	a 5	敲石	輝石安山岩	125	82	61.5	881	
166	I 10	FB	a 10	敲石	輝石安山岩	101.5	64	44.5	321	
167	H 11	FB	a 1	敲石?	輝石安山岩	86.5	58.5	37.5	258	
168	J 13-14	FB	土層	敲石	輝石安山岩	102	75	41	615	土層帶
169	I 15	FB	a 4	敲石・磨石	多孔質玄武岩	116	80.5	65	890	
170	L 10	FB	b 2	磨石・敲石	玄武岩	106	95.5	54	750	
171	K 17	FB	b 8	敲石・磨石	輝石安山岩	111	78.5	55	873.4	
172	表土			磨石・敲石	輝石安山岩	58	43.5	35.5	114.8	
173	J 12	FB	a 9	敲石・磨石	普通輝石安山岩	90.5	103	41	528	
174	J 13	FB	b 10	敲石・磨石	カンラン石玄武岩	95	76.5	46.5	482	

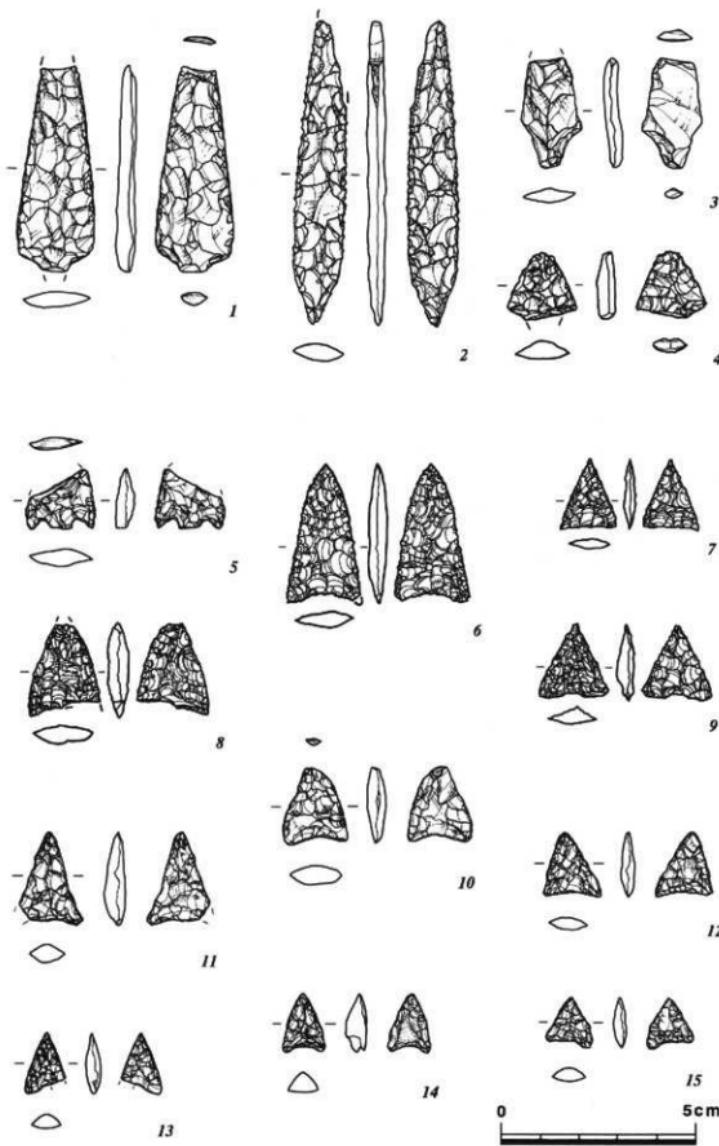
No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
175	J 16	FB	b 10	磨石・敲石	玄武岩	99.5	(54.5)	27	(191)	
176	J 16	FB	b 8	磨石・敲石	石英安山岩	(55)	74	38	(174)	
177	J 10	FB	a 7	凹石・磨石	多孔質玄武岩	107	90	54	649.1	
178	表土			凹石・磨石	輝石安山岩	83	85	35	380	
179	K 9	FB	a 4	凹石	玄武岩質溶岩	70	68	43	232	
180	L 9	FB	a 5	凹石・磨石	玄武岩	148	102.5	77	1760	
181	G 11	FB	a 3	凹石	安山岩質溶岩	66	58	38	170.7	
182	I 16	FB	a 57	凹石	輝石安山岩	83	70.5	55	383	
183	I 12	FB	a 1	凹石	玄武岩	68	66.5	40	202	
184	H 11	FB	a 35	磨石・凹石	玄武岩	100	72.5	43	495	
185	表探			敲石	多孔質玄武岩	72	60.5	41	238.7	
186	H 11	FB	a 5	凹石	玄武岩質溶岩	104.5	99	57.5	484	
187	H 11	FB	a 27	敲石? 凹石?	石英安山岩	51.5	50.5	38.5	132	
188	H 11	FB	a 30	凹石?	輝石安山岩	(81)	61	37.5	(214)	
189	H 11	FB	a 2	凹石	玄武岩	78	47.5	43	196	
190	J 14	FB	a 8	磨石・凹石?	輝石安山岩	(70)	54.5	37	(216)	
191	J 12	表土		磨石・凹石	カラン石玄武岩	82	78	44.5	308.6	
192	J 14	FB	b 5	磨石・凹石	輝石石英安山岩	106.5	96	62	914	
193	J 14	FB	a 19	磨石・凹石	玄武岩	125	101.5	53	893	
194	H 10	FB	a 3	磨石・凹石	玄武岩	99	81	42	505	
195	J 17	FB	b 12	凹石・磨石	輝石安山岩	105.5	89	45	682	
196	K 11	FB	b 1	磨石・凹石	複輝石安山岩	96.5	77.5	45.5	490	
197	I 17	FB	a 21	凹石・磨石	玄武岩	106	79.5	61	803	
198	J 11	FB	a 15	凹石・磨石	輝石安山岩	66	59	34	151	
199	I 17	FB	a 16	磨石・凹石?	輝石安山岩	88.5	72	41	325	
200	I 14	FB	a 10	凹石?	輝石安山岩	105.5	72.5	55	516.3	
201	I 11	FB	a 6	凹石	輝石安山岩	113.5	85.5	49.5	677.2	
202	I 13	FB	a 2	磨石・凹石	砂岩	94.5	76	49	351	
203	J 13	FB	b 11	磨石・凹石?	石英安山岩	86.5	(52.5)	51	(263.3)	
204	I 17	FB	a 41	凹石	砂岩	63	47	39	173	
205	J 13	FB	b 9	凹石?	多孔質玄武岩	57.5	44	52	155	
206	I 14	FB	a 9	磨石・凹石?	輝石安山岩	57	53	(34)	(91)	
207	L 9	FB	a 7	磨石・敲石・凹石		183.5	113	88.5	2170	
208	I 14	FB	a 5	敲石・凹石・磨石	輝石安山岩	110.5	52	29	252	
209	K 14	FB	b 1	敲石・磨石・凹石	玄武岩質溶岩	122	59	40	443.4	
210	K 12	FB	b 3	磨石・敲石・凹石	多孔質玄武岩	76.5	53	40	182	
211	L 9	FB	b 9	凹石・敲石・磨石	輝石安山岩	65	47.5	31	116	
212	K 10	FB	a 5	敲石・磨石・凹石	輝石安山岩	102	81	39	512.8	
213	J 11	FB	a 14	敲石・凹石・磨石	輝石安山岩	99.5	59.5	33	210	
214	表探			敲石・凹石・磨石	輝石安山岩	64	46	39	149.7	

No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
215	J 16	FB	a 13	敲石・圓石・磨石	多孔質玄武岩	102	73	41.5	421	
216		表土		敲石・圓石・磨石	輝石安山岩	68	45	35.5	144.5	
217	J 17	FB	b 11	磨石・敲石・圓石	輝石安山岩	119.5	85.5	59	970	
218	H 11	FB	b 41	敲石・圓石・磨石	玄武岩	118	83	42	688	
219	K 13	FB	b 9	磨石・圓石・敲石	輝石安山岩	108	99.5	50	706	
220	1 17	FB	a 39	磨石・圓石・敲石	輝石安山岩	89.5	83	31	336	
221	J 13	FB	a 8b	磨石・圓石・敲石	輝石安山岩	94.5	84	51	501.8	
222	I 10	FB	a 30	磨石・圓石・敲石	多孔質玄武岩	73	67	40	208	
223	J 10	FB	a 10	磨石・圓石・敲石	多孔質玄武岩	70.5	61	49	256	
224	H 11	FB	a 38	磨石・圓石・敲石	玄武岩	63.5	50.5	32.5	126	
225	G 11	FB	a 8	磨石・圓石・敲石	輝石安山岩	68	52	42	195	
226	表探			磨石・圓石・敲石	輝石安山岩	69.5	55.5	33.5	176.6	
227	H 11	FB	a 9	磨石・圓石・敲石	カンラン石玄武岩	73.5	53	53	245	
228	I 14	FB	a 8	磨石・圓石・敲石	多孔質玄武岩	54.5	59	43	156	
229	I 16	FB	a 10	磨石・圓石・敲石	玄武岩	51	45.5	39.5	106	
230	I 13	FB	a 5	磨石・圓石・敲石	石英安山岩	63	46.5	35	125	
231	表上			磨石・圓石・敲石	輝石安山岩	68	73.5	48	342	
232	I 13	FB	a 7	磨石・圓石・敲石	玄武岩	(89)	77	45	451.5	
233	I 17	FB	a 40	磨石・圓石・敲石	輝石安山岩	(82)	(52)	56	(204)	

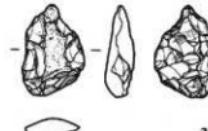
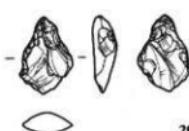
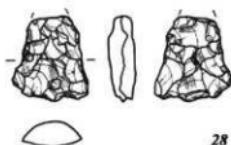
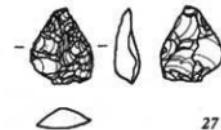
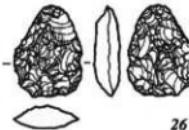
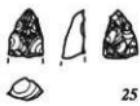
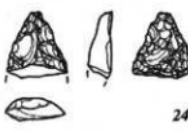
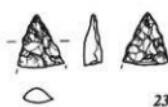
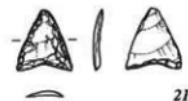
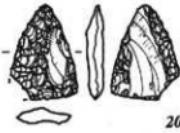
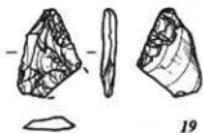
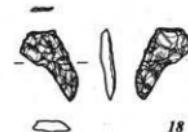
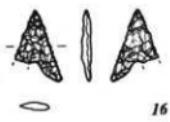
砥石？（第88図236）

溝状の研磨痕のある礫が1点出土している。溝断面はV字形であり、磨製石斧の存在から、その刃部研磨の道具と想定してよいかもしれない。

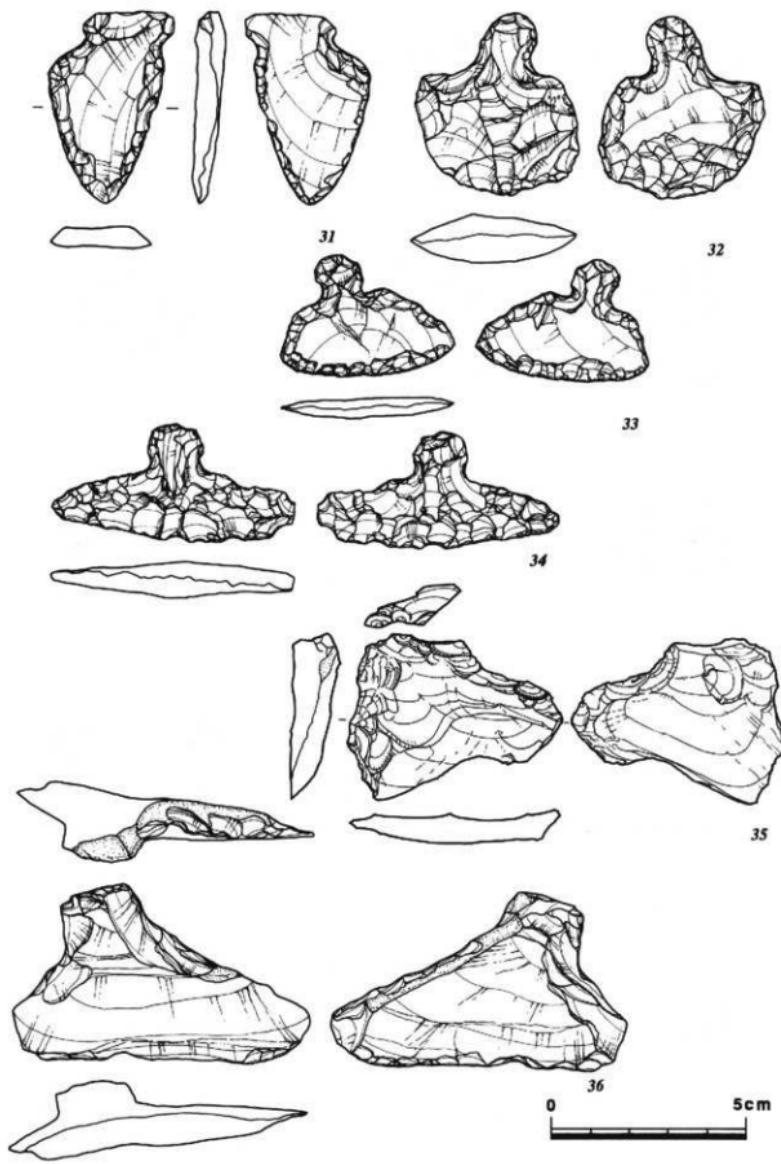
No.	区	層	取上No.	器種	材質	長さ(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考
236	J 15	FB	a 65	砥石	輝石安山岩	109	97	81	818	



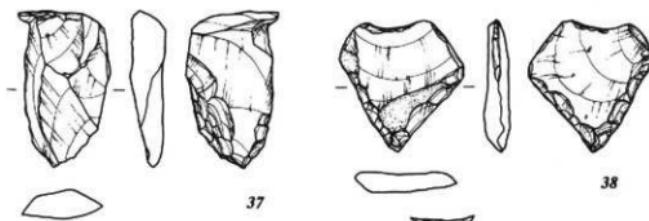
第71図 有舌尖頭器・石器 1



第72図 石器 2



第73図 石 七

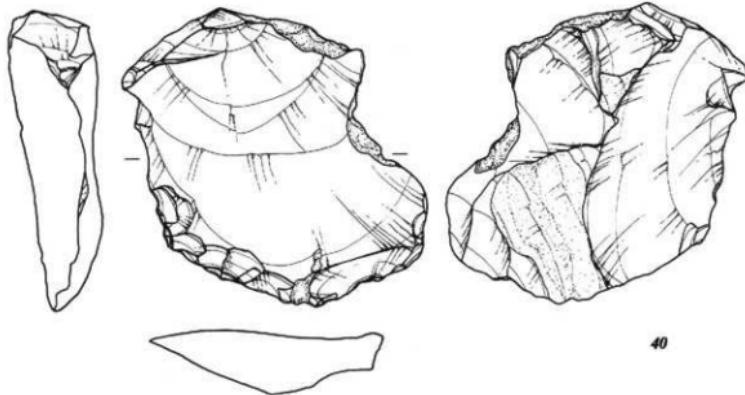


37

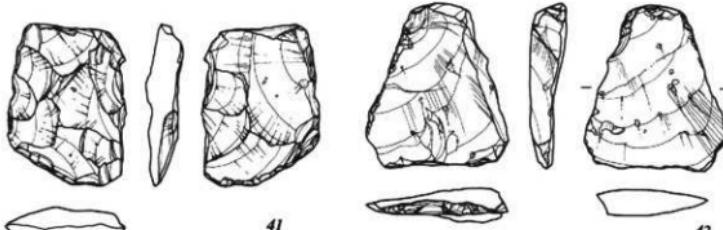
38



39



40



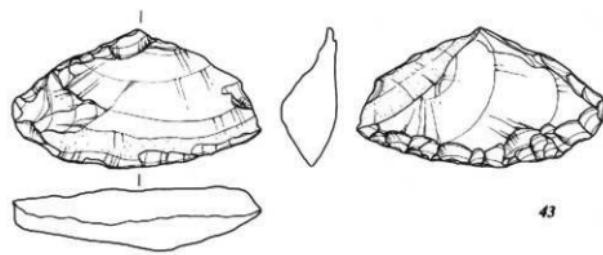
41

42

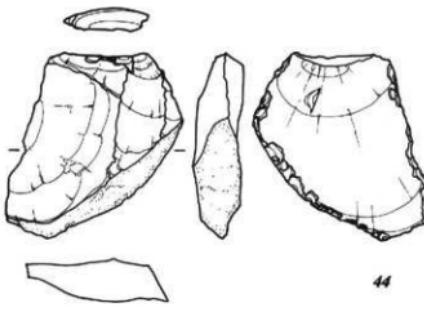
0

5cm

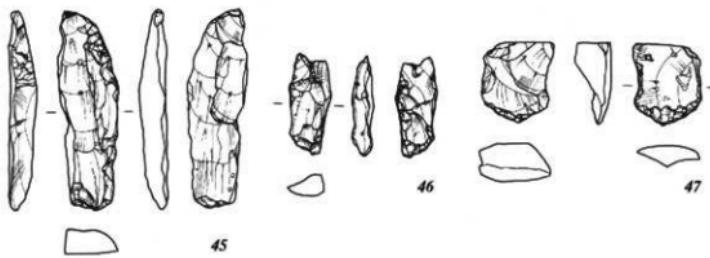
第74図 削器 1



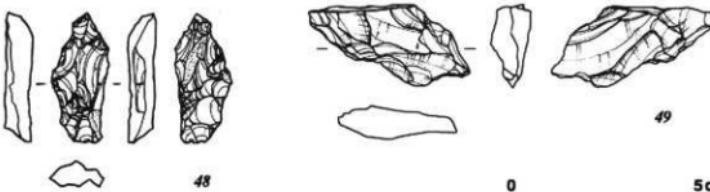
43



44



45

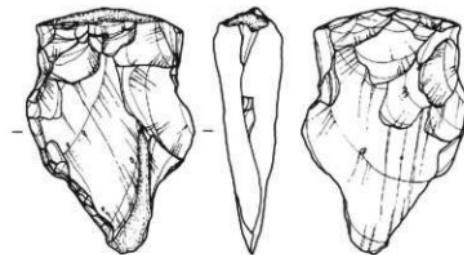


46

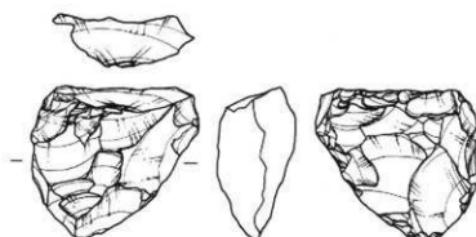


49

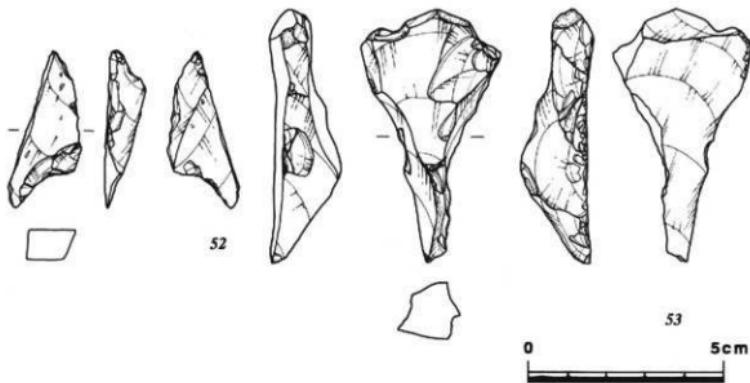
第75図 削器 2



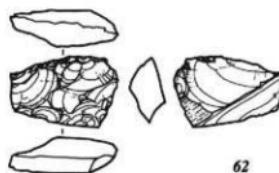
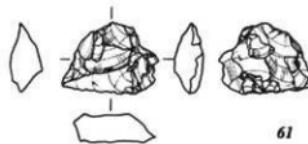
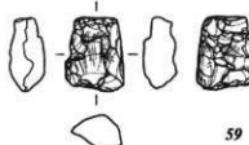
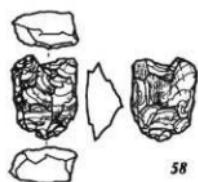
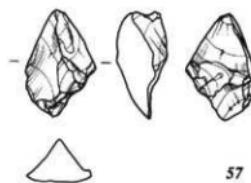
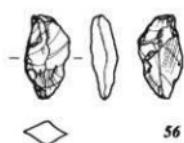
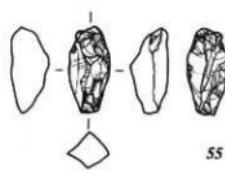
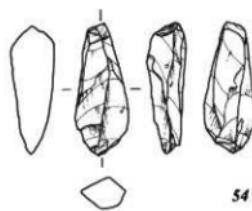
50



51



第76図 刃器 3

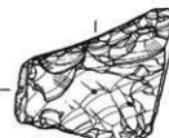
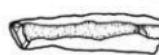


0 5cm

第77圖 橫形石器 1



63



64



65



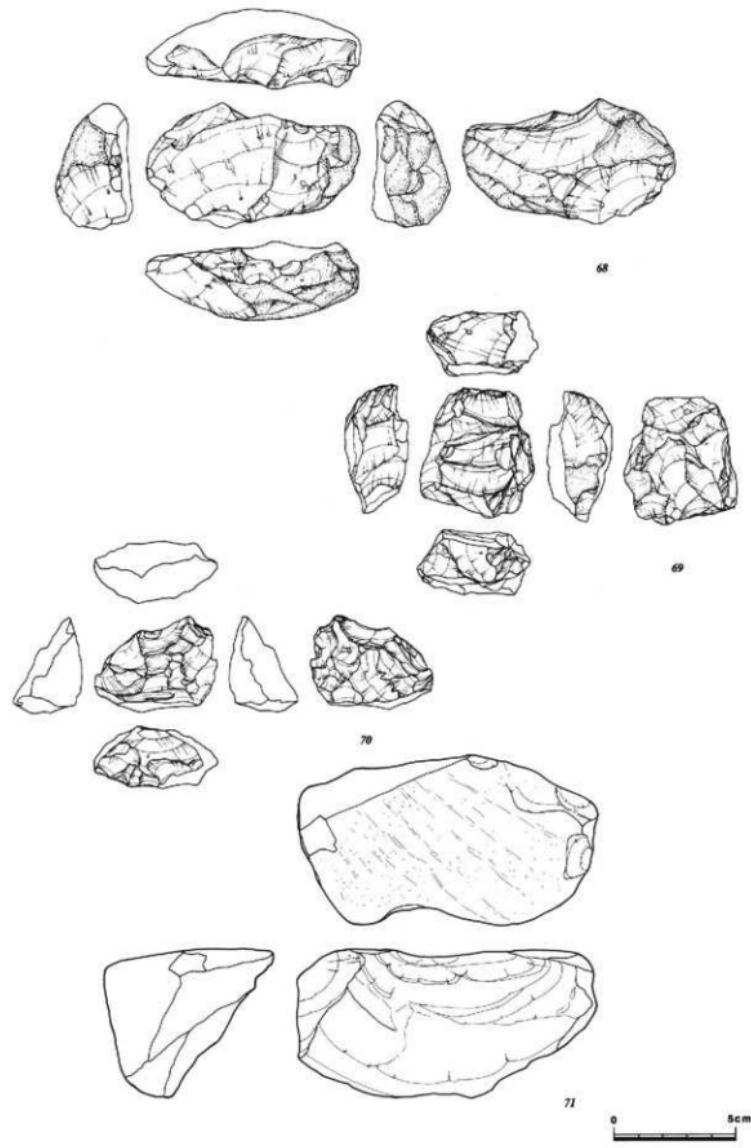
66



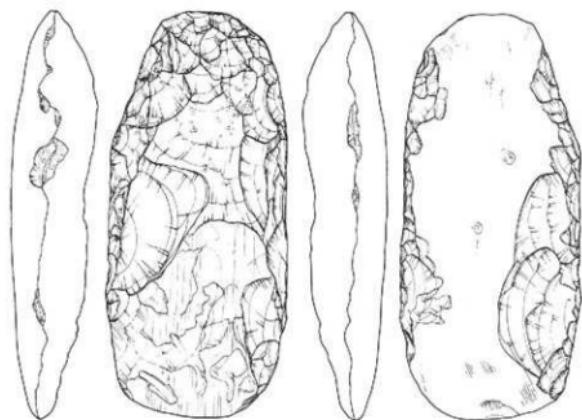
67



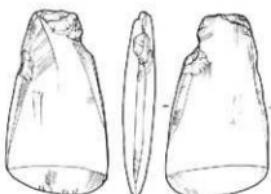
第78図 模形石器 2



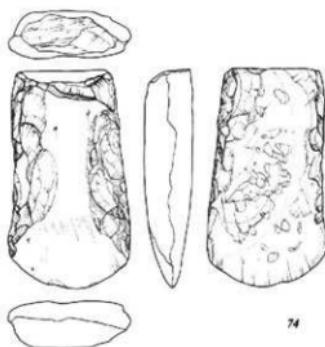
第79圖 石 核



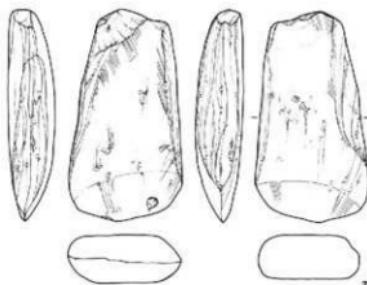
72



73



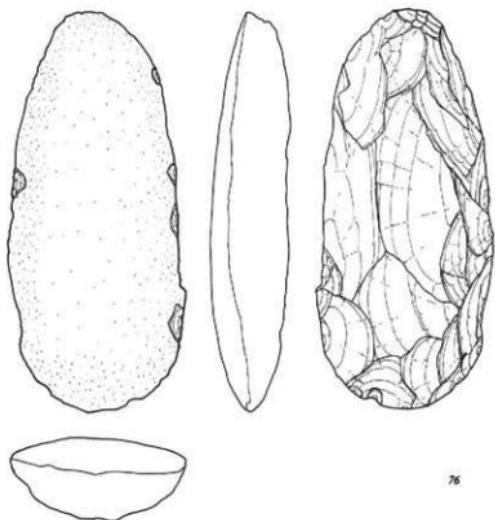
74



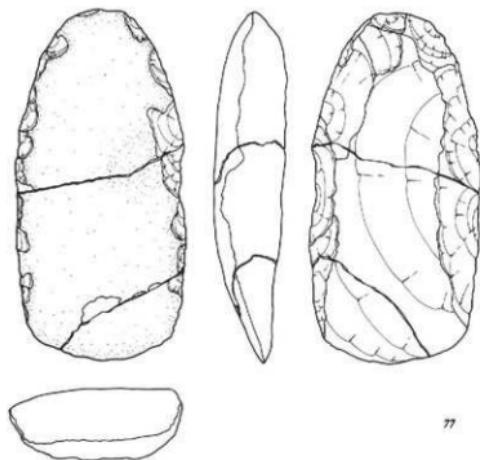
75

0 5cm

第80図 磨製石斧



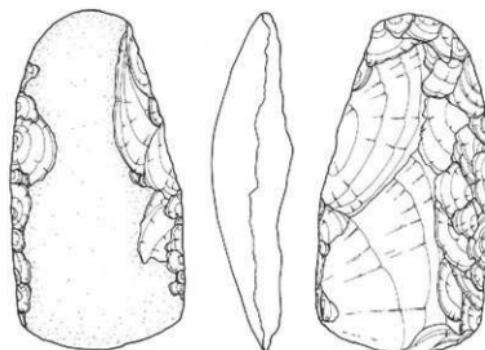
76



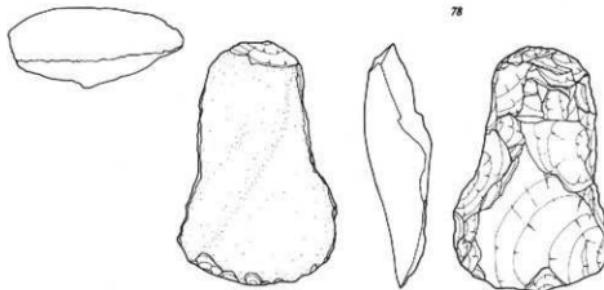
77



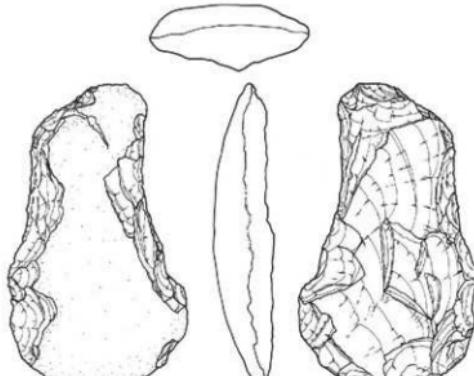
第81圖 打製石斧 1



78



79

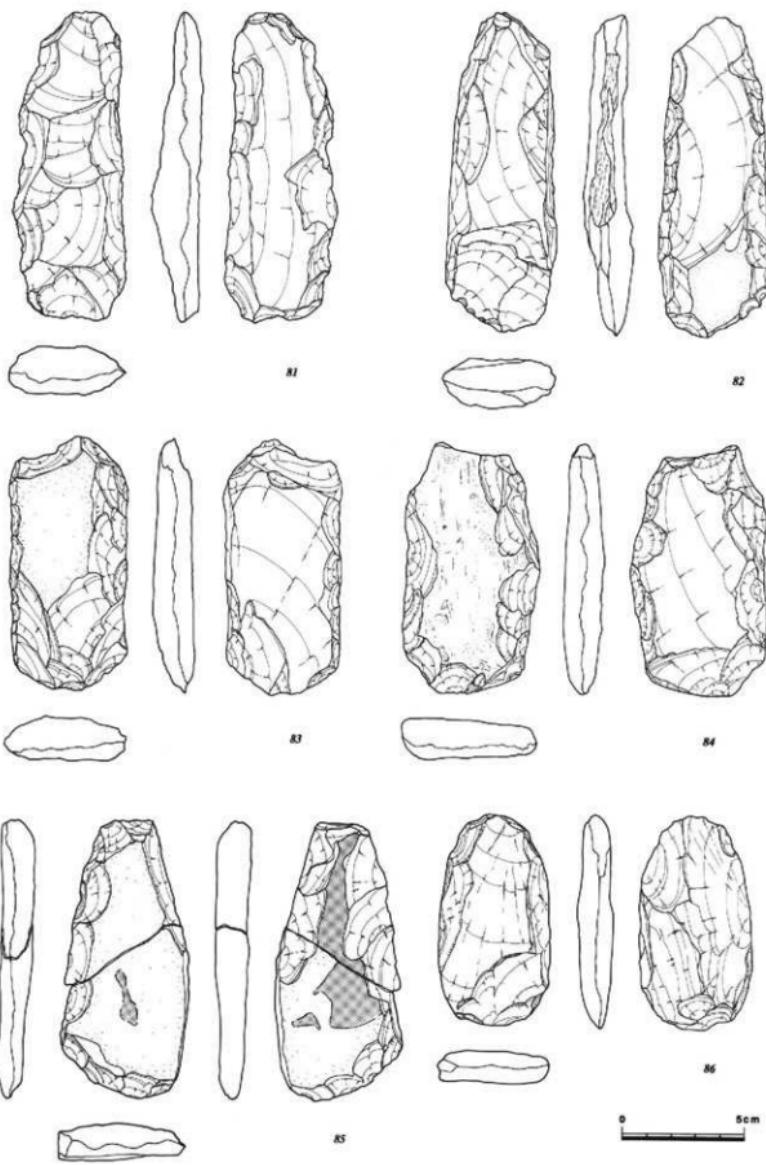


80

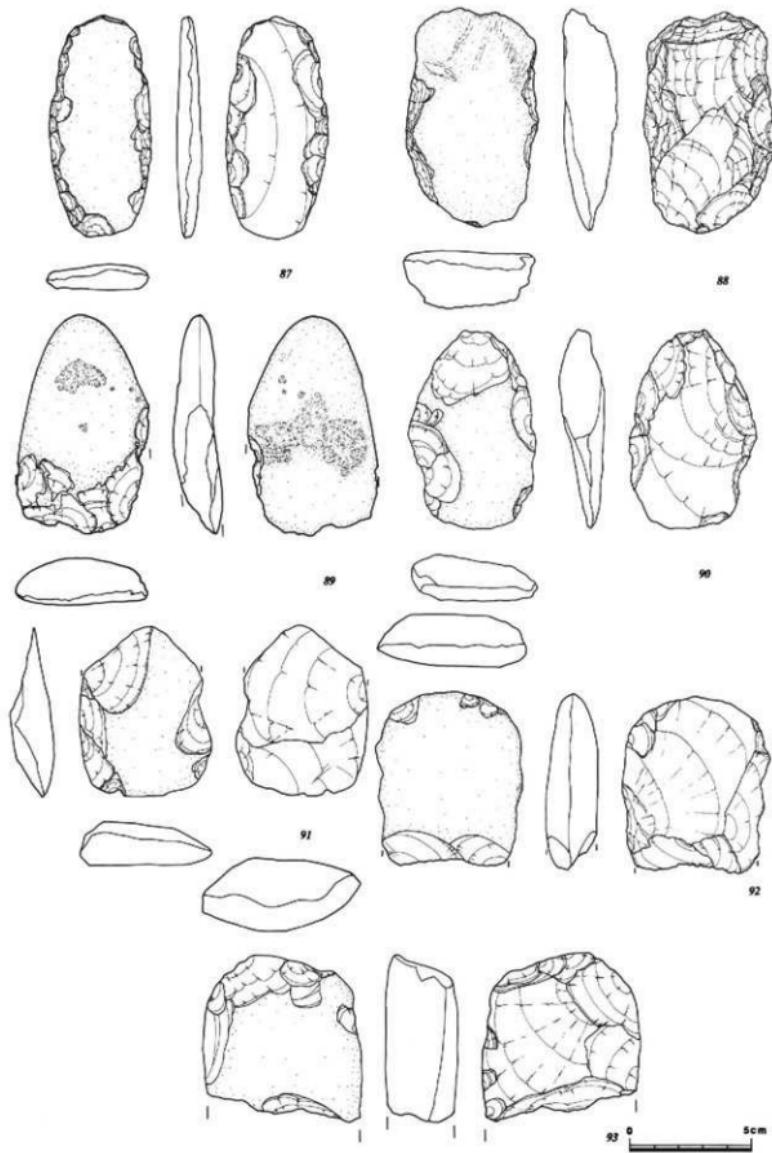


0 5cm

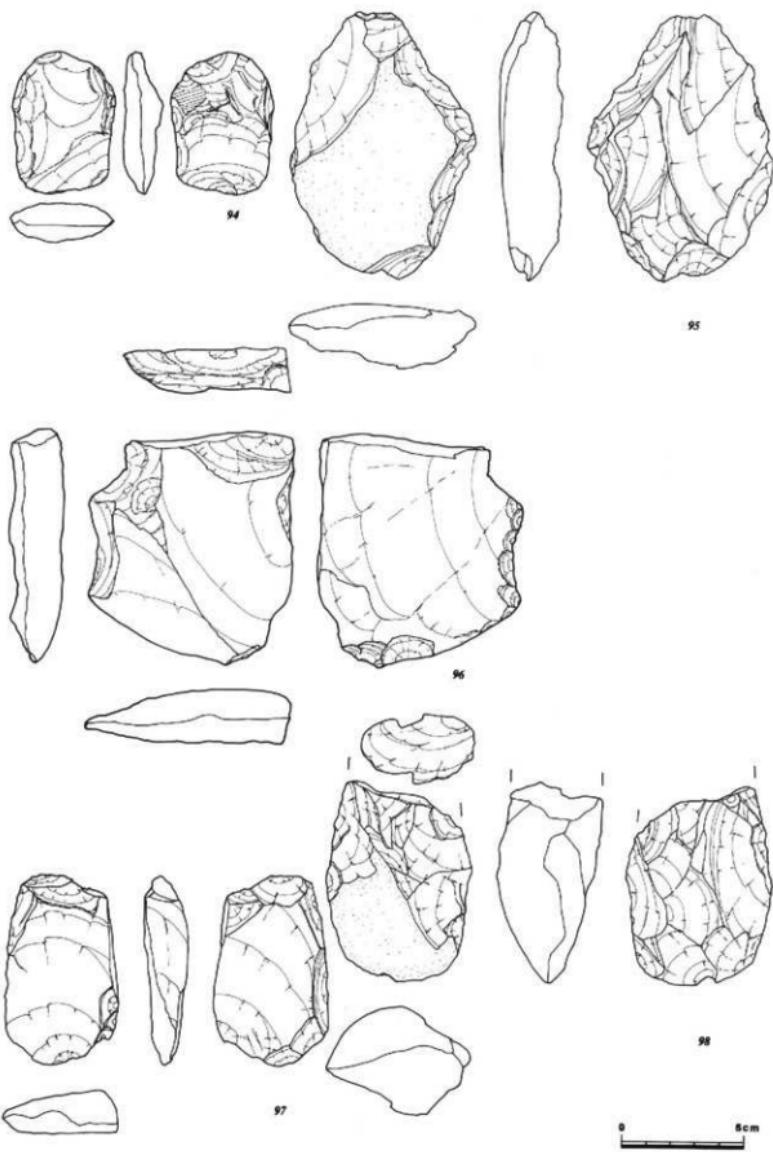
第82圖 打製石斧2



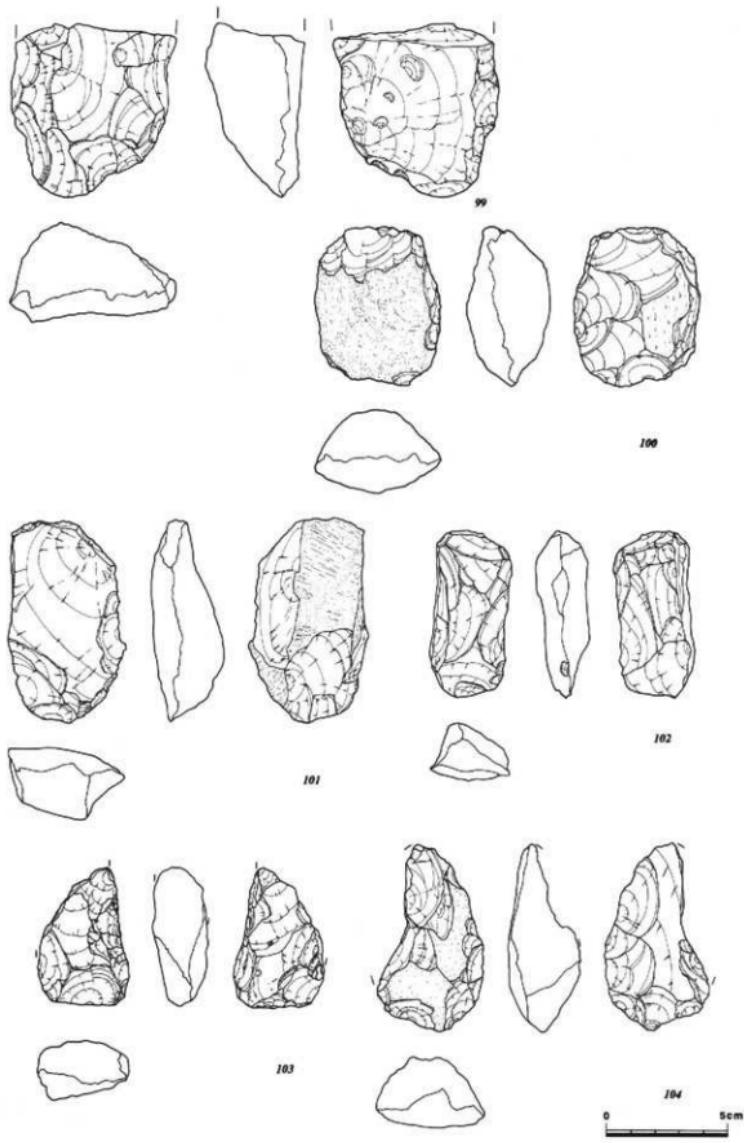
第83圖 打製石斧 3



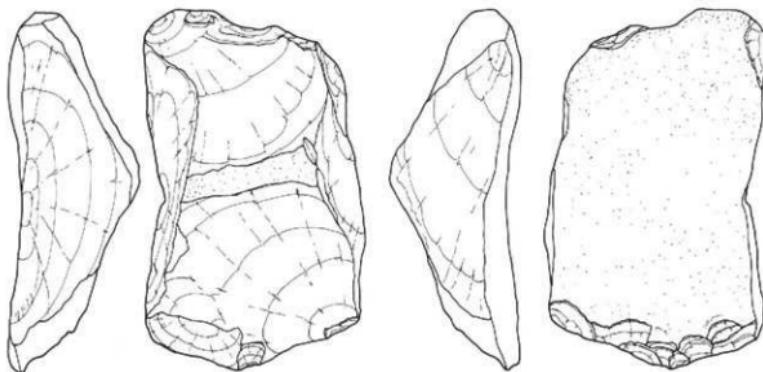
第84図 打製石斧 4



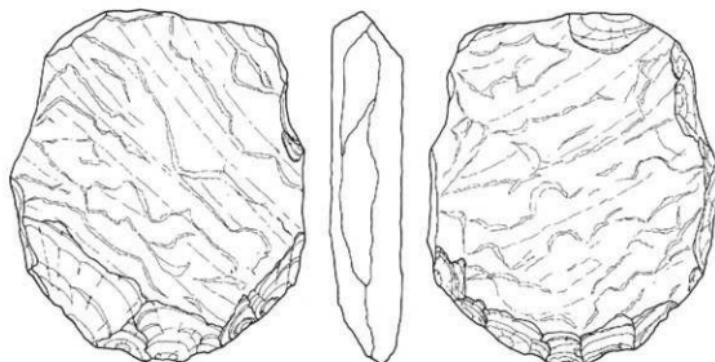
第85圖 打製石斧 5



第86圖 打製石斧 6



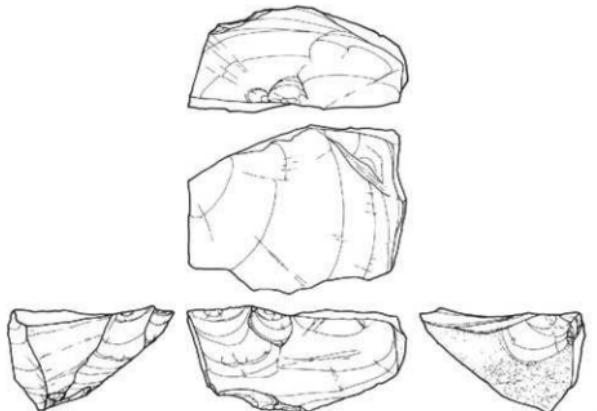
105



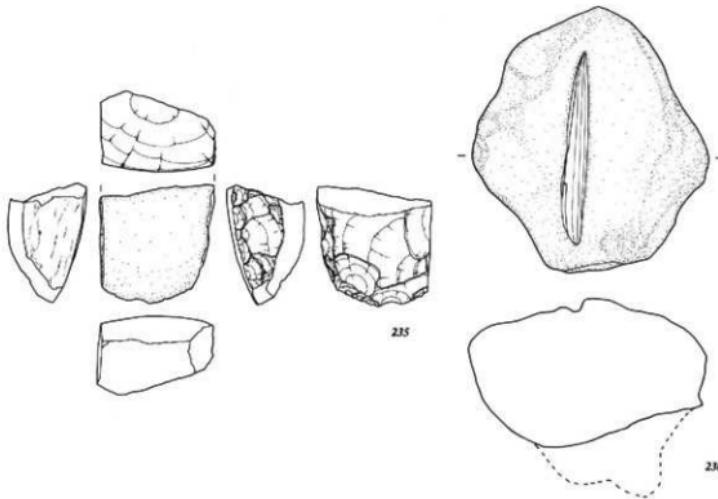
106



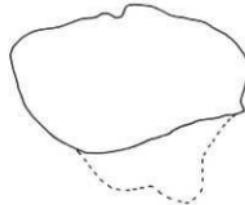
第87図 碓 器



234



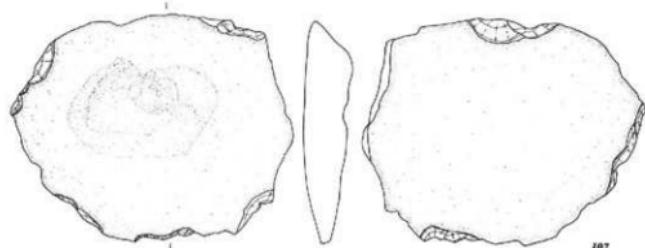
235



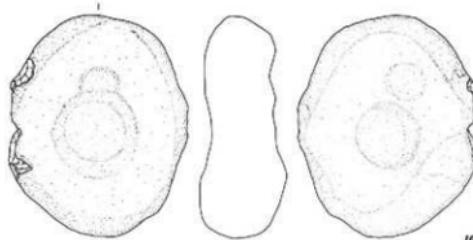
236



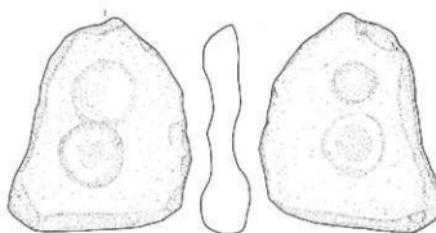
第88圖 石核・石斧・砸石？



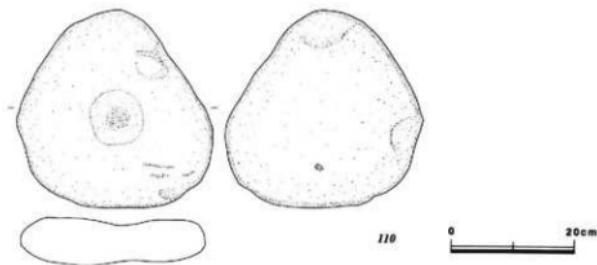
107



108



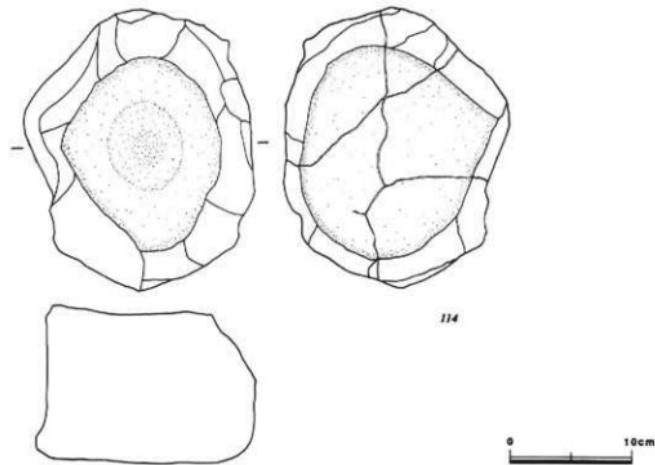
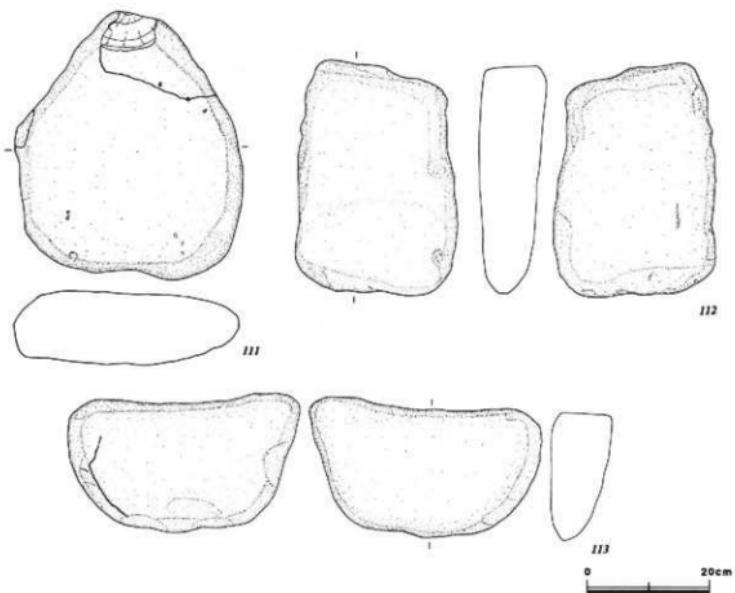
109



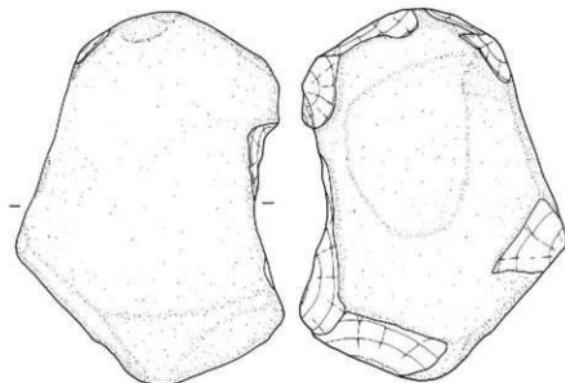
110

0 20cm

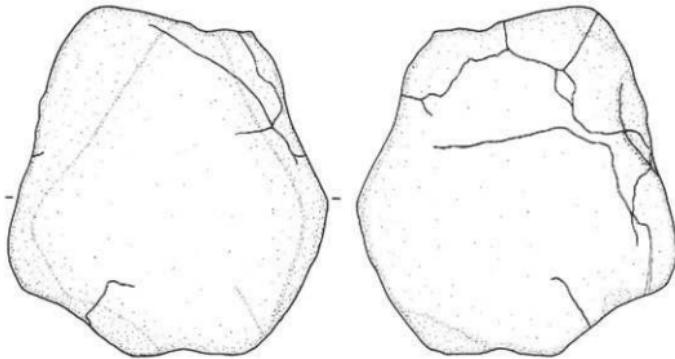
第89圖 石皿 1



第90図 石皿 2



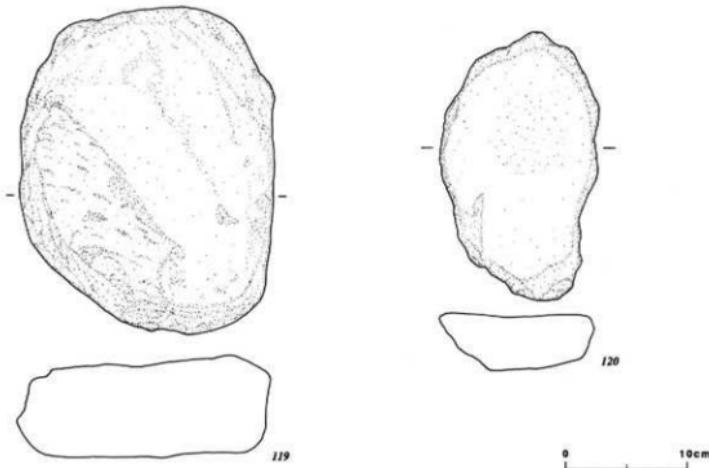
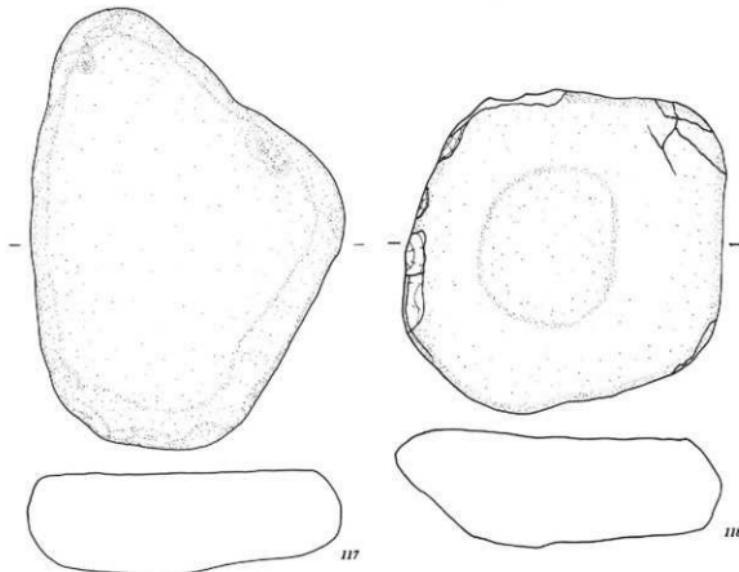
115



116

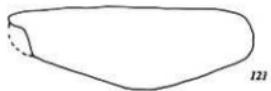
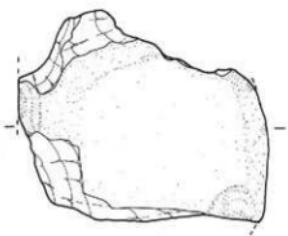


第91図 石皿 3

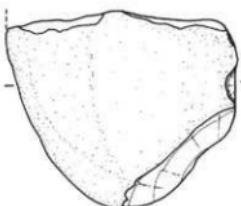


0 10cm

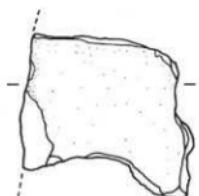
第92図 石皿 4



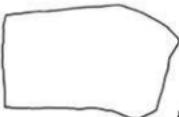
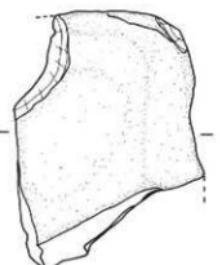
121



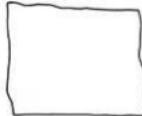
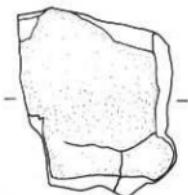
122



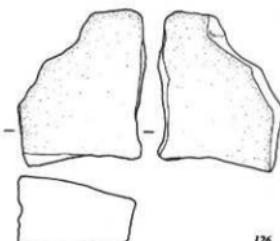
123



124



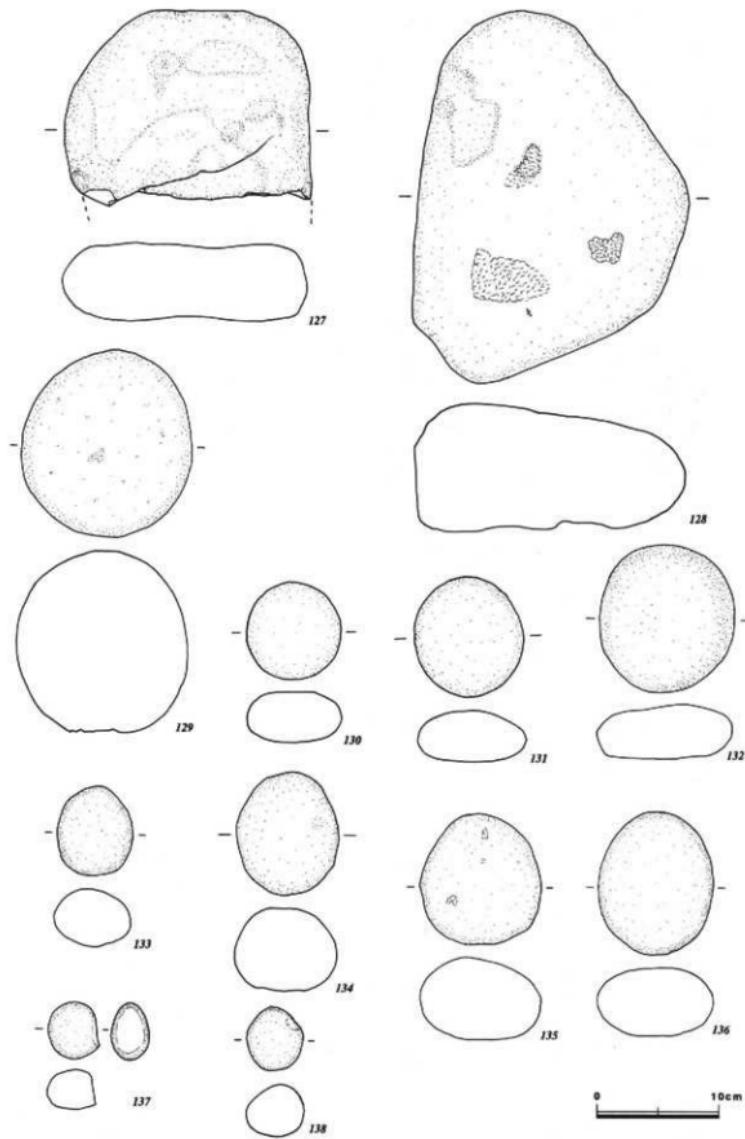
125



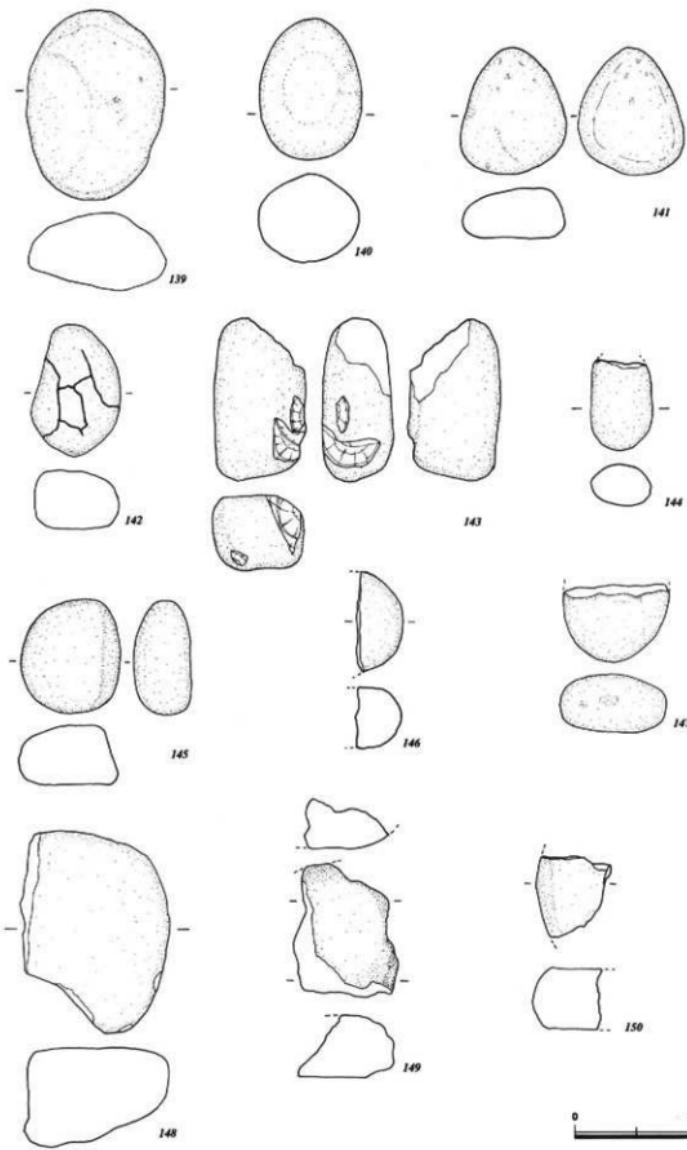
126



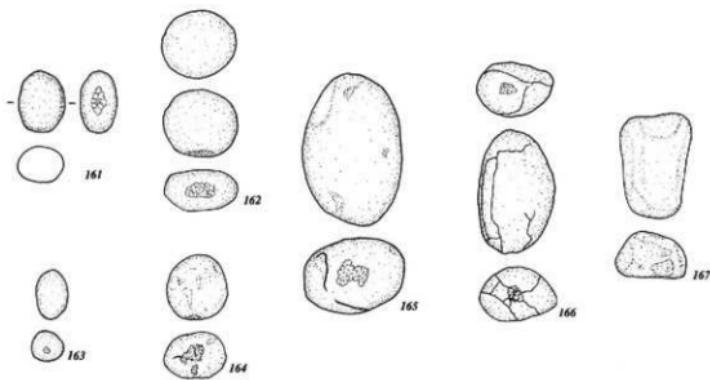
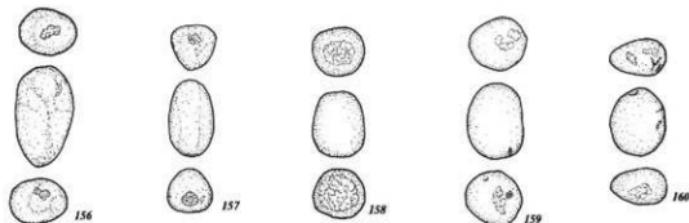
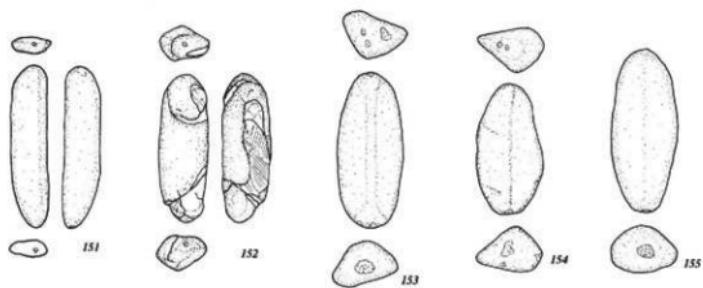
第93図 石皿 5



第94図 台石・磨石1

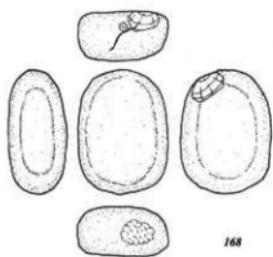


第95図 磨石 2

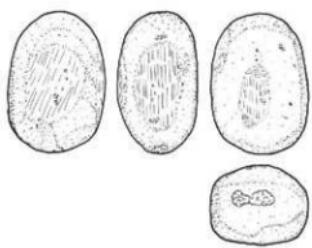


0 10cm

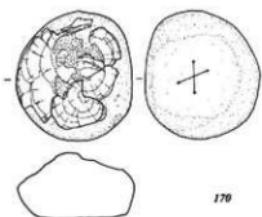
第96図 敲 石



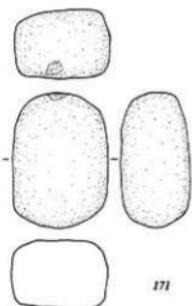
168



169



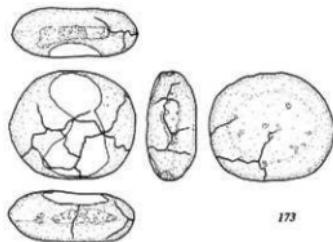
170



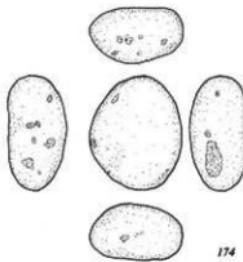
171



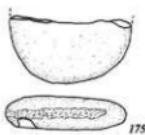
172



173



174



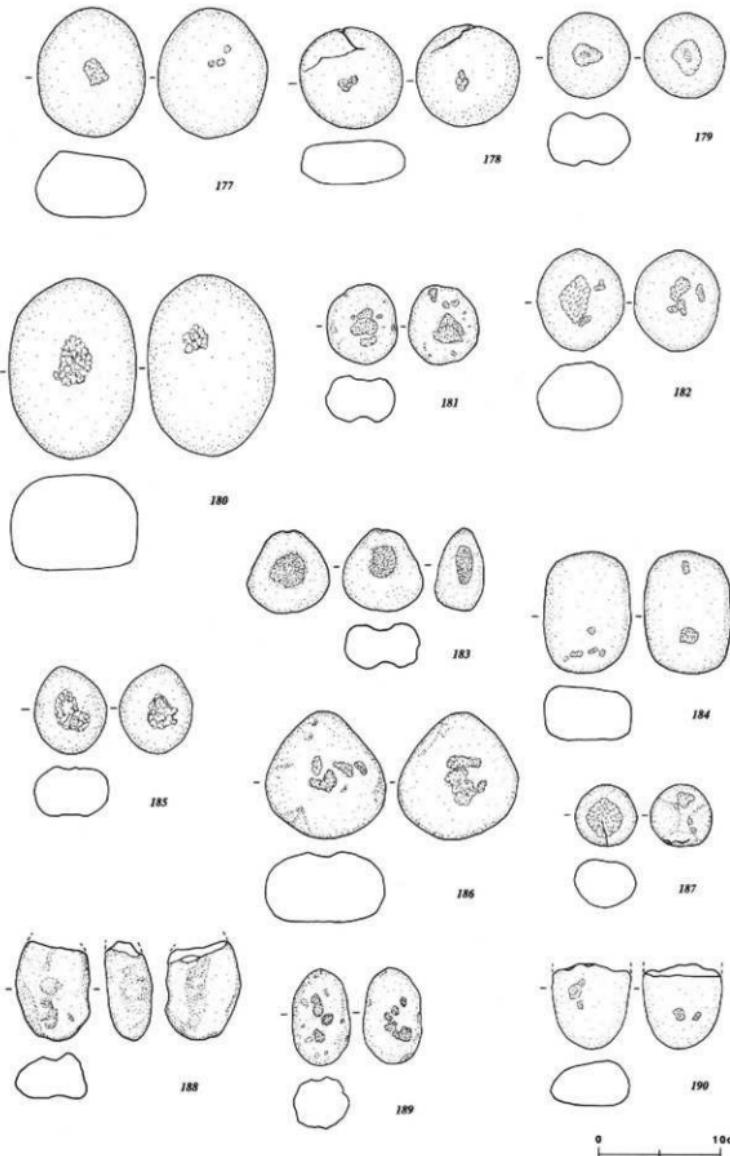
175



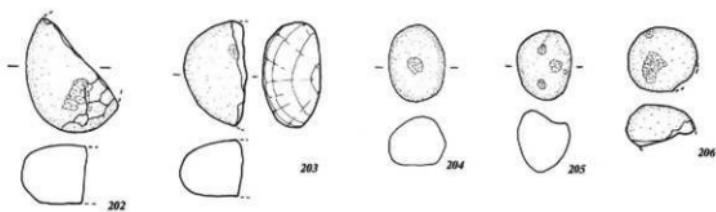
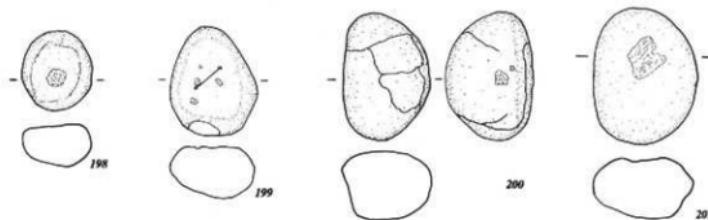
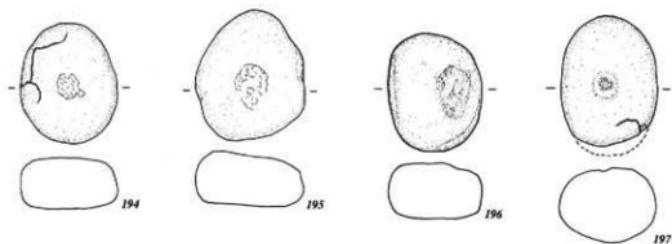
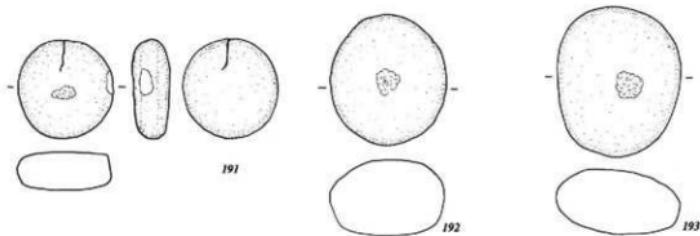
176



第97圖 磨石・敲石

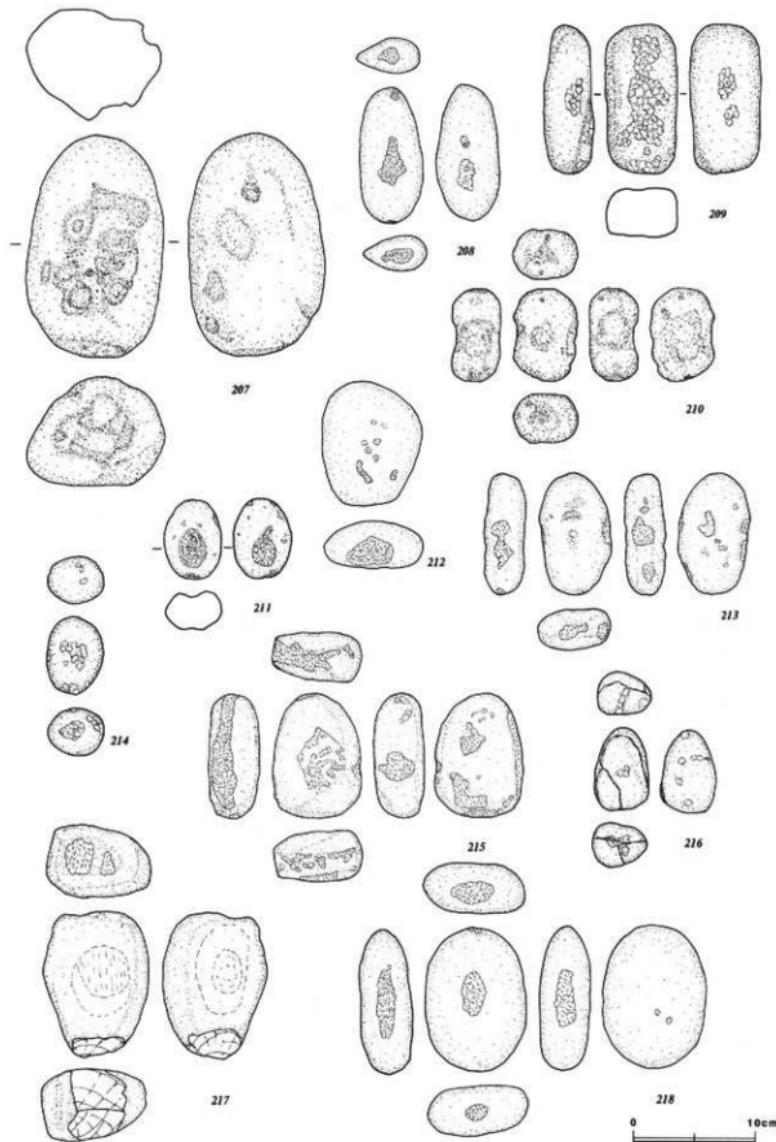


第98図 磨石・凹石・鼓石

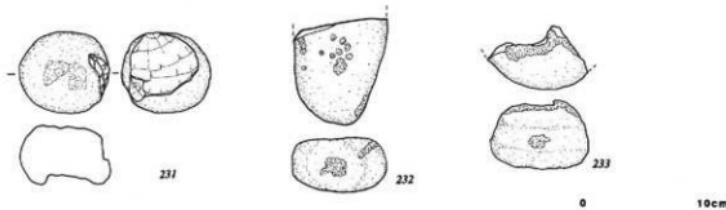
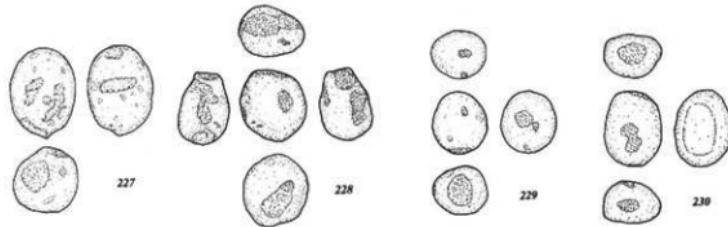
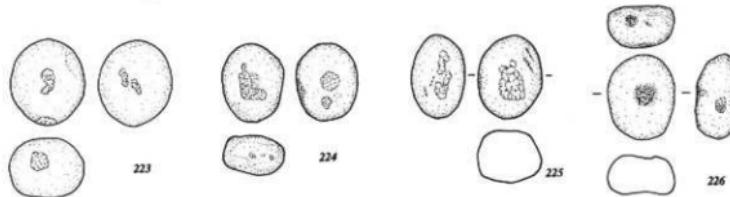
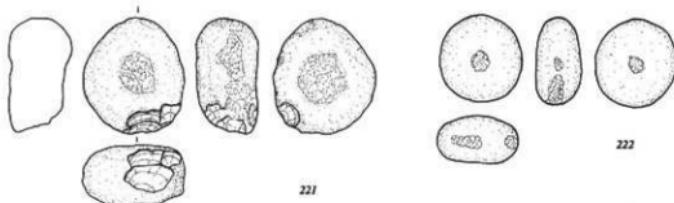
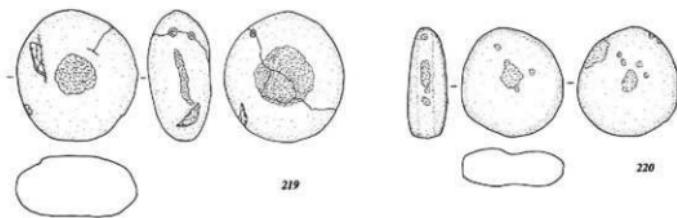


0 10cm

第99圖 磨石・凹石・敲石



第100圖 磨石・凹石・敲石



0 10cm

第101図 磨石・凹石・敲石

土 器 (第102図～第131図)

土器は総数2,432点を取り上げた。このうち692点の、文様および部位のわかるものを呈示する。ほとんどの土器が富士黒土層aから出土しており、また、それらが層位的に分離せずに混在していた。

主体を成すものは縄文時代早期の土器であり、前期の土器がそれに続くが、中期および後期の土器は非常に少ない。のことから、出土している他の遺物も縄文時代早期に属するものが多いと思われる。

以下、土器の分類にしたがい詳述する。

1 群

早期の撚糸文系および押型文系の土器を1群とした。

1群1類 (撚糸文系) 1～39

早期中葉の撚糸文系の土器を1群1類とした。絡条体圧痕文や、表裏に撚糸文や縄文を施すものも含んでいる。ほとんどのものが纖維を含んでおり、撚糸文系土器としては比較的後出のものが主体と考えられる。

No.	区 層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
1	J 12	FB b 23	撚糸文系?	黒褐色	大粒の長石(蛭石?)を含む。纖維を含む。	細かい撚糸の絡条体圧痕文? 多縄文系?
2	K 10	FB a 5	撚糸文	黒褐色	長石、石英を含む。 纖維を含む。	表裏に斜めのしの撚糸文。
3	I 12	FB a 21	撚糸文?	にふい黄褐色	細かい長石を含む。 纖維を含み纖弱。	表裏縄文。
4	I 17	FB a 67	撚糸文系?	明褐色	細かい長石、黒色粒子を含む。 少量の纖維を含む。	角棒状の輪に絡めたLの絡条体圧痕文。
5	J 12	FB b 5	撚糸文	明赤褐色	長石、黒色粒子を含む。 多条のR?の横位撚糸文。 纖維を含む。 二次焼成を受け剥落が激しい。	
6	K 10	FB b 3	撚糸文	黒褐色	崩岩状の砂粒を多く含む。 Rの斜め交互の撚糸文。 纖維を含む。	
7	K 17	FB b 6	撚糸文	黒色	石英を含む。 纖維を含み、脆弱。	斜めの撚糸文?
8	J 11	FB a 87	撚糸文?	暗橙色	細かい長石を含む。 羽状の撚糸文? 纖維を含む。	
9	K 10	FB b 2	撚糸文	明褐色	細かい長石を含む。 多方位のRの撚糸文。 纖維を含む。	
10	J 11	FB a 241	撚糸文	赤褐色	反石、黒色粒子を含む。 Rの撚糸文を菱形に交差させる。	
11	I 12	FB a 67	撚糸文	橙色	細かい長石、黒色粒子を含む。	Rの縦位撚糸文。
12	J 12	FB b 34	撚糸文	黒褐色	細かい長石を含む。 纖維を含む。	Rの撚糸文。
13	表		撚糸文	橙色	長石を多く含む。	Rの縦位撚糸文。

No.	区層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
14	K 10	FB a 17	燃糸文	にぶい黄橙	長石、細かい石英を含む。鐵維を含む。	Lの横位燃糸文。
15	I 10	FB a 163	燃糸文	明黄褐色	細かい長石、黒色粒子を含む。鐵維を含む。	
16	L 9	FB a 7	燃糸文	褐色	細かい長石、赤褐色粒子を含む。鐵維を含む。	Rの縦位燃糸文。
17	H 12	FB a 12	燃糸文	暗赤褐色	砂粒を多く含み、脆弱。鐵維を含む。	Rの縦位燃糸文。
18	K 10	FB b 1	燃糸文	褐色	灰色粒子を多く含む。鐵維を含む。	Lの燃糸を最初に縦位施文の後、横位に施し編目状にしている。
19	J 11	FB b 1	燃糸文	灰褐色	灰色砂粒を多く含む。鐵維を含む。	Rの横位燃糸文。
20	K 13	FB b 28	燃糸文	褐色	長石、雲母を含む。鐵維を含む。	RLの横位繩文。口縁。
21	H 10	FB a 4	燃糸文	にぶい黄橙色	長石、黒色粒子を含む。鐵維を含む。	Rの燃糸を口縁部近くに横位、胴部に縦位に施す。
22	I 10	FB a 160	燃糸文	褐色	鐵維を多く含み、脆弱。	Rの縦位燃糸文。
23	I 10	FB a 18	燃糸文	にぶい赤褐色	細かい長石を含む。鐵維を含む。	Rの縦位燃糸文。
24	I 16	FB a 38	燃糸文	明赤褐色	長石を多く含む。やや脆弱。	Rの縦位燃糸文。
25	K 14	FB a 4	燃糸文	赤褐色	長石、黒色粒子、雲母を含む。少量の鐵維を含む。	LRの繩文？
26	J 12	FB b 31	燃糸文	明褐色	細かい長石を含む。鐵維を含む。	Rの横位燃糸文。
27	I 10	FB a 37	燃糸文	明褐色	長石を含む。鐵維を含む。	Lの横位燃糸文。
28	J 11	FB a 76	燃糸文系	橙色	大粒の長石を含む。鐵維を含む。	LRを横に施文。
29	H 12	FB b 4	燃糸文？	橙色	長石、石英を含む。	Rの太い繩を軸に絡めて回転させている。
30	I 16	FB b 2	燃糸文系？	明赤褐色	大粒の長石、石英、黒色粒子、赤褐色粒子を多く含む。	RLの圧痕。
31	I 10	FB a 142	燃糸文系	明褐色	長石を含む。鐵維を含む。	繩文？
32	J 11	FB a 221	燃糸文	褐色	砂粒を多く含み、脆弱。鐵維を含む。	R？の縦位燃糸文。
33	K 10	FB a 20	燃糸文	明黄褐色	長石、黒色粒子を含む。	Rの燃糸文。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
34	H	11	FB	a 79	撚糸文	橙色	砂粒を多く含む。織 縦位の撚糸文。 縦を含む。
35	K	11	FB	b 6	撚糸文	明褐色	長石、黒色粒子を含む Lの縦位撚糸文。 縦を含む。
36	I	12	FB	a 96	撚糸文	暗赤褐色	細かい長石、石英、 Lの撚糸文。 黒色粒子を含む。
37	J	12	FB	a 4	撚糸文	橙色	長石を多く含む。織 LRの網文。 縦を含む。
38	K	12	FB	a 8	撚糸文	黄褐色	灰色粒子を多く含む Lの撚糸文。 縦を含む。
39	I	10	FB	a 111	撚糸文	赤褐色	軽石? を主体にした Rの横位撚糸文。 砂粒を多く含む。織 縦を含み、脆弱。

1群2類（押型文系）40~89

早期中葉の押型文土器を1群2類とした。楕円押型文以外は細久保式に比定されると思われるが、格子・日押型文が施される土器の一部には口縁部に、格子状の沈線が施されるものがある。これは沈線文系土器の影響なのかもしれない。楕円押型文の一部には帯状施文されているものがあり、粗大な楕円押型文ではあるが、単純に新しい時期のものとはいえないかもしれない。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
40	J	16	FB	a 65	押型文（細久 明赤褐色 保系）		大粒の長石を多量に 山形押型文。 含む。
41	J	11	FB	a 266	押型文（細久 橙色 保系）		細かい長石、黒色粒子 山形文。口縁部表に沈線。 子を含む。
42	I	11	FB	a 117	押型文（細久 橙色 保系）		細かい長石を含む。 山形押型文。口縁部表に沈線？
43	K	11	FB	b 8	押型文（細久 明褐色 保系）		長石、褐色粒子を含む 山形と格子目の押型文。 心。
44	J	11	FB	a 118	押型文（細久 橙色 保系）		長石を含む。 山形文。
45	J	11	FB	a 197	押型文（細久 橙色 保系）		長石、石英を含む。 山形押型文。 脆弱。
46	I	11	FB	a 149	押型文（細久 橙色 保系）		長石を多く含む。 山形押型文。
47	I	11	FB	a 199	押型文（細久 橙色 保系）		長石、黒色粒子を含む 格子目文。口縁部表に格子状の沈線。 心。少量の纖維を含む。
48	J	10	FB	a 24	押型文（細久 明赤褐色 保系）		長石を多く含む。石 格子目押型文。口縁部表に格子状の沈線。 心を含む。
49	J	11	FB	a 25	押型文（細久 橙色 保系）		長石、灰色粒子、黒 格子目押型文。口縁部表に格子状の沈線。 色粒子を多く含む。

No.	区	層	地質	No.	型式	色調	胎土	文様
50	H 11	FB a	85	押型文（細久 橙色 保系）			長石、石英を含む。 少量の纖維を含む。	格子目押型文。
51	J 10	FB a	18	押型文（細久 橙色 保系）			長石を含む。少量の 纖維を含む。	格子目押型文の横位帯状施文。
52	J 11	FB b	11	押型文（細久 橙色 保系）			石英、長石を含む。	格子目押型文。
53	I 111	FB a	52	押型文（細久 明褐色 保系）			長石を含む。少量の 纖維を含む。	格子目押型文。
54	J 13	FB b	1	押型文（細久 橙色 保系）			長石を多く含む。少 量の纖維を含む。	格子目押型文。
55	I 110	FB a	74	押型文（細久 橙色 保系）			長石、石英を含む。	格子目押型文。
56	I 111	FB a	上	押型文		暗赤褐色	長石を多く含む。少 量の纖維を含む。	格子目文と菱目文 の縦位を含む。
57	表			押型文（細久 黒褐色 保系）			長石を含む。	格子目押型文。
58	J 11	表		押型文（細久 灰褐色 保系）			細かい長石を含む。	格子目文。
59	I 110	FB a	221	押型文（細久 明褐色 保系）			石英、長石を多く含 む。	菱目押型文。
60	J 11	FB b	4	押型文（細久 橙色 保系）			長石、黒色粒子を含 む。	菱目文と格子目文。
61	I 111	FB a	325	押型文（細久 明褐色 保系）			長石を多く含む。少 量の纖維を含む。	格子目押型文。
62	J 11	FB a	180	押型文（細久 橙色 保系）			長石を含む。	格子目押型文。
63	I 110	FB a	12	押型文		橙色	長石を含む。纖維を 含む。	椿円押型文の縦位帯状施文。
64	J 11	FB a	231	押型文		橙色	長石、黒色粒子を含 む。少量の纖維を含 む。	椿円押型文。縦位の 帯状施文。
65	K 11	FB a	36	押型文		明褐色	細かい長石を含む。 纖維を含む。	椿円押型文の縦位帯状施文。
66	I 111	FB a	331	押型文（高山 暗赤褐色 寺系）			細かい長石、石英を 含む。纖維を含む。	椿円押型文。
67	I 110	FB b	1	押型文（高山 明褐色 寺系）			細かい長石を含む。 纖維を含む。	椿円押型文。
68	I 110	FB a	87	押型文		明赤褐色	長石を含む。纖維を 含む。	椿円押型文の縦位帯状施文。
69	J 11	FB a	29	押型文（高山 赤褐色 寺系）			石英、長石を含む。 少量の纖維を含む。	椿円押型文

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
70	I 10	FB a	81	押型文	暗褐色	細かい長石、石英、赤褐色粒子を含む。纖維を含む。	楕円押型文
71	K 11	FB a	31	押型文（高山 明黄褐色 寺系）		細かい長石、石英、黒色粒子を含む。纖維を含む。	淡い楕円押型文。
72	J 12			押型文（高山 明赤褐色 寺系）		石英、長石を含む。	楕円押型文。試掘坑より出土。
73	I 11	FB a	277	押型文（高山 橙色 寺系）		石英、長石を含む。 少量の纖維を含む。	楕円押型文。
74	I 11	FB a	303	押型文（高山 橙色 寺系）		細かい長石、砂粒を含む。 少量の纖維を含む。	楕円押型文。
75	K 11	FB a	35	押型文（高山 褐色 寺系）		細かい長石、石英を含む。纖維を含む。	楕円押型文。
76	K 11	FB a	23	押型文（高山 暗赤褐色 寺系）		細かい長石、石英を含む。 纖維を含む。	楕円押型文。
77	I 11	FB a	301	押型文（高山 にふい赤褐色 寺系）		細かい長石を含む。	楕円押型文。
78	I 10	FB a	107	押型文（細久 明黄褐色 保系）		大粒の長石を多く含む	山形押型文。
79	J 10	FB a	4	押型文（高山 橙色 寺系）		石英、長石を含む。連鎖状の楕円押型文。 纖維を含む。	
80	J 11	FB b	27	押型文（高山 橙色 寺系）		細かい長石、石英を含む。	楕円押型文。
81	J 12	FB b	28	押型文（高山 明赤褐色 寺系）		細かい長石を含む。纖維を含む。	淡い楕円押型文。
82	K 10	FB a	3	押型文（高山 橙色 寺系）		長石を含む。纖維を含む。	楕円押型文
83	J 11	FB b	33	押型文（高山 橙色 寺系）		長石、石英、黒色粒を含む。	楕円押型文
84	I 10	FB a	134	押型文（高山 橙色 寺系）		細かい長石、石英を含む。	連鎖状の楕円押型文。
85	J 11	FB a	264	押型文（高山 橙色 寺系）		長石を含む。纖維を含む。	楕円押型文
86	J 12	FB a	11	押型文（高山 明褐色 寺系）		石英、長石を含む。纖維を含む。	楕円押型文。
87	J 10	FB a	9	押型文（高山 橙色 寺系）		石英、長石、黒色粒を含む。纖維を含む。	楕円押型文
88	J 11	FB b	23	押型文（高山 明赤褐色 寺系）		長石、黒色粒子を含む。纖維を含む。	楕円押型文。
89	J 12	FB a	12	押型文（高山 褐色 寺系）		長石、石英を含む。	楕円押型文 纖維を含む。

2 群

早期の条痕文系土器を2群とした。ほとんどの土器が纖維を含む。

2群1類（野島式）90～144、640

早期後葉の野島式と考えられる土器を2群1類とした。比較的太めの沈線で施文するものと半截竹管状の工具で細めの平行沈線で集合沈線や、幾何学文を施すものが多い。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
90	表			野島	暗赤褐色	長石を含む。纖維を含む。	棒状工具による集合沈線。同じ工具による口縁部刻み。
91	J 17	FB		野島	暗赤褐色土	長石を含む。纖維を含む。	棒状工具による集合沈線。口縁部に同じ工具による刻み。
92	K 13	FB b 13		野島	橙色	細かい長石、石英を多量に含み、脆弱。纖維を含む。	棒状工具による集合沈線。
93	K 13	FB b 7		野島	にぶい橙色	長石、黒色粒子を含む。纖維を含む。	棒状工具による集合沈線。口縁部内側斜めに同心。纖維による刻み。
94	K 13	FB b ?		野島	赤橙色	砂粒を多く含む。纖維を含む。	集合沈線の上から沈線。文様帯との区分に隆起。
95	K 17	FB b 5		野島?	淡橙色	長石、石英、褐色粒を多量に含む。	細い棒状工具による集合沈線とそれを擦消す幅広の浅い沈線。
96	K 17	FB b 15		野島	橙色	長石、黒色粒子を多く含む。纖維を含む。	細い集合沈線。幅広の浅い沈線。
96	K 17	FB b 16		野島	橙色	長石、黒色粒子を多く含む。纖維を含む。	細い集合沈線。幅広の浅い沈線。
97	I 16	FB a 155		野島	橙色	石英、長石を多く含む。纖維を含む。	棒状工具による集合沈線。口縁部に同じ工具による刻み。
98	J 13	FB b 4		野島	褐色	長石を多く含む。纖維を含む。	棒状工具による集合沈線。口縁部に同じ工具による刻み。
99	J 17	FB a 10		野島	明褐色	長石を多く含む。纖維を含む。	エッジのある工具による集合沈線。同じ工具による口縁部刻み。
100	J 14	FB a 14		野島	明黄褐色	砂粒を多量に含む。	棒状工具による集合沈線。口縁部に同じ工具による刻み。
101	J 15	FB a 90		野島	暗褐色	砂粒を多く含み、脆弱。	集合沈線。
102	I 16	FB a 144		野島	明赤褐色	長石を多く含む。纖維を含み、脆弱。	棒状工具による集合沈線。
103	I 17	FB b 1		野島	橙色	長石、黒色粒子を多く含む。纖維を含む。	棒状工具による集合沈線。
104	I 16	FB a 70		野島	明赤褐色	反石、黒色粒子を含む。纖維を含む。	棒状工具による集合沈線。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
105	K	13	FB	b 1	野島	橙色	長石を含む。細かい 石英を含む。繊維を 含む。
106	?	13	FB	b 21	野島	橙色	大粒の長石、黒色粒 子を多く含む。繊維 を含む。
107	J	16	FB	a 16	野島	オリーブ褐色	長石を含む。繊維を 含む。
108	J	17	FB	a 22	野島	橙色	長石を含む。繊維を 含み、脆弱。
109	K	13	FB	b 17	野島	橙色	長石、石英を多く含 む。繊維を含む。
110	I	16	FB	a 104	野島	暗赤褐色	長石を多く含む。繊 維を含む。一次焼成 を受け、脆弱。
111	I	11	FB	a 土	野島	赤褐色	長石、黒褐色粒子を 含む。繊維を含む。
112	I	17	FB	a 116	野島	褐色	長石を含む。繊維を 含む。
113	I	17	FB	a 134	野島	赤褐色	大粒の長石、石英を 棒状工具による集合沈線。 多く含む。
114	I	17	FB	a 35	野島	赤褐色	大粒の長石を多く含 む。繊維を含む。
114	J	17	FB	a 39	野島	明赤褐色	大粒の砂粒を多量に 含む。繊維を含む。
115	J	14			野島	暗肌色	長石、石英、黒色粒 子を多く含む。
116	I	17	FB	a 82	野島	暗褐色	砂粒を多く含む。繊 維を含む。
117	J	16	FB	a 38	野島	橙色	長石を含む。繊維を 含む。
118	J	15	FB	a 45	野島	橙色	細かい長石、黒色粒 子を多く含む。
119	K	13	FB	b 3	野島	黄灰褐色	細かい長石を多く含 む。繊維を含み、脆 弱。
120	I	15	FB	a 30	野島	橙色	長石、石英を多く含 む。黒色粒子を含 む。繊維を含む。
121	I	11	FB	a	野島	灰橙色	細かい長石を含む。 繊維を含む。脆弱。
122	K	15	FB	a 7	野島	暗赤褐色	長石を多く含む。繊 維を含む。
123	J	13	FB	b 8	野島?	橙色	大粒の長石を多量に 含む。繊維を含む。

No.	区	層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
124	J	10	FB a	31	野島	にぶい黄橙	大粒の砂粒を多く含む。繊維を含む。
							植物性の棒状工具による太い集合沈線。
125	I	11	FB a	205	野島	明黄褐色	細かい長石を含む。 棒状工具による集合沈線。裏面に擦痕。
							繊維を含む。
126	J	14	FB b	2	野島	灰肌色	大粒の長石を含む砂粒を多く含み、脆弱。繊維を含む。
							棒状工具による集合沈線。
127	K	17	FB b	18	野島	黒褐色	細かい長石を多く含む。 エッジのある工具の圧痕。繊維を含む。
							脆弱。
128	I	16	FB a	51	野島	にぶい褐色	細かい石英を含む。 細い集合沈線。
							繊維を含み、脆弱。
129	K	13	FB b	16	野島	橙色	細かい長石を多く含む。 細い集合沈線。
							繊維を含む。
130	I	16	FB a	60	野島	にぶい赤褐色	細かい長石を含む。 細い集合沈線。
							繊維を含む。非常に脆弱。
131	K	13	FB b	24	野島	明褐色	長石、石英、赤褐色 棒状工具による集合沈線。口縁部に同じ工具に粒子を多く含む。
							による刻み。
132	K	15	FB a	10	野島	明赤褐色	大粒の長石を多く含む。 細く淡い集合沈線。
							繊維を含む。
133	I	17	FB a	59	野島	黒褐色	細かい長石、石英を多く含む。 細い集合沈線。
							繊維を含み、脆弱。
133	I	17	FB a	60	野島	暗褐色	細かい長石、石英を多く含む。 細い集合沈線。
							繊維を含み、脆弱。
134	J	14	FB a	16	野島	赤肌色	大粒の長石を多く含む。 棒状工具による沈線。
							繊維を含む。
135	I	16	FB a	95	野島	明赤褐色	長石を含む。 繊維を棒状工具による沈線。
							含む。
136	K	13	FB b	19	野島？	明褐色	長石を含む。 繊維を細い沈線。
							含み、脆弱。
137	J	12	FB b	24	野島？	暗褐色	長石を多く含む。 繊維を含む。 植物茎による沈線。裏面に同じ工具による横ナード。
							植物茎による沈線。裏面に同じ工具による横ナード。
138	J	16	FB a	89	野島	明赤褐色	細かい灰色粒子を多く含む。 繊維を含む。 細い集合沈線。
							細かい灰色粒子を多く含む。 繊維を含む。
139	K	17	FB b	17	野島	橙色	長石、石英を多く含む。 細い棒状工具による集合沈線。
							繊維を含む。
140	表		野島？		黒黄褐色	細かい長石、黒褐色	細いエッジのある沈線を羽状に配す。
							粒子を多く含む。
141	J	17	FB b	20	野島？	にぶい黄橙色	大粒の長石を多く含む。 竹管による平行沈線と円形刺突。
							繊維を含む。
142	K	17	FB b	12	野島？	橙色	長石を多く含む。 繊維を含む。 細い集合沈線と幅広の浅い沈線。

No.	区層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
143	I 16	FB a 1	野島?	灰黄褐色	細かい長石を多量に含む。纖維を含む。	細い棒状工具による集合沈線。裏面に薄い条痕。
144	I 17	FB a 147	野島?	明褐色	長石を含む。	不規則な沈線。裏面に段あり。
640	K 14	FB a 5	野島	橙色	石英を多く含む。纖維を含む。やや脆弱。	半截竹管状工具による集合沈線を地文に不規則施す。波状口縁。

2群2類(鶴ヶ島台式) 145~153

早期後葉の鶴ヶ島台式と考えられる土器を2群2類とした。沈線の交差点などに刺突を施すものや、三角形状の区画に刺突を充填するものなどがある。

No.	区層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
145	J 17	FB b 22	鶴ヶ島台	にぶい黄橙色	長石を多く含む。纖維を含む。	竹管による平行沈線と円形刺突。口縁。補修孔あり。
146	J 17	FB a 25-2	鶴ヶ島台	橙肌色	長石を含む。纖維を含み、脆弱。	細い竹管の刺突文。
147	J 16	FB a 41	鶴ヶ島台?	明赤褐色	長石、石英、雲母を多量に含み、脆弱。纖維を含む。	棒状工具による刺突。
148	J 15	FB a 72	鶴ヶ島台	褐色	細かい長石、石英を含む。纖維を含む。	丸棒状工具による刺突。
149	J 15	FB a 63	鶴ヶ島台	褐色	細かい長石、石英を含む。纖維を含む。	丸棒状工具による刺突。口縁部表肩に刻み。
149	J 16	FB a 58	鶴ヶ島台	にぶい橙色	細かい長石、石英を含む。纖維を含む。	丸棒状工具による刺突。口縁部表肩に刻み。
149	J 15	FB a 78	鶴ヶ島台	褐色	細かい長石、石英を含む。纖維を含む。	丸棒状工具による刺突。口縁部表肩に刻み。
150	I 16	FB a 80	鶴ヶ島台?	黒褐色	大粒の砂粒、纖維を含む。	棒状工具による刺突? 口縁部に刻み。
151	K 11	FB b 1	鶴ヶ島台	暗肌色	細かい砂粒を少量含む。纖維を含む。	植物茎による沈線と刺突。
152	I 11	FB b 1	鶴ヶ島台?	赤褐色	長石、細かい長石、石英を含む。	丸棒状工具による刺突。
153	J 16	FB a 54	鶴ヶ島台	赤褐色	細かい長石、石英を含む。纖維を含む。	丸棒状工具による刺突。

2群3類(茅山下層式) 154~191、288

早期後葉の茅山下層式と考えられる土器を2群2類とした。斜め連続刺突文の間を指腹?による淡い沈線によって文様を形成している。

No.	区層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
154	I 16	FB a 6	茅山下層	灰黄褐色	長石を含む。	刺突文。口縁部表肩に同じ工具の刻み。表裏に朱痕。補修孔あり。
155	J 16	FB a 1	茅山下層	にぶい黄橙色	石英、長石を含む。纖維を含む。	斜めの刺突文。口縁部をやや肥厚し、表裏肩に刻み。

No.	区	層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
156	J?	茅山下層			暗肌色	大粒の長石を含む。纖維を含む。	刺突文。口縁部表肩に刻み。
157	I 16	FB a 44	茅山下層		灰黃色	長石を含む。纖維を含む。	指による微隆線上に指による刺突を施す。口縁表肩に同じ工具の刻み。裏面に条痕。
157	I 16	FB a 99	茅山下層		灰黃色	長石を含む。纖維を含む。	指による微隆線上に刺突を施す。口縁表肩に同じ工具の刻み。裏面に条痕。
158	I 15	FB a 53	茅山下層		橙色	長石、石英を多く含む。纖維を含む。	指による浅い沈線。それによって形成された隆起上に刺突。やや肥厚した口縁肩表裏に刻み。
159	I 17	FB a 111	茅山下層		灰黃色	長石を含む。纖維を含む。	刺突文とその間に指による浅い沈線。口縁裏面に条痕。
159	I 17	FB a 1	茅山下層		灰黃色	長石を含む。纖維を含む。	刺突文とその間に指による浅い沈線。口縁裏面に条痕。
160	I 17	FB a 92	茅山下層		明黄褐色	長石を含む。纖維を含む。	刺突文とその間に指による浅い沈線。同じ工具による口縁表肩の刻み。表裏に条痕。
161	I 17	FB a 110	茅山下層		灰黃褐色	長石を多く含む。纖維を含む。	刺突文。口縁部に同じ工具の刻み。表裏に薄い条痕。
162	K 17	FB a 3	茅山下層		赤褐色	細かい長石、雲母を含む。纖維を含む。	斜めの刺突文。
163	I 16	FB a 2	茅山下層		明黄褐色	長石、石英を含む。纖維を含む。脆弱。	指による浅い沈線、その間に刺突。同じ工具による口縁表肩の刻み。
163	I 16	FB a 62	茅山下層		明黄褐色	長石、石英を含む。纖維を含む。脆弱。	指による浅い沈線、その間に刺突。同じ工具による口縁表肩の刻み。
164	I 17	FB a 138	茅山下層		肌色	石英、長石を含む。纖維を含む。	刺突文。表裏に薄い条痕。
165	I 17	FB a 132	茅山下層		灰黃褐色	細かい長石を含む。纖維を含む。	刺突文。くびれ部。
166	I 16	FB a 132	茅山下層？		明赤褐色	細かい長石を含む。表面に条痕。纖維を含む。	
167	I 15	FB a 54	茅山下層		にぶい黄橙色	長石を含む。纖維を含む。	指による浅い沈線の間に刺突文。くびれ部。
168	I 15	FB a 20	茅山下層		にぶい黄橙色	大粒の長石を含む。纖維を含む。	斜めの刺突文。
169	I 15	FB a 23	茅山下層		にぶい黄橙色	長石、石英を多く含む。纖維を含む。	刺突文。
170	I 17	FB a 64	茅山下層？		黃褐色	長石、石英を含む。	連続刺突。
171	I 17	FB a 13	茅山下層		赤褐色	細かい雲母を多く含む。纖維を含む。	斜めの刺突。裏面に薄い条痕。
172	I 17	FB a 58	茅山下層		赤褐色	長石、石英、雲母を多く含む。纖維を含む。	斜めの刺突。表裏に条痕。くびれ部。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
172	I	17	FB a	65	茅山下層	赤褐色	長石、石英、雲母を 多く含む。纖維を含 む。
172	I	17	FB a	123	茅山下層	橙色	長石、石英、雲母を 多く含む。纖維を含 む。
173	I	16	FB a	112	茅山下層	明赤褐色	細かい長石、雲母を 斜めの刺突文。表面に条痕。くびれ部。 含む。纖維を含む。
174	I	17	FB a	122	茅山下層	明褐色	石英を含む。細かい 斜めの刺突文。表面に条痕。くびれ部。 雲母を多く含む。纖 維を含む。
175	I	17	FB a	土	茅山下層	赤褐色	細かい雲母WP多く 刺突文。表面に条痕。くびれ部。 含む。纖維を含む。
176	J	14	FB a	5	茅山下層	赤肌色	長石を含む。纖維を 刺突文。くびれ部。表面に条痕。 含む。
177	I	16	FB a	116	茅山下層	灰黃色	長石を含む。纖維を 刺突文。表面に条痕。 含む。
178	J	17	FB b	5	茅山下層	明赤褐色	細かい長石、黑色粒 斜めの刺突。文様帶部分に段。 子を含む。纖維を含 む。
179	J	15	FB a	17-2	茅山下層	明肌色	長石、石英を含む。 刺突文。くびれ部。 纖維を含む。
180	J	17	FB b	13	茅山下層	にぶい黄橙色	長石、石英を含む。 刺突文。裏面に条痕。くびれ部。 纖維を含む。
181	I	17	FB a	16	茅山下層	明黄褐色	石英、長石を含む。 刺突文。くびれ部。表面に条痕 纖維を含む。
182	I	16	FB a	7	茅山下層	明赤褐色	細かい長石、雲母を 斜めの刺突文。裏面に条痕。くびれ部。 含む。纖維を含む。
183	J	16	FB a	2	茅山下層	橙肌色	長石、石英を多く含 細かい爪形様の刺突文。くびれ部。 む。纖維を含む。
184	I	16	FB a	78	茅山下層?	明赤褐色	大粒の長石を多く含 む。纖維を含む。非 常に脆弱。
185	I	17	FB a	70	茅山下層	にぶい赤褐色	細かい雲母、長石を 連続刺突。 含む。纖維を多く含 む。
186	I	16	FB b	3	茅山下層?	にぶい赤褐色	大粒の石英を多量に 刺突。 含む。纖維を含む。 非常に脆弱。
187	I	16	FB a	135	茅山下層?	にぶい褐色	長石を含む。纖維を 段を持つ。刺突? 含む。非常に脆弱。
188	I	16	FB a	30	茅山下層?	明赤褐色	大粒の長石を多量に くびれ部に棒状工具による刺突。 含む。非常に脆弱。
189	I	17	FB a	121	茅山下層	明黄褐色	長石、石英を多く含 斜め刺突文。 む。纖維を含む。
190	I	15	FB a	1	茅山下層	明黄褐色	石英、長石を多く含 刺突文。 む。纖維を含む。脆 弱。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
191	J	13	表	茅山下層	灰褐色	細かい長石を含む。	斜めの刺突。 繊維を含む。

2群4類（茅山上層式？）192～196

口縁部まで条痕のみのものや、一条の隆帯、薄い沈線による波状文が施される。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
192	I	116	FB a	108	茅山上層？	黒赤褐色	大粒の長石を多く含む。 表面が剥落し、 脆弱。
193	J	10	FB a	1	茅山上層？	明褐色	細かい長石を多く含む。 口縁部に爪？による刻み。裏面に条痕。
194	I	116	FB a	79	茅山上層？	赤褐色	大粒の砂粒、繊維を 含み、非常に脆弱。
195	J	16	FB a	44	茅山上層？	赤褐色	大粒の砂粒、繊維を 含み、非常に脆弱。
196	J	16	FB a	74	茅山上層？	にぶい赤褐色	大粒の砂粒、繊維を 含み、非常に脆弱。
							たが状の隆帯（くびれ）を持ち、その上部に大き な筋のRLを施す。その上から波状の擦痕状沈 線。口縁部に刻み。
							たが状の隆帯（くびれ）を持ち、その上部に大き な筋のRLを施す。その上から波状の擦痕状沈 線。口縁部に刻み。
							たが状の隆帯（くびれ）を持ち、その上部に大き な筋のRLを施す。

2群その他（条痕の施される土器）197～276

条痕の施されたものを呈示した。上記した各類の無文と思われる。また、赤褐色の上器は打越式のものも含まれているかもしれない。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
197	K	9	FB a	6	条痕	黄褐色	長石、黒色粒子を含む。 表裏に細かい条痕。
198	I	17	FB a	149	条痕	黄褐色	石英、長石を多く含む。 表裏に細かい条痕。
199	I	17	FB a	141	条痕	橙色	長石、石英を含む。 表裏に条痕。 繊維を含む。
200	J	12	FB a	24	条痕	明黄褐色	長石、石英を含む。 表裏に条痕。 繊維はあまり多くない。
201	I	10	FB a	201	条痕	明赤褐色	大きめの長石、細い 石英を含む。繊維は 少。
202	J	17	FB b	17	条痕	明赤褐色	細かい長石、石英を 多く含む。繊維を含む。
203	J	12	FB a	54	条痕	黄褐色	長石を含む。 表裏に条痕。
204	I	15	FB a	46	条痕	橙色	大粒の石英、長石を 含む。繊維を含む。
							表に条痕。

No.	区	層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
205	J	12	FB	b 7	条痕	褐色	細かい長石、石英を多く含む。纖維を含む。
206	I	10	FB	a 225	条痕	赤褐色	非常に細い白色粒子を多く含む。纖維を含む。
207	I	11	FB	a 120	条痕	にぶい赤褐色	白、黒色の細砂粒を表に幅広の淡い条痕。裏面に条痕。多く含む。
208	J	17	FB	a 28	条痕	黄褐色	長石を多く含む。纖維を含み脆弱。
209	I	12	FB	a 41	条痕	にぶい黄橙色	軽石状の白色粒子を含む。纖維を含み、空隙も多い。
210	I	17	FB	a 4	条痕	赤褐色	長石を含む。纖維を含み、脆弱。
211	J	12	FB	a 27	条痕	明褐色	長石を多く含む。裏面に条痕。
212	J	13	FB	b 21	条痕	肌色	長石を多く含む。裏面に条痕。
213	I	11	FB	a 320	条痕	にぶい赤褐色	長石、纖維を含む。
214	I	10	FB	b 4	条痕	赤褐色	長石を多く含む。纖維を含み。
215	J	14	FB	a 22	条痕	暗赤褐色	大粒の長石を多く含む。裏面に条痕。纖維を含む。
216	I	18	FB	a 2	条痕	褐色	結晶化した黒色砂を多く含む。纖維含む。
217	J	15	FB	a 88	条痕	明赤褐色	長石を少量含む。表に太い条痕。
218	I	13	FB	a 10	条痕	橙色	長石、石英を含む。裏面に条痕。
219	I	17	FB	a 100	条痕	赤褐色	石英、雲母を含む。表に淡い条痕。纖維を含む。
220	K	11	FB	a 38	条痕	赤褐色	少量の細い長石を含む。表に条痕。
221	J	16	FB	a 24	条痕	明黄褐色	細かい長石を含む。裏面に条痕。纖維を含む。
222	J	10	FB	a 71	条痕	明褐色	長石、細かい黒色粒子を多く含む。纖維を含む。
223	J	FB			条痕		長石、石英を多く含む。裏面に条痕。纖維を含む。
224	J	11	FB	a 126	条痕	赤褐色	長石を含む。纖維は裏面に薄い条痕。少景含む。

No.	区	層	車上No.	形式	色調	胎土	文様
225	I	13	FB	a 22	条痕	にぶい黄橙色	長石、少量の大粒の 石英、纖維を含む。 表に条痕。
226	J	11	FB	a 219	条痕	橙色	細かい長石を含む。裏に条痕。
227	I	16	FB	a 43	条痕	橙色	細い長石を含む。纖維を含む。 表裏に太い条痕。
228	K	12	FB	b 9	条痕	にぶい黄褐色	細かい長石を多く含む。 表裏に条痕。
229	J	12	FB	a 38	条痕	明黄褐色	長石、石英を含む。表裏に条痕。 少量の纖維を含む。
230	I	10	FB	a 206	条痕	暗褐色	黒色粒子、長石を含む。 裏に太い条痕。
231	L	9	FB	a 3	条痕	にぶい黄橙色	長石を含む。纖維を含む。 表裏に条痕。
232	I	10	FB	a 128	条痕	明褐色	長石を含む。纖維を含む。 表裏に条痕。
233	K	17	FB	b 19	条痕	明赤褐色	長石を含む。 裏面に淡い条痕。
234	I	16	FB	a 16	条痕	明赤褐色	細かい長石を多量に含み、脆弱。
235	I	10	FB	a 198	条痕	赤褐色	長石、石英を含む。表裏に条痕。 纖維を含む。
236	I	10	FB	a 130	条痕	明褐色	長石を多く含む。 裏に条痕。
237	I	10	FB	a 57	条痕	明褐色	大粒の長石を多く含む。表裏に雜な条痕。 纖維を含む。
238	I	11	FB	a 20	条痕	赤褐色	反石を含み、少量の 纖維を含む。 表裏に粗い条痕。
239	J	16	FB	a 81	条痕	橙色	細かい長石を含む。裏に条痕。 纖維を含む。
240	I	10	FB	a 22	条痕	赤褐色	長石を含む。纖維を含む。 表裏に淡い条痕。
241	I	11	FB	a 85	条痕	明赤褐色	大きな長石を多く含む。 表裏に雜な条痕。 み、纖維を含む。
242	I	14	FB	a 9	条痕	明赤褐色	大粒の長石を多量に含む。 表裏に条痕。 大粒の黑色粒子を含む。 纖維を含む。
243	I	15	FB	a 58	条痕	明赤褐色	長石、石英を含む。表に淡い条痕。 纖維を含む。
244	I	12	FB	b 1	条痕	橙色	大粒の長石を多量に含む。 裏に条痕。 脛弱。

No.	区	層	上No.	型式	色調	胎土	文様
245	I	110	FB a	222 条痕	明褐色	長石、石英を含む。 繊維を含む。	表面に淡い条痕。
246	I	112	FB a	64 条痕	にぶい赤褐色	大粒の長石、石英を 多く含む。 繊維を含む。	裏面に条痕。
247	J	11	FB a	13 条痕	赤褐色	大粒の長石、黒色粒 子を多量に含む。 繊 維を含む。	裏に条痕。
248	H	12	FB a	24 条痕	明褐色	長石を含む。	表面に条痕。
249	J	12	FB a	22 条痕	明褐色	細かい長石、黒色粒 子を含む。 繊維を含 む。	表面に条痕。
250	K	12	FB b	8 条痕（野 島？）	橙色	長石、繊維を含む	表面に擦痕状の条痕。 文様を成すか？
251	I	116	FB a	25 条痕	明赤褐色	細かい長石を多く含 む。 繊維を含む。	表面に条痕。
252	K	12	FB a	6 条痕		少量の長石を含む。 繊維を含む。	表面に淡い条痕。
253	I	116	FB a	127 条痕	橙色	長石を多く含む。 繊 維を含む。	表面に条痕。
254	J	12	FB b	8 条痕	明黄褐色	大粒の石英、長石を 含む。	裏面に粗い条痕。
255	I	117	FB a	9 条痕	明赤褐色	長石、石英を多く含 む。	裏面に擦痕状の条痕。
256	I	111	FB a	227 条痕	赤褐色	長石を多量に含む。 繊維を含み、脆弱。	裏に淡い条痕。
257	I	116	FB a	50 条痕	明赤褐色	細かい長石を多量に 含む。 繊維を含む。	表面に淡い条痕。
258	J	116	FB a	91 条痕	明赤褐色	長石を多く含む。 繊 維を含み、脆弱。	表面に淡い条痕。
259	I	115	FB a	29 条痕	赤褐色	大粒の長石、石英を 含む。	表面に淡い条痕。
260	J	10	FB a	29 条痕	にぶい黄橙	大粒の石英、長石を 裏に細かい条痕。 含む。	
261	J	11	FB a	64 条痕？	にぶい黄色	長石、石英を含む。	表面に条痕？
262	I	116	FB a	130 条痕	明赤褐色	細かい長石を多く含 む。 繊維を含む。	表面に細く淡い条痕？
263	J	10	FB a	60 条痕	明赤褐色	大粒の長石、石英を 含む。 繊維を多く含 む。	表面に細く粗い条痕。
264	J	10	FB a	55 条痕	明黄褐色	長石、石英を含み、 大粒の石英を少量含 む。 繊維を含む。	表面に条痕。

No.	区	層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
264	J	10	FB a	55 条痕	明黄褐色	長石、石英を含み。表に条痕。 大粒の石英を少量含む。纖維を含む。	
266	J	11	FB b	39 条痕	黒褐色	細かい長石、石英を 含む。纖維を含む。	
267	I	12	FB a	82 条痕	橙色	大粒の長石を多く含む。裏に細かい条痕。 む。纖維を含む。	
268	L	9	FB a	9 条痕	明赤褐色	大粒の白色粒子（長石、条痕？ 隕石？）を含む。纖維を含み脆弱。	
269	J	16	FB a	34 条痕？	橙色	長石、石英を含む。表に条痕。 纖維を含む。	
270	I	16	FB a	37 条痕	明赤褐色	細かい長石を多く含む。裏面に条痕。 む。纖維を含む。	
271	J	10	FB a	56 条痕	橙色	長石を含む。纖維を表に条痕。 含む。	
272	K	11	FB a	14 条痕	明黄褐色	長石を含む。少量の 細かい条痕。 纖維を含む。	
273	J	11	FB a	226 条痕	橙色	細かい長石を含む。表に淡い条痕。 纖維を含む。	
274	J	16	FB a	71 条痕	にぶい橙色	長石を含む。纖維を表に条痕？ 含む。	
275	J	15	FB a	74 条痕	明赤褐色	長石を含む。纖維を表に条痕？ 含み、脆弱。	
276	I	10	FB a	条痕	暗赤褐色	長石を含む。纖維を表に条痕？ 含む。	

3群（東海系早期末）

東海系の早期末の土器群を3群とした。

3群1類（柏畑式）277～291、642～644

柏畑式と考えられるものを3群1類とした。胸部上半位のあたりに連続した爪形文を1列に施している。多くは裏面に条痕を施し、表面はナデによって平滑にされている。2群の土器に比べて薄手につくられている。

No.	区	層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
277	J	15	FB a	50 柏畑	暗灰褐色	長石、石英を含む。爪形文。裏面に条痕。 纖維を含む。	
278	I	15	FB a	43 柏畑	にぶい黄橙色	細かい長石、石英を 含む。纖維を含む。	爪形文。裏面に条痕。
279	J	16	FB a	56 柏畑	暗灰褐色	長石、細かい雲母を 含む。纖維を含む。	爪形文。裏面に条痕。
280	J	16	FB a	21 柏畑	にぶい黄色	細かい長石、雲母を 含む。纖維を含む。	爪形文。

No.	区層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
281	J 16	FB a 36	柏烟	にぶい黄色	細かい長石、石英を含む。纖維を含む。	爪形文。裏面に条痕。
282	J 16	FB a 66	柏烟	黒褐色	細かい長石、石英を含む。纖維を含む。	爪形文。
283	I 17	FB a 47	柏烟？	黄褐色	細かい長石を含む。 纖維を含む。	爪形文。
284	I 16	FB a 150	柏烟	にぶい橙色	細かい長石、雲母を含む。 纖維を含む。	爪形文。裏面に条痕。
285	J 16	FB a 85	柏烟	にぶい黄褐色	長石、石英を多量に含む。 纖維を含み施弱。	爪形文。
286	I 15	FB a 48	柏烟？	にぶい黄橙色	細かい長石を含む。 裏面に条痕。補修孔。纖維を含む。	爪形文。
287	I 13	FB a 17	柏烟？	橙色	長石、石英、黒色粒	爪形文。沈線状の横引き線。子を多く含む。
288	I 15	茅山下崩？ 柏烟？		暗肌色	大粒の長石、石英を多く含む。 纖維を含む。	指による浅い沈線。それによって生じた隆起上に刺突。裏に条痕。試掘坑より出土。
289	J 16	FB a 22	柏烟	明褐色	石英、長石、雲母を多く含み砂質。 纖維を介み施弱。	爪形文。
290	J 11	FB b 6	柏烟	暗灰黄色	石英、反石を多く含む。 纖維を含む。	裏面に植物纖維状の条痕。
291	J 15	FB a 73	柏烟？	明黄褐色	細かい長石、石英を含む。 纖維を含む。	裏面に条痕。補修孔。

3群2類 (上ノ山式) 292~302

太い一条の隆帯上に指頭？あるいは棒状工具による連続交互押圧文や、やや間隔が開いた押圧が施される。口縁にも同じ文様が施される。器厚は比較的厚手である。

No.	区層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
292	I 11	FB a 94	上ノ山	明褐色	石英、長石を多く含む。 纖維を含む。	太い隆帯上を交互に押圧。口縁部にも同じ施文。表面に赤彩。
293	I 11	FB a 207	上ノ山	黄橙色	大粒の長石、石英を含む。 纖維を含む。	隆帯上に交互の押圧。口縁部に同じ施文。
294	K 10	FB a 22	上ノ山	赤褐色	長石、石英を含む。 纖維を含む。	太い隆帯上に指腹状の刺突。裏面に条痕。口縁部に指腹状の刺突。
295	I 11	FB a 167	上ノ山	にぶい褐色	長石、石英、赤褐色	太い隆帯の上半分に棒状工具（指？）による押圧。 纖維を含む。
296	K 10	FB a 29	上ノ山？	にぶい黄橙色	細かい長石、黒色粒	太い隆帯上に棒状工具（指？）による斜め押圧。 子を多く含む。
297	I 11	FB a 25	上ノ山	橙色	長石、石英を多く含む。 纖維を含む。	太い隆帯上に交互の押圧。口縁部に同じ施文。表面に赤彩。

No.	区層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
298	J 11	FB a	115	上ノ山	橙色	長石、石英を多く含む。纖維を含む。
						隆帶上に（指による？）交互の押圧。口縁部にも同じ施文。表面に赤彩。
299	J 11	FB a	12	上ノ山？	橙色	大粒の長石を多く含む。纖維を含む。
						幅広の薄い隆帶に指による複雑な押圧。口縁部に指による刻み。
300	J 11	FB a	44	上ノ山	明黃褐色	長石、石英、黒色粒子を多く含む。鐵母を含む。
						一本の隆帶上に刻み。口縁に刻み。
301	J 12	FB b	17	上ノ山？ 田戸上巻式 か？	黒褐色	石英、長石、黒色粒子を多く含む。
						隆帶上を棒状工具による刻み。口縁部にも同じ施文。半裁竹管状工具による並行沈線。
302	H 11	FB a	82	上ノ山？	明赤褐色	砂粒を多く含む。鐵
						太い隆帶上を棒状工具による刻み。
						纖維を含む。

3群3類（入海1式）303～333

数条、あるいは螺旋状にやや太めの陥帯を口縁部近くに巡らし、その上に棒状工具による、細かい連續交互押圧文や斜め押圧を施す。口縁にも同じ押圧を施している。

No.	区層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
303	I 17	FB a	101	入海1	暗褐色	長石、石英、黒色粒子を多く含む。纖維をふくみ、脆弱。
						逆くの字形の刺突を施した陥帯を口縁部近くに巡らす。
303	J 17	FB a	24	入海1	明褐色	長石、石英、黒色粒子を多く含む。纖維をふくみ、脆弱。
						逆くの字形の刺突を施した陥帯を口縁部近くに巡らす。
303	J 17	FB a	25	入海1	明褐色	長石、石英、黒色粒子を多く含む。纖維をふくみ、脆弱。
						逆くの字形の刺突を施した陥帯を口縁部近くに巡らす。
304	I 11	FB a	80	入海1	明赤褐色	細かい長石を含む。
						陥帯上に棒状工具による斜めの刻み。口縁部に纖維を含む。
305	J 11	FB a	227	入海1	橙色	長石を多く含む。鐵
						陥帯上に棒状工具による斜めの刻み。口縁部に纖維を含む。
306	H 11	FB a	1	入海1	橙色	長石、黒色粒子を含む。
						陥帯上を交互の押圧。口縁部にも同じ施文。表面に赤彩。
307	I 11	FB a	75	入海1	赤褐色	大粒の長石を多く含む。
						太い陥帯上に棒状工具による刻み。口縁部にも纖維を含む。
308	J 14	FB a	33	入海1	肌色	長石、石英を多く含む。纖維を含む。
						太い陥帯に棒状工具、指？による押圧。裏面に條痕。
309	表			入海1	灰黄色	石英、長石、細かい黒色粒子を含む。纖維を含む。
						一本の断面三角形の陥帯上によいわき刻み。
310	表			入海1	黄褐色	細かい長石を含む。
						陥帯上に棒状工具による斜めの刻み。口縁部に刻み。
311	J 10	FB a	52	入海1	にぶい赤褐色	細かい長石、黒色粒子を多く含む。
						陥帯上に棒状工具による斜めの刻み。
312	J 12	FB a	35	入海1	黄褐色	長石、石英、黒色粒子を多く含む。纖維を含む。
						陥帯上に交互に押圧。口縁部にも同様な施文。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
313	I 12	FB a	101	入海 1	明赤褐色	大粒の長石を多く含む。	太い隆帶上に範状工具による刻み。
314	H 11	FB a	27	入海 1 ?	にぶい黄褐色	長石、細かい石英を含む。	太い隆帶上に範状工具による斜めの刻み。
315	H 12	FB a	15	入海 1	暗赤褐色	長石、黒色粒子を含む。	隆帶上に棒状工具による押圧。
316	J 11	FB a	112	入海 1	橙色	大粒の長石を多く含む。	太い隆帶上に範状工具による刻み。
317	I 10	FB a	56	入海 1	橙色	細かい長石、黒色粒子、赤褐色粒子を含む。	隆帶上に植物茎の斜め刺突。
318	J 14	FB a	61	入海 1	赤褐色	大粒の長石を多く含む。	太い隆帶上に範状工具による刻み。
319	J 11	FB a	185	入海 1	灰黄色	長石、石英、細かい黑色粒子を多く含む。織維を含む。	断面三角形の隆帶上に弱い刻み。
320	J 11	表		入海 1	灰黄褐色	長石、石英、細かい黑色粒子を多く含む。織維を含む。	一本の隆帶上によわい刻み。
321	I 11	FB a	332	入海 1	明赤褐色	長石を含む。	隆帶上に丸棒状工具による斜め押圧。裏面に条痕。
322	J 10	FB a	49	入海 1	赤褐色	大粒の長石を含む。	隆帶上に範状工具による刻み。
323	J 10	FB a	51	入海 1	赤褐色	長石を多く含む。	太い隆帶上に範状工具による刻み。
324	J 11	FB a	238	入海 1	灰黄色	長石、石英、黒色粒子を多く含む。織維を含む。	一本の断面三角形の隆帶上によわい刻み。
325	J 12	FB a	2	入海 1	褐色	長石を多く含む。	隆帶上に押圧。Iの押圧。表に条痕。
326	L 9	FB a	10	入海 1	明黄褐色	細かい長石、石英、黒色粒子を多く含む。	隆帶上に範状工具による刻み。
327	J 11	FB a	138	入海 1 ?	明褐色	細かい長石を含む。	薄い隆帶上に棒状工具による刻み。
328	I 14	FB a	6	入海 1 ?	明褐色	長石を多く含む。	隆帶。
329	K 14	FB a	6	入海 1 ?	にぶい橙色	長石を含む。	取手状の大きな隆帶？上に範状工具による刻み。
330	J 17	FB a	17	入海 1 ?	明赤褐色	長石を多く含む。	隆帶。波状口縁。
331	K 10	FB a	21	入海 1	赤褐色	長石を多く含む。硬質。	
332	K 9	FB a	13	入海 1 並行？	黒褐色	大粒の長石、石英を含む。	隆帶上に範状工具による刻み。波状口縁に同じ刻み。織維を含む。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
333	I	12	FB a	28	入海 1 ?	にぶい赤褐色	長石を多く含む。縹 塵帶上に棒状工具による刻み。 鐵を含む。

3群4類（入海2式）334～422、641

2から4条の細い、あるいは薄い陰帯を口縁部に巡らす。1、2条目を平行に3、4条目を波状にしているものが多い。陰帯上には連続した幅広の爪形文を施している。口縁部およびその下にも連続した爪形文を配している。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
334	I	10	FB a	133	入海 2 ?	暗褐色	長石、石英を多く含む 薄い陰帯上に爪形文。口縁部に刻み。 む。鐵を含む。
335	J	11	FB a	8	入海 2	橙色	長石、黒色粒子を含む 薄い陰帯上に爪形文。
336	K	11	FB a	10	入海 2	明黄褐色	長石を含む。 細い陰帯上に刻み。
337	I	11	FB a	9	入海 2	暗赤褐色	長石、黒色粒子を含む 細い陰帯上に竹管状工具による斜め刺突。 む。
338	K	11	FB a	9	入海 2	暗赤褐色	細かい長石を含む。 細い陰帯上に節のある刻み。
339	I	11	FB a	326	入海 2	明黄褐色	石英、長石を多く含む 細い陰帯上に刻み。
340	I	10	FB a	86	入海 2	明赤褐色	大粒の長石、黒色粒を多く含む。 細い陰帯上に刻み。口縁部に爪による弱い刻 み。
341	H	12	FB b	3	入海 2	明黄褐色	石英、長石を多く含む 細い陰帯上を爪による刻み。口縁部に淡い刻 み。
342	I	11	FB a	142	入海 2	にぶい黄橙色	長石、石英を含む。 隆帶上に刻み。
343		表			入海 2	暗肌色	長石、石英を多く含む 細い陰帯上に刻み。
344	I	11	FB a	228	入海 2	明黄褐色	長石、石英を多く含む 細い陰帯上に押圧。 む。
345	J	11	FB b	17	入海 2	にぶい黄橙色	長石、黒色粒子、赤褐色粒子を含む。 細い陰帯上に刻み。口縁部に淡い刻み。
346		表			入海 2	暗赤褐色	長石を含む。 隆帶上に刻み。
347	H	11	FB a	53	入海 2	橙色	黒色粒子を含む。 細い陰帯上に刻み。
348	I	11	FB b	18	入海 2	明赤褐色	細かい長石、黒色粒を含む 細く薄い陰帯上に淡い刻み。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
349	I	II	FB a	68	入海2	明黄褐色	石英、長石、黒色粒子を含む。纖維を含む。
							口縁部に刺み。隆帶に箆状工具による刺突。
349	I	II	FB a	187	入海2	浅黄色	石英、長石を含む。纖維を含む。
							口縁部に刺み。隆帶上に箆状工具による刺突。
350	K	10	FB a	13	入海2	にぶい橙色	石英、長石、黒色粒子を多く含む。
							細い隆帶上に刺み。口縁部表に細かい爪形、上部に刺み。表裏に赤彩？
351	I	II	FB a	235	入海2	灰橙色	細かい長石を含む。細い隆帶上に刺み。口縁部に爪？による刺み。
352	K	12	FB b	6	入海2	にぶい黄橙色	長石、石英を含む。
							細い隆帶上に爪による刺み。口縁部に爪形文と爪による刺み。
353	I	10	FB a	50	入海2	黄褐色	石英、長石を多く含む
							口縁部に刺み。隆帶上に爪形文。
354	I	10	FB a	77	入海2	橙色	大粒の石英、灰色粒子、長石を含む。
							隆帶上に刺み。口縁部に刺み。
355	J	11	FB a	129	入海2	にぶい黄橙色	大粒の石英、長石を多く含む。纖維を含み、脆弱。
							隆帶上に爪による刺み。口縁部に刺み。裏面に纖維による横ナデ。
355	J	11	FB a	177	入海2	暗灰黄色	大粒の石英、長石を多く含む。纖維を含み、脆弱。
							隆帶上に爪による刺み。口縁部に刺み。裏面に纖維による横ナデ。
356	J	11	FB a	96-2	入海2	暗橙色	長石、黒色粒子、赤褐色粒子を含む。
							細い隆帶上に刺み。口縁部に淡い刺み。
357	表				入海2	赤褐色	長石を含む。纖維を含む。
							細い隆帶上に刺み。口縁部に刺み。
358	J	11	FB a	225	入海2	浅黄色	長石を多く含む。纖維を含む。
							隆帶上に爪形文。口縁部に爪形文と爪による刺み。
359	I	II	FB a	土	入海2	黑褐色	長石、石英を含む。薄い隆帶上に爪形文。
							纖維を含む。
360	I	12	FB a	66	入海2	にぶい黄色	長石、石英を含む。隆帶上に短い箆状工具による刺突。
361	H	12	FB a	10	入海2	明黄褐色	長石、細かい黒色粒子を含む。
							隆帶上に爪形文と爪形文。
362	I	II	FB a	254	入海2	浅黄色	長石、石英を含む。纖維を含む。
							隆帶上に箆状工具による斜めの刺突。
363	J	13	表		入海2	暗肌色	細かい長石を含む。細い隆帶上に刺み。
364	I	II	FB a	70	入海2	灰オリーブ色	長石、石英、細かい黑色粒子を含む。纖維を含む。
							隆帶上に斜めの爪形文。裏面に植物纖維状の横ナデ。
365	I	II	FB a	166	入海2	灰黄褐色	長石、黒色粒子を含む。
							隆帶上に箆状工具による刺突を施す。
366	K	11	FB b	14	入海2	明黄褐色	大粒の石英、長石を多く含む。
							隆帶文。爪形文。

No.	区	層	東上No.	形式	色調	胎土	文様
367	I	11	FB b 3	入海 2	明赤褐色	長石、黒色粒子を多く含む。	隆帶上に笠状工具で斜めに刺突。
368	I	10	FB b 2	入海 2	明褐色	細かい長石、石英を含む。	細い隆帶に刻み。
369	H	12	FB a 11	入海 2	にぶい赤褐色	長石、灰色粒子、橙色粒子を含む。	細い隆帶上に刻み。被厚された口縁部に刻み。
370	J	11	FB a 100	入海 2	灰黄色	大粒の石英、長石、	隆帶上に爪形文。 チャートを含む。
371	J	11	FB a 104	入海 2	にぶい黄色	石英、長石を含む。	隆帶上に爪形文。 繊維を含む。
372	I	11	FB b 4	入海 2	褐色	細かい石英、長石を含む。	細い隆帶上に刻み。 含む。繊維を含む。
373	I	11	FB a 100	入海 2	明赤褐色	長石、黒色粒子を含む。	細い隆帶上に深い刻み。
374	I	12	FB a 73	入海 2	浅黄色	長石、石英を含む。	薄い隆帶上に爪形文。裏面に植物繊維状のものによる横ナデ。
375	II	11	FB a 45	入海 2	橙色	長石、石英を含む。	繊維を含み、やや脆弱。
376	J	13	FB a 14	入海 2	明肌色	長石、石英を含む。	繊維を含む。
							隆帶に薄い笠状工具による追跡刺突文。隆帶の上下にその工具による横引きの押さえ。
377	表			入海 2	にぶい黄橙色	石英、長石を多く含む。	薄い隆帶上に爪形文。 繊維を含む。
378	I	12	FB a 6	入海 2	黄褐色	大粒の石英、長石を多く含む。	繊維を含み、隆帶上に爪形文。爪形文。
379	I	11	FB a 48	入海 2	浅黄色	細かい長石、石英を含む。	少量の繊維を含む。
380	I	12	FB a 94	入海 2	にぶい黄橙色	石英、長石を含む。	細い断面三角形の隆帶に爪形状の刻みを施す。
381	表			入海 2	暗肌色	長石を含む。少量の繊維を含む。	非常に薄い隆帶上に爪形文。
382	J	11	表		赤褐色	大粒の長石を含む。	薄い隆帶上に爪形文。その下に爪形文を施す。
383	J	12	FB b 14	入海 2	明黄褐色	長石、石英を含む。	少量の繊維を含む。
384	H	11	FB a 49	入海 2	明黄褐色	長石、石英を含む。	隆帶上に爪形文。
385	表			入海 2	暗灰褐色	石英、長石を含む。	繊維を含む。
386	H	11	FB a 64	入海 2	橙色	長石、石英を含む。	薄い隆帶上に爪形文。

No.	区	層	車	No.	型式	色調	胎土	文様
387	J	11	FB	a	236	入海2	灰黄色	長石、石英を多く含む。隆帯上に爪形文。
388	K	11	FB	a	32	入海2	橙肌色	石英、長石を含む。隆帯上に範状工具による刺突。
389	J	10	FB	a	57	入海2	にぶい黄橙	石英、長石を多く含む。薄い隆帯上に爪形文。裏面に繊維による横ナデ。
390		表			入海2	暗褐色	大粒の石英を含む。薄い隆帯上に細かい爪形文。裏面に繊維による横ナデ。	
391		表			入海2	橙肌色	長石、石英を含む。薄い隆帯上に細い範状工具による刺突。	
392	L	9	FB	a	1	入海2	明黄褐色	長石、石英を含む。薄い隆帯上に爪形文。
393	J	11	FB	a	24	入海2	浅黄色	細かい長石、石英、薄い隆帯上に爪形文。黒色粒子を多く含む。
394	J	11	FB	a	128	入海2	浅黄色	細かい長石、石英を薄い隆帯上に爪形文。口縁部に爪による刺み。多量に含む。
395	J	11	FB	a	204	入海2	浅黄色	細かい長石、石英を薄い隆帯上に爪形文。口縁部に羽状の爪形文と爪による刺み。
396	I	11	FB	a	54	入海2	にぶい黄色	長石、石英、黒色粒 範状工具による爪形文、同じ工具による刺みを子を多く含む。
396	J	11	FB	a	67	入海2	浅黄色	長石、石英、黒色粒 範状工具による爪形文、同じ工具による刺みを子を多く含む。
396	J	11	FB	a	270	入海2	浅黄色	長石、石英、黒色粒 範状工具による爪形文、同じ工具による刺みを子を多く含む。
397	I	10	FB	a	169	入海2	にぶい黄色	大粒の長石、石英を隆帯上に爪形文。口縁部に羽状の爪形文。口縁部裏面に爪形文。
398	J	11	FB	a	10	入海2	浅黄色	長石、石英を含む。薄い隆帯上に爪形文。口縁部にお状の爪形文と繊維を含む。裏面に赤筋の痕跡。
399	I	11	FB	b	12	入海2	橙色	石英、長石を多く含む。非常に薄い隆帯上に幅の広い爪形文。口縁部近くに幅広の爪形文。口縁部に刺み。
400	K	10	FB	a	27	入海2	黑灰褐色	大粒の石英、長石を薄い隆帯上に爪形文。口縁部に薄い隆帯をつぶす形で羽状の爪形文。裏面に口縁部に爪形文。裏面に繊維による横ナデ。
401	I	11	FB	a	44	入海2	にぶい黄色	大粒の長石、石英を爪形文。薄い隆帯上に爪形文。口縁部に爪による刺み。裏面に繊維によるナデ。
402		表			入海2	暗黄橙色	石英、長石、暗灰色 細かい隆帯上に爪形文。口縁部に羽状の爪形文と粒子を含む。	
403	I	10	FB	a	102	入海2	橙色	石英、長石を多く含む。非常に薄い隆帯上に爪形文。
404	J	10	FB	a	43	入海2	橙色	長石、石英を多く含む。薄い隆帯上に爪形文。口縁部に刺み。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
404	J	10	FB a	43 入海 2	橙色	長石、石英を多く含む。	薄い隆帶上に爪形文。口縁部に刻み。
405	I	12	FB a	40 入海 2	にぶい黄橙色	長石、黒色粒子を多く含む。纖維を含む。	爪形文と非常に薄い隆帶上に爪形文。
406	I	10	FB a	132 入海 2	明黄褐色	細かい石英、長石を含む。纖維を含む。	薄い隆帶上に爪形文。
407	K	12	FB b	3 入海 2	にぶい黄橙色	石英、長石を多く含む。非常に薄い隆帶上に細かく長い爪形文。	纖維を含む。
408	表			入海 2	暗灰褐色	細かい長石、石英、黒色粒子を多量に含む。	非常に薄い隆帶上に爪形文。
409	J	11	FB a	19 入海 2	橙色	長石、石英を多く含む。	薄い隆帶上に箇状工具による刻み。
410	J	12	FB b	16 入海 2	明褐色	石英、長石を多く含む。纖維を含む。	幅広の隆帶上に薄い箇状工具による箇状の刺突。
411	表			入海 2	肌色	長石、石英を多く含む。少量のチャートを含む。	箇状工具による爪形の刻みをもつ隆帶文を波状に施す。
412	H	12	FB a	2 入海 2	にぶい黄橙色	大粒の石英、長石を多く含む。纖維を含む。	爪形文と薄い隆帶上に爪形文。赤塗の痕跡を残す。
413	I	11	FB a	218 入海 2	明褐色	長石、細かい黑色粒子を含む。	薄い隆帶上に箇状工具による刺突。
414	表			入海 2	暗褐色	細かい長石、石英を含む。	薄い隆帶上に爪形文。
415	I	11	FB a	215 入海 2	明赤褐色	長石、石英、雲母を多く含む。	爪形文。薄い隆帶上に爪形文。
416	I	11	FB a	139 入海 2 ?	浅黄色	石英、長石を多く含む。	箇状工具による爪形文。
417	J	11	FB a	249 入海 2	暗灰黄色	長石、石英を含む。	非常に薄い隆帶上に爪形文。
418	H	11	FB a	84 入海 2	橙色	長石、石英を含む。	爪形文。
419	K	11	FB a	26 入海 2	明黄褐色	大粒の石英、長石を多く含む。	薄い隆帶上に爪形文。
420	I	11	FB a	76 入海 2	浅黄橙色	長石、石英を多く含む。	非常に薄い隆帶上に箇状工具？による斜めの爪形文。
421	J	11	FB a	130 入海 2 ?	にぶい橙色	長石、石英を多く含む。	爪形文。
422	I	10	FB a	42 入海 2	にぶい黄橙色	石英、長石を含む。少量の纖維を含む。	幅広の隆帶上に幅広い（爪による押し引き？）爪形文。
423	H	11	FB a	86 入海 2	明灰肌色	大粒の石英、長石、黒灰色粒子を多く含む。	口縁に爪形の刻み。口縁上段に2条の幅広連続爪形文。その下に3条の薄い隆帶上に連続爪形文。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
641	I	111	FB a	43	入海 2	明灰肌色	大粒の石英、長石、黒灰色粒子を多く含む。
							口縁に爪形の刻み。口縁上段に2条の幅広連続爪形文。その下に3条の薄い陸帯上に連続爪形文。
641	J	11	FB a	110	入海 2	明灰肌色	大粒の石英、長石、黒灰色粒子を多く含む。
							口縁に爪形の刻み。口縁上段に2条の幅広連続爪形文。その下に3条の薄い陸帯上に連続爪形文。
641	J	11	FB a	159	入海 2	明灰肌色	大粒の石英、長石、黒灰色粒子を多く含む。
							口縁に爪形の刻み。口縁上段に2条の幅広連続爪形文。その下に3条の薄い陸帯上に連続爪形文。
641	J	11	FB a	203	入海 2	明灰肌色	大粒の石英、長石、黒灰色粒子を多く含む。
							口縁に爪形の刻み。口縁上段に2条の幅広連続爪形文。その下に3条の薄い陸帯上に連続爪形文。
641	J	11	FB a	327	入海 2	明灰肌色	大粒の石英、長石、黒灰色粒子を多く含む。
							口縁に爪形の刻み。口縁上段に2条の幅広連続爪形文。その下に3条の薄い陸帯上に連続爪形文。

3群5類(石山式) 423~440

口縁部近くに連続爪形文を施す。器厚は薄めで、硬質である。

No.	区	層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
423	J	11	FB a	168	石山?	赤褐色	長石を多く含む。 波状の爪形文。
424	J	12	FB b	6	石山	黒褐色	石英、長石を多く含む。 爪形文。 繊維を含む。
425	I	12	FB a	22	石山?	明褐色	細かい長石、黒色粒 波状の爪形文。 子を含む。
426	J	11	FB a	39	石山	灰黄色	細かい長石を含む。 爪形文。 口縁部表側に細かい刻み。 繊維を含む。
427	表				石山?	暗橙色	細かい長石、黒色粒 波状の爪形文。 子を含む。
428	H	11	FB a	12	石山	にふい黄褐色	細かい長石、石英を押し引きに近い連続爪形文。 表に繊維による横含む。 少量の繊維をナデが顕著。 口縁部に爪による刻み。
429	I	11	FB a	121	石山?	赤褐色	大粒の長石、黒色粒 爪形文。 子を多く含む。
430	J	11	FB a	176	石山?	赤褐色	長石、石英、黒色粒 錠状工具による爪形文。 子を含む。 繊維を含む。
431	H	12	FB a	20	石山	にふい黄橙色	長石、石英、黒色粒 押し引くような爪形文。 口縁部に刻み。 子を多く含み、砂質。
432	I	111	FB a	190	石山	明黄褐色	長石、石英を多く含む 爪形文。 繊維を含む。
433	I	111	FB a	35	石山	浅黄色	細かい石英、長石、押し引きに近い連続爪形文。 黒色粒子を含む。
434	I	111	FB a	272	石山	明黄褐色	石英、長石を含む。 爪形文。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
435	J	11	FB a	57 石山	にぶい橙色	大粒の石英、長石を含む。	幅広の爪形文。
436	K	11	FB a	33 石山?	褐色	長石を多く含む。	幅広で二重の爪形文。
437	J	11	FB a	208 石山?入海?	浅黄色	石英、長石を含む。少量の纖維を含む。	爪形文。
438	I	10	FB a	30 石山	黄褐色	石英、長石を含む。纖維を少量含む。	爪形文。
439	I	10	FB a	16 石山	明黄褐色	細かい長石、石英を含む。少量の纖維を含む。	爪形文。裏面に纖維によるナデ。
440	K	11	FB b	2 石山?	暗赤肌色	大粒の石英、長石を含む。	爪形文。

4 群 (打越式) 441~476

口縁部に貝殻腹縁の押圧によるハの字形の連続文を施す。焼成は良好で硬質であり、赤褐色を呈する。裏面に非常にはっきりした条痕が施される。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
441	I	11	FB a	11 打越	明赤褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。口縁部に貝殻腹縁による刻み。
441	J	11	FB a	6 打越	明赤褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。口縁部に貝殻腹縁による刻み。
441	J	11	FB a	34 打越	橙色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。口縁部に貝殻腹縁による刻み。
442	表			打越	赤褐色	細かい長石を含む。	貝殻腹縁の圧痕文と押引文。口縁。
443	K	11	FB b	12 天神山?打越?	赤褐色	細かい長石、黒色粒	表裏に口縁部まで条痕。天神山?打越?子を含む。
444	J	12		テ 打越?	黒橙色	長石、石英、黒色粒	表面に条痕。子を含む。
445	I	10	FB a	139 打越	明赤褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の押引文と圧痕文。
446	I	11	FB a	136 打越	赤褐色	大粒の長石を多量に	貝殻腹縁の圧痕文。口縁部にも同じ施文。含む。
447	I	11	FB a	159 打越?	黄褐色	長石、黒色粒子を含む	表に口縁部近くまで条痕。
448	I	10	FB a	187 打越	明褐色	反石、暗赤褐色粒子	貝殻腹縁の圧痕文。を含む。
449				打越	橙色	大粒の長石を含む。	貝殻の背面による押引文。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
450	J	11	FB	a 163 打越	赤褐色	長石、灰色粒子を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
451	H	10	FB	a 7 打越	明黄褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
452	表			打越	赤褐色	細かい長石を含む。	貝殻腹縁の押引文と圧痕文。
453	I	11	FB	a 17 打越	赤褐色	長石、黒色粒子を含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
454	表			打越	暗褐色	大粒の長石を含む。鐵錐を含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
455	表			打越	暗赤褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
456	表			打越	褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
457	J	11	FB	a 257 打越	赤褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
458	J	11	FB	a 222 打越	褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。裏面に淡い条痕。
459	I	11	表	打越	赤褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
460	J	11	表	打越	赤褐色	灰褐色粒子、橙色粒子を含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
461	I	12	FB	a 79 打越？	灰黄褐色	長石、黒色粒子を含む。	貝殻腹縁による押圧？
462	J	10	FB	a 3 打越	明赤褐色	長石、石英を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。裏面に淡い条痕。
463	I	12	FB	a 43 打越	明赤褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
464	I	12	FB	b 4 打越	赤褐色	大粒の長石、細かい長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
465	J	12	FB	a 30 打越	暗褐色	長石を多量に含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
466	II	11	FB	a 93 打越	明赤褐色	細かい長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文と押引文。口縁。
467	I	11	FB	a 211 打越	明赤褐色	長石を含む。	貝殻腹縁の圧痕文。
468	J	11	FB	a 167 打越	明赤褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縁の圧痕文。裏面に薄い条痕。口縁。
469	I	11	FB	a 258 打越	明褐色	大粒の長石を多量に含み、脆弱。	貝殻腹縁の圧痕文。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
470	J	II	FB a	139 打越	橙色	長石を多く含む。	貝殻腹縫の圧痕文。
471	J	II	FB a	179 打越	明褐色	長石を多く含む。	貝殻腹縫の圧痕文。口縁。
472	表			打越	橙色	長石を含む。	貝殻腹縫の圧痕文。
473	I	II	FB a	24 打越	赤褐色	長石、石英含む。	貝殻腹縫の圧痕文。
474	J	II	FB a	131 打越	明褐色	長石を含む。少量の 繊維を含む。	貝殻腹縫の圧痕文。
475	I	II	FB a	172 打越？	にぶい褐色	石英を多く含む。少 量の繊維を含む。	貝殻腹縫の圧痕文。
476	表			打越？	暗橙色	大粒の石英、長石を 多く含む。	

その他（早期後半と考えられる土器）477～523

早期後半に含まれると考えられる上器を一括した。前記した各群に含まれる可能性が高いものも含まれている。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
477	G	II	FB a	4 天神山？	赤褐色	長石を含む。硬質。	薄い籠状工具による波状の連続刺突。一部分に 「」の押圧。
478	I	II	FB a	148 神之木台？ 野島？	明赤褐色	長石、石英を多く含 む。繊維を含む。	細い籠帶を横位に、刺みのある鈎状の高い籠帶 を縦位に施す。籠帯を押さえるように器面に朱 漆？
479	I	II	FB a	21 早期末？	明褐色	細かい長石を多く含 む。繊維を含む。や や脆弱。	口縁部を肥大化した取手を持ち、上面に貝殻腹 縫による刺突。早期末？
480	J	II	FB a	161 入海 2 ?	赤褐色	大粒の長石を含む。	籠棒状工具によるやや波状の連続刺突。入海 2 ?
481	I	II	FB a	192 天神山？	明褐色	長石を多量に含む。	細い平行沈線の山形文。
482	表			早期末？	黒色	長石、石英を含む。 繊維を含む。	細い沈線。早期末？
483	I	II	FB a	256	暗赤褐色	細かい長石、石英、 黒色粒子を多く含 む。繊維を含む。	口縁部にV字形の籠線の貼り付け。その下部に L Rの網文。
484	I	II	FB a	151 早期末？	橙色	長石、赤褐色粒子を 含む。繊維を含む。	表面にR Lの網文？口縁に爪？による刺み。早 期末？
485	H	II	FB a	18 早期末？	橙色	細かい砂粒を多く含 む。脆弱。	細かい集合沈線。早期末？
486	J	II	FB a	46 早期末？	褐色	長石を主体とした砂 粒を多く含む。	籠帯とその内側に平行沈線。早期末？

No.	区	層	取上No.	型式	色調	胎土	文様
487	I	111	FB a	231	入海?	明褐色	長石を含む。 薄い陸帯上に箋状工具による斜め刺突。
488	J	16	FB a	32	早期末?	橙色	大粒の長石、石英を 多く含む。 陸線の上に刻みを施す。
489	表			入海2?	暗赤褐色	長石を多く含む。	細い陸帯上に刻み。
490	表			入海2?	橙色	細かい長石、黒色粒 子を少量含む。	薄い陸帯上に箋状工具による刻み。
491	J	14	FB a	6	入海2?	暗赤褐色	長石、石英を含む。 細い陸帯。
492	I	112	FB a	48	入海2?	黄橙色	大粒の石英、長石を 含む。纖維を含む。 陸帶上に細い竹管による2本の押し引き文。口 縁部に箋状工具による連続刺突と刻みを施す。 入海2?
493	H	11	FB a	26	入海2?	明赤褐色	長石、石英、黒色粒 子を多く含む。
494	H	12	FB a	18	入海?	明黄褐色	大粒の長石、石英を 含む。 竹管による押し引き文。
495	J	9	FB a	7	入海2?	浅黄色	石英、長石を多く含 む。 陸帶上に細い竹管状の工具の押し引き文を施 す。入海2?
496	J	10			入海?	灰橙色	長石、石英を多く含 む。纖維を含む。 細い陸帯（断面三角形）、倒木痕より出土。
497	I	110	FB a	17	石山?	明褐色	長石、石英を含む。 爪形文。口縁を表側にかえし、刻みを施す。
498	I	111	FB a		入海2?	橙色	長石を含む。脆弱。 薄い陸帯上に箋状工具による斜め刺突。土坑14 覆土中より出土。
499	J	17	FB b	18	早期末?	明赤褐色	纖維を含む。 刺突文。早期末?
500	K	17	FB b	7	入海?	黒色	石英を多く含む。纖 維を多く含み脆弱。 薄い陸帯上に刻み？
501	表			入海2並行?	暗橙色	長石、石英を多く含 む。口縁部を肥厚し、爪形の刻みを施す。裏面に条 痕。纖維を含む。 入海2並行?	
502	I	111	FB a	185	入海か	明褐色	長石を含み、纖維を 含む。表面に赤彩。
503	J	11	FB a	102	入海2並行?	明肌色	大粒の長石、石英を 多く含む。纖維を含 む。 無文。口縁部に交互の刻み。表裏に赤彩。入海 2並行?
504	I	111	FB a	283	入海2?	明褐色	長石、黒色粒子を多 く含む。 口縁部に淡い刻み。 入海2?
505	I	111	FB a	313	?	明褐色	細かい長石、石英を 多く含む。 口縫。
506	J	17	FB b	14	?	黑褐色	大粒の長石、石英を 多量に含む。脆弱。 口縫。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
507	J	II	FB a	124	早期?	赤褐色	細かい長石を含む。 口縁部。無文。 便質。
508	J	I	FB a	24-2	?	暗褐色	大粒の長石、石英を 含む。 口縁。片口状のつくり。 纖維を含む。
509	J	II	FB a	63	?	橙色	細かい長石、石英、 黒色粒子を含む。 繊 維を少量含む。
510	K	I	FB b	1	?	橙色	大粒の長石、石英を 半蔵竹管による平行沈線? 横位の擦痕。 多く含む。
511	I	II	FB a	19	I11FBa333に 類似	赤褐色	長石の細粒を多く含 む。指による横ナデ
512	I	II	FB a	333	早期末	赤褐色	細い長石の砂粒を含 表面に指による横ナデ、纖維は含まない。 む。
513	J	II	FB a	50	中期?	橙色	大粒の石英、長石を 口縁部あるいは台。 多く含む。
514	J	II	FB a	49	中期?	橙色	大粒の石英、長石を 口縁部あるいは台。 多く含む。
515	J	II	FB a	105	?	明赤褐色	長石を多く含む。 繊 Iの押圧。 纖維を含む。
516	K	II	FB a	7	?	明褐色	大粒の長石を含む。 Iの押圧。 纖維を含む。
517	表			?	肌色	長石、細かい黒色粒 Rの圧痕。 子を含む。	
518	J	II	FB a	24	?	暗赤褐色	長石、石英、雲母を 表面に段。 多量に含む。
519	J	II	FB b	1	?	赤褐色	長石、石英、雲母を 表面に段。 多量に含む。 纖維を 含む。
520	I	II	FB a	4	?	にふい黄褐色	石英、黒色粒子を含 脊帶 む。 纖維を含む。
521	表			?	暗橙色	細かい長石、黒色粒 細い平行沈線。 子を含む。	
522	K	II	FB a	3	?	赤橙色	長石、石英、細かい 刺突文? 黒色粒子を含む。
523	I	II	FB a	144	?	黄褐色	大粒の石英、長石を 補修孔 多く含む。

5 群（上の坊式）524～556

角をもつ、ヘラ状の工具による連続した斜め削突を施す。近接した二条の列は羽状に配されているものが目立つ。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様	
524	I	10	FB a	63	上の坊	明褐色	大粒の長石（蛭石？）、褐色粒子を多く含む。	箆棒状工具による斜め連続刺突。間隔の離れた羽状を呈す。口縁部に刻み。
525	J	11	FB b	34	上の坊	赤褐色	細かい長石を含む。	箆棒状工具による斜め連続刺突。同じ工具による口縁部の刻み。
526	表			上の坊？	暗赤褐色	大粒の長石を多く含む	箆状工具による刺突。口縁部に刻み。	
527	J	11	FB a	74	上の坊	橙色	長石、黒色粒子を含む	箆棒状工具による刺突。
528	表			上の坊	暗赤褐色	大粒の長石、赤褐色	箆棒状工具による刺突。間隔の開いた羽状を呈す。	
529	表			上の坊	暗赤褐色	長石、黒色粒子を含む	箆棒状工具による斜め刺突。羽状を呈する。	
530	K	9	FB a	9	上の坊	褐色	細かい長石、黒色粒子、赤褐色粒子を多く含む。	箆棒状工具による斜め刺突。羽状を呈す。
531	J	12	FB a	20	上の坊	明褐色	長石を多く含む。	箆状工具による斜め刺突。口縁部に刻み。
532	J	11	FB a	96	上の坊	明褐色	長石、黒色粒子を多く含む。	箆棒状工具による斜め連続刺突。
533	I	11	FB a	306	上の坊	赤褐色	長石、黒色粒子、青灰色粒子を含む。	箆棒状工具による斜め刺突。
534	表			上の坊？	明肌色	石英、細かい長石、	爪形文？	
						黒色粒子を含む。		
535	I	10	FB a	157	上の坊	黄褐色	細かい長石、黒色粒子を多く含む。砂質。	箆棒状工具による刺突。指？による淡い押し引きで磨滅している。
536	J	11	FB a	72	上の坊	橙色	細かい長石、黒色粒子を多く含む。	箆棒状工具による刺突。
537	J	17	FB b	11	上の坊	明褐色	長石、赤褐色粒子、	箆棒状工具による斜め刺突。
538	H	11	FB a	4	上の坊	橙色	細かい長石、黒色粒子を含む。	箆棒状工具による刺突。
539	I	10	FB a	100	上の坊	赤褐色	大粒の長石、赤褐色粒子を含む。	箆棒状工具による刺突。
540	I	12	FB b	2	上の坊	にぶい褐色	長石（蛭石？）を多く含む。	箆棒状工具による連続刺突。間隔の開いた羽状を呈す。
541	I	11	FB a	208	上の坊	赤褐色	細かい長石、黒色粒子を含む。	箆棒状工具による刺突。
542	I	10	FB a	7	上の坊	赤褐色	長石、石英を含む。少量の纖維を含む。	箆状工具による斜め刺突文。
543	J	14	FB b	8	上の坊	黒赤褐色	長石の砂粒を多く含む。	箆状工具による刺突。
							くみ、脆弱。	

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
544	J	17	FB a	36 上の坊	明橙色	長石、黒色粒子を含む。	箇棒状工具による斜め刺突。
545		表		上の坊	暗赤褐色	長石を含む。	深い箇状工具による斜め刺突。間隔の開いた羽状を呈す。
546	K	12	FB b	5 上の坊	にぶい赤褐色	安山岩様の灰色粒子、長石を含む。	箇状工具による斜め連続刺突。羽状を呈す。
547	J	1?		上の坊	暗赤褐色	長石を多量に含み難弱。	箇状工具による列点文。
548		表		上の坊	暗赤褐色	長石を多く含む。	箇状工具による刺突。
549	I	11	FB a	188 上の坊	暗赤褐色	長石を含む。脆弱。	箇棒状工具による斜め連続刺突。
550	I	16	FB a	8 上の坊	橙色	大粒の長石を多く含む。	角棒状工具による押し引きに近い連続刺突。み脆弱。
551	J	12		テ 上の坊		長石、細かい黑色粒子を含む。	箇状工具による斜め連続刺突。羽状を呈する。
552	J	12	FB b	27 上の坊?	明褐色	細かい長石、石英、黒色粒子を多く含む。	箇状工具による刺突。口縁部に斜めの刻みと取手状の突起。
553	I	11	FB a	83 上の坊	明褐色	長石を含む。	箇棒状工具による刺突。
554	I	17	FB a	7 上の坊	明黄褐色	大粒の長石、黒色粒子を多く含む。非常に脆弱。	箇棒状工具による斜め刺突。
555	I	11	FB a	155 上の坊	にぶい赤褐色	長石を多く含む。	箇状工具による波状の連続刺突。
556	I	12	FB a	83 上の坊	褐色	細かい長石、黒色粒子を多く含む。	薄い箇棒状工具による連続刺突。

6 群（諸磯系）

諸磯式に關係するものを6群とした。

6群A類（諸磯b式） 557～600

縄文を地文に、半截竹管による平行沈線によって直線、弧線の文様を描くものが主体。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
557	表			諸磯b?	暗灰肌色	長石、黒色粒子を含む。	LRL?を地文に平行沈線文。
558	H	11	FB a	89 諸磯b?	橙色	長石、石英を含む。	LRL?を地文に横に平行沈線文。
559	H	11	FB a	73 諸磯b?	橙色	長石、石英を含む。	LRLを地文に横に平行沈線文。

No.	区層	車上No.	型式	色調	胎土	文様
560	表		諸磯 b ?	暗灰肌色	長石、石英、黒色粒 子を含む。	LRLを地文に横に平行沈線文。
561	表		諸磯 b ?	暗灰肌色	細かい長石、石英、 黒色粒子を含む。	LRLを地文に横に平行沈線文。
562	K 15 FB a 3		諸磯 b	明赤褐色	長石、石英を多く含む。	半裁竹管による平行沈線文。
563	J 15 FB a 16		諸磯 b	明赤褐色	石英、長石を多く含む。	R Lを地文、半裁竹管による平行沈線文。
563	J 15 FB a 17		諸磯 b	黄橙色	石英、長石を多く含む。	R Lを地文、半裁竹管による平行沈線文。
563	J 15 FB a 18		諸磯 b	赤褐色	石英、長石を多く含む。	R Lを地文、半裁竹管による平行沈線文。
563	J 15 FB a 21		諸磯 b	赤褐色	石英、長石を多く含む。	R Lを地文、半裁竹管による平行沈線文。
564	J 15 FB a 36		諸磯 b	明赤褐色	長石、石英を多く含む。	Lの継位?を地文に平行沈線文を施す。
565	J 15 FB a 57		諸磯 b	明赤褐色	長石、石英を多く含む。	半裁竹管による平行沈線。
566	J 15 FB a 38		諸磯 b	赤褐色	長石、石英を多く含む。	半裁竹管による平行沈線文。
567	J 15 FB a 29		諸磯 b	明赤褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線を施す。
568	J 15 FB a 32		諸磯 b	にぶい赤褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
569	J 15 FB a 11		諸磯 b	橙色	長石、石英、黒色粒 子を多く含む。	R Lの地文、半裁竹管による平行沈線文。
569	J 15 FB a 25		諸磯 b	明褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文とし、半裁竹管の平行沈線文。
570	J 15 FB a 13		諸磯 b	暗赤褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文とし、半裁竹管による平行沈線文。
571	J 15 FB a 8		諸磯 b	暗赤褐色	石英、長石を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線を施す。
572	K 15 FB a 4		諸磯 b	明赤褐色	石英、長石を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線を施す。
573	J 15 FB a 58		諸磯 b	暗赤褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
574	J 15 FB a 39		諸磯 b	暗赤褐色	長石、石英を多く含む。	L Rを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
575	表		諸磯 b	暗赤褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎上	文様
576	J 15	FB a	20	諸磯 b	暗赤褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
577	J 15	FB a	28	諸磯 b	明赤褐色	石英、長石を多く含む。	R Lを地文とし半裁竹管による平行沈線文を施す。
578	J 15	FB a	24	諸磯 b	明褐色	石英、長石を含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
579	J 15	FB a	37	諸磯 b	暗赤褐色	石英、長石を多く含む。	R L ?を地文とし、半裁竹管の平行沈線文を施す。
580	J 15	FB a	23	諸磯 b	明褐色	長石、石英を多く含む。	R L ?を地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
581	J 15	FB a	31	諸磯 b	褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
582	J 15	FB a	67	諸磯 b	赤褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
583	J 15	FB a	26	諸磯 b	明褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
584	J 15	FB a	34	諸磯 b	赤褐色	長石、石英を多く含む。	R L ?を地文とし半裁竹管による平行沈線文を施す。
585	J 15	FB a	35	諸磯 b	明褐色	石英、長石を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
586	J 15	FB a	42	諸磯 b	黒褐色	石英、長石を多く含む。	R Lを地文とし半裁竹管による平行沈線文を施す。
587	J 15	FB a	19	諸磯 b	にぶい赤褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
588	J 15	FB a	10	諸磯 b	にぶい黄褐色	長石、石英を多く含む。	R L ?を地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
589	J 15	FB a	87	諸磯 b	にぶい褐色	石英、長石を多く含む。	半裁竹管による平行沈線文。
590	J 16	FB a	8	諸磯 b	暗赤褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
591	J 15	FB a	6	諸磯 b	にぶい赤褐色	長石、石英を多く含む。	半裁竹管による平行沈線文。
592	J 16	FB a	9	諸磯 b	にぶい赤褐色	長石、石英を多く含む。	Rを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
593	J 15	FB a	62	諸磯 b	暗褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
594	J 15	FB a	31	諸磯 b	褐色	長石、石英を多く含む。	R Lを地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
595	J 15	FB a	70	諸磯 b	明赤褐色	長石、石英を多く含む。	半裁竹管による平行沈線文。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
596	表			諸磯 b	暗赤褐色	長石、石英を多く含む。	半裁竹管による平行沈線文。
597	J 15	FB a 41		諸磯 b	にぶい赤褐色	長石、石英を多く含む。	半裁竹管による平行沈線文を施す。
598	J 15	FB a 69		諸磯 b	赤褐色	長石、石英を多く含む。	半裁竹管による平行沈線文。
599	表			諸磯 b	にぶい赤褐色	長石、石英を多く含む。	R L ? を地文に半裁竹管による平行沈線文を施す。
600	J 15	FB a 33		諸磯 b	橙色	長石、石英を多く含む。	半裁竹管による平行沈線文。

6群B類（諸磯式・縄文のみ施文）601～626

縄文が密接に施文されている上器を一括した。比較的薄手で、裏面は丁寧なナデ調整が行われる。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
601	I 11	FB a 161		諸磯	明黄褐色	石英、長石、雲母、黒色粒子を多く含む。	RLの横位施文。口縁。
602	I 11	FB a 34		諸磯	赤褐色	長石、石英、雲母を多く含む。	RLを横位施文。口縁。
603	I 11	FB a 101		諸磯	赤褐色	長石を多く含む。	RLの横位の施文。口縁。
604	I 11	FB a 247		諸磯	明赤褐色	長石、石英を多く含む。	RLの横位施文。口縁。
605	J 11	FB a 33		諸磯	灰褐色	長石、雲母を多く含む。	RLを横位施文。口縁。
606	I 12	FB a 46		諸磯	にぶい赤褐色	長石を多く含む。	RLの横位。口縁。
607	表			諸磯	明橙色	長石を多く含む。	RLの横位施文。
608	I 12	FB a 103		諸磯	暗赤褐色	石英、長石を多く含む。	諸磯
609	H 11	FB a 2		諸磯	にぶい赤褐色	石英、長石を多く含む。	RLの横位施文。
610	I 12	FB a 31		諸磯	明赤褐色	石英、長石を多量に含む。	RLを横位施文。
611	H 11	FB a 55		諸磯	にぶい赤褐色	長石、石英、雲母を多く含む。	RLRの横位施文。
612	I 13	FB a 15	加曾利E ? 諸磯？	諸磯	橙色	長石、石英、黒色粒子を多く含む。	RLの縄文。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
613	J	12	FB a	58 諸磯	褐色	長石、石英を多量に含む。脆弱。	RLの横位施文。
614	表			諸磯	赤褐色	石英、長石を多く含む。	RLを横位施文。
615	I	12	FB a	16 諸磯	橙色	長石、石英を多く含む。	RLを横位施文。
616	I	12	FB a	78 諸磯	褐色	石英、長石、黒色粒子を多く含む。	RL?
617	I	13	FB a	13 諸磯	橙色	長石、石英を多く含む。	RLの横位施文。
618	H	11	FB a	65 諸磯	にほい赤褐色	長石、石英を多く含む。	RL。脆弱。
619	I	11	FB a	102 諸磯	赤褐色	石英、長石を多量に含む。	RLを横位施文。
620	I	11	FB a	137 諸磯	赤褐色	長石、石英を多く含む。	RLを横位施文。
621	I	12	FB a	61 諸磯	橙色	長石を多く含む。	RLの横位施文。
622	J	12	FB a	25 諸磯	褐色	長石、石英を多く含む。	LR。
623	I	13	FB a	1 諸磯	明黄褐色	細かい長石、石英、雲母を含む。	RLの繩文。
624	I	11	FB a	245 諸磯	赤褐色	石英、長石、黒色粒子を多く含む。	RLを横位施文。
625	I	12	FB a	55 入海?諸磯? 黄褐色		長石、石英を含む。薄い腹带上に細い竹管による二条の押引文。	
626	表			入海?諸磯? 明肌色		長石を含む。少量の雲母を含む。	細い竹管による数条の押引文。

7 群 (前期～中期と思われるもの) 627～631

平行沈線と密接な刺突が施される土器。比較的厚手で、雲母を多く含む。焼成は悪く、赤褐色で、表面が剥落しやすい。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
627	I	15	FB a	21 五領ヶ台?	明褐色	石英、雲母を多量に含む。やや脆弱。	棒状工具による刺突と半截竹管による平行沈線文。
628	I	15	FB a	16 五領ヶ台?	明赤褐色	石英、長石、雲母を多量に含む。やや脆弱。	棒状工具による刺突。同じ工具による沈線。
629	I	15	FB a	18 五領ヶ台?	橙色	石英、長石、雲母を多量に含む。	やや脆弱。棒状工具による刺突。

No.	区層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
630	I 16	FB a 40	五領ヶ台?	明赤褐色	雲母、長石を多く含む。脆弱。	竹管状工具による刺突。

631	I 16	FB a 39	五領ヶ台?	明赤褐色	石英、雲母を多量に含む。やや脆弱。	棒状工具による刺突。
-----	------	---------	-------	------	-------------------	------------

8群(中期) 632~637、645

中期の上器を8群で括した。

No.	区層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
632	I 16	FB a 9	藤内	明赤褐色	長石、石英を多く含む。	隆蒂、三叉文。
633	J 14	FB a 29	勝板 I	にぶい黄褐色	長石を多く含む。	半截竹管による押し引き。
634	J 13	表	勝板 I	暗灰肌色	長石、黒色粒子を多く含む。	半截竹管による押し引き。
635	J 13	FB a 9	勝板 I	暗灰肌色	長石、黒色粒子を多く含む。	半截竹管による押し引き。
636	I 15	FB a 40	加曾利E1	にぶい赤褐色	石英、長石を多く含む。	隆蒂。
637	J 14	FB b 4	加曾利E ?	肌色	長石、黒色粒子を含む。	RLの繩文。

9群(後期) 638、639

後期と思われる土器を9群として括した。

No.	区層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
638	表	堀之内?	黒褐色	砂粒を多く含む。	隆蒂上に押さえ。口縁。	
639	J 14	FB a 1	加曾利B並行?	黒灰色	長石、石英を多く含む。	二本の浅い沈線。口縁。表面に煤が付着。

口縁突起部 第130回642~645

口縁の突出部分を実測した。642~644は早期末の柏烟式で、645は中期中葉の藤内式と思われる。

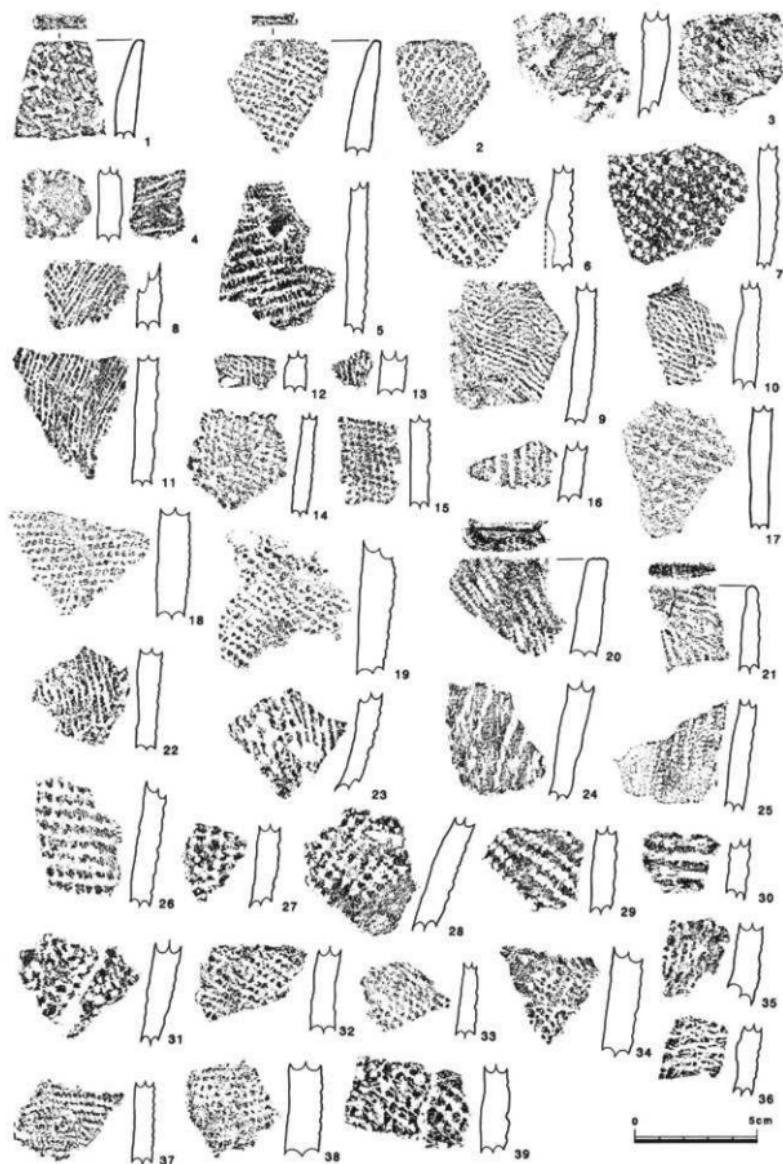
No.	区層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
642	J 13.14	FB a	柏烟?	明橙色	長石、石英を多く含む。纖維を含む。	口縁突起部。表裏に淡い条痕。
643	I 13	FB a 7	柏烟?	明赤褐色	石英、長石、黒色粒子を多く含む。纖維を含む。	口縁突起部。表に淡い条痕。

No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
644	I	16	FB	a 42	梢端?	明黄褐色	角礫状の石英粒子を含む。鐵錆を含む。
645	J	16	FB	a 29	藤内	橙色	長石、石英、暗褐色の粒子を含む

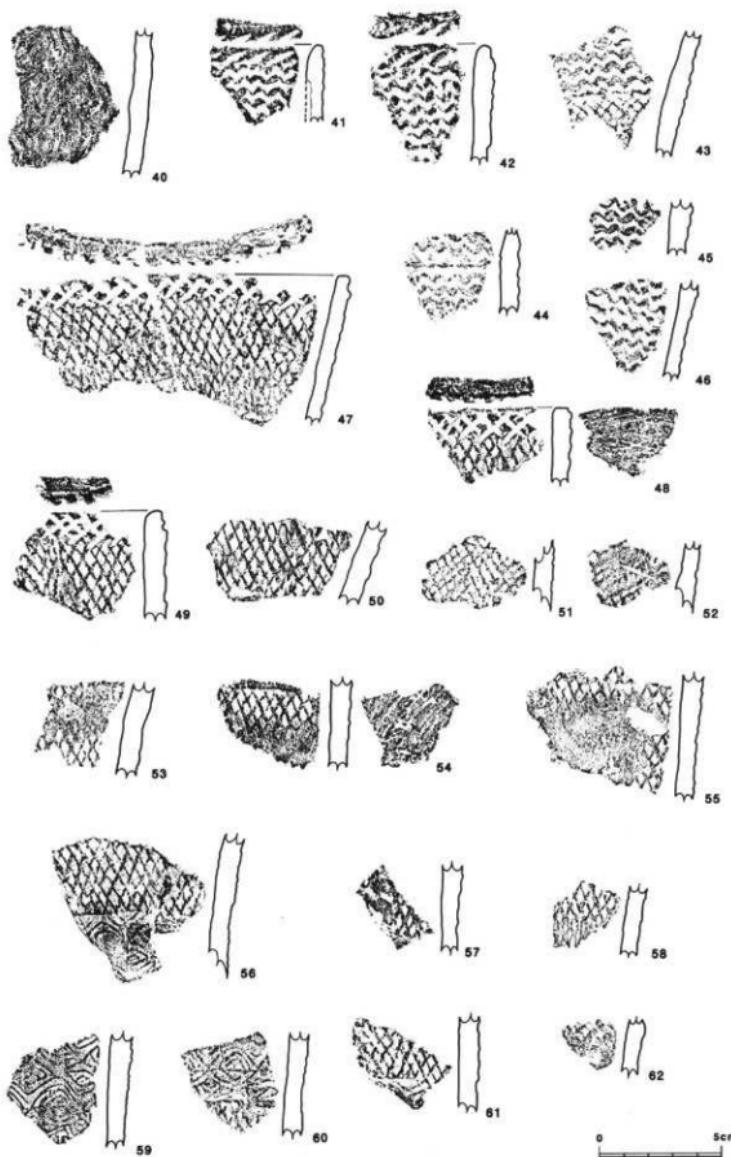
底 部 第130図646~666

底部を一括して呈示した。尖底から平底まで存在するが、胎土から考えると、その多くは早期後葉のものと考えられる。

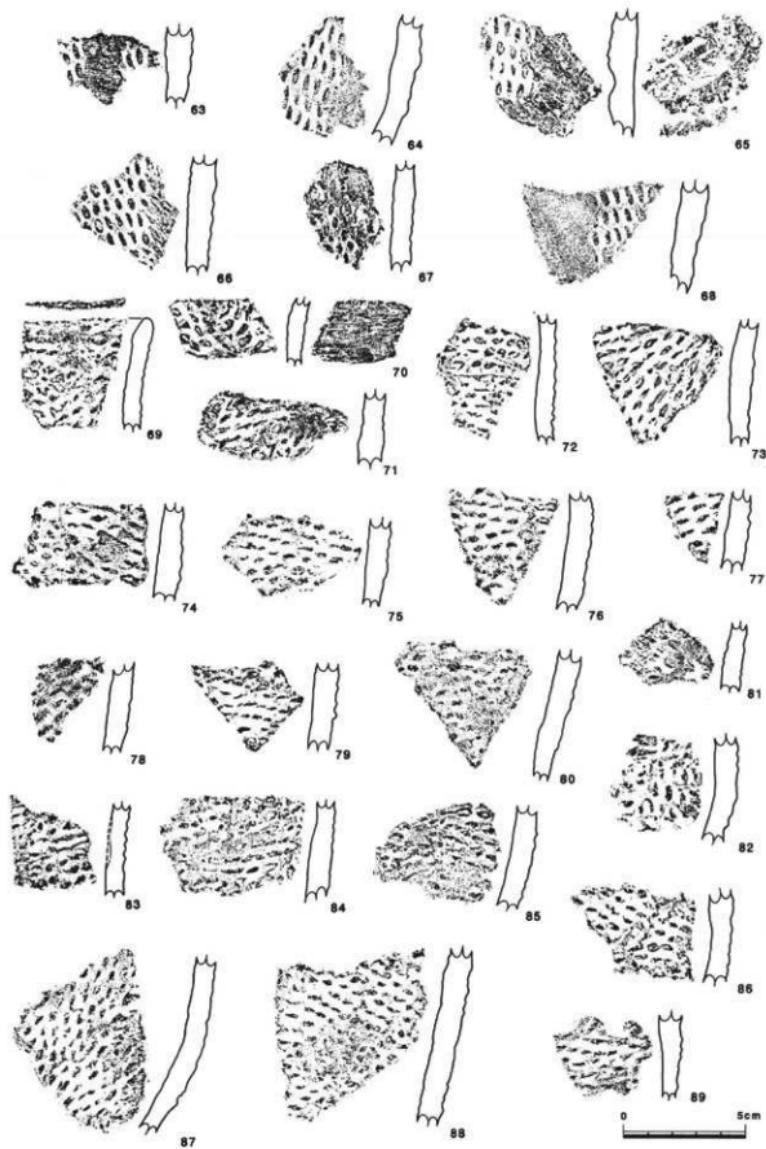
No.	区	層	東上No.	型式	色調	胎土	文様
646	H	12	FB	b 1	尖底部	明褐色	黑色粒子、石英を含む 挣形文系?
647	H	11	FB	a 96	尖底部	明褐色	石英、白色粒子を含む 早期末。
648	J	12	FB	a 32	尖底部	明褐色	石英を多く含む 早期末。
649	I	17	FB	a 128	底部	赤褐色	石英、黒色粒子を含む 早期末。
650	J	17	FB	b 6	底部	灰白色	石英を含む 早期末。
651	I	16	FB	a 101	底部	明赤褐色	黑色粒子、長石、石英を含む 早期末。
652	J	11	FB	b 2	底部	にぶい橙色	長石、黒色粒子を含む 早期末。
653	J	11	FB	a 141	尖底に近い平底部	橙色	黒、白色の砂粒を含む 早期末。
654	I	16	FB	a 128	底部	橙色	黒、白色粒子を含む 早期末。
655	J	15	FB	a 86	底部	橙色	長石、黒色粒子、石英を含む 早期末。
656	表			底部	暗赤褐色	長石、石英、黒色粒子を多く含む。 早期末。	
657	表			底部	暗赤褐色	長石、石英、黒色粒子を多く含む。 早期末。	
658	I	17	FB	a 98	底部	赤褐色	石英を多く含む 早期末。
659	K	17	FB	a 1	底部	明褐色	石英を多く、黒、白、褐色粒子を含む 早期末。
660	U	17	FB	a 43	底部	にぶい橙色	白、黒色粒子を含む 早期末。



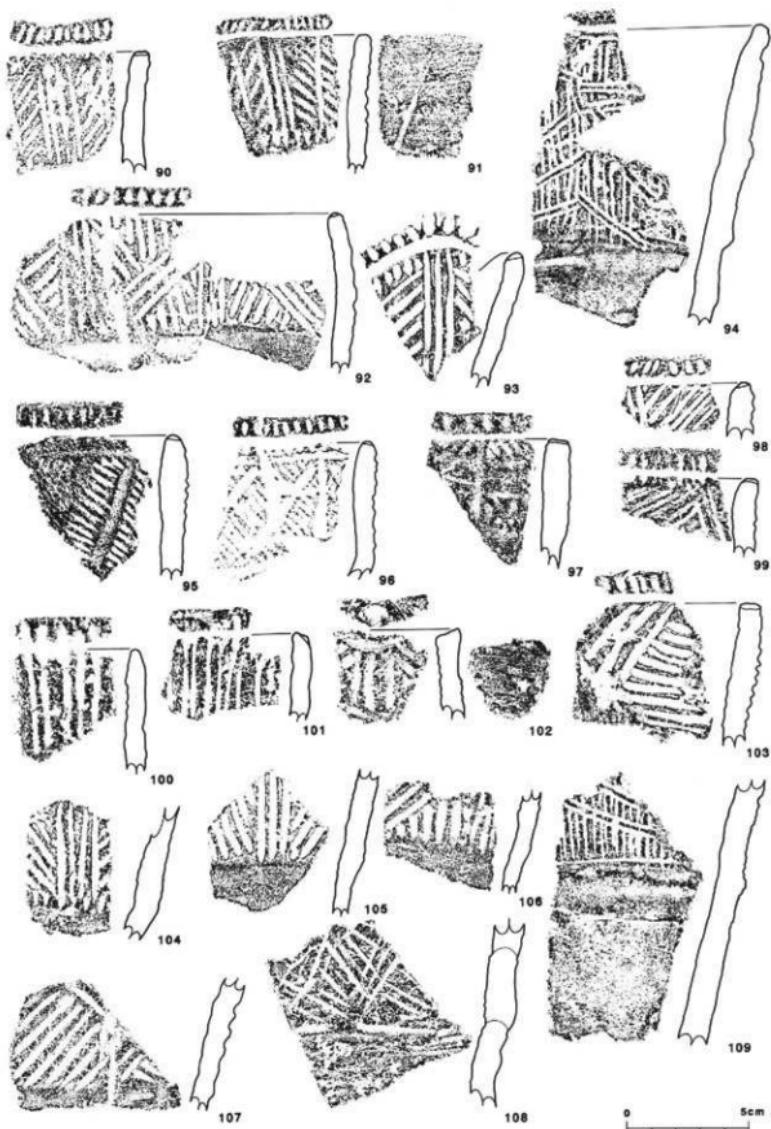
第102図 1群1類土器



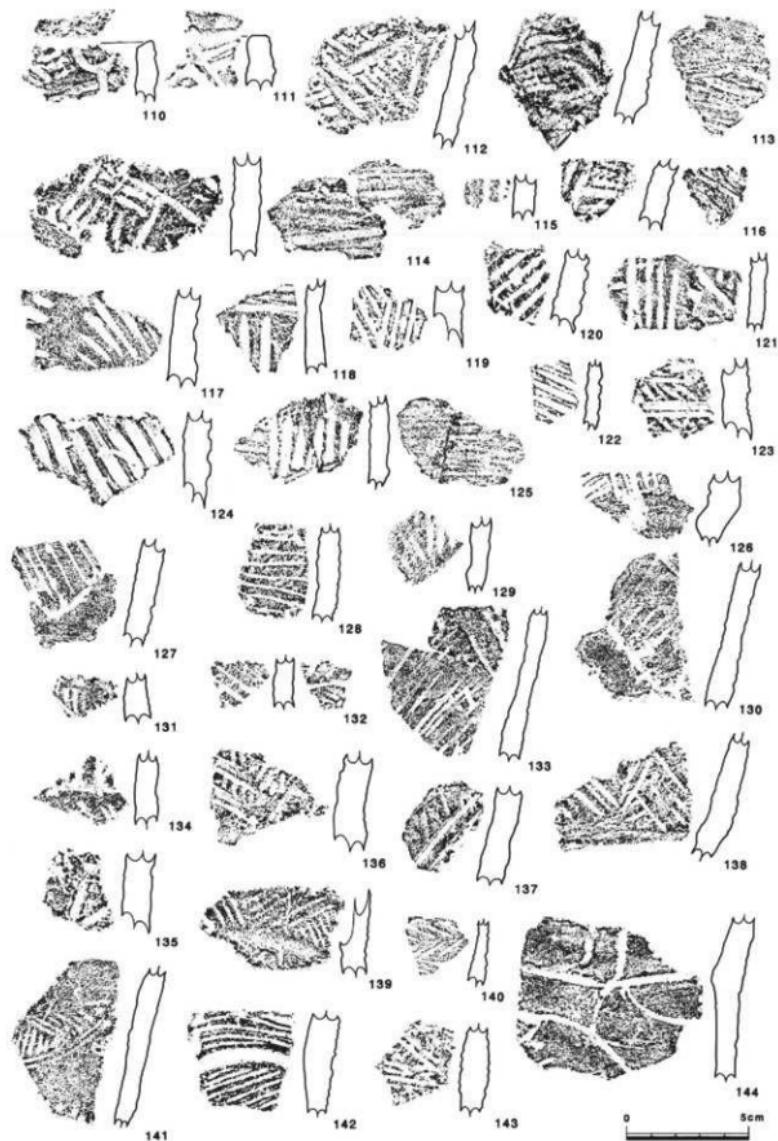
第103図 1群2類土器1



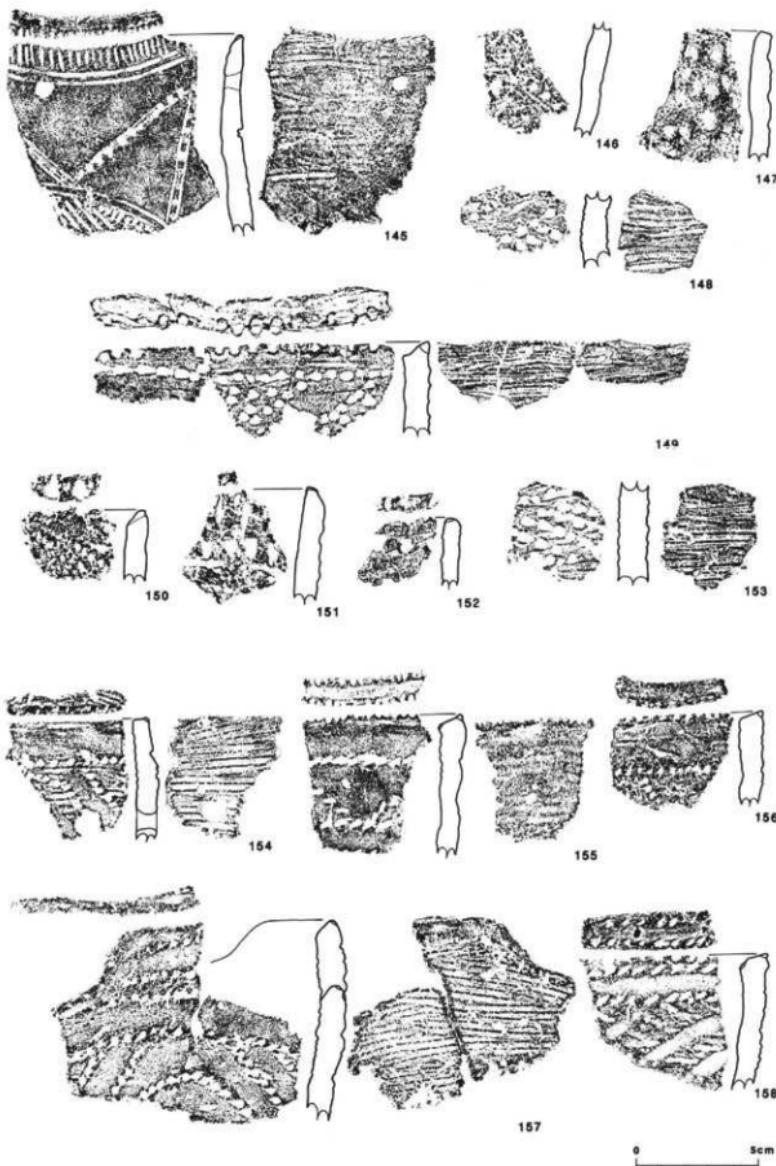
第104図 1群2類土器2



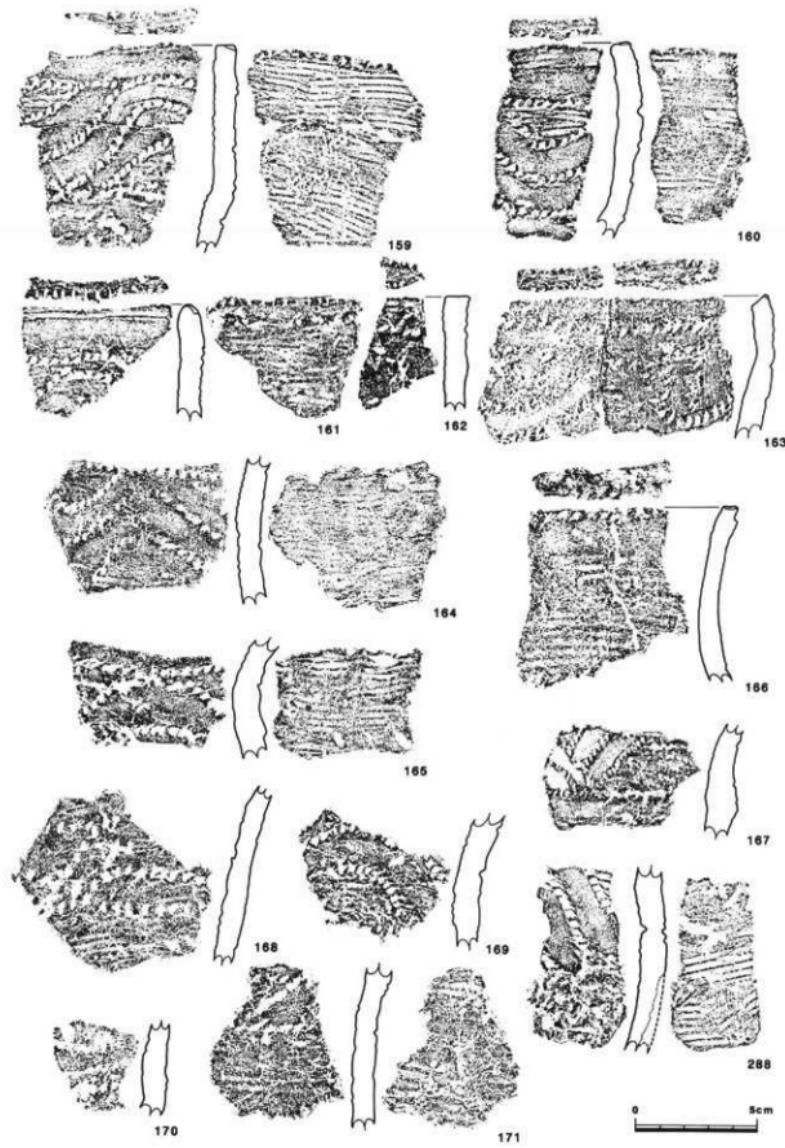
第105図 2群1類土器1



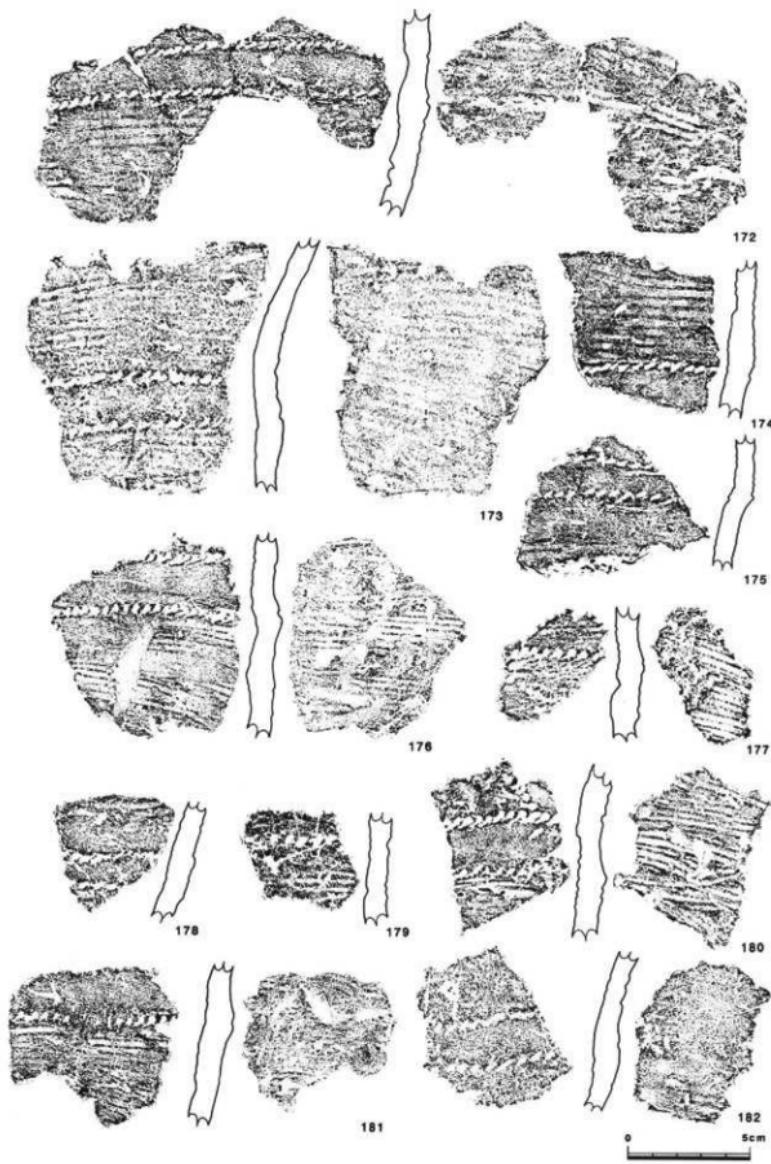
第106図 2群1類土器2



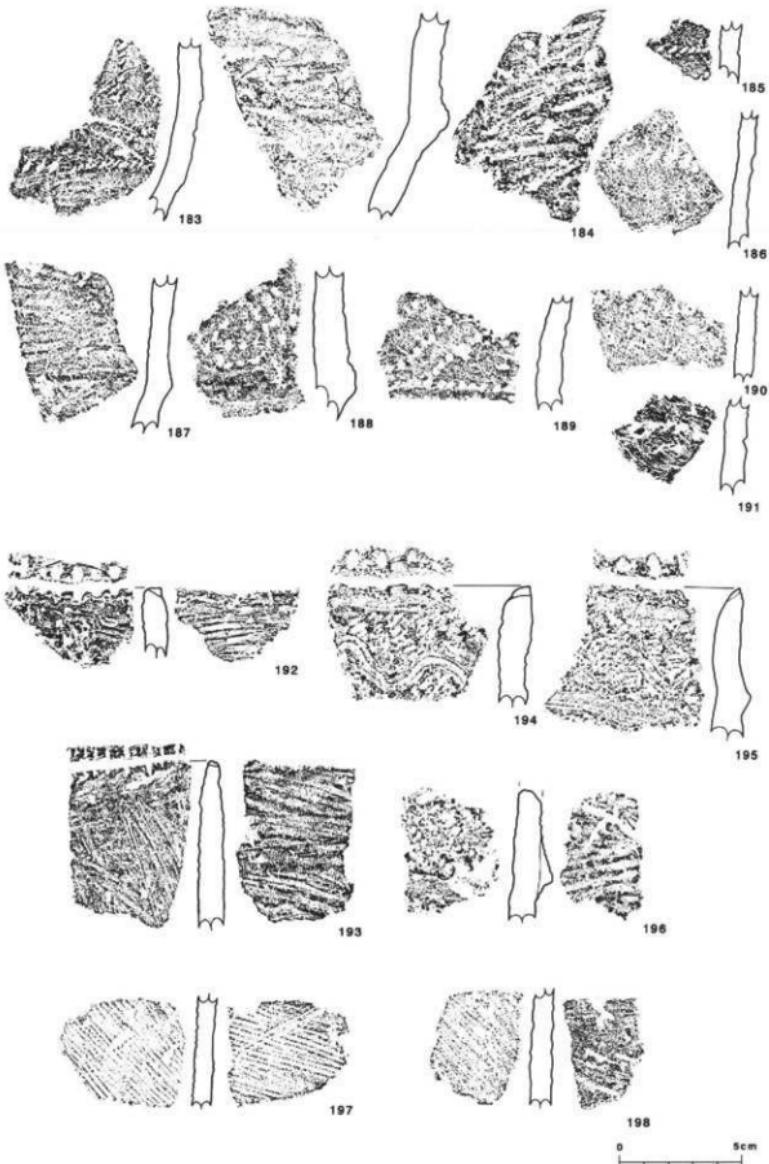
第107図 2群2類・3類土器1



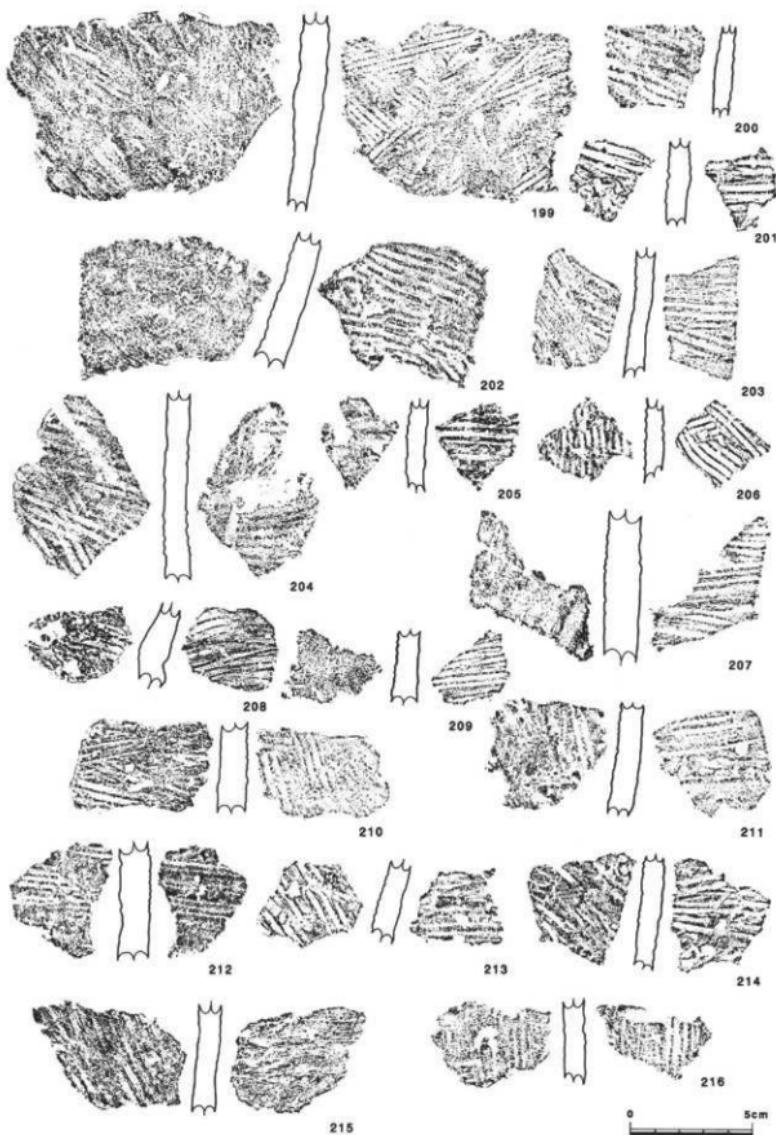
第108図 2群3類土器2



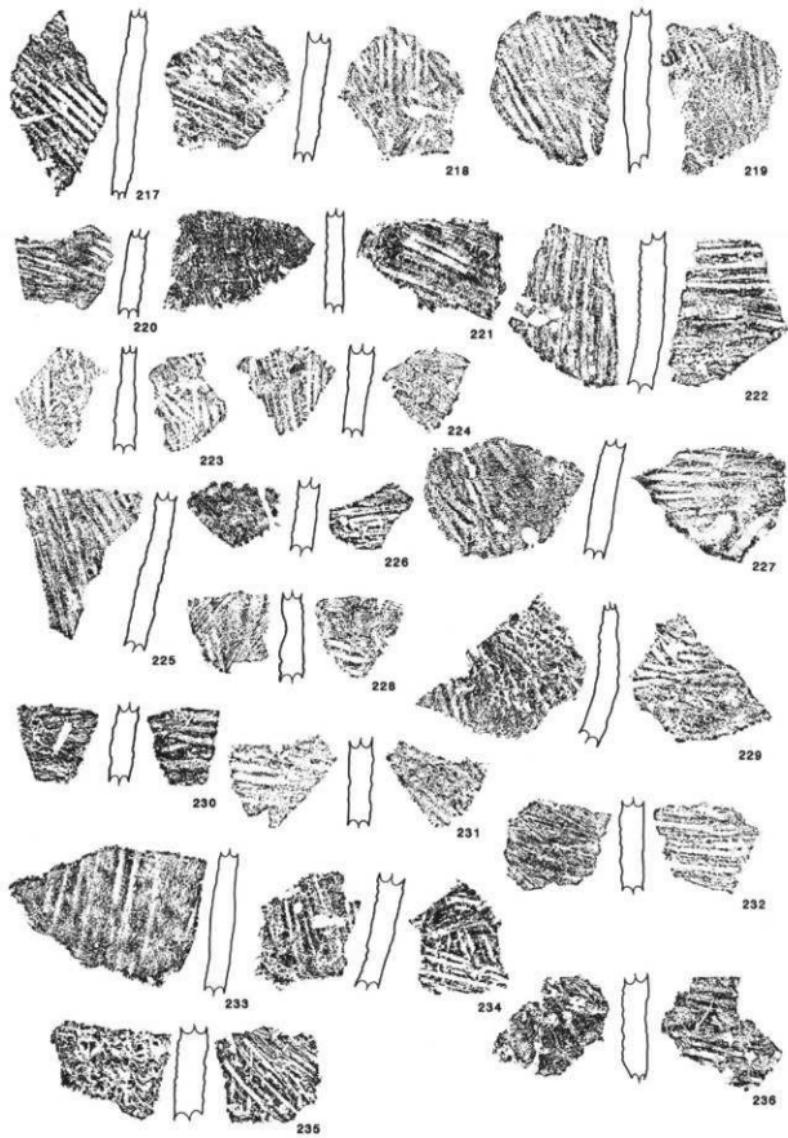
第109図 2群3類土器3



第110図 2群3類・4類土器

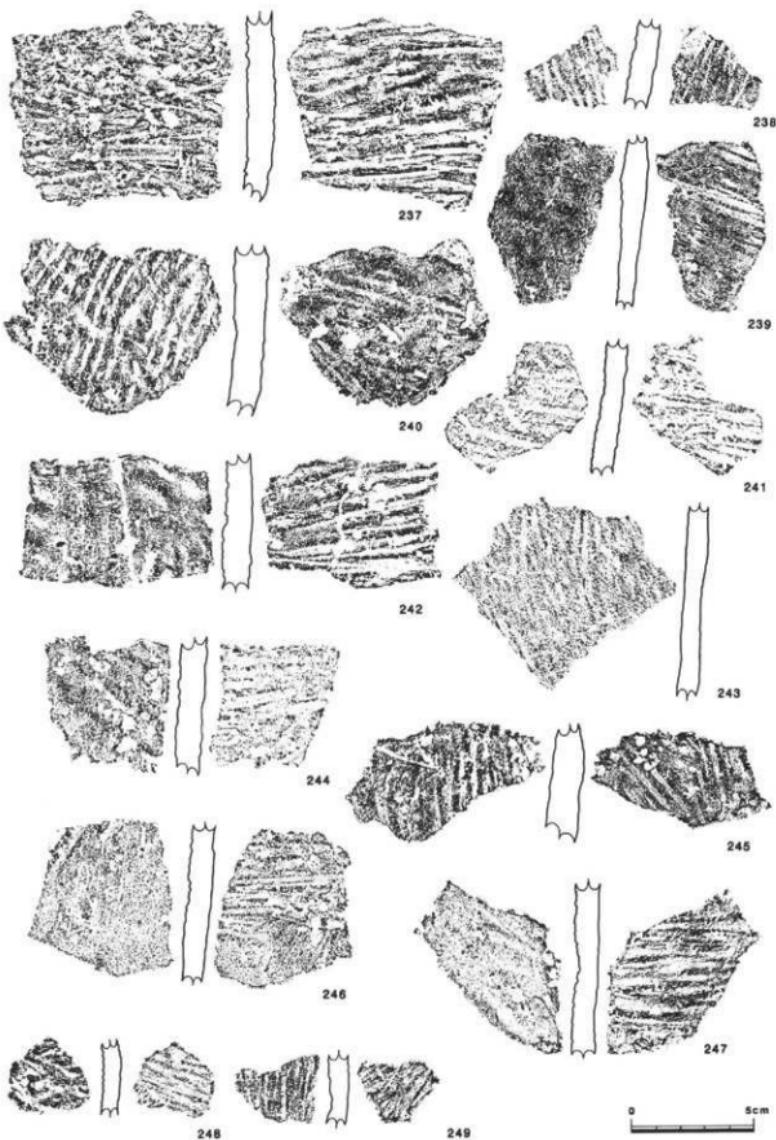


第111図 2群土器

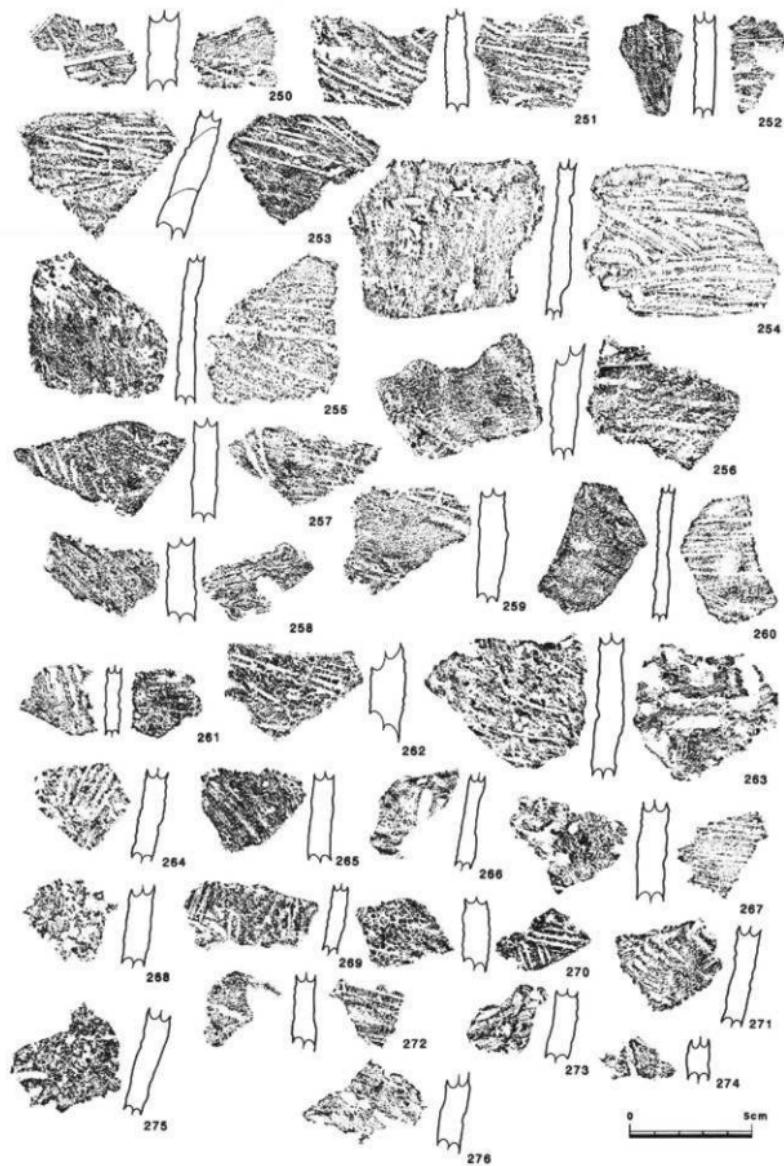


0 5cm

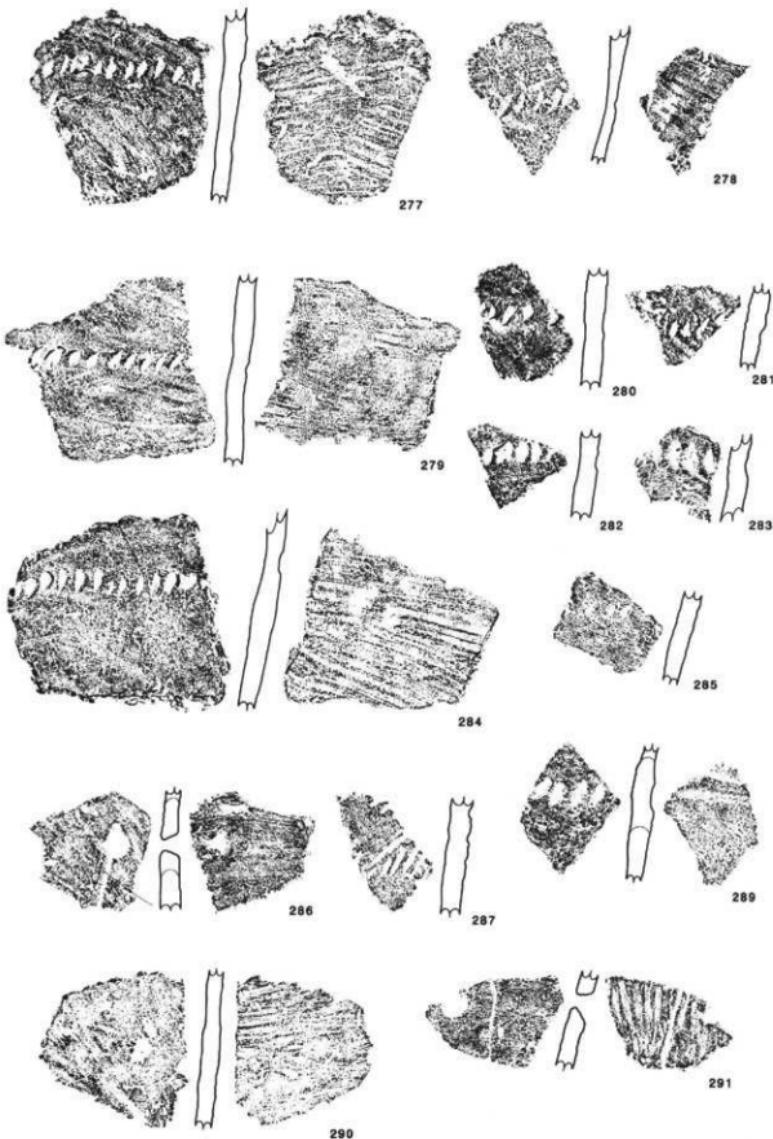
第112図 2群土器



第113図 2群土器

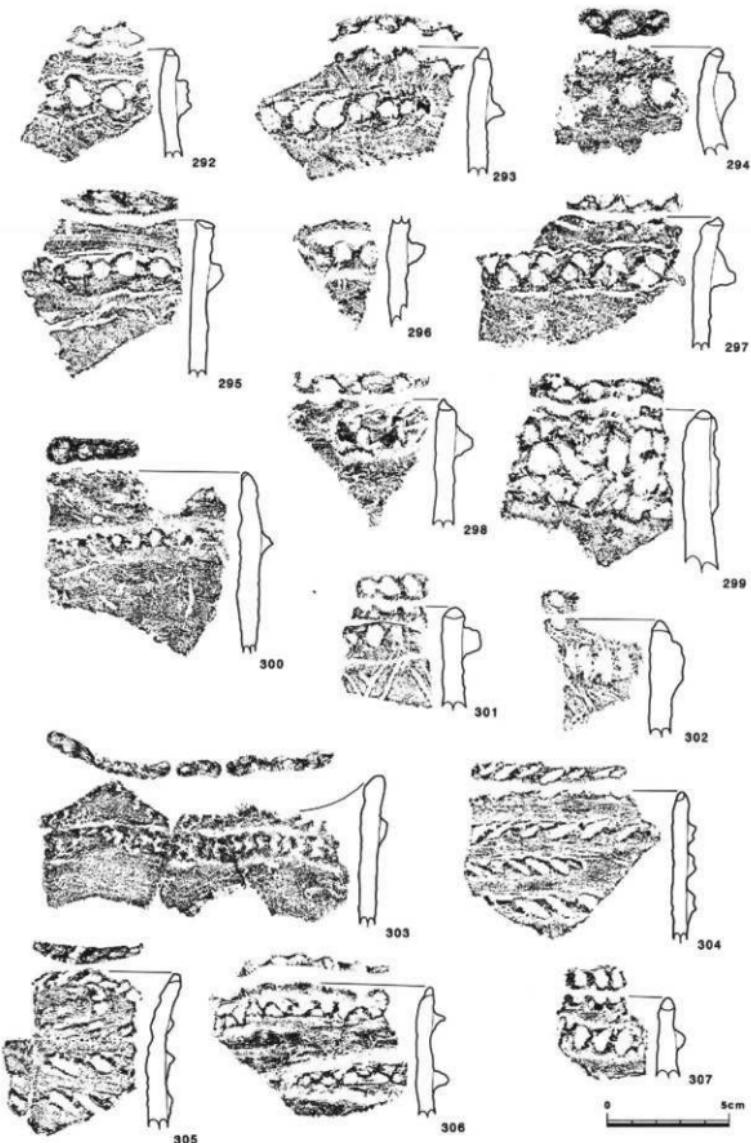


第114図 2群土器

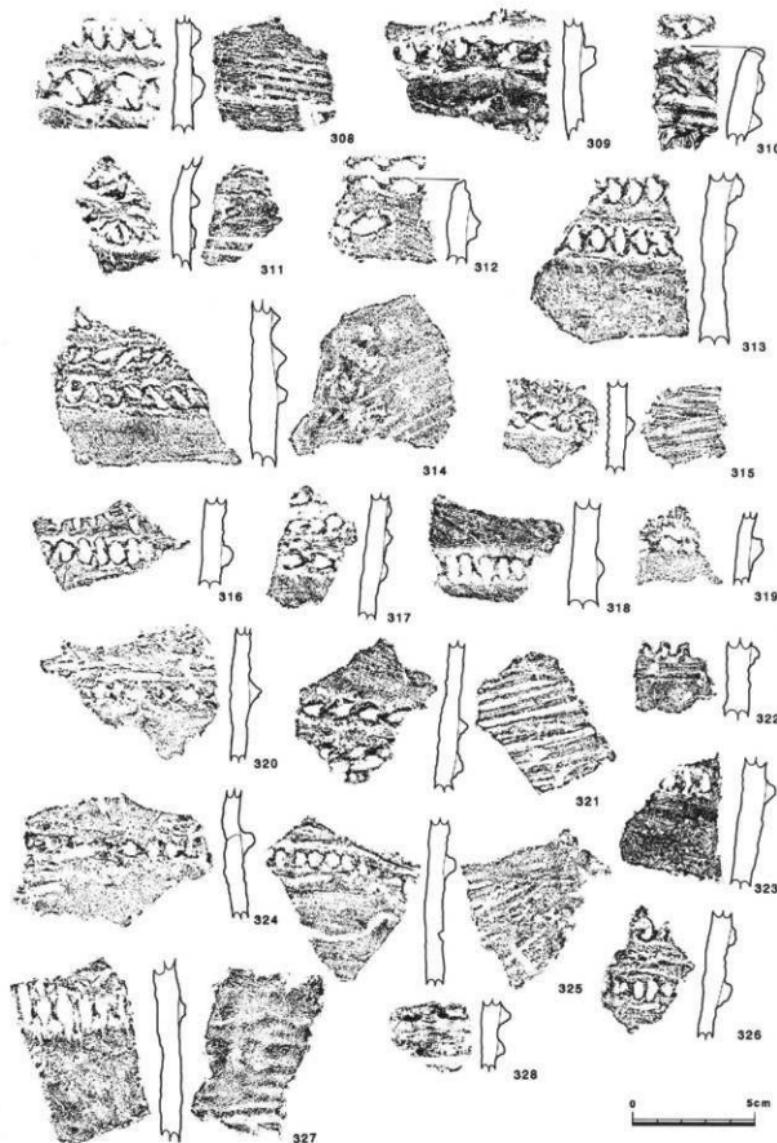


第115図 3群1類土器

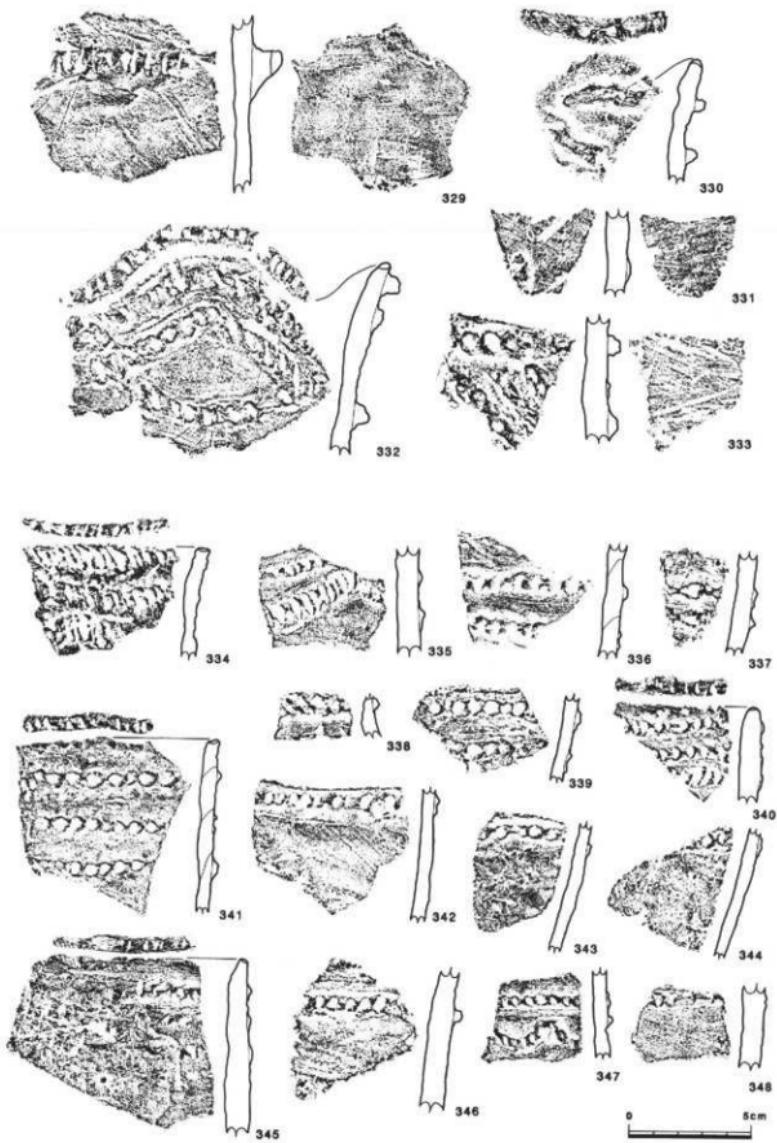
0 5cm



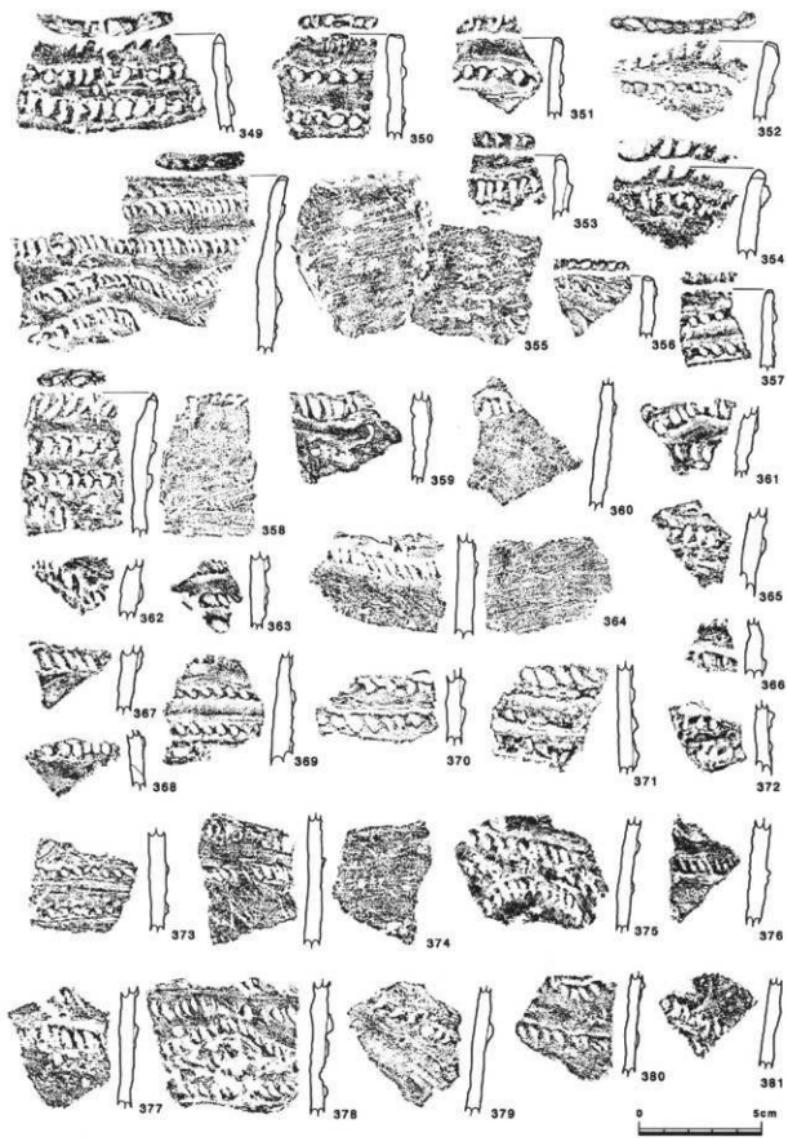
第116図 3群2類・3類土器1



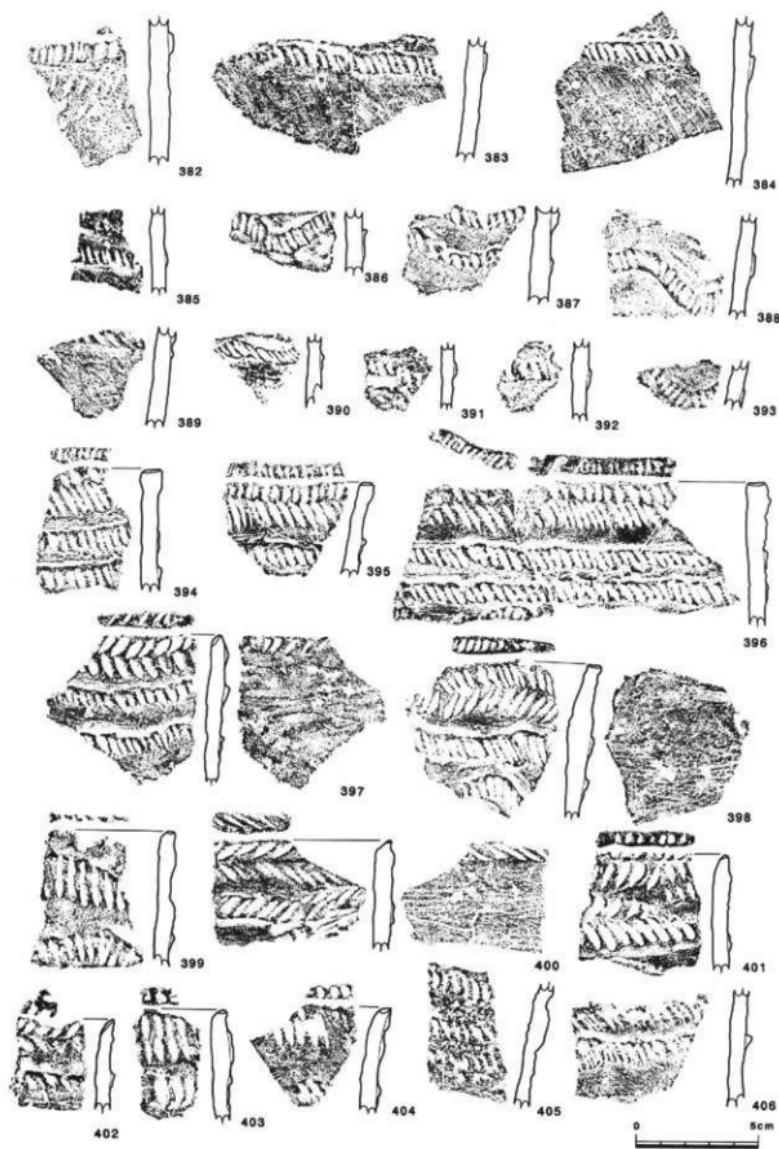
第117図 3群3類土器2



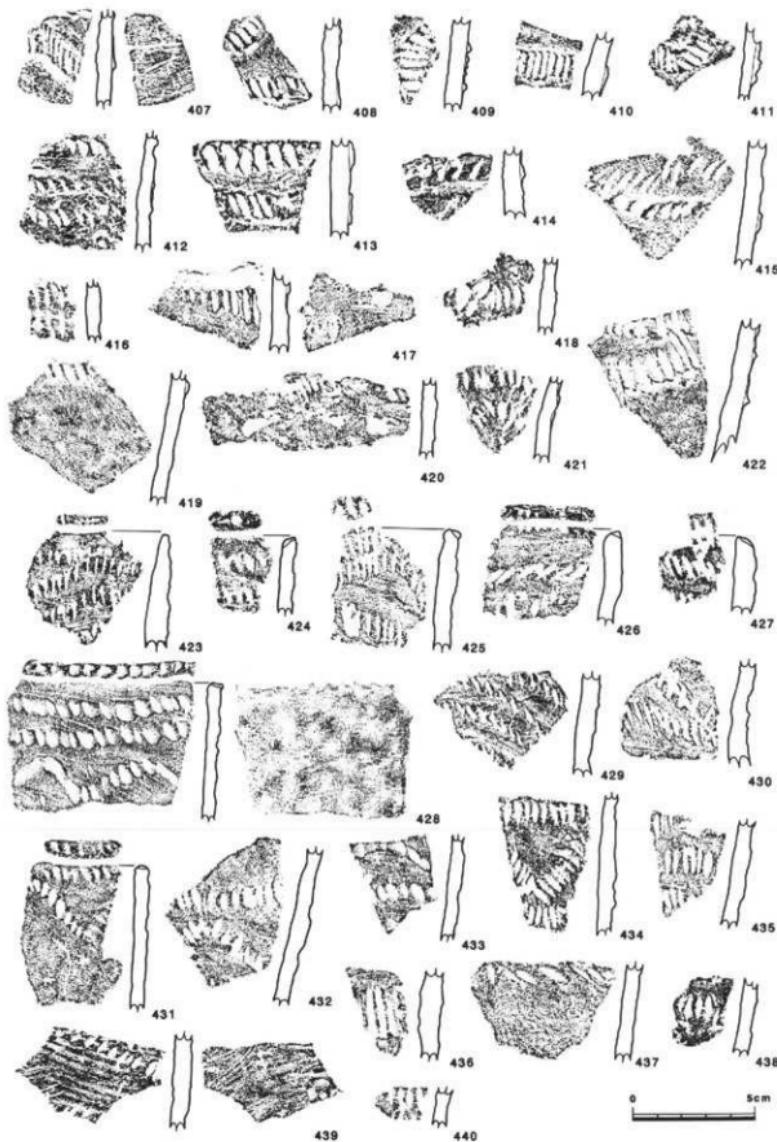
第118図 3群3類土器3・3群4類土器1



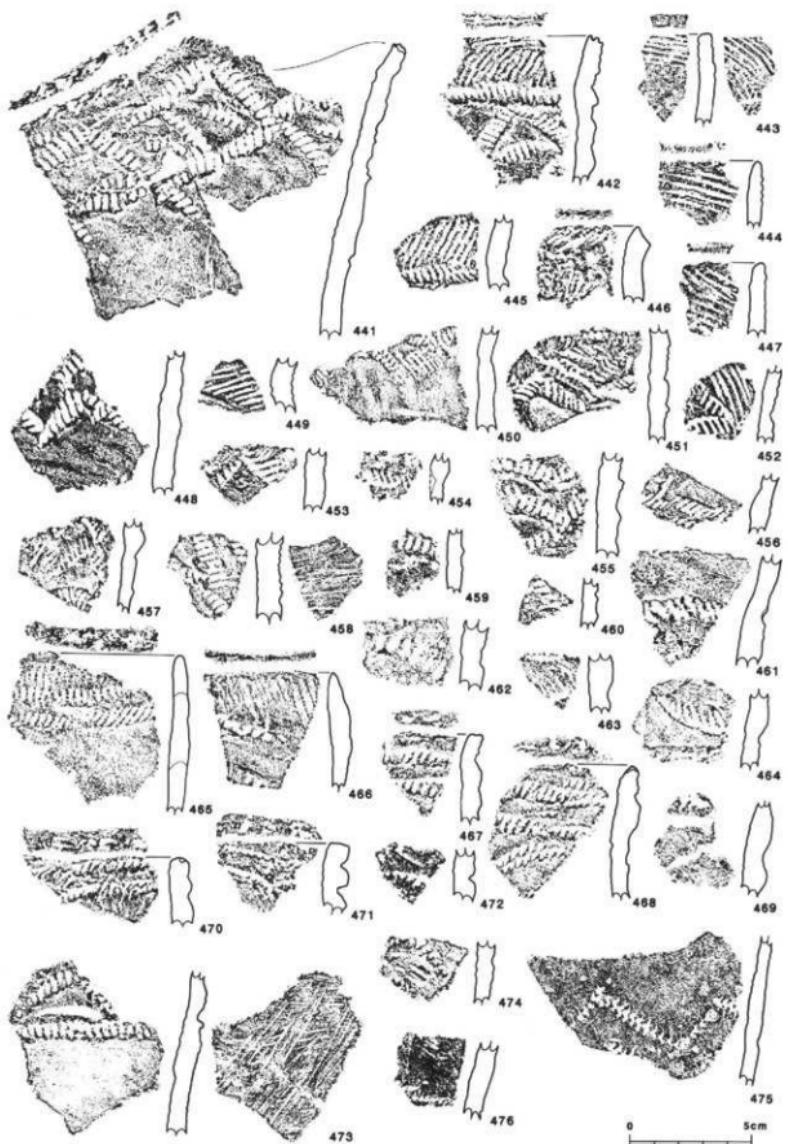
第119図 3群4類土器2



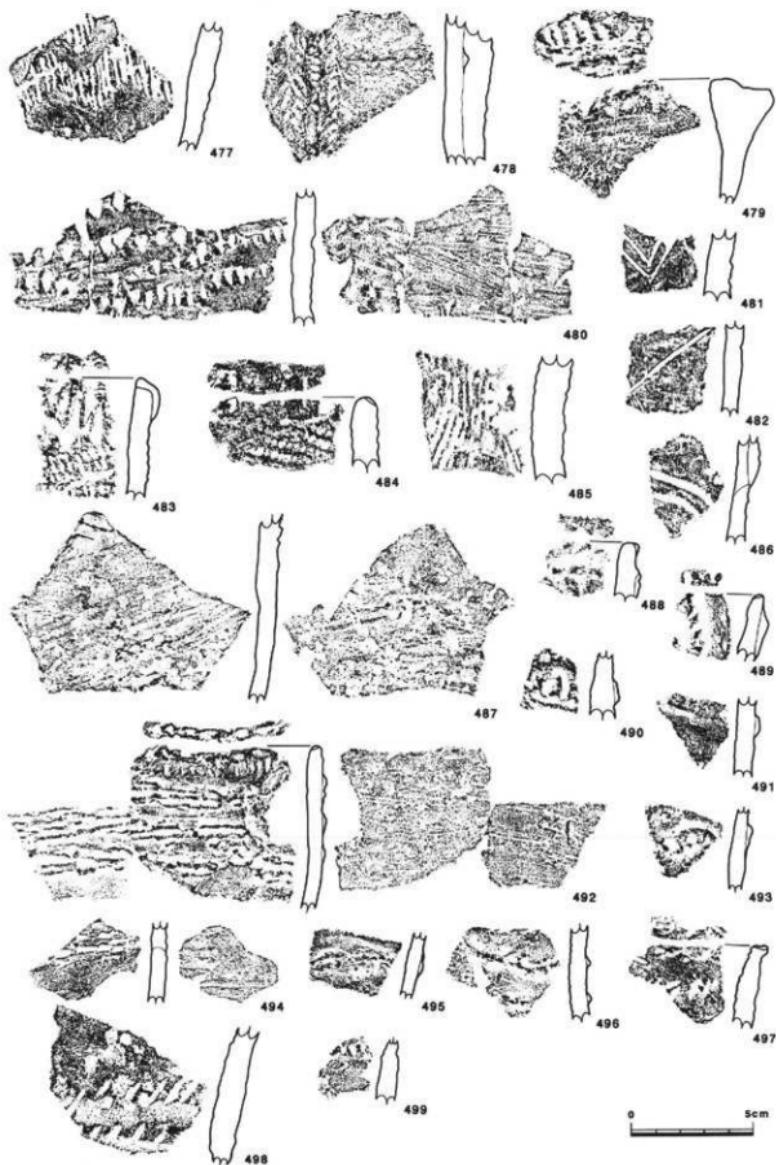
第120図 3群4類土器3



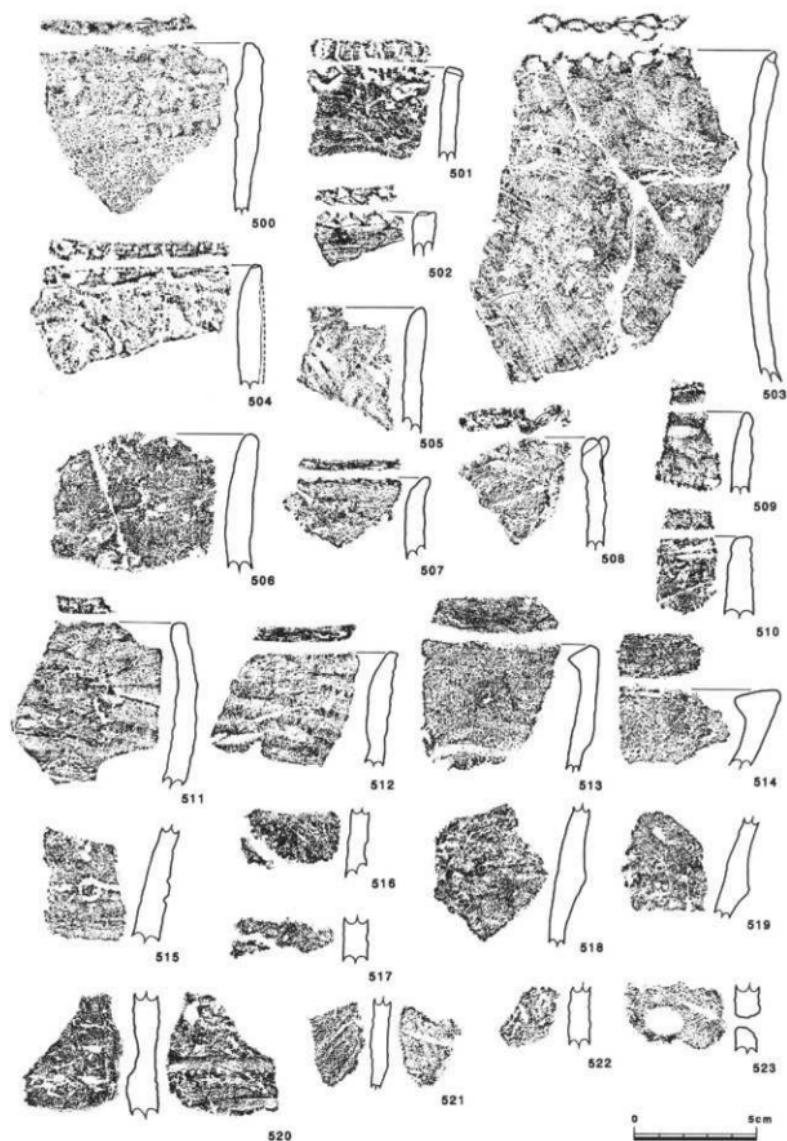
第121図 3群4類土器4・3群5類土器



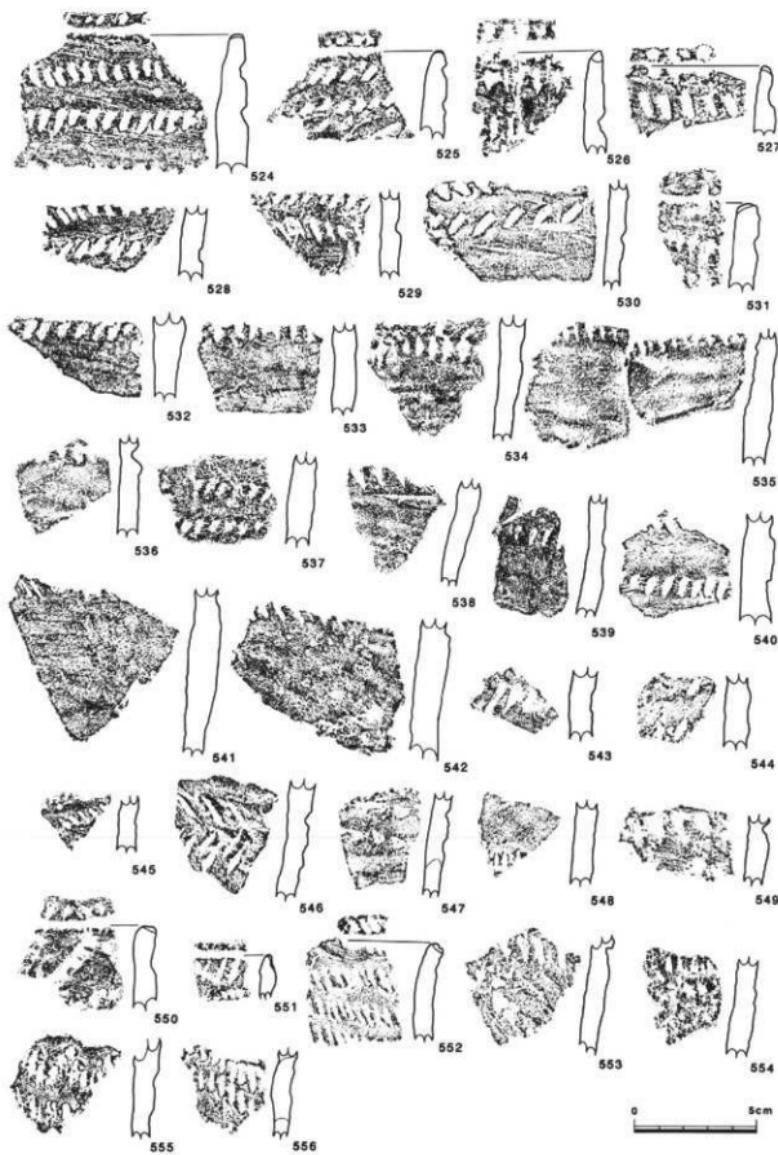
第122図 4群土器



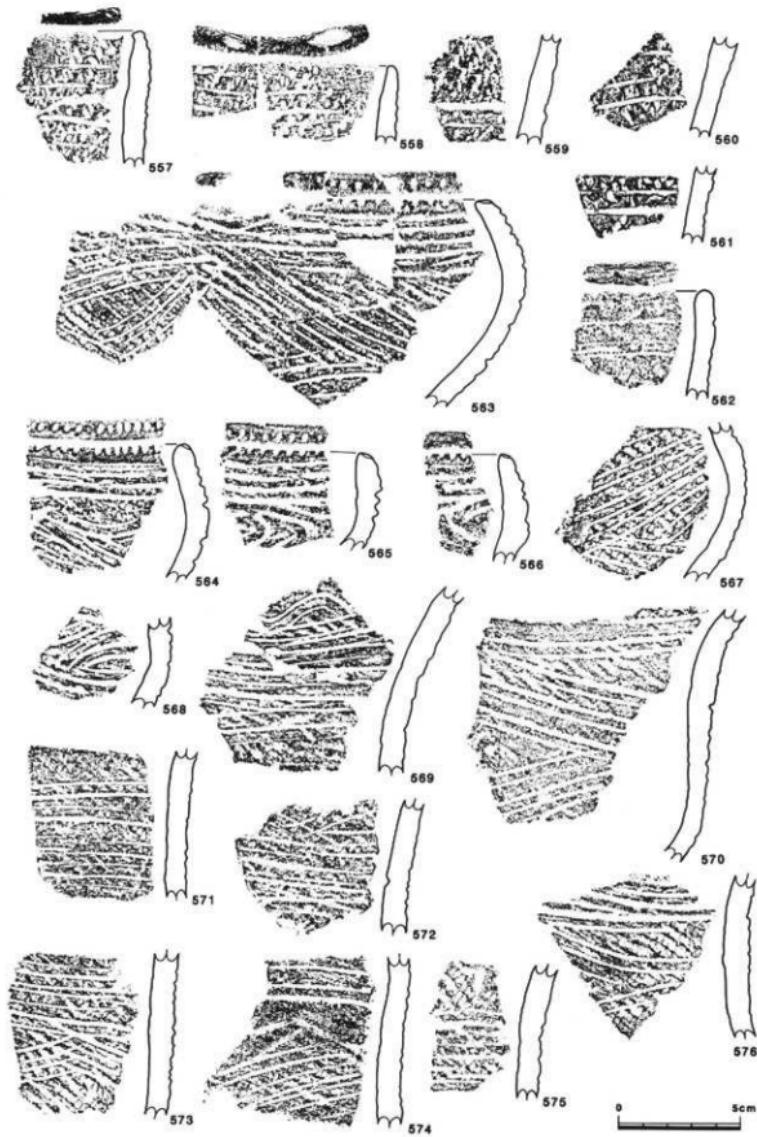
第123図 早期後半の土器 1



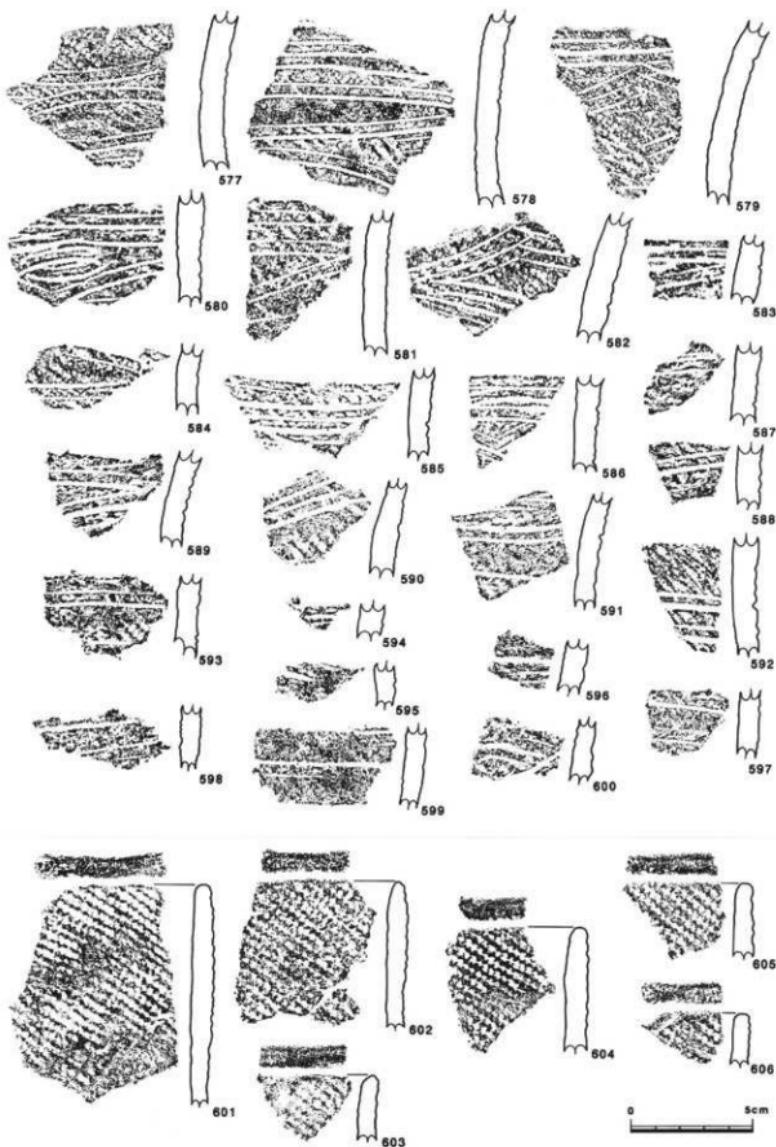
第124図 早期後半の土器2



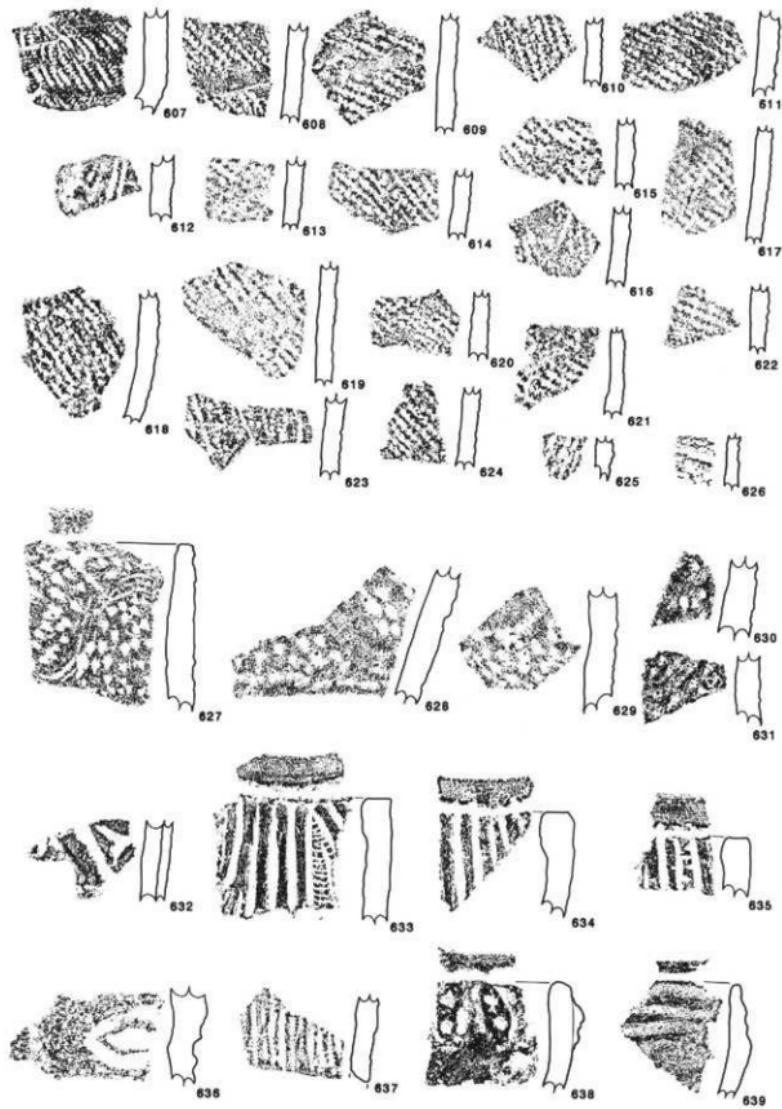
第125図 5群土器



第126図 6群A類土器1

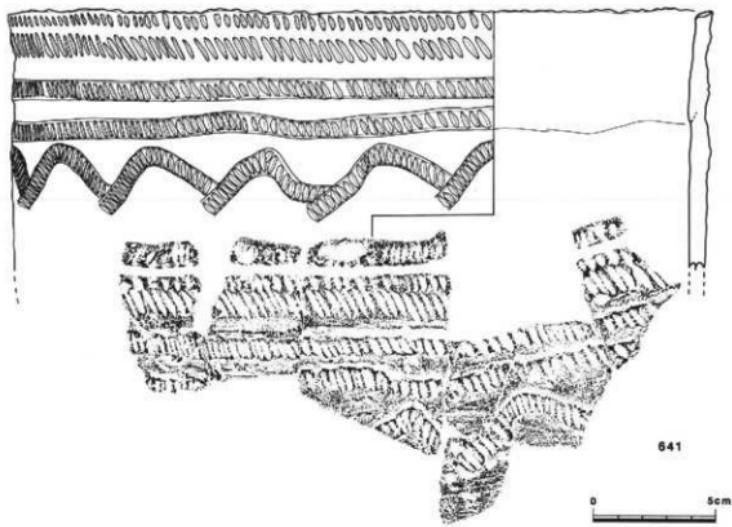
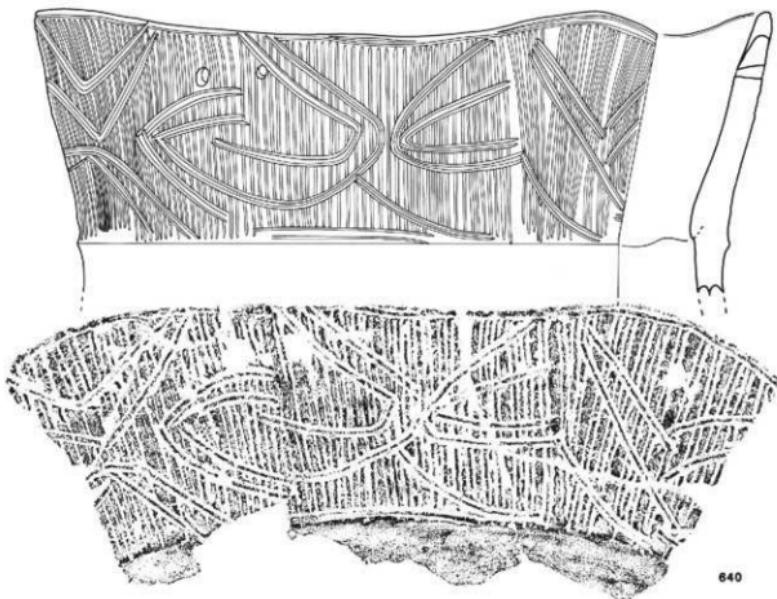


第127図 6群A類土器2・6群土器1

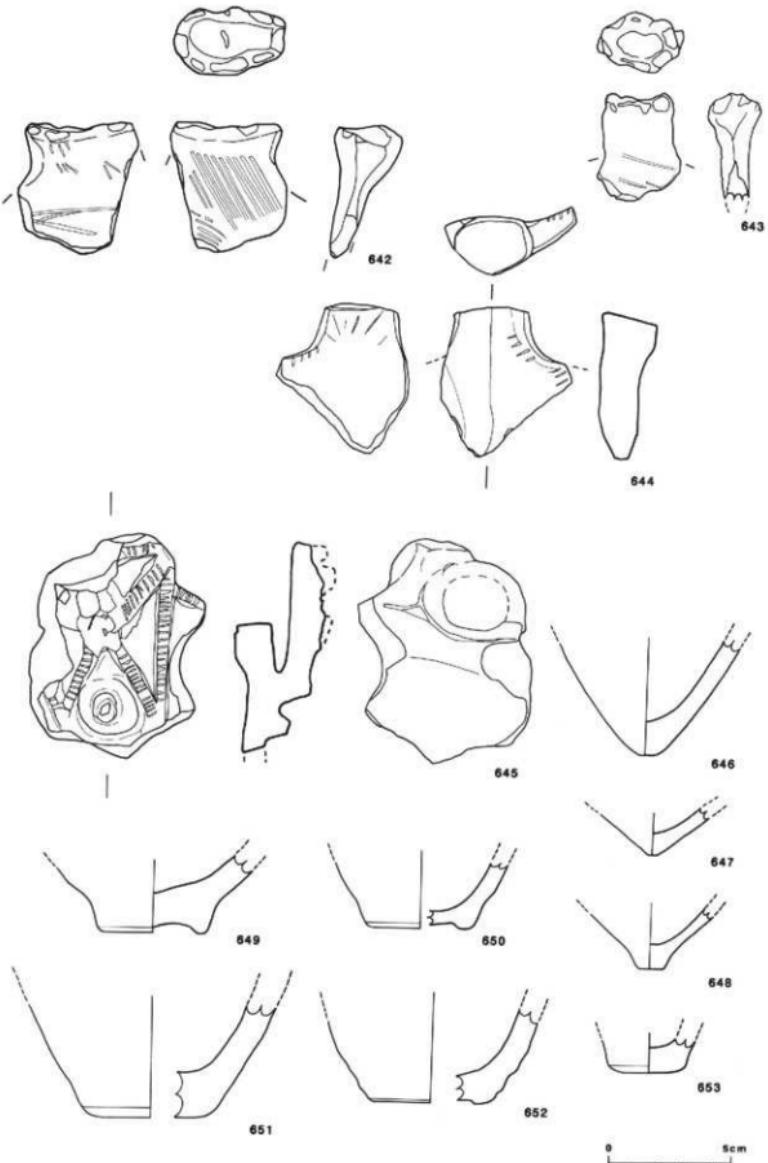


第128図 6群土器2・前期以降の土器

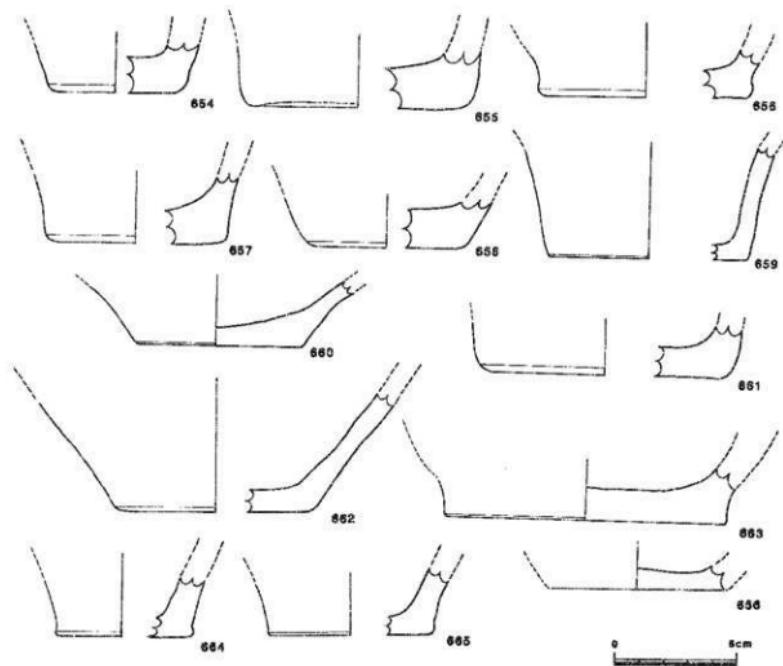
0 5cm



第129図 2群1類土器・3群4類土器

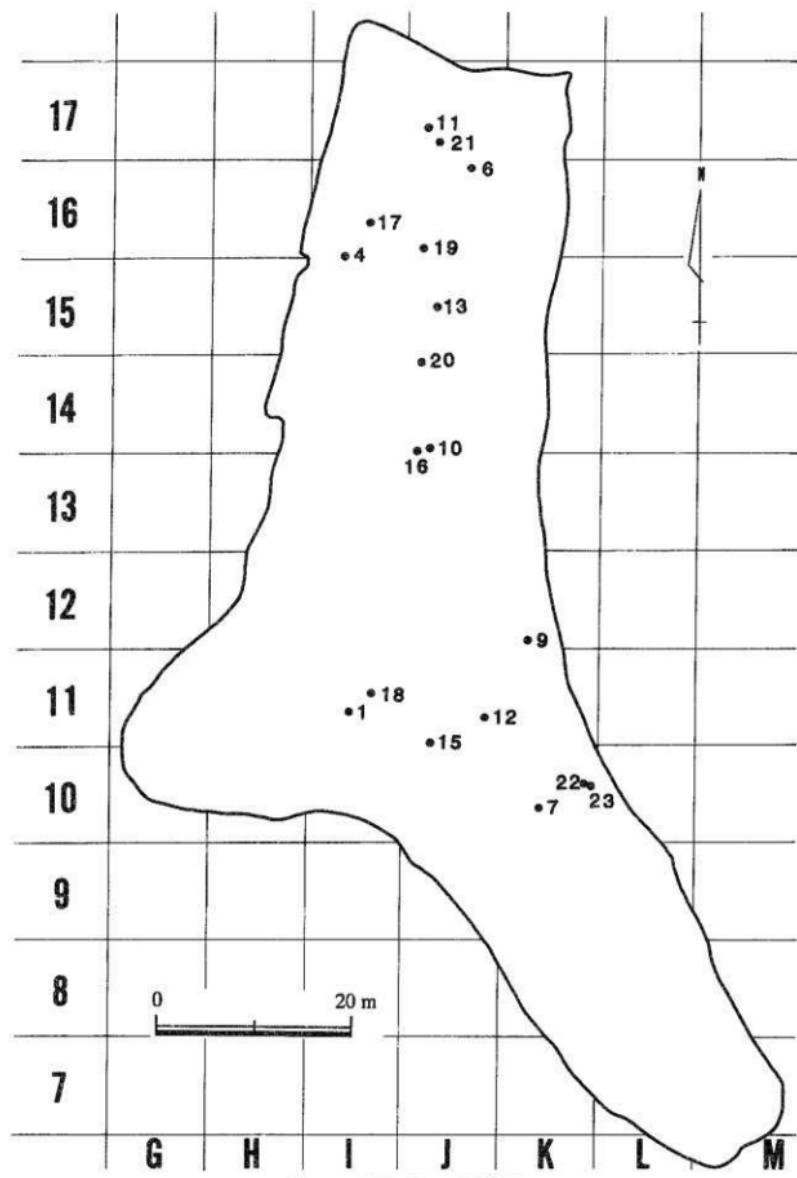


第130図 口縁突起部・底部 1



第131図 底部 2

No.	区	屏	及上No.	型式	色調	胎土	文様
661	J 16	FB a	76	底部	橙色	石英、白色粒子を含 む。	早期木。
662	I 16	FB a	138	底部	明赤褐色	石英を多く含む。	早期木。
663	J 16	FB a	12	底部	赤褐色	石英を多く、黒色粒 子を含む。	早期木。
664	表			底部	暗橙色	細かい長石、黒色粒 子を多く含む。	前期以降？
665	表			底部	暗橙色	細かい長石、黒色粒 子を多く含む。	前期以降？
666	H 11	FB a	58	底部	褐色	石英を多く、黒色粒 子を含む。	諸儀式？



第132図 休場上層の石器分布図

第V章 旧石器時代の遺構と遺物

第1節 休場層内の遺構と遺物

縄文時代の調査中に、旧石器時代と考えられる遺物が混在して確認された。そのため、調査区全域にトレレンチおよび試掘坑を掘削したが、ブロックおよび、礫群等の遺構は確認できなかった。遺物が確認された部分はそれぞれ拡張を行ってみたが、あまり広がりをみせる地点は存在しなかった。縄文時代の層より検出された遺物は、休場層が流失していた丘陵頂部付近からの流れ込みとも考えられる。

遺物の分布（第132図）

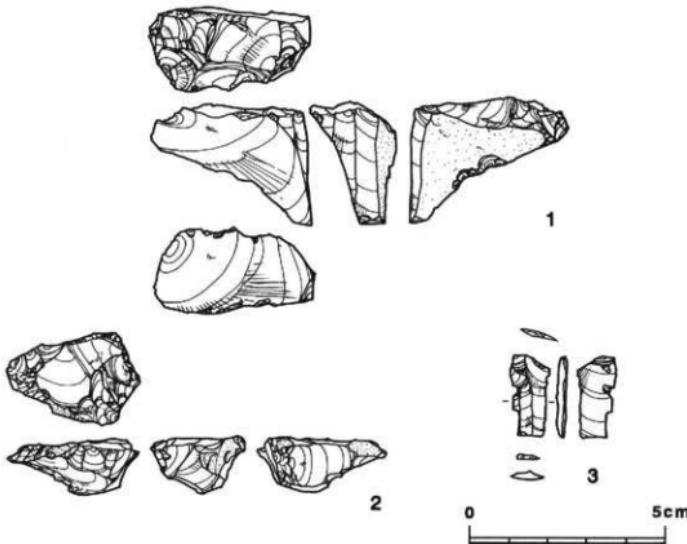
遺物の分布は、縄文時代の層から出土したものも表示した。調査区全域に、ほぼランダムに散布し、集中する傾向は見出せない。

遺物（第133図～第136図）

細石器に関係すると思われる遺物（1～3）

1～2は、野呂・休場型の細石核に関係するかもしれないと考え、呈示した。どちらも打面部を残存している。打面調整の剥離が頻繁に行われ、その打面より、連続した数条の剥離が観察される。

1は赤褐色の脈状模様をもつ漆黒の黒曜石で、打面再生剥片と思われる。取上番号 I 11 FBa 24。幅31 mm、奥行41 mm、高さ25 mm、重さ12.8 g、出土標高132.142m。



第133図 細石器

2は明灰色の細かい縞を持つ不透明の黒耀石製。最終剥離面が大きく剝り込む形で、石核全体にダメージをあたえている。細石核かどうかは疑問であるが、連続した小型の剥離痕が観察されるため、細石器関係の遺物とした。I 15区から試掘調査で出土。幅34 mm、奥行15 mm、高さ24 mm、重さ8.7 g。

3は透明な黒耀石製の細石刃と思われ、頭部、尾部ともに表面側から折断されているようである。3は表土中より出土、長さ21 mm、幅10 mm、厚さ2.5 mm、重さ0.4 g。

槍先形尖頭器（4、5）

片面加工の小型の槍先形尖頭器が2点出土している。

4は透明感のある黒耀石製で、取上番号I 16 YLu 1、長さ37 mm、幅19 mm、厚さ9 mm、重さ3.4 g、出土標高128.975m、長泉町八分平遺跡の石器群に類似するものと思われる。

5は白斑、気泡の多い灰黒色の黒耀石製で、表土より出土。長さ34.5 mm、幅22 mm、厚さ10 mm、重さ4.8 g。横長の剥片の周囲に調整が加えられており、尖頭器の未製品かもしれない。縄文時代の遺物の可能性もある。

ナイフ形石器（6～10）

すべて二側縁加工のナイフ形石器である。6～9のナイフ形石器は、やや幅広の縦長剥片素材を、打痕を削除後、主軸を若干斜めに使用し、刃部を形成させている。時期的には高尾編年（高尾1994）尾上イラウネ亞段階に相当すると考えられる。

6は透明な黒耀石製で、取上番号J 16 FBb 13。長さ29.5 mm、幅16 mm、厚さ5 mm、重さ1.7 g、出土標高126.915m。

7はスリガラス状の黒耀石製で、取上番号K 10 FBb 1。長さ31.5 mm、幅18 mm、厚さ6.5 mm、重さ2.8 g、出土標高126.999m。先端部を欠損している。

8は黒色縞状の模様を持つ黒耀石製で、J 12の試掘坑より出土。長さ27.5 mm、幅16.5 mm、厚さ8 mm、重さ2.8 g。先端部を欠損している。

9は、漆黒の黒耀石製で、取上番号K 12 FBa 3。長さ15.8 mm、幅15.1 mm、厚さ3.7 mm、重さ0.8 g、出土標高127.215m。ナイフ形石器の基部であるが、折断面から二次的な加工が施されている。

10は、分厚い縦長剥片を素材とする、断面三角形の二側縁加工のナイフ形石器である。打面を遣し、プランディングはやや鋸歯縁状になる。漆黒の黒耀石製で、11の台形石器と同一母岩と考えられる。11とともに休場上層より検出されたが、第0黑色帯中の石器群に類似する点も多い。取上番号J 14 YLu 1。長さ41 mm、幅20.5 mm、厚さ16.5 mm、重さ9.6 g、出土標高127.875m。

台形石器（11～13）

幅広貝殻状の剥片を素材とし、剥片縁辺を直刃とした石器を台形石器とした。

11は分厚い剥片を素材とし、平坦剥離状の刃溝加工を行っている。漆黒の黒耀石製で、10と同一母岩と考えられる。取上番号J 17 YLu 1。長さ36 mm、幅22.5 mm、厚さ7 mm、重さ8 g、出土標高127.311m。

12は剥片の打面部を遣し、その打面を右側縁とし、左側縁部は折り取ったあとで上下から対向的にプランディングを施して、台形石器の形態を作っている。縞状の黒色部を持つ黒耀石製で、刃部に、使用痕と思われる微細な剥離痕が多く観察される。取上番号J 11 FBa 33。長さ22.5 mm、幅19 mm、厚さ9 mm、重さ1.8 g、出土標高128.27 m。

13は灰色の黒耀石製で、礫面を残す貝殻状の剥片の左右縁辺に、非常に細かい剥離を施して台形石器

を形作っている。ほとんど剥片の形態を変化させていない。長さ24.5 mm、幅21.2 mm、厚さ7.6 mm、重さ2.9 g、出土標高127.988m。

攝 器 (14)

14は、黒色緻密安山岩製の縦長剥片の末端部に、刃部を形成した攝器である。表土中より検出されたため、時期は不明だが、形態から旧石器時代遺物とした。長さ58 mm、幅36 mm、厚さ17 mm、重さ25 g。

石刃状剥片 (15~18)

石刃状の剥片を出土層位に間わらず抽出した。

15はざらつき感のある黒耀石製で、頭部(打点部)が折り取られている。取上番号J 11 FBa 9。長さ30 mm、幅16 mm、厚さ6.5 mm、重さ1.9 g、出土標高129.815m。

16は頁岩製。取上番号J 14 YLu 1 b。長さ55 mm、幅25 mm、厚さ9.5 mm、重さ8.9 g、出土標高128.101m。風化が著しい。

17は気泡の多い黒色緻密安山岩製。取上番号I 16 FBa 49。長さ42 mm、幅20 mm、厚さ10 mm、重さ4.9 g、出土標高128.873m。

18は、ざらつき感のあるやや赤みがかった黒耀石製。取上番号I 11 FBa 11。長さ49.5 mm、幅22 mm、厚さ9.5 mm、重さ6.2 g、出土標高131.477m。

剥 片 (19~21)

休場層から出土した剥片を呈示する。

19は風化の進んだ頁岩製。打面再生剥片かもしれない。取上番号J 16 YLu 1。長さ38.5 mm、幅31 mm、厚さ19 mm、重さ15.9 g、出土標高129.656m。

20は緑白色の珪岩製。取上番号I 14 YLu 2。長さ34.5 mm、幅33 mm、厚さ6 mm、重さ4.5 g、出土標高127.622m。

21は半透明の黒耀石製。取上番号J 17 YLu 2。長さ25.5 mm、幅35.5 mm、厚さ10.5 mm、重さ7.2 g、出土標高127.439m。

蔽 石 (22、23)

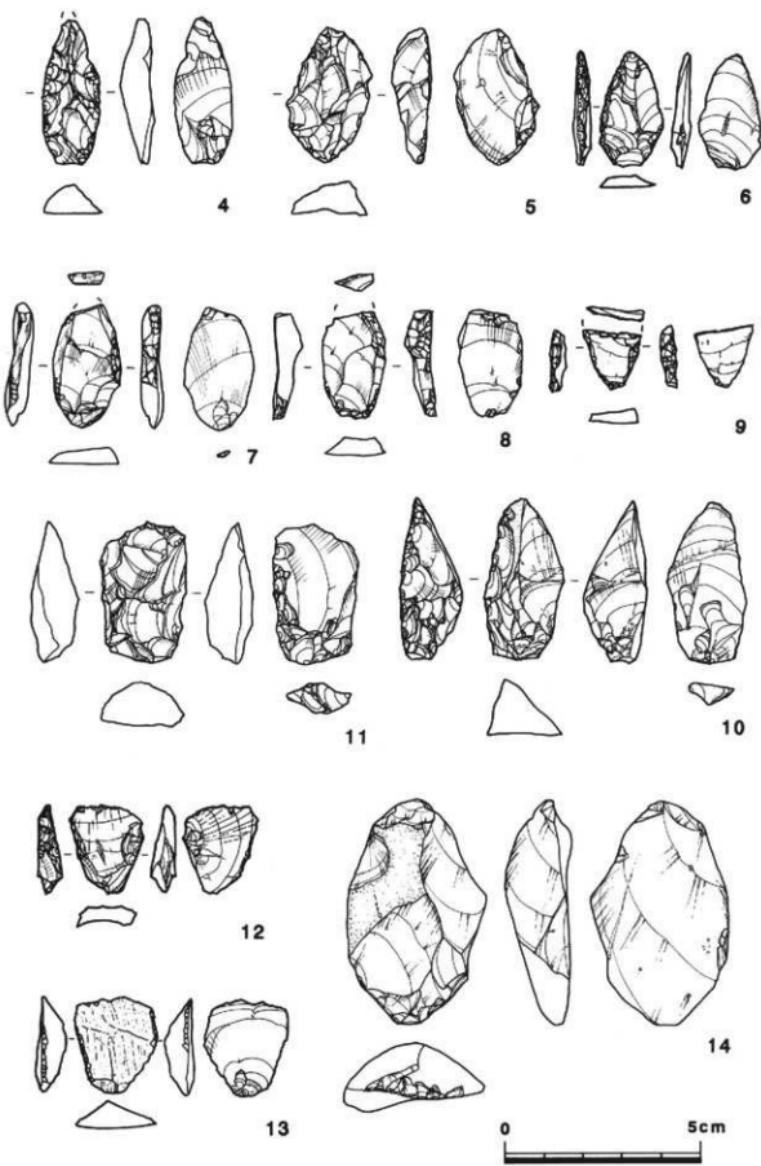
休場層から出土した蔽石は2点である。この2点は数cmしか離れずに出土している。

22は鄭石安山岩製。被熱による亀裂がほぼ全体におよんでいる。上下および正面に敲打痕が著しい。長さ118 mm、幅94.5 mm、厚さ79 mm、重さ1095.8 g、出土標高125.362m。

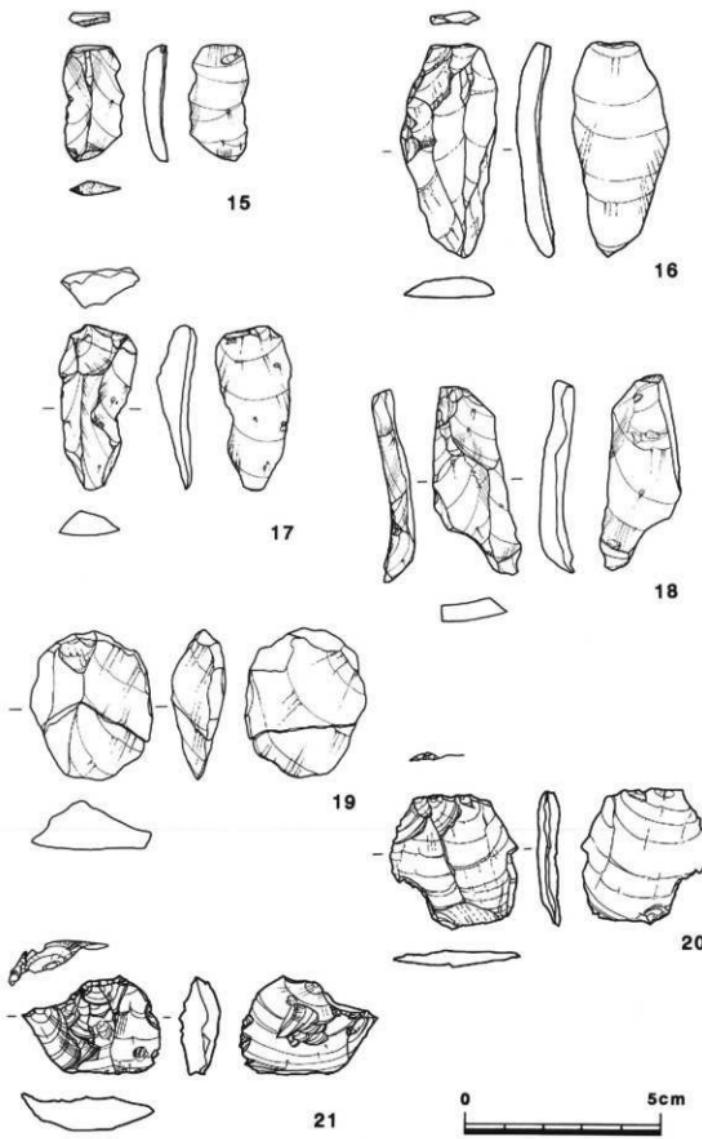
23は玄武岩製。敲打痕は一端のみ。長さ166 mm、幅88 mm、厚さ69 mm、重さ1650 g、標高125.207 m。

以上、休場層内に文化層をもつと考えられる遺物の多くは、富士黒土層から検出されている。遺跡の立地が斜面ということから、かなりの遺物が原位置を保っていないと考えられる。

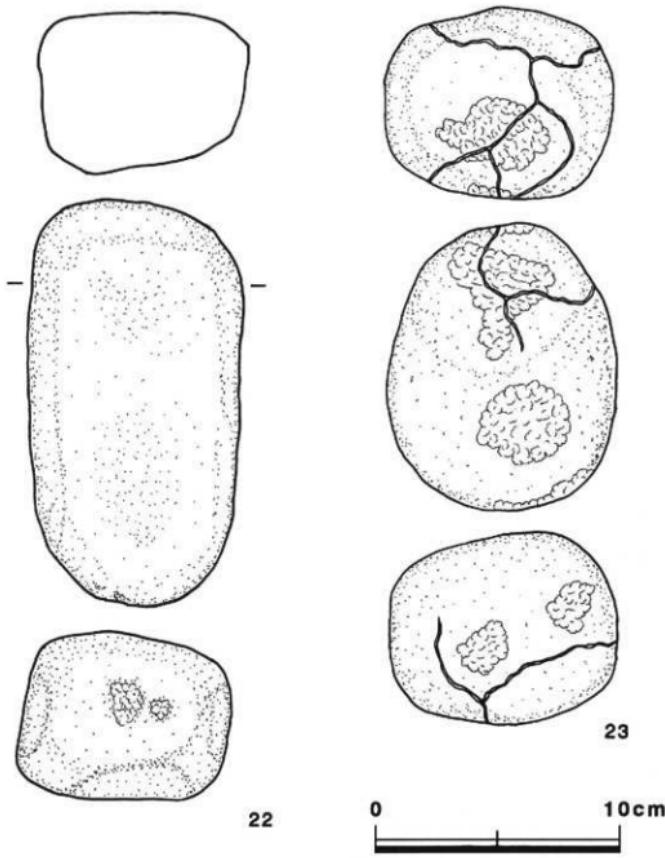
特に遺跡立地上、好適地と考えられる丘陵頂部は、すでに休場層を含め、多くの層が流出してしまっていた。表土下、中部ローム層が露出している部分もあり、この地点から流入している可能性も高い。



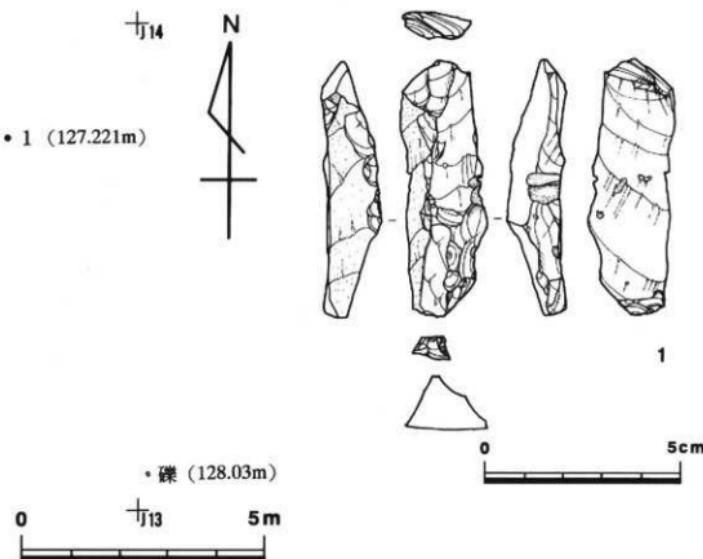
第134図 休場上層の石器 1



第135図 休場上層の石器2



第136図 休場上層の石器 3



第137図 第I 黒色帶中の分布と石器

第2節 第I 色帶中の遺構と遺物

遺物出土状況（第137図）

第I 黒色帶（BB I）のほぼ中位から、1点の黒耀石製の石刃と、1点の礫が出土している。出土位置は、J 13とJ 14を結ぶライン付近である。1の石刃は、ほぼ直立した形で出土した。礫は赤化していないので被熱しているかどうかは不明である。

遺 物（第137図）

1は気泡の多い、箱根産と考えられる黒耀石製の石刃で、打面部側が折れており、下端部側には数回の剥離痕が観察される。ファースト・フレイクに近いためか、左側に自然面を残し、稜調整状の剥離も行われている。全体的に厚く、第I 黒色帶中の石器群の特徴を示している。なお、図中の括弧内の数字は出土地点の標高である。

1の法量は、長さ65 mm、幅22 mm、厚さ15.5 mm、重さ18.3 g。

第3節 第Ⅱ黒色帶中の遺構と遺物

第Ⅱ黒色帶中から、礫と石器の混在したブロックが、1ヶ所検出されている。

遺構（第138図）

H14区と114区にまたがる形で、礫と石刃・石刃状剥片が混在した形のブロックが検出されている。地形は、丘陵頂部から北に下る形の尾根肩部に分布する。規模は、5m四方におさまる程度のものである。

ブロックの主体は、箱根山系の安山岩の角礫で、最東端の比較的大きい礫以外はすべて赤化している。この最東端の礫は、やや青がかかった安山岩円礫で、他の礫とは石質が異なっている。

ブロックの礫は被熱によって破碎している状況が観察されるが、接合することはできなかった。このブロックからは、碎片や剥片剥離作業に伴う剥片等がみられなかったので、ブロック内では石器製作は行われていないと考えられる。

遺物（第138図）

遺物は石刃2点と石刃状剥片1点が検出されている。3点ともに富士川流域から東駿河湾沿岸一帯で採集される貞岩を素材としている。

この貞岩は風化が著しく、母岩別の分類は不可能に近いが、風化の度合いや、剥片剥離の状況からみて、同一石核から剥離されたものと考えてよいかもしれない。

1は、長さ69.5mm、幅28mm、厚さ10mm、重さ12.9g。

2は、長さ71mm、幅17mm、厚さ7.5mm、重さ6.3g。

3は、石刃状剥片でしたが、同一石核から連続的に剥離されたものならば、石刃として考えてよいと思われる。長さ69mm、幅44mm、厚さ22.5mm、重さ44g。

第4節 第Ⅲスコリア帶黒色帶1下面検出の遺構

土坑（第139図～第142図）

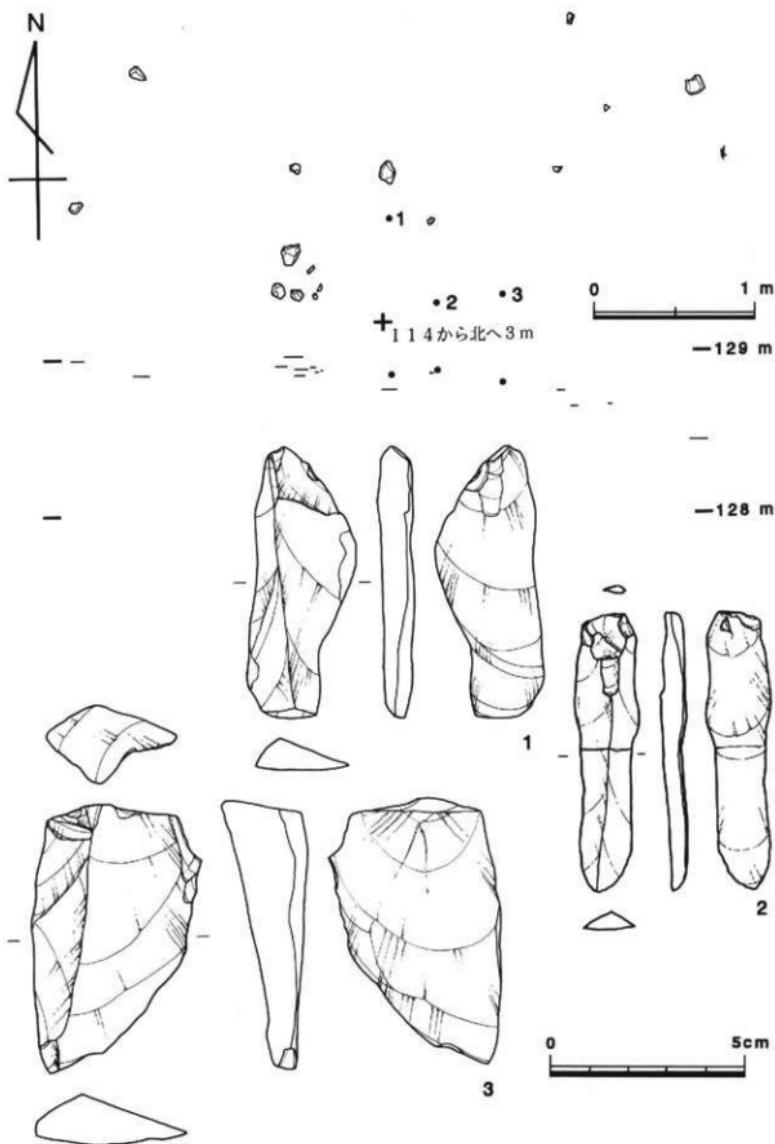
土層確認のため、14列のトレンチを中部ロームまで掘削中、第Ⅲスコリア帶下部で、土坑1を確認した。確認状況は黒色土が正円形に表れる形である。

類例として、山田川の谷をはさんで南側の尾根上に立地する初音ヶ原遺跡が知られていたので、列状に検出されることを想定して、第Ⅲスコリア帶黒色帶1下面で、周囲に調査区を拡張した。その結果、土坑1から南西6mに土坑2を検出した。

土坑1は、トレンチ内で第Ⅲスコリア帶の下部で確認されたため、遺構の上部がかなり失われている。それゆえ、本来はより大きく、深かったものと思われる。覆土は、最下部に粘性のある漆黒土が堆積し、中间部は遺構の壁の崩落土と流入土、上部にはレンズ状堆積した自然埋没土から成っているため、長時間開口しながら、徐々に埋没していく経過が想定できる。計測値としては、長径1.06m、短径0.92m、深さ1.085mを計る。

土坑2は、第Ⅲスコリア帶黒色帶1下面を、平面的に拡張している途中で確認した。それゆえ土坑1に比べて、より原型に近いものと思われる。覆土は、ほぼ土坑1に類似し、自然堆積と考えられる。長径、短径とともに1.35m、深さ1.3～1.65mである。

2基の土坑は、第Ⅲスコリア帶黒色帶1下面で計測した等高線図からもわかるように、斜度12度の斜



第138図 第Ⅱ黒色帶中の分布と石器

面に形成されている。これは、初音ヶ原遺跡群でみられた、広く平らな台地を直線上にならぶ例とは異なっている。

同時期、同形態の土坑であるが、立地がかなり違うので、初音ヶ原遺跡群で一般に認識された立地以外の場所も、調査の対象としてこれから考えなければならない。現在、試掘調査中の加茂ノ洞B遺跡においても、谷地形中から同様な土坑が検出されており、さらに異なった立地からも検出されはじめている。のことからも、遺物の有無だけでなく、平面的な、造構確認のための確認調査の必要性が高くなっている。

その他の遺構（第143図）

土坑1の検出によって、第Ⅲ黒色帯～第Ⅲスコリア帶黒色帯1中に文化層が存在する可能性が高くなつたため、第Ⅲ黒色帯上部より平面的に精査していった。この結果、不整形な落ち込み（土坑3）と炭化物集中域を検出した。

土坑3は第Ⅲスコリア帶黒色帯1下面を精査中に確認した。黄褐色ローム面との境界部は自然地形と考えられる凹凸がみられ、それらすべてがみられなくなるまで削平した時点でのものである。それゆえ、自然地形によるもの可能性も高い。

炭化物集中域は第Ⅲスコリア帶黒色帯1中より検出され、その下面の黄褐色ローム層に入り込む形で検出された。焼土の分布は無く、石器類も伴出していない。

なお、図143は分布域のもっとも広くなった時点での分布であり、断面図はその時点で半裁断面での実測であるので、すべての炭化物を示しているものではないことを了承されたい。

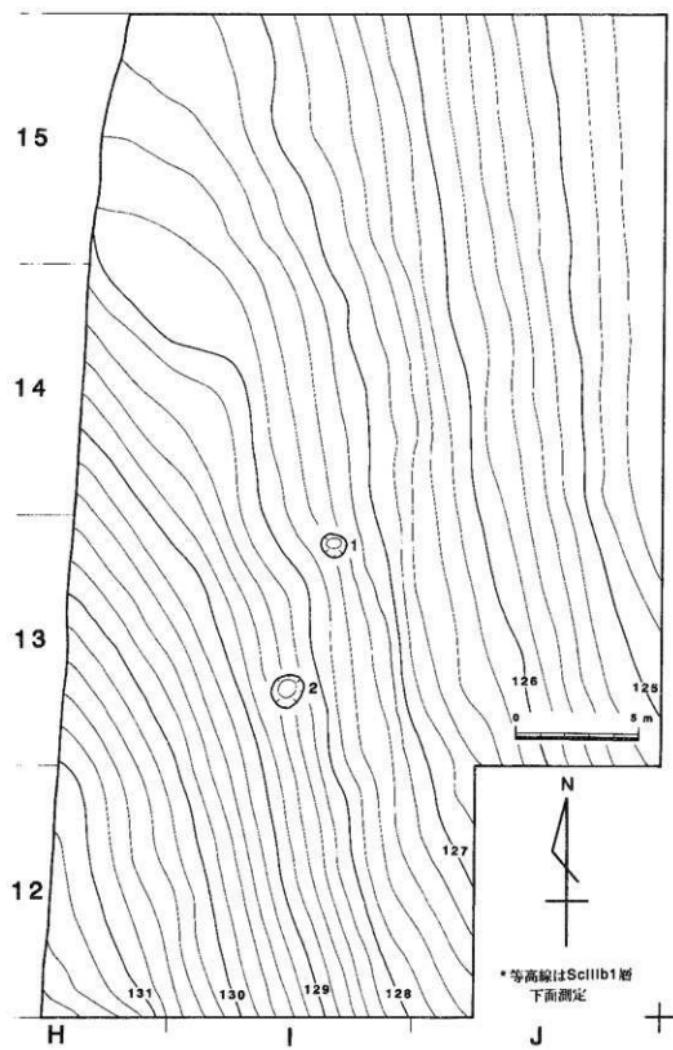
炭化物集中域の形成された層位は第Ⅲスコリア帶黒色帯1の下部であり、土坑が構築されたのは、覆土の観察から、第Ⅲスコリア帶黒色帯1中から第Ⅲ黒色帯にかけてと考えられるので、同時に存在していないかったと考えられる。この炭化物集中域が人工的なものか自然的なものは、伴出する遺物が存在しないため不明といわざるをえない。

第5節 中部ローム層内出土の遺物（第144図）

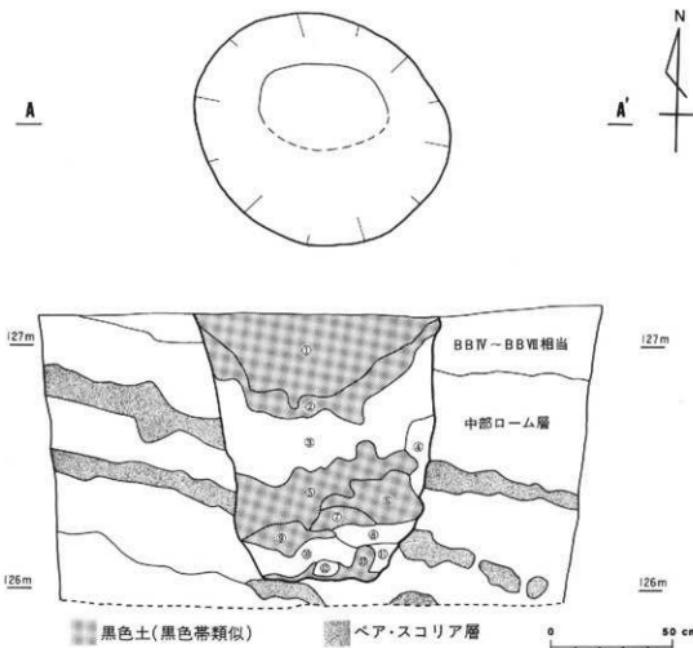
中部ローム層の上位に、ペア・スコリア層と呼ばれる赤褐色のスコリア層が3層平行して確認される。この3層の上から2番目と3番目のスコリア層の間のローム層中から、粗粒安山岩の剥片が、1点出土している。

この層の年代は、後期旧石器時代の下限をこえる3万年以前の層位であり、時期的には中期旧石器時代にあたるが、箱根・愛鷹地域では類例が見いだせない。この安山岩は箱根の山体を形成するものと同じであり、一次加工の跡も観察されないので、人工の遺物かどうかは判断がつかない。それゆえ、ここでは参考資料として提示したいと思う。

出土区は113区のトレンチ中で、剥片の法量は、長さ28.9 mm、幅29.8 mm、厚さ8.2 mm、重さ7.1 gを測る。

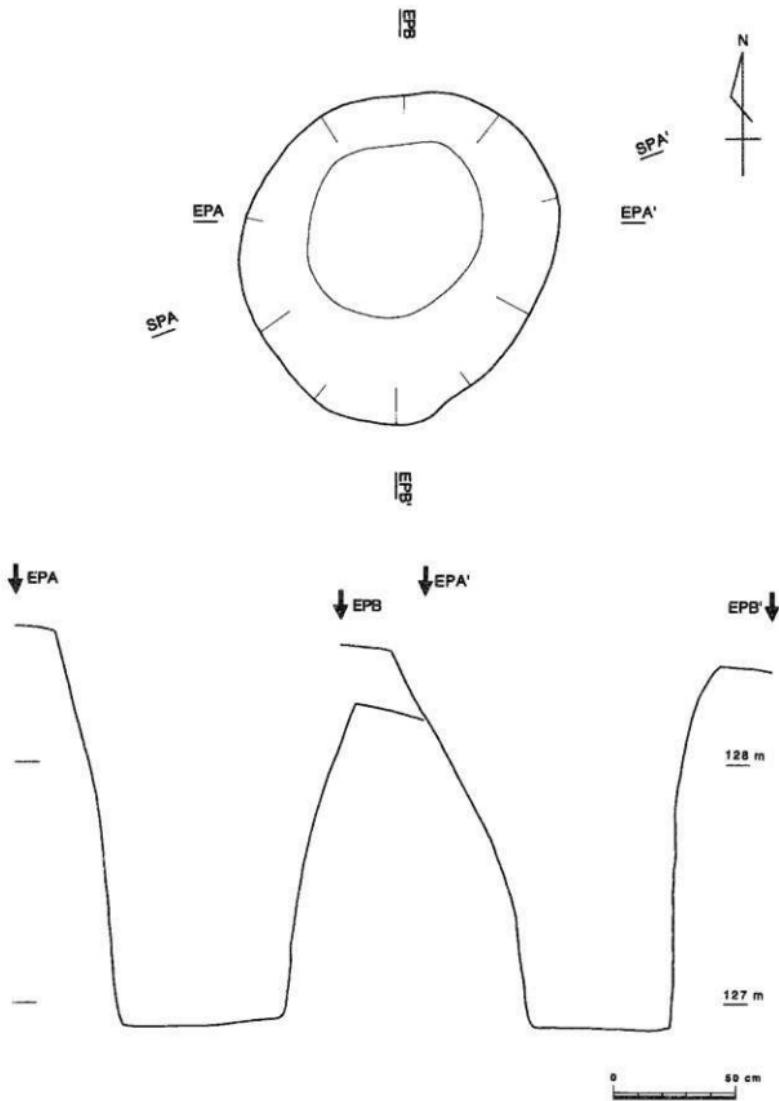


第139図 第Ⅲスコリア帯黒色帯1下面検出土坑配置図

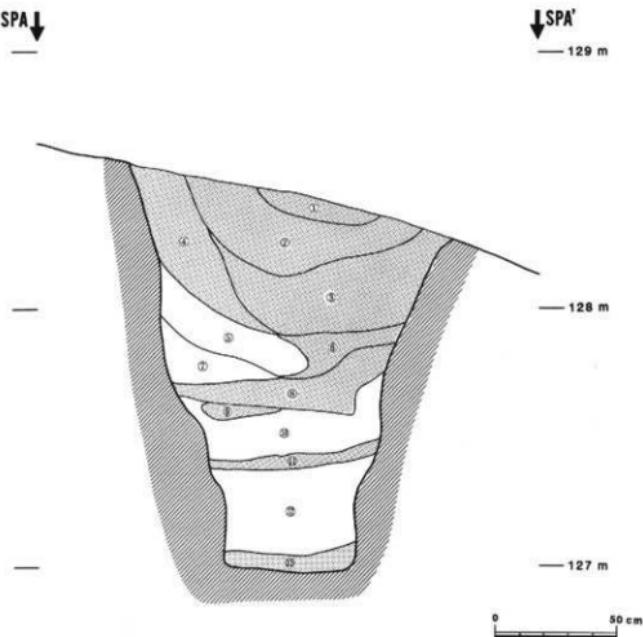


- ① 黒褐色スコリア層 径2~7mmの砂やや紫かかった黒色スコリアより構成される。少量の径2~6mmの青灰色スコリアを含む。BBⅣに相当するか。
- ② 黒褐色スコリア層 ①と同じ構成に青褐色土が混在する。
- ③ 増強褐色スコリア質層 径2~15mmの中や紫かかった黒色スコリアと褐色スコリアを多く含んでいる。径5mmの青灰色スコリアも少しある。
- ④ 黄褐色ローム層 径1~15mmの赤褐色スコリア（ペア・スコリア？）を含む。壁面の中部ロームの崩落？
- ⑤ 黑褐色スコリア層 径3~10mmのやや紫かかった黒色スコリアと、径2~7mm褐色スコリアから構成される。黄褐色土との混土でやや混ざる。
- ⑥ 黑褐色スコリア層 径2~5mmの橙色スコリアの間を黒褐色土が埋める構造。
- ⑦ 黒色硬質スコリア質層 径2~5mmの橙、黄、茶色のスコリアを多く含み、全体的に黒褐色を呈す。
- ⑧ 黄褐色ローム層 径2~4mmの橙、赤褐色スコリアを少量含む。中部ロームの崩落土？
- ⑨ 黑褐色スコリア層 ⑩に近似。
- ⑩ 增強褐色ローム層 ⑪に類似するが、やや暗く灰褐色を帯びる。また、スコリア含有量も多く、径2~4mmの黑色スコリアも少量含む。
- ⑪ 黄褐色ロームと赤褐色スコリア（ペア・スコリア2番目）の復土層
- ⑫ 黑褐色スコリア質層 ⑪に類似するが、橙、赤褐色スコリアの含有量が多い。
- ⑬ 黑色スコリア質層 径2~4mmの橙色、赤褐色、黄色のスコリアを多く含む。⑭に類似。

第140図 第Ⅲスコリア帯黒色帶1下面検出土坑1

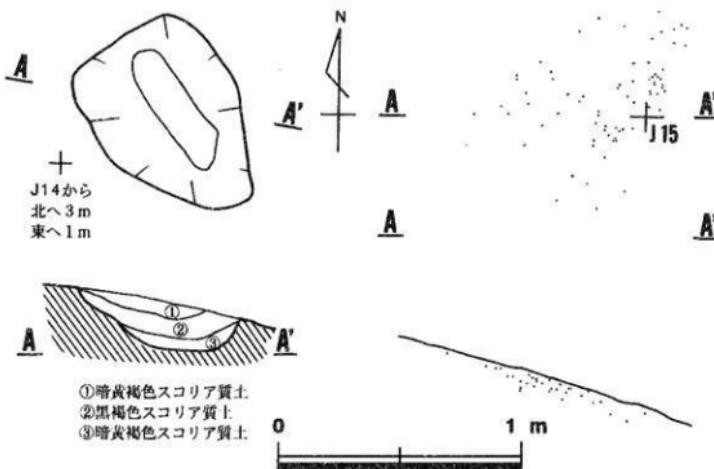


第141図 第IIIスコリア帯黒色帶1下面検出土坑2

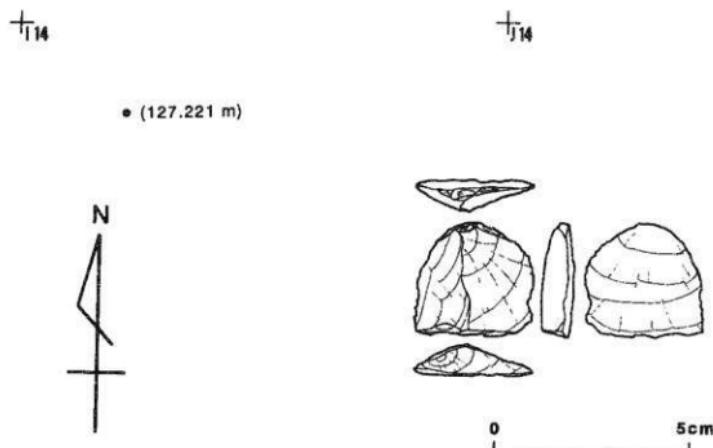


- ① 暗褐色スコリア質層 径2~4 mmの褐色スコリアを主体に含み、少量の白色バミス、径1 mmの青灰色スコリアも含む。
- ② 黒褐色スコリア質層 径2~4 mmの褐色スコリアを含む。
- ③ 暗褐色スコリア質層 径2~4 mmの褐色スコリアを含む。ややローム状。
- ④ 暗褐色ローム層 径2~4 mmの褐色スコリアを含む。黄褐色ロームと黒褐色土との混土状。
- ⑤ 黑褐色ローム層 径3~5 mmの黑色スコリアを含み、少量の径2~3 mmの褐色スコリアを含む。
- ⑥ 暗褐色スコリア質層 ⑤と類似するが、やや明るい。
- ⑦ 黄褐色ローム層 ⑤と類似するが、スコリアの含有量が少ない。
- ⑧ 黑褐色スコリア質層 径3~5 mmの褐色スコリアを含む。
- ⑨ 暗褐色ローム層
- ⑩ 黑褐色ローム層 径2~4 mmの赤褐色スコリア（ペア・スコリア1番目？）を含み、少量の径2~3 mm黑色スコリアを含む。部分的に灰褐色土を含む。
- ⑪ 暗褐色ローム層 径2~4 mmの赤褐色スコリアを少量含む。
- ⑫ 黑褐色ローム層 黒色土が、現在している。

第142図 第IIIスコリア帯黒色帶1下面検出土坑2土層



第143図 第Ⅲスコリア帯黒色帶1下面検出の遺構（土坑・炭化物集中域）



第144図 中部ローム層出土の遺物

第VI章 まとめ

焼場遺跡A地点の調査は、東駿河湾環状道路建設に伴う調査としては、最初のものである。全国的にみても、旧石器時代から縄文時代にかけて有数の遺跡集中地域である、箱根西麓・愛鷹南麓をほぼ横断する調査となることから、今後の調査の進展によって、静岡県東部地域の歴史を知るうえで、多大な資料蓄積になると思われる。この資料蓄積の第一歩として、焼場遺跡A地点の近世から旧石器時代までの遺構、遺物の若干のまとめをしておきたい。

平安末～近世初頭

この時期の遺構、遺物は表土中から検出された。焼場遺跡の現況は、雜木林の繁茂した斜面であったことから、多くは木根中から出土している。遺構としては、土坑やピット類が多く、その中に埴土や骨片が検出されるものもあることから、遺跡名の名称に関係するものと考えている。しかし、土坑内より時期が限定できる遺物が検出されていないので、存続期間は不明といわざるをえない。ただし、一部の土坑に関しては、「平安・鎌倉古道」と考えられる道路状遺構硬質部よりも下層に存在したことから、かなり古い時期（中世？）まで、さかのぼれる可能性があると考えられる。

とくに注目される遺構として、道路状遺構がある。詳細は第III章を参照されたいが、踏み固められた帯状の硬質部分と、その下層に2条の細い溝が平行して走行している。

硬質部が溝の上部を覆うことから、道路が計画されて最初に溝が掘削され、それが埋没した後も道路として使用されていたことが観察される。溝1の上部は硬質部分のほぼ中央にあたることから、溝1が最初に掘削されて、その後、溝2が掘削されていることが想定される。現在、調査区西側を市道山田20号線に削平されてしまっているが、本来は、この削平された部分に道路状遺構の西側側溝が存在したのではないだろうか。

この道路状遺構は最初に溝が掘削されていることから、計画的に設定されたものであることがわかる。表土から出土している土器の年代は12世紀末から19世紀までであるが、特に16世紀から18世紀初めのものが多い。この時期に当たる計画的な道路は、古代の足柄路が衰退した後の、箱根路である「平安・鎌倉古道」が想定できる。

加藤学園考古学研究所によって、元山中遺跡で検出された「平安・鎌倉古道」と推定された道路状遺構は、休場ローム層を大きく掘り窪めた構造をしており、焼場遺跡の場合と異なっている。しかし、「三島市誌」によれば、鎌倉後期に鎌倉へと開かれた新道の推定ルートは、この両遺跡を通っており、出土した遺物からも、両者の遺構はこの「平安・鎌倉古道」と考えてもよいのではないだろうか。

この道路は、16世紀代の輸入陶器類が検出されることから、近世東海道（箱根往還）の整備直前まで、東海と関東を結ぶ重要な幹線として利用されていたらしいことが窺える。

縄文時代

縄文時代の遺構、遺物は、草創期の有舌尖頭器から後期の土器まであるが、ここでは、もっとも多く出土した早期から前期について考察してみたい。

縄文時代早期から前期にかけての遺物は、中央の丘陵斜面を中心に、ほぼ全域にわたって分布している。その状況は、同じ層位から、あらゆる種類の石器やいろいろな型式の土器が混在して出土しているようと思えた。

調査中の感覚としては、北に向かうほど土器の型式が新しくなるように感じていた。そこで、このよ

うな傾向をつかむため、各区ごとに石器の種類と土器型式の頻度グラフを作成してみることとした。グラフの見方は、底面がグリッド配置、Z軸方向が個数である。

石鎚（第145図1）は、おもに調査区の北側に多く分布し、南側になると散漫に分布するようになる。楔形石器（第145図2）は、調査区の、ほぼ斜面中位にほぼ均等に分布するようであるが、南北二つの大きな分布域に分かれる可能性もある。

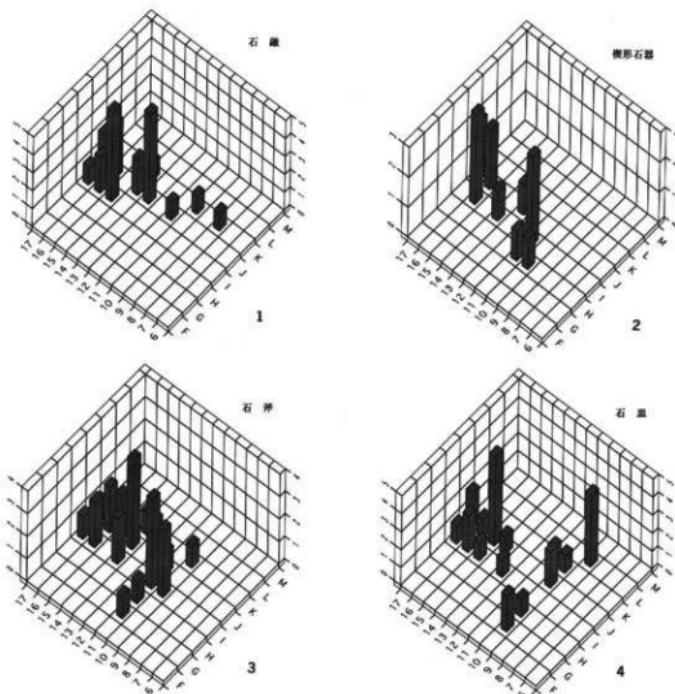
石斧（第145図3）は、ほぼ調査区に均等に分布するようであるが、J14区やI10・11区で比較的多く出土している。

石皿（第145図4）は、北側と丘陵頂部、南東部の三つの分布に分かれている。石皿というやや固定的な使用法から考えて、場の空間的な意味があるのかもしれない。

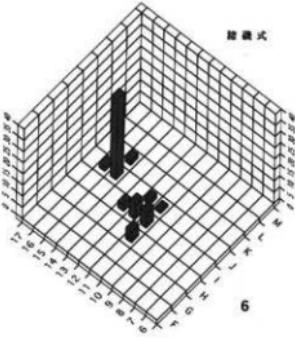
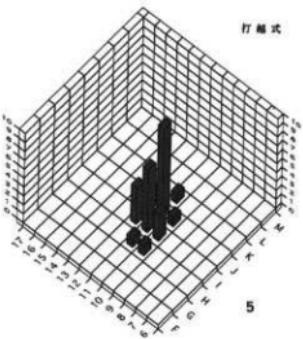
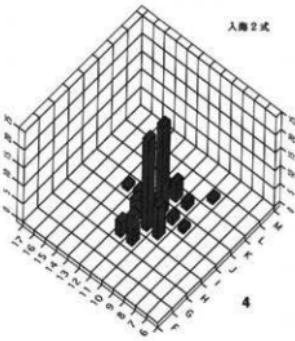
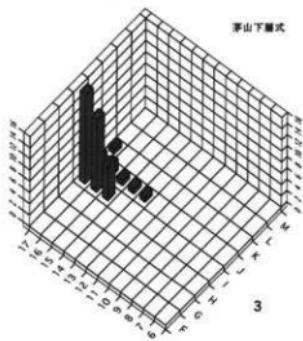
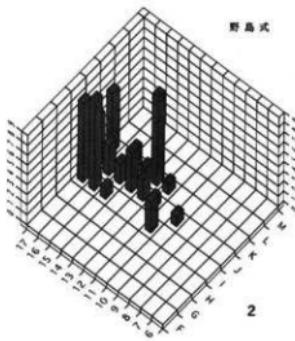
土器の分布は、統計的にグラフ化可能な6つの型式別、あるいは近接した時期ごとに、それぞれグラフ化した。

燃糸文土器と押型文土器をまとめてグラフ化している（第146図1）。丘陵部斜面と北側の2つの分布域があるが、主体はI10・11区、J11・12区である。これらの分布の差は型式差によるものかもしれない。

野島式（第146図2）は、丘陵斜面部から北端まで分布するが、K13区で突出する以外は、北端に近づくほど量が増える傾向にある。



第145図 繩文時代石器出土頻度グラフ



第146図 純文時代土器出土頻度グラフ

茅山下層式（第146図3）は、調査区北端の平坦部に分布の中心がある。野島式の傾向がより顕著に出ているともいえるが、分布の中心が、調査区外の北側丘陵部（平成5年度以降調査予定）に存在する可能性が高い。

入海2式（第146図4）は、丘陵斜面部にはほぼ集中する。

打越式（第146図5）は、入海2式とほぼ同じ分布を示し、より集中している。

諸磯式（第146図6）は、2つの分布域を示す。これは、b式の分布域が北側に集中し、縄文のみが施文された一群が丘陵斜面に集中しているからである。

グラフでの分布をみると、調査区のほぼ全域に分布していた遺物は、それぞれにある分布域をもっていることがわかる。特に土器型式ごとにその分布をみると、集中する部分に片寄りがみられる。

のことから、縄文時代には、調査区全域が均等に使用されていた訳ではなく、各時期に部分的に使用されていたことがわかる。つまり、縄文時代の各時期の部分的な活動の集積によって焼場遺跡は形成されたことになる。

石器については、石讃がほぼ野島式の分布に類似する以外は、同様の分布を示すものはない。しかし、石器ごとの分布にいくつかの片寄りがみられたので、土器型式の分布と石器の分布の片寄りを参考に、個別に観察していけば、各石器の分類が可能かもしれない。

旧石器時代

休場上層の石器群

休場上層（YL_u）に文化層をもつと考えられる旧石器時代の遺物の多くは、ナイフ形石器文化の終末期にあたるものと考えられる。富士黒土層から縄文時代の遺物と混在して検出されたものも多く、本来は、丘陵頂部付近にブロックがつくられており、それが流出してしまっていたものと思われる。

ただし、第134図10、11の石器は、形態から、第0黒色帯に文化層をもつ石器群である可能性が高く、休場層内においても、石器の流出があったかもしれない。

第1黒色帯中の文化層

箱根産の黒羅石製と考えられる石刃1点のみのため、石器群の内容は不明であるが、分厚く、同層位から出土する石器群の特徴をそなえている。ただし、この時期の石刃は、頁岩や、黒色緻密安山岩製のものが多く、黒羅石製のものは珍しい。

第II黒色帯中の文化層

3点の僅かな量の石刃・石刃状剥片のみで、他の石器類がないため、明確に石器群の内容を述べることができない。しかし、その3点が石刃技法によって製作されていることから、焼場遺跡が立地する尾根の南側の尾根に存在する、初音ヶ原遺跡第2地点や第3地点の第II黒色帯から検出された石器群に類似した石器群であることが類推される。これらの石器群では、比較的小型の石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器を主体に、大型の石刃が多く検出されている。焼場遺跡ではこの大型の石刃のみが遺されていたと考えられる。

ブロックが検出されたのは、非常に狭い尾根上であることから、このような小規模の遺跡が、箱根山麓の小さな尾根上に多く遺されている可能性があり、これから調査においても十分に配慮しなければならないと思われる。

第Ⅲスコリア帯黒色帶Ⅰ下面検出の土坑

初音ヶ原遺跡群の13基に統いて、この焼場遺跡で2基検出されたことから、この箱根山麓では、かなり普遍的な遺構であることが予想される。現在、初音ヶ原遺跡群も、引き続き調査されているが、さらに多くの類似した土坑が検出されているようであるし、東駿河湾環状道路建設に伴って、下原遺跡や加茂ノ洞B遺跡でも同じ遺構が検出されはじめている。

これらの最新の状況によると、より上位の層を含めた断面を検出できた土坑が数例あり、それら全てが、第Ⅲ黒色帶中から掘り込まれていることが観察できるという。このことから、焼場遺跡の土坑も第Ⅲ黒色帶では観察できなかったが、掘りこまれたのは、第Ⅲ黒色帶中の可能性が高いと考えられる。

この土坑の性格等は、初音ヶ原遺跡群で発見された当初とは、立地や、分布に多くのバラエティがあることがわかりつつあるので、下原遺跡や加茂ノ洞B遺跡での成果がはっきりした時点で、検討していくたいと思う。

最後になったが、中・近世の陶磁器や土器については、当研究所の足立順司氏にご教授を受けた。いつもながら感謝いたします。なお、グラフ作成には米Delta Point社のDelta Graph PRO 3を使用した。

（参考文献）

- 三島市誌編纂委員会 1959 『三島市誌』中巻 三島市
静岡県教育委員会 1980 『静岡県歴史の道調査報告書－東海道一』静岡県文化財調査報告書20
前嶋秀強 1987 『初音ヶ原B遺跡出土の土坑について』『静岡県考古学研究』20
前嶋・鈴木他 1989 『静岡県・三島市 初音ヶ原遺跡群Ⅲ 都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
三島市教育委員会
鈴木敏中 1992 『旧石器時代の土坑』『考古学ジャーナル』9 ニュー・サイエンス社
秋本兵四 1993 『元山中遺跡』 加藤宇賀考古学研究所

付 編

焼場A遺跡の基本層序・古植生とローム層中の 土坑のしゃへい物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

目 次

Iはじめに	p. 191
II 層序の確認	p. 191～p. 201
1 調査区で認められた土層断面	
2 層序対比の手法	
3 試料の採取とその選択	
4 分析処理手順	
(1)テフラ分析	
(2)重鉱物分析	
(3)火山ガラス比分析	
5 分析結果	
(1)テフラ分析	
(2)重鉱物組成	
(3)火山ガラス比	
6 層序対比	
III 古植生の推定	p. 201～p. 203
1 目的	
2 試料	
3 分析方法	
4 基本土層での植物珪酸体の産状	
5 古植生について	
IV 土坑1底部での植物珪酸体の産状	p. 203～p. 206
1 目的	
2 試料	
3 分析方法	
4 結果	
5 考察	
<引用文献>	p. 206

—図表類一覧—

- 表1 基本上層試料デフラ分析結果
表2 基本土層試料重鉱物分析および火山ガラス比分析結果
表3 基本上層試料の植物珪酸体分析結果
表4 土坑1試料の植物珪酸体分析結果

- 図1 基本上層柱状図と分析試料
図2 基本土層の重鉱物組成および火山ガラス比
図3 基本土層の植物珪酸体組成
図4 土坑1の植物珪酸体組成

- 図版1 試料中のスコリア、軽石、重鉱物および火山ガラス
図版2 植物珪酸体

焼場A遺跡の基本層序・古植生とローム層中の 土坑のしゃへい物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

I はじめに

三島市に所在する焼場A遺跡は、箱根火山西麓斜面の標高120m付近に位置する。箱根火山西麓斜面は、長い間の谷の侵食により、丘陵状の景観を呈する。この丘陵の尾根上には、旧石器時代から近世に至るまでの数多くの遺跡が認められており、焼場A遺跡もそのような遺跡の中の一つといえる。また、焼場A遺跡と谷を挟んだ南側の丘陵上には、旧石器時代の遺物が出土した下原遺跡や旧石器時代の土坑が13基検出された初音ヶ原遺跡群などが分布する。

焼場A遺跡の位置は、古代の道路である「平安・鎌倉古道」の推定ルート上に位置することもあり、表層には古道跡が検出され土器や陶磁器類が出土している。その下位の土層からは、縄文時代早期を中心とする縄文土器が出土し、同時期とされる土坑も検出されている。さらに下位のいわゆるローム層中からは3層準にわたって旧石器時代の遺物が出土しており、その最下位の遺物包含層のさらに下位より土坑が検出された。

本報告は、これららの遺物や遺構の年代の検証を目的として、発掘調査によって認められた土層について自然科学的手法を用いた分析調査を行った結果である。また、旧石器時代を中心とした古植生に関する解析も行う。さらに、最も下位より検出された土坑について、覆土を分析することにより、その機能用途に関する考察を行う。

II 層序の確認

1 調査区で認められた土層断面

焼場A遺跡では、第2地点とされた箇所において良好な土層断面が作成された。本遺跡の位置する箱根西麓地域の上層は、愛鷹南麓地域で認められている土層の状況に類似しており、そこで設定されている分層にほぼ従うことができる。本分析の対象とした第2地点においても、愛鷹南麓地域の層序に対比された以下のような分層（基本土層とする）が行われている。

地表直下の表土の下位には、栗色土層（Ku）、富士黒土層a（FBa）、富士黒土層b（FBb）が堆積し、それより下位にいわゆるローム層が認められている。表土の中部には、平安・鎌倉古道と考えられる硬質部が確認され、FBaは、縄文時代早期の遺物を中心とする縄文時代の遺物包含層となっている。また、FBb上面は縄文時代早期の遺構検出面である。

ローム層は、上位より休場上層（YL_u）、休場中層（YL_m）、休場下層（YL I）、第0黒色帶（BB 0）、第Iスコリア層（Sc I）、第I黒色帶（BB I）、ニセローム層（NL）、第II黒色帶（BB II）、第IIスコリア層（Sc II）、第III黒色帶（BB III）、第IIIスコリア層スコリア1（Sc III s 1）、第IIIスコリア層黒色帶1（Sc III b 1）までが分層、対比されている。

これらのうち、YL_u、BB I、BB IIの各層より旧石器時代の遺物が出土し、Sc III b 1の下面に土坑

の検出面がある。Sc III b 1より下位は、愛鷹南麓地域との対比が明瞭ではなく、①層～⑫層までの分層がなされている。これらのうち②層については、Sc III s 4に対比される可能性が指摘されている。また、⑥、⑧、⑩の各層は、愛鷹南麓地域の中部ローム層上部の指標層であるペア・スコリア層に対比されている。さらに、このスコリア層との関係から④層は、第IV～第VII黒色帶（BB IV～VII）に対比されると考えられている。

2 層序対比の手法

一般に地層の対比には、指標テフラを見だし、それを鍵層にする方法がとられる。本遺跡の地理的な位置とこれまでのテフラ分布の研究例（例えば町田・新井、1992など）から、本遺跡においてもテフラによる対比が可能であると考える。

本遺跡のKu～FBbまでの土層中には、完新世に噴出した富士山を給源とするテフラや天城カワゴ平軽石（Kg：町田ほか、1984）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah：町田・新井、1978）などの指標テフラが堆積している可能性がある。しかし、本遺跡の位置は、これらテフラの給源火山から遠いためにテフラを構成する火山碎屑物の粒径は小さくなる。そのためそれらのテフラは土壤中に混交してしまい、地層断面中にテフラ層として認められない場合が多い。このような土層中のテフラを分析により検出し（以下テフラ分析）、その降灰層準を推定する。

一方、YL_u以下のローム層にある重要な指標テフラとしては、姶良Tn火山灰（AT：町田・新井、1976）がある。ATは鹿児島県の姶良カルデラを給源とし、降灰年代は約2.1～2.5万年前と考えられている（町田・新井、1992）。これまでの愛鷹南麓から箱根西麓地域にかけての調査例では、ほぼNL中に認められていることが多い。また、以前当社が行った愛鷹南麓でのローム層の分析において、YL_u中にもATとは異なるテフラが検出されている。このテフラは、層位と碎屑物の特徴から立川ローム層最上部ガラス質火山灰（UG：山崎、1978）に対比される可能性が指摘された。これに類似するテフラは、富士山東麓でも記載されており（遠藤・鈴木、1980）、UGに対比される可能性が高いといわれている（鈴木ほか、1987）。なお、UGの降灰年代は約2万年前とされており、浅間火山軽石流期のテフラである可能性が高いと考えられている（町田・新井、1992）。ATもUGも細粒の火山ガラスからなるためにローム層中では、肉眼で認められることは少なく、土壤中に混交するこれらのテフラ由来の火山ガラスの産状を調べる（以下火山ガラス比分析）ことにより、降灰層準を推定する。

さらに、ローム層の対比には、指標テフラに加えて重鉱物組成の層位的変化（以下重鉱物分析）を合わせて対比の鍵に用いるのが有効な方法である。特に武藏野台地の立川ローム層では対比試料が比較的多いため有効な手段となっており、相模野台地や大宮台地においても資料が蓄積されつつある。箱根西麓から愛鷹南麓地域にかけては、まだ対比資料は少ないが、当社が分析を行った愛鷹南麓の資料との対比が可能である。

3 試料の採取とその選択

層序対比試料の採取は、上層断面の良好な第2地点で行った。試料は、Kuから④層までは厚さ5cmで連続して採取し、⑤層から⑨層までは、各層1～2点を自安に適宜採取した。試料には、上位より試料番号を付け、④層の最下位の試料は試料番号60、⑨層の最下位の試料は試料番号70である。

これらのうち、KuおよびFBb上部まではテフラ分析の対象とし、試料番号2から1点おきに試料番号10まで5点を選択した。試料番号10以下のFBb上部以下については、重鉱物分析の対象として各層につき1点ずつ計18点を選択した。火山ガラス比分析の対象としては、UGに対比される可能性のあるテフラの検出が予想される層準であるFBb上部からYL_m上部までの試料番号10～16を1点おきに4点を

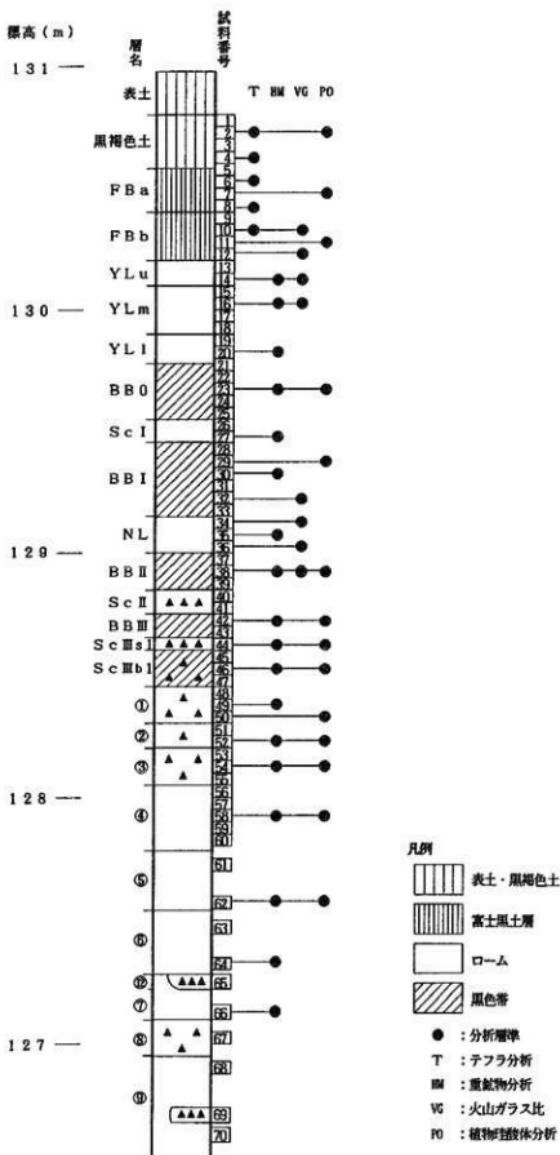


図1 基本土層柱状図と分析試料

選択し、ATの検出が予想される層準であるBB I下部からBB II中部までの試料番号32～38を1点おきに4点を選択した。

以上の試料の採取層準と分析に供した試料は、分析結果を示した図1にまとめた。

4 分析処理手順

(1)テフラ分析

試料は、適量を蒸発皿に取り、泥水にした状態で超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂を尖体顕微鏡下で観察、スコリア・軽石・火山ガラスの特徴や含まれる量の多少を定性的に調べる。

(2)重鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16 mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4 mm～1/8 mmの砂分をポリタングステト（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

(3)火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の碎屑物を250粒を計数し、碎屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉱物にいれ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

5 分析結果

(1)テフラ分析

スコリア、火山ガラス、軽石の産状およびその特徴を表1に示す。スコリアは、最上位の試料番号2に微量認められるのみである。その産状から、これを対比指標とすることはできない。火山ガラスは、試料番号2に少量、それ以下の試料には微量認められる。試料番号2に認められる火山ガラスは、無色透明で中間型および軽石型を呈する。試料番号4では、これらの火山ガラスに無色透明および褐色を呈するバブル型火山ガラスが混在する。試料番号6以下では、バブル型火山ガラスのみである。軽石は、試料番号2に少量認められ、それより下位の試料中には微量かまたはほとんど認められない。試料番号2に認められる軽石は、最大径約1.5 mm程度、白色で発泡が良好、角閃石や斜方輝石の斑晶を包有する。

上記の試料番号2に認められる火山ガラスと軽石は、その特徴および産状からKgに由来する可能性が高い。その降灰層準は、本分析結果からは明瞭に求めることはできない。およそ、Ku中部付近であろうと考えられる。試料番号4以下に認められる火山ガラスは、その特徴から、ATおよびK-Ahに由来する火山ガラスが拡散したものと考えられる。K-Ahについては、テフラ分析の対象とした層位の中に降灰層準があると予想したが、本分析結果からは推定することができない。

(2)重鉱物組成

全層準を通じてカンラン石が最も多く、その層位の変化も比較的顕著である。カンラン石は試料番号16に顕著な量比の極小層準が認められ、試料番号49にも極小層準がある。また、試料番号30には極大層準が認められる。さらにカンラン石では、試料番号44や試料番号58でそこを境として変化傾向が変わる。

斜方輝石と単斜輝石の両輝石は、試料番号27以下の層準ではカンラン石とほぼ逆の変化傾向を示す。

表1 基本土層試料チラ分析結果

層名	試料番号	スコリア			火山ガラス			軽石		
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調	形態	量	色調・発泡度	粒径
K u	2	+	B·sg>R·b	1.5	++	c l	nd, pn	++	w·g	
	4	-			+	c l, br	bw, md, pn	+		
F B a	6	-			+	c l, br	bw	+		
	8	-			+	c l, br	bw	-		
F B b	10	-			+	c l, br	bw	+	w·sb	0.5

凡例 - : 含まれない、+ : 微量、++ : 少量。

B : 黒色 R : 赤色 W : 白色

g : 良好 sg : やや良好 s b : やや不良 b : 不良

最大粒径はmm

c l : 無色 b r : 褐色

b w : バブル型 m d : 中間型 p m : 軽石型

表2 基本土層試料重鉱物分析および火山ガラス比分析結果

試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	重鉱物同定粒数	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	同定粒数
10								10	2	2	236	250
12								14	11	0	225	250
14	85	31	11	0	7	116	250	17	21	1	211	250
16	42	24	4	0	3	177	250	14	2	0	234	250
20	105	27	12	1	4	101	250					
23	111	34	21	0	12	72	250					
27	157	43	13	0	9	28	250					
30	184	25	11	3	7	20	250					
32								164	1	4	81	250
34								158	0	3	89	250
35	131	58	14	3	9	35	250					
36								111	2	2	135	250
38	146	50	10	0	7	37	250	125	0	2	123	250
42	156	39	11	0	4	40	250					
44	152	36	19	0	6	37	250					
46	126	48	15	0	28	33	250					
49	99	79	24	0	8	40	250					
52	125	50	35	0	11	29	250					
54	124	46	27	0	8	45	250					
58	170	28	18	0	5	29	250					
62	160	31	18	0	7	34	250					
64	156	43	17	0	9	25	250					
66	166	36	19	0	0	29	250					

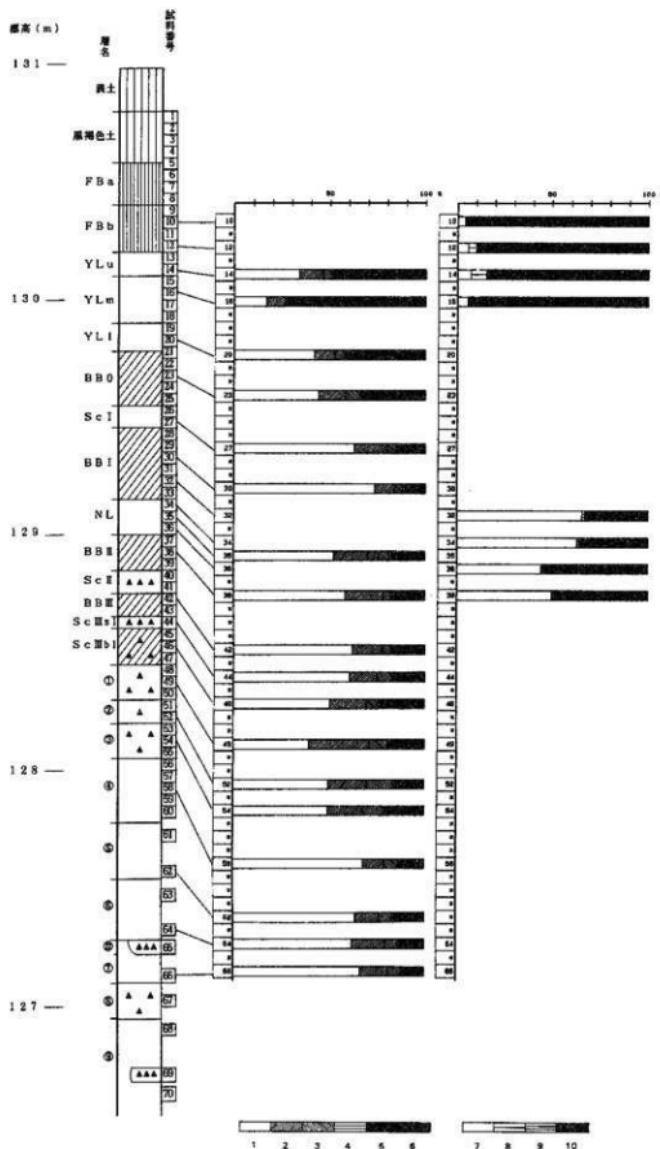


図2 基本土壤の重続物組成および火山ガラス比

試料番号52以下では、斜方輝石に対する單斜輝石の量比が高くなる。

試料番号27から上位に向かっては「その他」とした粒が増加し、試料番号16で極大となる。この層位での「その他」は、鏡下の観察からカンラン石の風化した褐鉄鉱が非常に多い。

(3)火山ガラス比

試料番号10～16には、少量のバブル型火山ガラスと中間型火山ガラスが認められる。このうち、バブル型火山ガラスの方は、層位的な変化が認められないことから、おそらくATの拡散したものであると考えられる。これに対して、中間型火山ガラスは、試料番号12と14に濃集する傾向が読み取れる。この火山ガラスは、その形態と産出層準から、これまでの研究例においてUGに対比されると考えられてきたテフラに由来する可能性が高い。降灰層準もおよそ試料番号14付近のYLu下部に推定される。

試料番号32～38には、バブル型火山ガラスの濃集が認められる。試料番号38より下位では、概査により、バブル型火山ガラスが極端に少なくなることを確かめた。このバブル型火山ガラスは、その産出層準と形態からATに由来すると考えられる。一般に、土壤中に特定のテフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い（早津、1988）。これに従えば、本地点におけるATの降灰層準は試料番号38付近と考えられるが、現場所見ではNL下部にATが復讐されている。したがって、詳細な降灰層準の認定には、議論の余地が残されるが、BBⅡ上部からNL下部にかけての層準にATの降灰層準があることは間違いない。

6 層序対比

KuからFBbまでは、明瞭な指標テフラの降灰層準を認めることができなかったので、詳細な層序対比を行うことはできない。ただし、Ku中部付近にKgの降灰層準が考えられることから、Ku中部以上は、約2800～2900年前以降の堆積層であると考えてよい。

YLu下部には、UGに対比される可能性のあるテフラの降灰層準が推定されることから、YLu下部の堆積年代は約1.2万年前頃と考えられる。したがって、YLu上部からFBaまでの土層は、1.2万年前以降2800年前以前の堆積であることは確実である。YLMは、中部にあるカンラン石の極小と「その他」の極大が対比指標となり、愛鷹南麓のYLM中部とほぼ確実に対比できる。YLⅠ～ScⅠまでは、指標テフラ、重鉱物組成ともに対比の指標となるものは見出せないことから堆積年代の推定および愛鷹南麓との詳細な対比はできない。

BBⅠでは、カンラン石の極大が、愛鷹南麓との対比指標になる。愛鷹南麓ではBBⅠ下部からNL上部にかけてカンラン石の極大層準となっていることから、本遺跡のBBⅠは、ほぼ愛鷹南麓のBBⅠに対比される。また、近接する下原遺跡においてはBBⅠの土壤中の炭素分の放射性炭素年代測定により約2万年前の値が得られている。下記のATとの層位関係も考慮すると、本遺跡のBBⅠの堆積年代もおよそ2万年前頃と考えられる。

NLおよびBBⅡは、ATの降灰層準から愛鷹南麓のNLおよびBBⅡにほぼ対比され、その堆積年代も約2.1～2.5万年前の間にに入る。上述の下原遺跡においては、同様の測定が行われたBBⅡの放射性炭素年代が約2.5万年前の値が得られている。この年代は、本遺跡のBBⅡの年代としても矛盾はない。

ScⅡ以下の層については、試料番号44と試料番号49のカンラン石の量比の変化が対比指標となる。当社による愛鷹南麓の分析例では、試料番号44のようなカンラン石の量比の変化はScⅢs1に認められ、本遺跡とほぼ対比される。また、①層にある試料番号49のような極小は、愛鷹南麓の例では、ScⅢs4に認められている。前述のように現場所見では、本遺跡の②層がScⅢs4に対比されるとされているが、その対比について検討する余地がある。③層以下では、特に対比指標は見出せない。ただし、試料番号58に認められるカンラン石の量比変化と両輝石の少なさおよび單斜輝石の斜方輝石に対する量比の多さ

表3 基本土壤試料の植物生駆体分析結果

種類(Taxa)	試料番号	2	7	11	23	29	38	42	44	46	50	52	54	58	62
イネ科葉部短胞生駆体 キビ族(その他)ササ属	5	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケアシ族(マサササ属)	3	-	1	2	-	-	-	4	2	2	1	-	-	1	-
タケアシ族(マサササ節) タケアシ族(その他のササ節)	25	29	13	9	2	15	-	-	7	6	21	2	41	22	26
タケアシ族(マサササ節) タケアシ族(その他のササ節)	187	138	225	227	56	227	82	63	74	204	190	184	218	194	-
ウイチゴツナ族 ウイチゴツナササ属	5	1	3	2	-	1	5	4	2	3	-	-	-	-	-
ウイチゴツナ族 ウイチゴツナササ属	6	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明ヒゲババ型 不明ヒゲシチク型	23	6	4	5	3	7	7	4	4	3	-	1	1	1	-
不明ヒゲシチク型	45	25	15	5	6	6	-	8	12	12	7	11	9	-	-
不明ヒゲシチク型	21	12	1	5	5	7	5	2	4	7	2	6	8	6	-
イネ科葉身機動網胞生駆体 キビ族	3	3	-	6	7	12	14	5	8	-	-	1	-	-	-
タケアシ族(マサササ属)	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケアシ族(マサササ節) タケアシ族(その他のササ節)	34	87	20	6	18	52	37	26	46	62	20	69	50	142	-
タケアシ族(マサササ節) タケアシ族(その他のササ節)	51	66	51	40	45	24	27	33	25	36	36	23	39	61	-
ウシクサ族 シバ属	17	12	10	26	15	28	39	24	40	7	-	1	2	7	-
不明	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
4	15	21	26	28	14	18	14	16	8	1	10	17	6	-	-
合計	321	211	263	255	71	268	108	80	101	248	206	239	261	236	-
イネ科葉部短胞生駆体 検出個数	112	183	102	104	113	130	135	102	135	113	57	104	108	216	-
イネ科葉身機動網胞生駆体 検出個数	433	394	365	359	184	398	243	182	236	361	263	343	369	452	-
組織 樹木(IV)	6	2	2	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	3	-

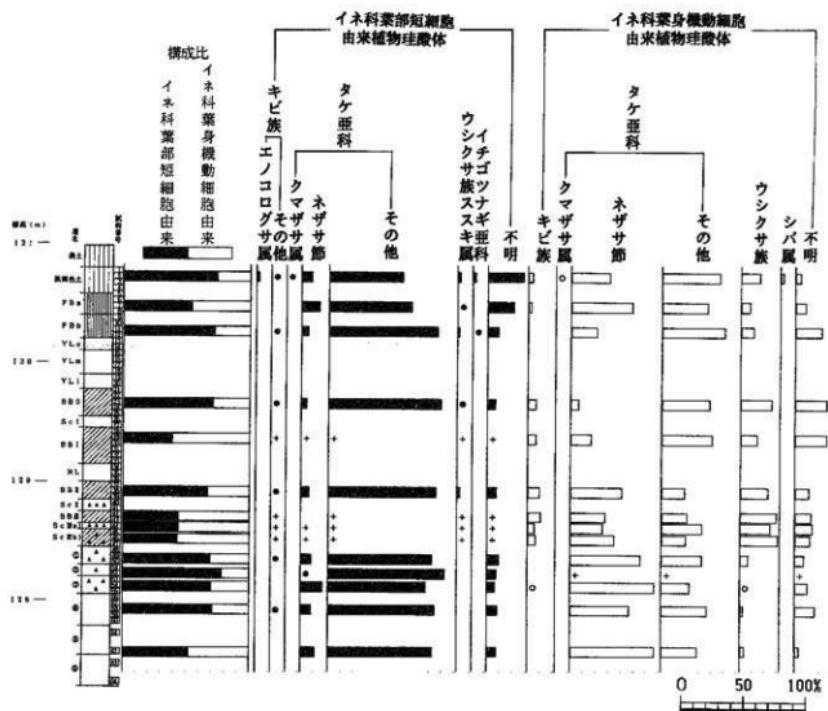


図3 基本土層の植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+はイネ科葉部短細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料で出現した種類を示す。

などの重鉱物組成の傾向は、当社の愛鷹南麓の BB VI～中部ローム最上部にわたる分析例において、BB VIIと中部ロームの層界付近に認められている。したがって、④層は上部ローム層最下部に対比される可能性が高い。

III 古植生の推定

1 目的

古植生の推定に最も有効な手法は、堆積物中の花粉化石の産状を調べることである。しかし、今回の分析の対象としている黒色帯やローム層は、これまでの知見から花粉化石が酸化などで消滅あるいは破壊している可能性が大きい。一方、花粉と同様に古植生を推定する手がかりとなる植物珪酸体は、酸化等に比較的強いといわれ、黒ボク土層やローム層中からも検出されている。そこで、本報告では、旧石器時代前後の古植生変遷について植物珪酸体分析により考察を行う。

2 試料

旧石器時代前後の古植生変遷に関する調査では、基本土層より採取された試料から、土坑検出面である SC III b 1 と①層との境界を挟んでその前後の黒色帯を中心に14点の試料を選択した(図1)。

3 分析方法

試料中の植物珪酸体は、湿重約5 gについて過酸化水素水(H_2O_2)・塩酸(HCl)処理、超音波処理(70W、250 KHz、1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行って分離・濃集する。これを適度に希釈し、カバーグラス上に滴下して乾燥させる。ブリュウラックスで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

出現傾向からイネ科植物相の変遷を検討するために、植物珪酸体組成の層位的变化を図化した(図3)。各種類(Taxa)の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。なお、検出個数が短細胞珪酸体では200個未満、機動細胞珪酸体では100個未満の試料については組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず出現した種類を+で示すとした。

4 基本土層での植物珪酸体の産状

検出された植物珪酸体の種類とその検出個数を表3、植物珪酸体組成の層位的变化を図3に示す。

試料番号44・42・38・29を除いて、植物珪酸体のなかでは短細胞珪酸体の検出個数が多く、機動細胞珪酸体はわずかに認められるだけである。試料番号44・42・38・29では、機動細胞珪酸体の検出個数が多い。保存状態は、両珪酸体ともに不良であり、表面に多数の小孔(浴食痕)が生じている。

植物珪酸体組成には、下位から上位にかけて変化が認められる。試料番号62(SC III b 1下の⑤層)～試料番号50(SC III b 1下の①層)では、タケア科が多産し、この中では特にネザサ節の機動細胞珪酸体の出現率が高い。この他、ウシクサ族がわずかに、キビ族が稀に認められる。また、試料番号62では樹木に由来したと思われる植物珪酸体もわずかに認められる。この植物珪酸体は、近藤・ピアソン(1981)

の第IVグループに類似する。

その上位の試料番号46 (SC III b 1層) ~ 試料番号38 (BB II層) では、下位と同様にタケ亜科が多産するが、ウシクサ族の機動細胞珪酸体の出現率が高くなり、ウシクサ族スキ属の短細胞珪酸体も認められる。また、試料番号46では前述の樹木に由来したと思われる、近藤・ピアソン (1981) の第IVグループに類似する植物珪酸体もわずかに認められる。

試料番号29 (BB I 層)・試料番号23 (BB 0 層)・試料番号11 (FBb 層) では、ネザサ節の出現率はやや減少する。試料番号29・試料番号11では、前述の樹木に由来したと思われる、近藤・ピアソン (1981) の第IVグループに類似する植物珪酸体もわずかに認められる。試料番号11では、イチゴツナギ亜科がわずかに産出する。試料番号7 (FBa 層) と試料番号2 (黒褐色上層) ではネザサ節の出現率が再び高くなる。また、試料番号2ではイチゴツナギ亜科がわずかに産出し、キビ族エノコログサ属、タケ亜科クマザサ属、シバ属がわずかに認められるようになる。両試料からは、前述の樹木に由来したと思われる、近藤・ピアソン (1981) の第IVグループに類似する植物珪酸体もわずかに認められる。

5 古植生について

検出された植物珪酸体の保存状態は不良であった。また、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科植物と比較して風化に強く、また生産量が多い点がこれまでの研究から指摘されている (近藤、1982; 杉山、1986)。したがって、植物珪酸体の残存する割合の低い土壤中でもタケ亜科の植物珪酸体が残留することが考えられ、タケ亜科が生育していた割合を過大に評価する可能性が高い。そのため、検出された種類以外の植物も生育していた可能性がある。しかしながら、少なくとも検出された種類は生育していたと思われる。

この点を考慮して、本調査区近辺の植物珪酸体の産状から旧石器時代前後の植生、特にイネ科植物相は考えると次のようになる。

SC III b 1 下の⑤層～SC III b 1 下の①層では、タケ亜科、ウシクサ族、キビ族が生育していたと思われる。タケ亜科の中では、ネザサ節の生育する割合が高かったのかもしれない。ウシクサ族の仲間には、草原や原野などの乾いた場所に生育することの多いスキヤや湿润な場所に生育することの多いコブナグサ属、オギがある。本遺跡が、尾根上に立地することから、このウシクサ族は乾いた場所に生育するスキ属に由来するものと思われる。したがって、これらの層が堆積した間にはスキ属も生育していたと思われる。

また、SC III b 1 下の⑥層では、樹木に由来したと思われる、近藤・ピアソン (1981) の第IVグループに類似する植物珪酸体もわずかに認められた。この植物珪酸体は、ツツジ科、モクレン科モクレン属、ブナ科シノキ属・スダジイ属の葉部に多く形成されるが、検出された植物珪酸体から由来した植物を判断することはできない。しかし、これらの樹木のどれかが生育していた可能性が考えられる。

ネザサ節は地面に光の射す開けた場所に生育し (室井、1960)、スキ属は原野などの開けた場所に生育することが多い。また、前述のように樹木が生育していた可能性もある。これらの点から、調査区近辺に開けた場所と林分が存在したことが考えられる。

土坑1検出面上位のSC III b 1層～BB II層の頃も、下位と同様にタケ亜科 (ネザサ節を含む)、キビ族、ウシクサ族 (スキ属) が生育していたと思われる。また、ウシクサ族機動細胞珪酸体の出現率の増加とスキ属短細胞珪酸体の出現から、これらの層の頃にウシクサ族 (おそらくスキ属) の生育する割合が高くなつたと思われる。ネザサ節やスキ属の産出から、調査区近辺に開けた場所が存在したことと考えられる。

BB I 層・BB 0 層・FBb 層でも、同様な種類が生育していたと考えられる。また、ネザサ節の出現率

はやや減少することから、ネザサ節の生育する割合が減少したと考えられる。FBb層では、イチゴツナギ亜科も生育していたのであろう。なお、BB I層やFBb層では、前述のように樹木に由来したとみられる、近藤・ピアソン（1981）の第IVグループに類似する植物珪酸体もわずかに認められた。これより、樹木の生育も考えられる。ネザサ節、スキ属、樹木の産出からは、調査区近辺に開けた場所と林分が存在したことが考えられる。

FBa層と黒褐色土層でも、タケ亜科、キビ族、ウシクサ族（スキ属）が生育していたとみられる。また、ネザサ節の出現率が再び高くなることから、ネザサ節の生育する割合が再び増えたと考えられる。また、近世の耕作土とされる黒褐色土層ではイチゴツナギ亜科の他、キビ族エノコログサ属、タケ亜科クマザサ属・シバ属も生育するようになったと考えられる。なお、これらの層では前述のように樹木に由来したとみられる、近藤・ピアソン（1981）の第IVグループに類似する植物珪酸体もわずかに認められたことから、樹木の生育も考えられる。ネザサ節、スキ属、樹木の産出からは、調査区近辺に開けた場所と林分が存在したことが考えられる。

以上のように、調査区近辺には各時期とも概して開けた場所と林分が存在したと考えられる。

IV 土坑1底部での植物珪酸体の産状

1 目的

ローム層内で検出された土坑1は、初音ヶ原遺跡群に認められた土坑群と関連した狩猟施設とみられている。狩猟施設でしゃへい物が利用されていたとすれば、土坑の底部にその痕跡が残していることが予想される。そこで、土坑底部の土壤を対象として、しゃへい物の有無を検討する。しゃへい物に草本類、特にイネ科草本類が利用された場合には、イネ科植物に由来する植物珪酸体が残留する例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社 未公表）。そのため、植物珪酸体分析を行う。

2 試料

土坑1の底部から採取された5点を全てを分析試料とした。

3 分析方法

IIIと同様の手法で行った。

4 結果

検出された植物珪酸体の種類とその検出個数を表4、植物珪酸体組成の層位的变化を図4に示す。検出される植物珪酸体の保存状態は、両珪酸体ともに不良であり、表面に多数の小孔（浴食痕）が生じている。

土坑底部では、タケ亜科が多産し、特にネザサ節の機動細胞珪酸体の出現率が高い。また、中央部で採取された試料番号3・4はウシクサ族（スキ属を含む）が高い出現率を示すが、端部より採取された試料番号1・5および中央部で採取された試料番号2では低い。試料番号2・4ではイチゴツナギ亜科、試料番号3・4・5ではキビ族がわずかに認められる。

このような組成は、基本土層と比較すれば、タケ亜科、特にネザサ節の出現率が高い点でSC III b 1下の①層以深の層に類似する。ただし、試料番号2・4ではイチゴツナギ亜科が認められる点で異なる。また、試料番号3・4ではウシクサ族機動細胞珪酸体の出現率が高く、試料番号2・3・4・5ではス

スキ属の短細胞珪酸体が認められる点で異なる。

5 考 察

土坑1の調査結果(財団法人 静岡県埋蔵文化財研究所、1993)によれば、土坑内部は底部に粘性のある黒色土が堆積し、その上位に灰褐色土・黒色帶類似土(BB IIIかSC III b 1)、BB III類似土、BB III類似の黒色土が堆積している。これらの点から、土坑1はBB IIIより掘り込まれていると推定されている。また、土坑内が人為的に埋め戻されず、長い間開口していたことが推定されている。さらに、近接する土坑2とともに狭い尾根に沿って構築されており、初音ヶ原遺跡群に認められた土坑群と関連した狩猟施設とみられている。

底部の土壌は、①層以深の層と比較して黒色が強い。土壌の色は、基本的に「腐植(土壤有機物)」、「鉄化合物」、「珪酸アルミナ」という3成分の量や混じり具合によって決まる。黒色は、主に「腐植」の含有量によって発色する。発掘調査時の所見をみると、土坑底部の土壌は①層以深の層と比較して腐植含量の高いことが予想される。この黒色の強さが植物に由来する腐植の富化を反映するものであれば、土坑底部へ腐植を供給した植物体が混入したと考えられる。

また、土坑底部ではタケ亞科、特にネザサ節の機動細胞珪酸体の出現率が高い組成が得られ、①層以深の層に類似した組成であった。ただし、①層以深の層の植物珪酸体の産状と比較して、イチゴツナギ亞科が認められた。また、スキ属の短細胞珪酸体も認められ、ウシクサ族機動細胞珪酸体の出現率が高かった。このような植物珪酸体の産状を考慮すれば、土坑底部に混入した植物体としてイチゴツナギ

表4 土坑1試料の植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体						
キビ族	-	-	1	1	1	
タケ亞科ネザサ節	19	19	17	14	49	
タケ亞科(その他)	184	213	149	177	143	
ウシクサ族スキ属	-	7	4	5	1	
イチゴツナギ亞科	-	1	-	-	1	
不明キビ型	2	6	13	7	4	
不明ヒゲシバ型	4	8	14	5	7	
不明ダンチク型	4	7	8	6	5	
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
キビ族	-	-	9	5	1	
タケ亞科ネザサ節	78	51	41	64	92	
タケ亞科(その他)	46	39	37	42	25	
ウシクサ族	1	8	21	30	5	
不明	8	12	20	25	12	
合計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	213	261	206	215	211	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	133	110	128	166	135	
検出個数	346	371	334	381	346	
組織片 (IV)						
	-	1	-	-	1	

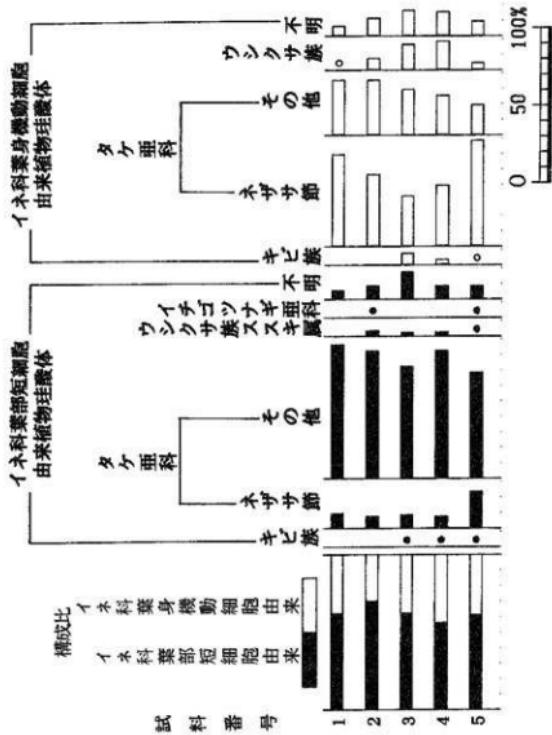


図4 土壠1の植物性壁体組成
出現率は、イネ科葉部短細胞由来とイネ科葉身機動細胞由来の総数をそれぞれ基數として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

唯科とウシクサ族（特にススキ属）が考えられる。ただし、検出された植物珪酸体の保存状態は不良であり、これ以外の植物が混入していた可能性も否定できない。

考古学的な所見により土坑1が狩獵施設とされることを考慮すれば、上坑底部の植物体は狩獵施設である穴を隠すためのしゃへい物として利用され、上坑内に落ち込んだものである可能性がある。

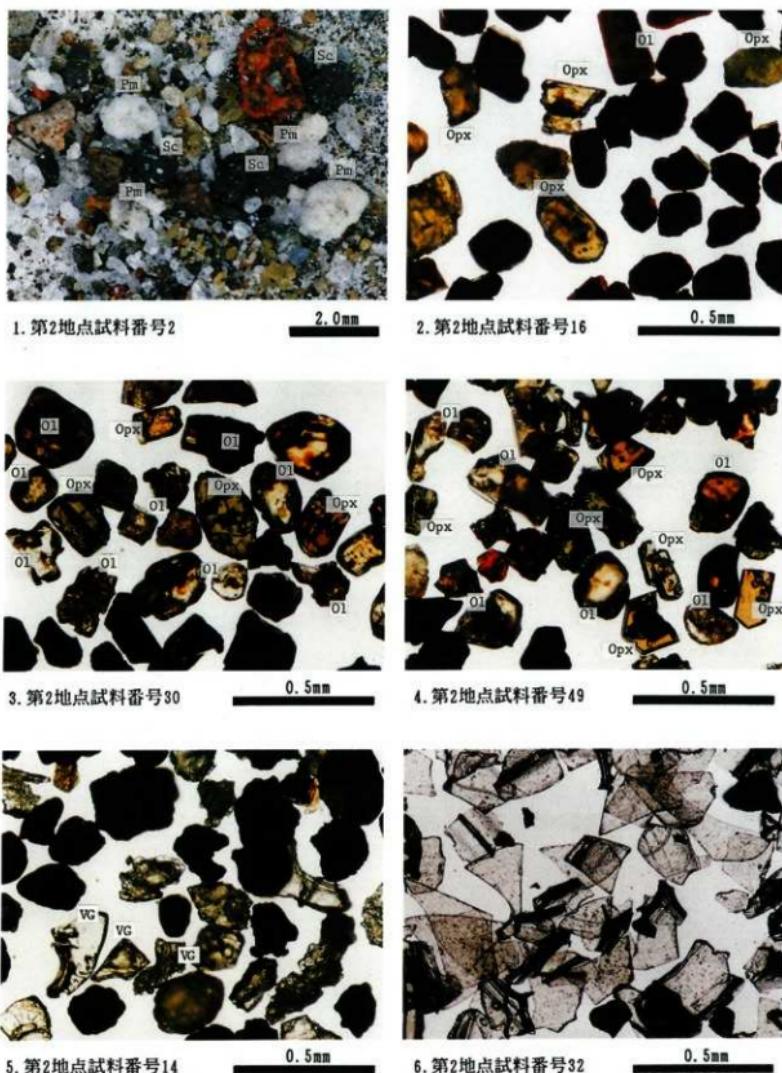
ウシクサ族、特にススキ属は前述のように原野などの比較的開けた場所に生育する。また、イチゴツナギ亞科にはウシノケグサ族、カラスムギ族、コヌカグサ族などの種類が含まれ、現在では原野や湿地など様々な場所に生育している。ススキ属と共に産することから、このイチゴツナギ亞科は原野に生育する種類であったと思われる。これらのことから、狩獵施設のしゃへい物として周囲に生育する植物を利用したことが窺える。

狩獵施設とされる陰穴状土坑内に、しゃへい物の痕跡が認められる例は少なく、しゃへい物として用いられた植物の種類を調査した例も少ない。例えば、諏訪市露が峰高原のローム台地に立地するジャコツバカラ遺跡（五味ほか・印刷中）では、縄文時代とされる陰穴状土坑内に底部に炭化物を多量に含む腐植質の屑が認められ、クリなどの樹木の他にヨシ属やコブナグサ属などのイネ科植物が産出した。特に、台地上に構築した土坑に低地に生育するイネ科植物を利用しておらず、しゃへい物の利用が周囲の植物にとどまらなかったことが推定されている。このような植物の利用のされ方が、時代や地域によってどのように異なるのかが今後の課題となろう。その意味で、今回の結果は興味深いものと言える。

〈引用文献〉

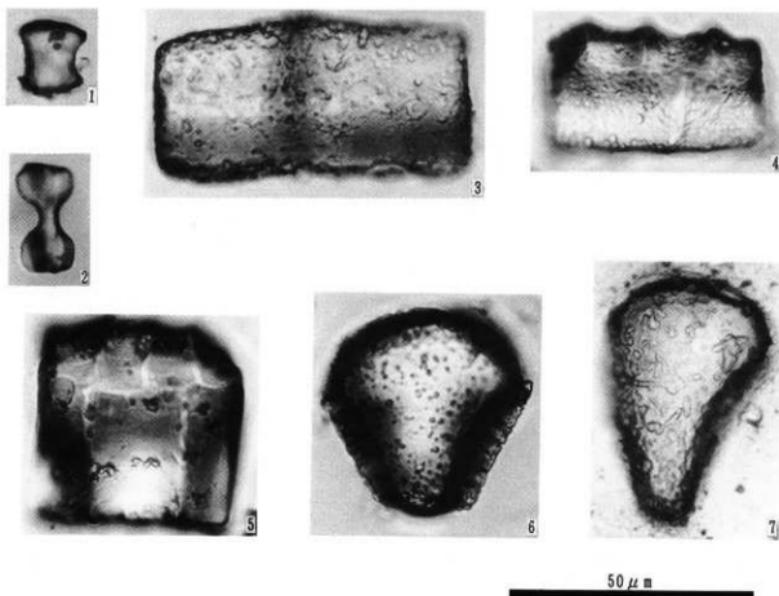
- 遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武藏野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学、13、p.19-30。
五味ほか（印刷中）
平津賛治（1988）テフラおよびテフラ性土壤の堆積機構とテフロクロノジー——ATにまつわる議論に關して。考古学研究、34、p.18-32。
近藤継一（1982）Plant opal分析による黒色腐殖層の成因究明に関する研究。昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書、32p。
近藤継一・ピアソン女子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について。帯広畜産大学研究報告、12、p.217-229。
近藤継一・佐瀬路（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究、25、p.31-64。
町田洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰—姶良Tn 火山灰の発見とその意義。科学、46、p.339-347。
町田洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラー・アコホヤ火山灰。第四紀研究、17、p.143-163。
町田洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス、276p。東京大学出版会。
町田洋・新井房夫・小田耕夫・遠藤邦彦・杉原重大（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ。渡辺竜経編「古文化財に關する保存科学と人文・自然科学」、p.865-928。
杉山真二・藤原宏志（1966）機動細胞珪酸体の形態によるタケ葉科植物の同定—古土壤推定の基礎資料として—。考古学と自然科学、19、p.69-84。
鈴木正章・山路達・二宮修治・大沢真澄・遠藤邦彦（1987）立川ローム層上部UG 火山灰の微量元素存在量とその給源火山。日本第四紀学会講演要旨集、17、p.112-113。
山崎耕輔（1978）立川断層とその第四紀後期の運動。第四紀研究、16、p.231-246。
財团法人静岡県埋蔵文化財研究会（1993）焼堀遺跡A地点 平成4年度東城河岸環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告、17p。

図版1 試料中のスコリア、軽石、重鉱物および火山ガラス



Sc:スコリア、Pm:軽石、O1:かんらん石、Opx:斜方輝石、VG:火山ガラス。

図版2 植物珪酸体



1. ネザサ節葉部短細胞珪酸体（土坑1;5）
2. ススキ属葉部短細胞珪酸体（基本土層;38）
3. ナビ族葉身機動細胞珪酸体（基本土層;38）
4. ネザサ節葉身機動細胞珪酸体（基本土層;7）
5. ネザサ節葉身機動細胞珪酸体（土坑1;5）
6. タケ亜科葉身機動細胞珪酸体（土坑1;5）
7. ウシクサ族葉身機動細胞珪酸体（基本土層;11）

写 真 図 版



(1)遺跡遠景

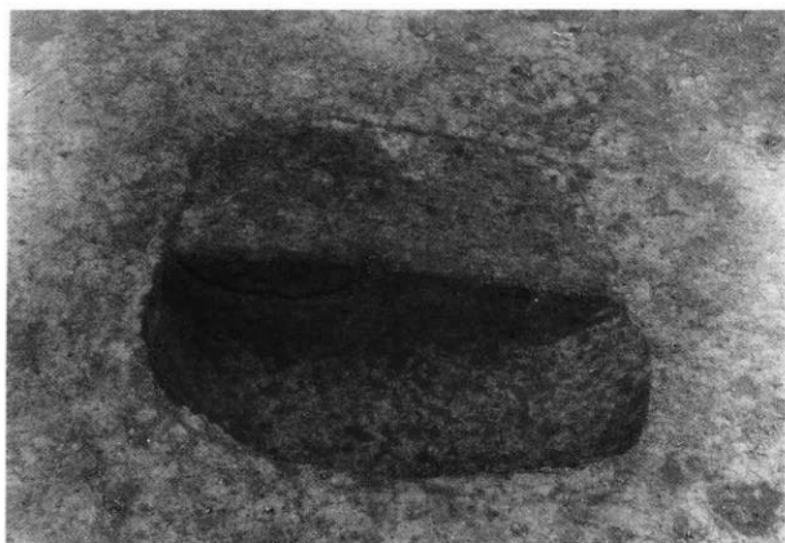


(2)調査前状況

図版 2



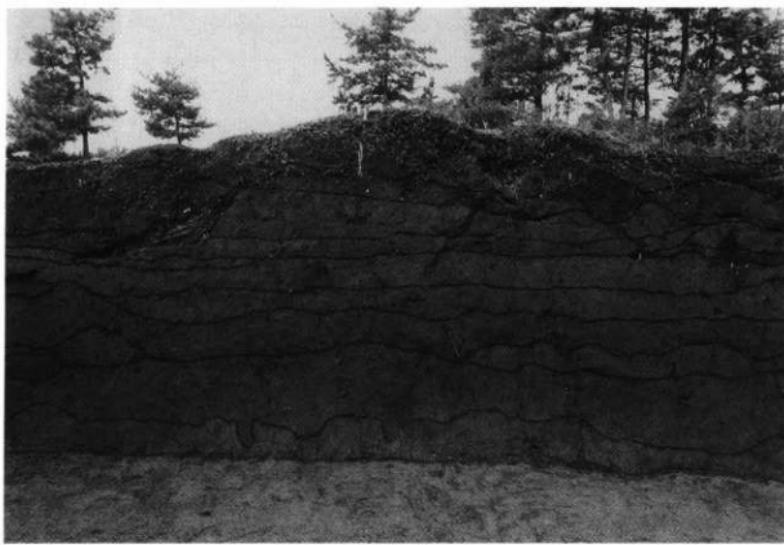
(1)馬頭鏡音（焼塔遺跡西側）



(2)中・近世土坑 2



(1)道路状造構



(2)道路状造構東側土層図

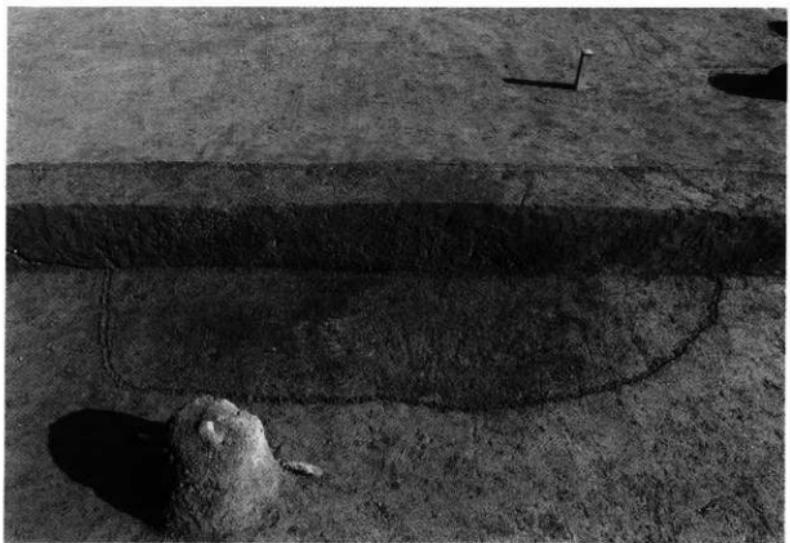
図版 4



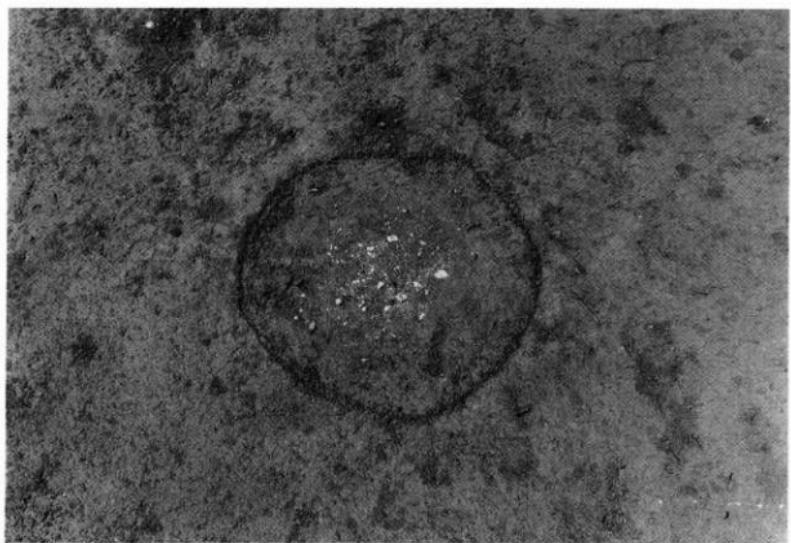
(1)道路状遺構に伴う溝状遺構検出状況



(2)道路状遺構に伴う溝状遺構



(1)中・近世焼土土坑



(2)中・近世の骨片を含むピット

図版 6



(1)縄文時代遺構完掘状況およびトレンチ掘削状況



(2)縄文時代土坑群（南斜面）



(1) 壴穴状遺構 1



(2) 壴穴状遺構 2



(1)縄文時代土坑11土層



(2)縄文時代土坑11



(1)集石遺構

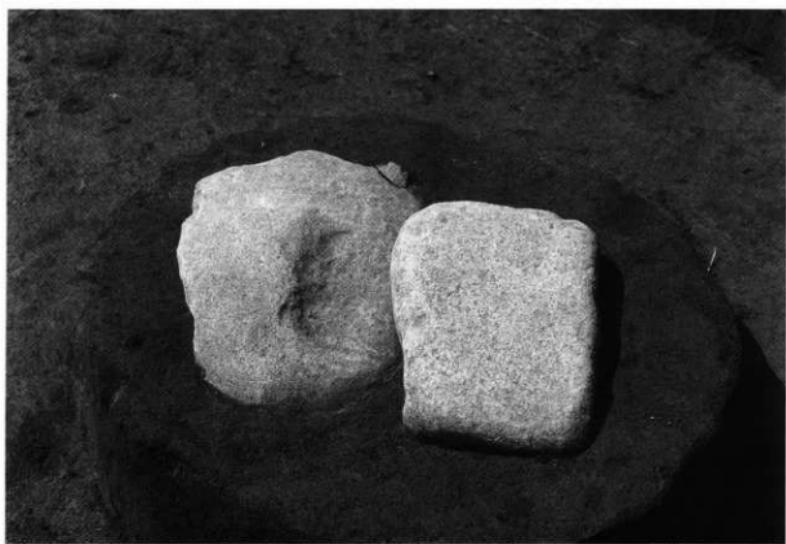


(2)集石遺構

図版 10



(1)石皿出土状況



(2)石皿出土状況



(1)縄文時代遺物出土状況



(2)石斧出土状況



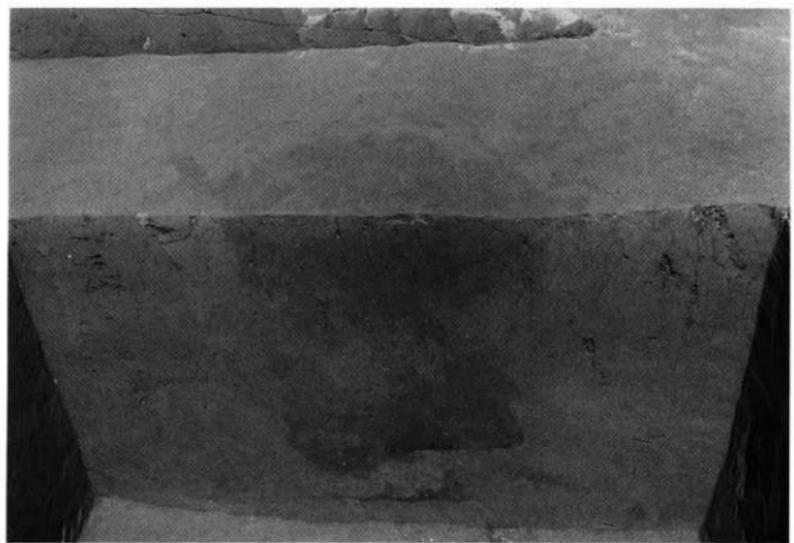
(1)倒木痕 2 土層断面



(2)倒木痕 2



(1)第Ⅲスコリア帯黒色帶1下面土坑1検出状況



(2)第Ⅲスコリア帯黒色帶1下面土坑1土層



(1) 第Ⅲスコリア帯黒色帶1下面土坑2



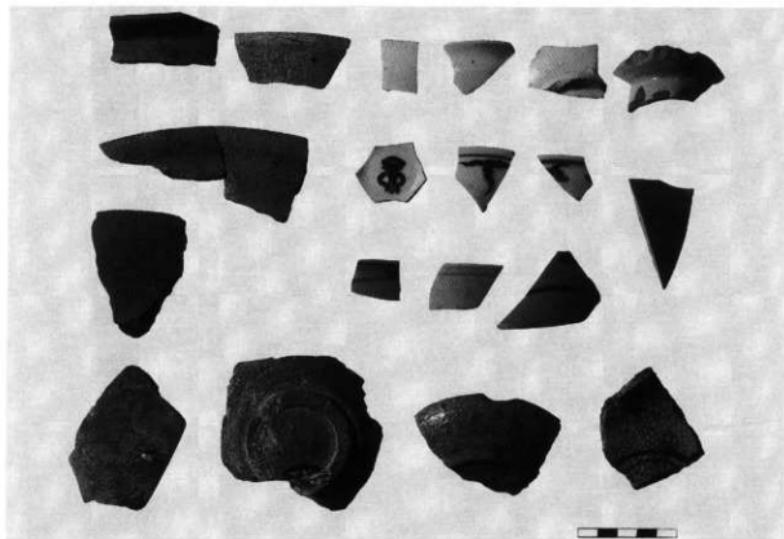
(2) 第Ⅲスコリア帯黒色帶1下面土坑配置



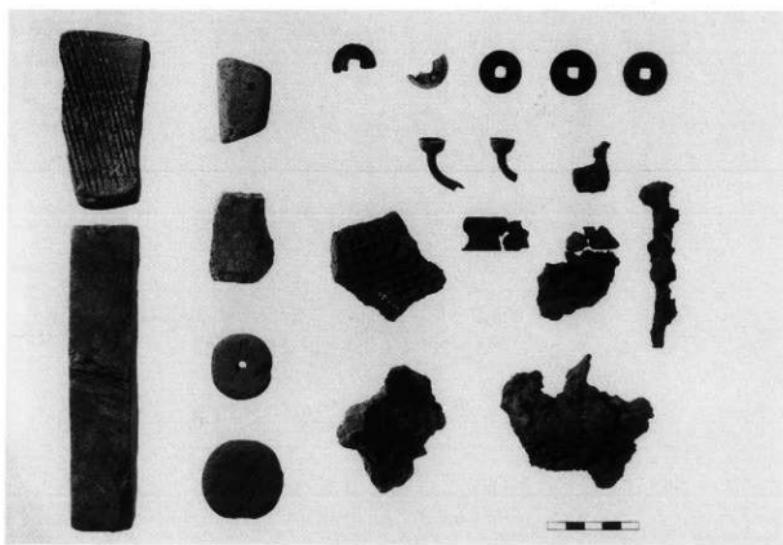
(1)第三スコリア帯黒色帯 1下面炭化物集中域



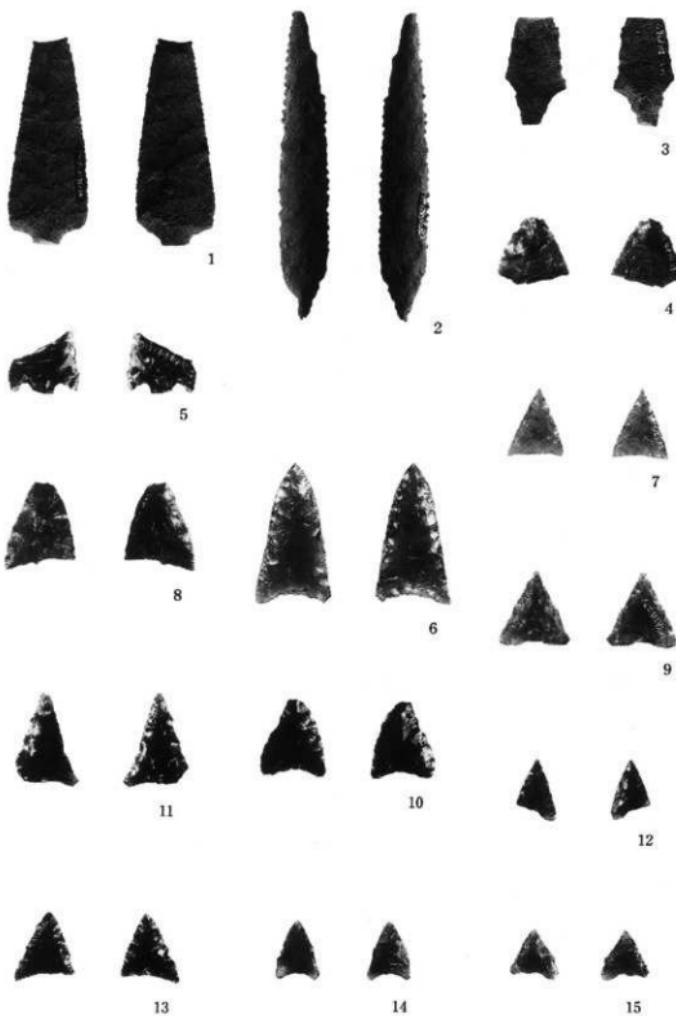
(2)中部ローム層遺物出土状況



(1)中・近世陶磁器

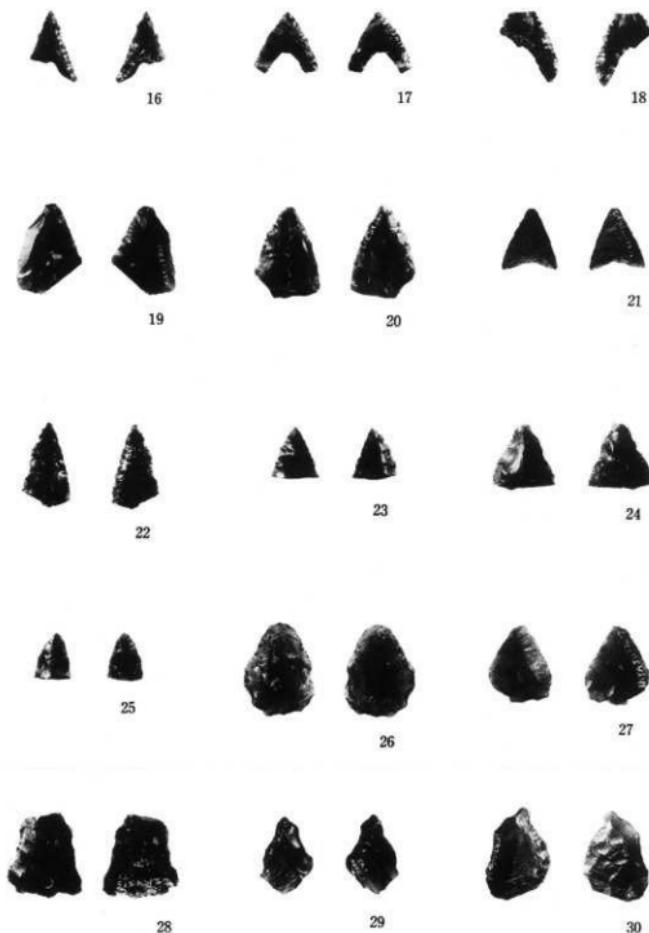


(2)中・近世遺物



有舌尖頭器・石器 1

図版 18



石鍛 2



31

32



33



34



35



36

石 七





37



38



39



40



41



42



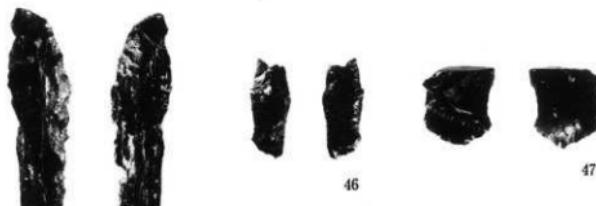
削器 1



43



44



46

47

45



48

49



削器 2



50



51



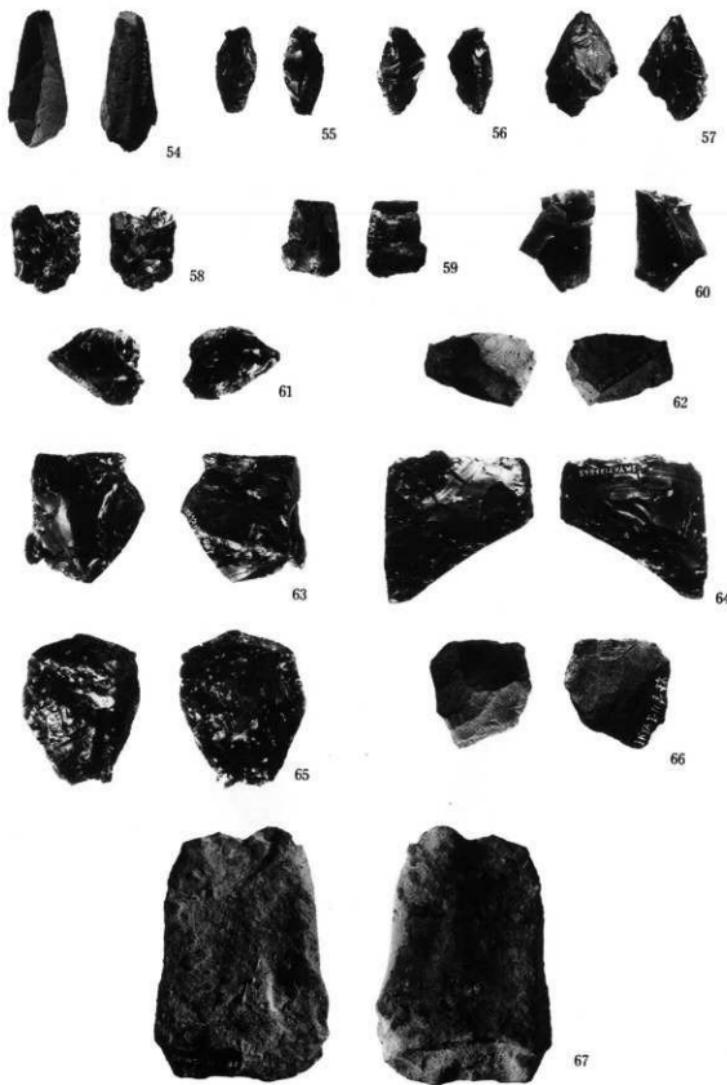
52



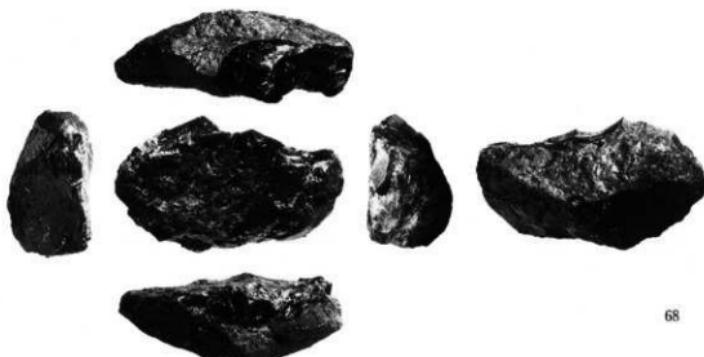
53



削器 3



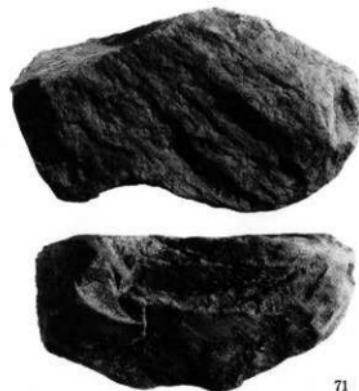
模形石器



68

69

70



71



石核



72



73



74



75

磨製石斧





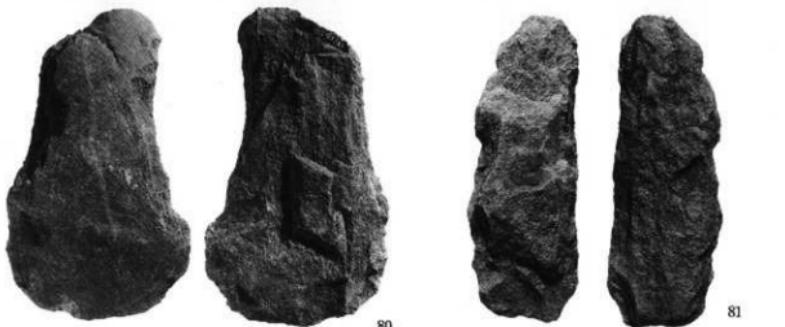
76

77



78

79



80

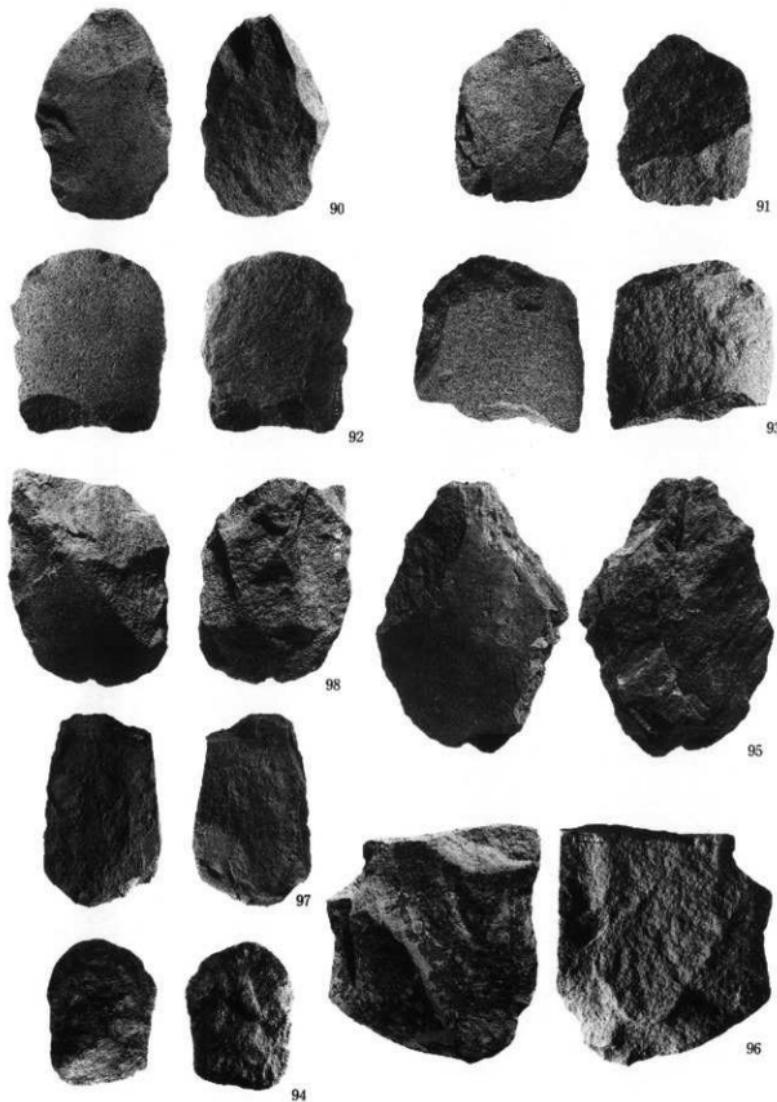
81



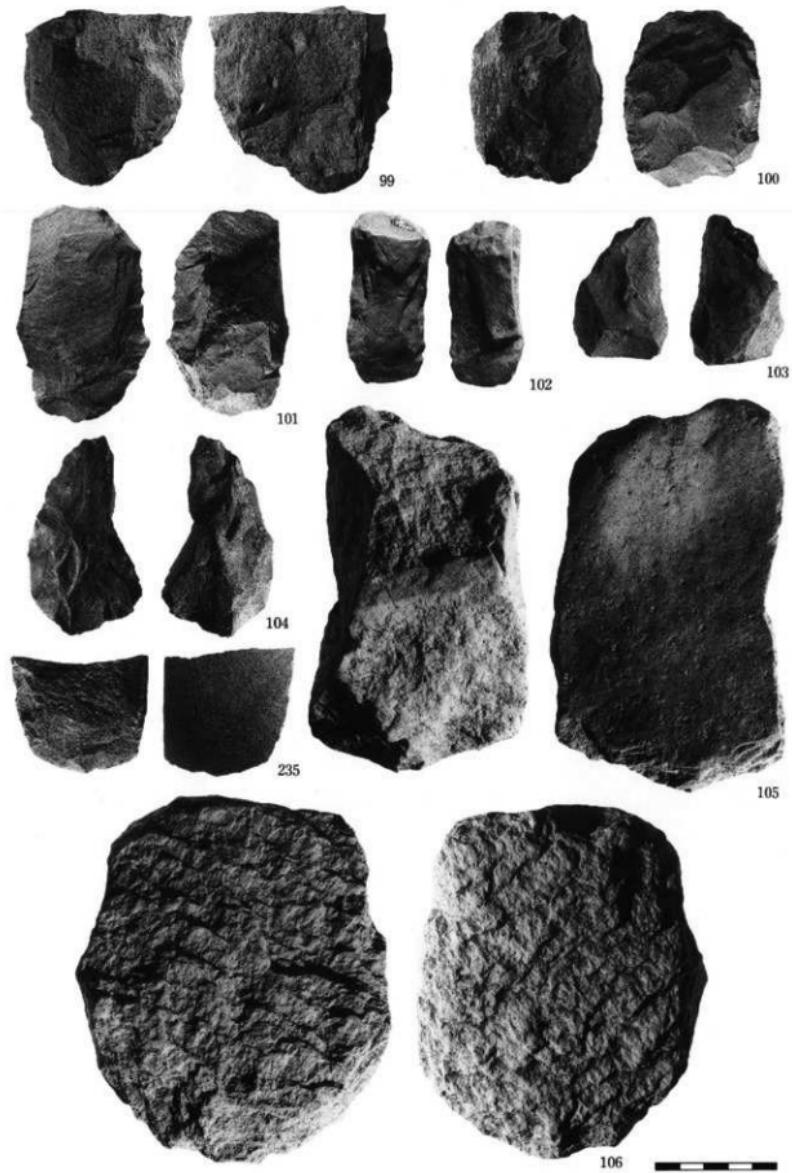
打製石斧 1



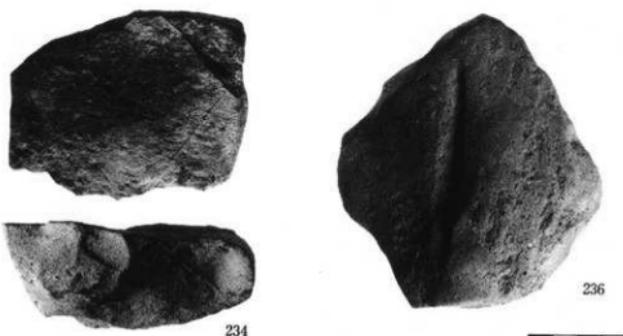
打製石斧 2



打製石斧 3

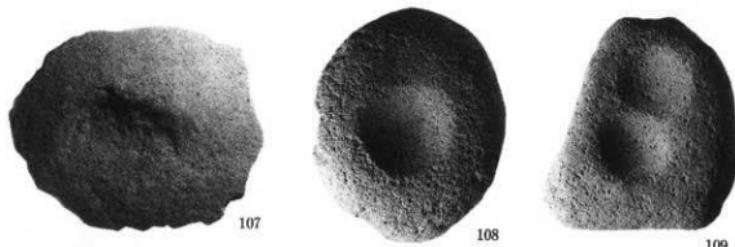


打製石斧 4・砾器



236

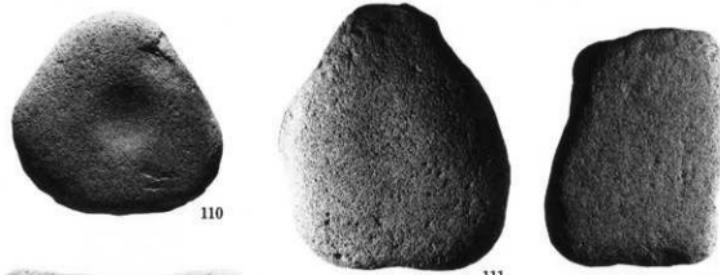
234



107

108

109



110

111

112



113



石核・磁石？・石皿 1



114



115



120



117



118



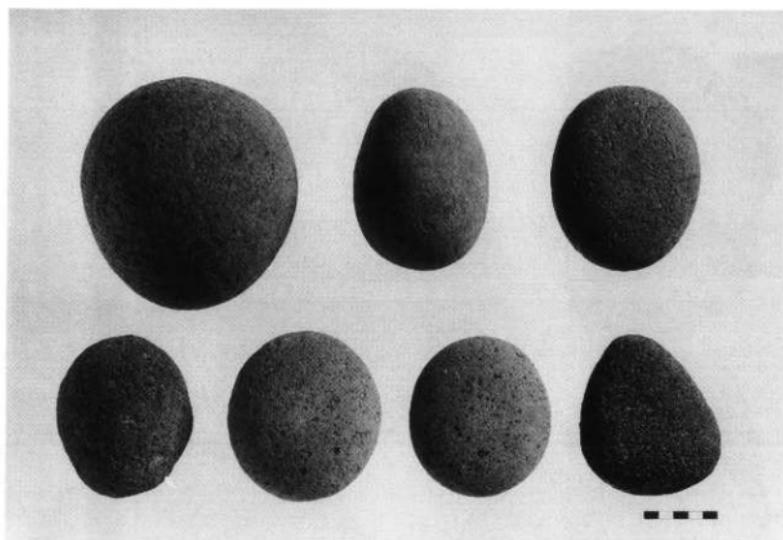
119



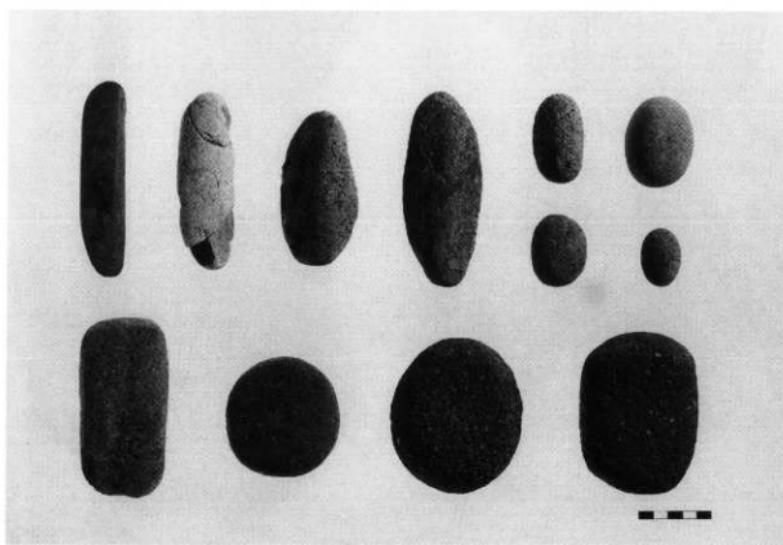
116

石皿 2

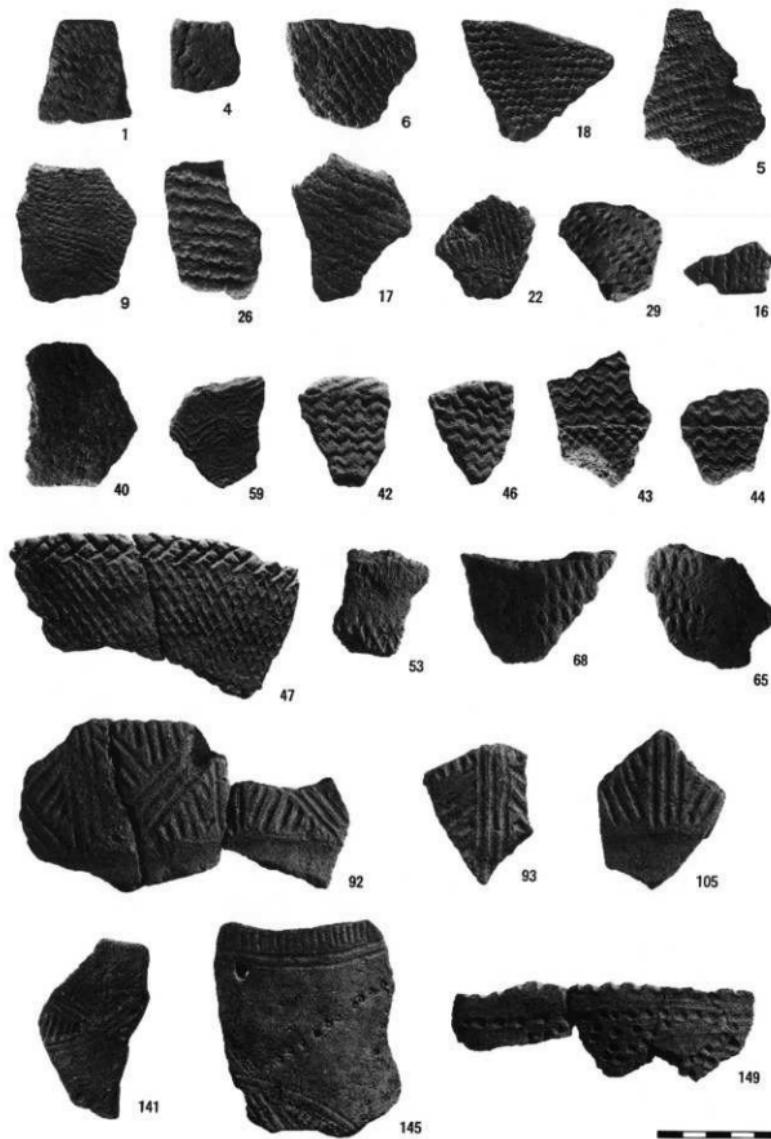




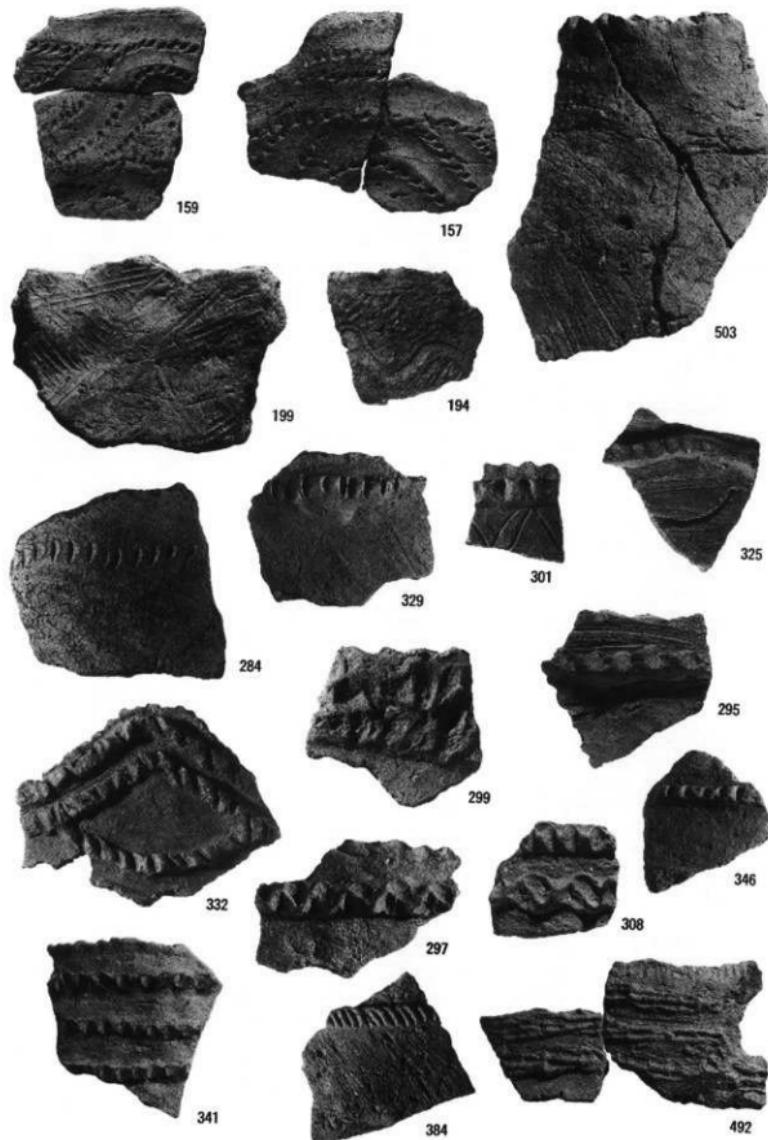
(1)磨石



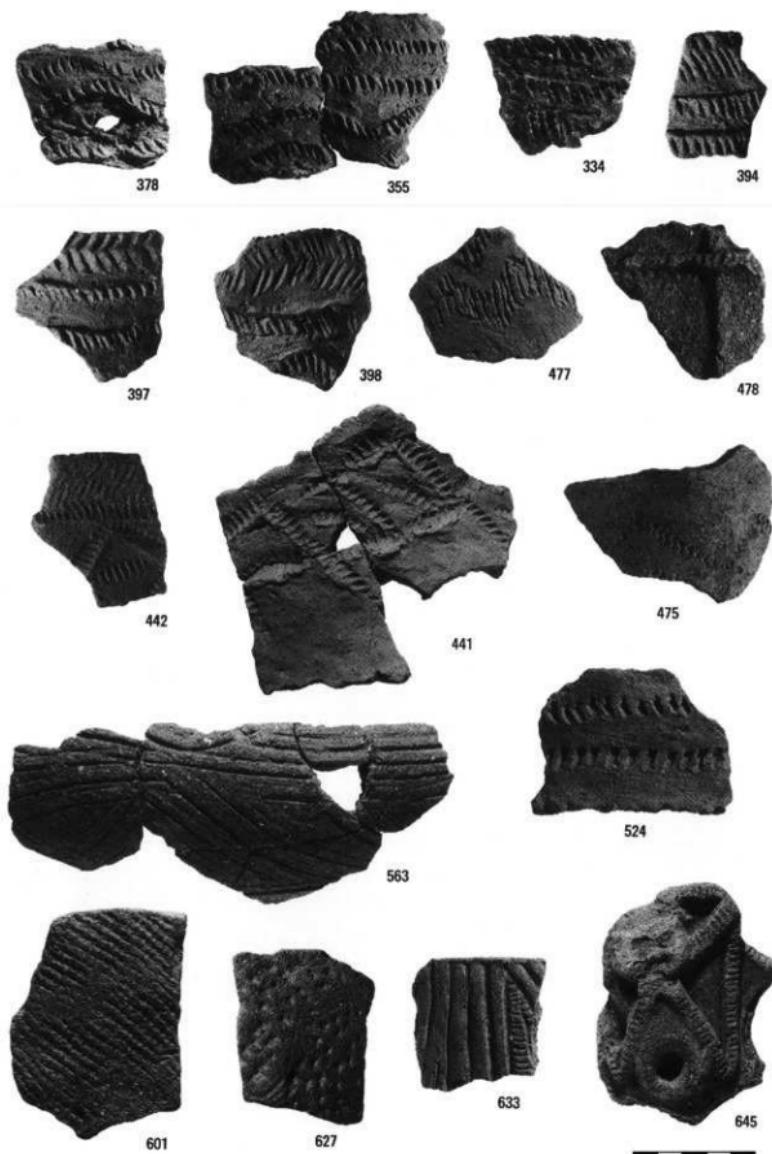
(2)磨石・敲石・凹石



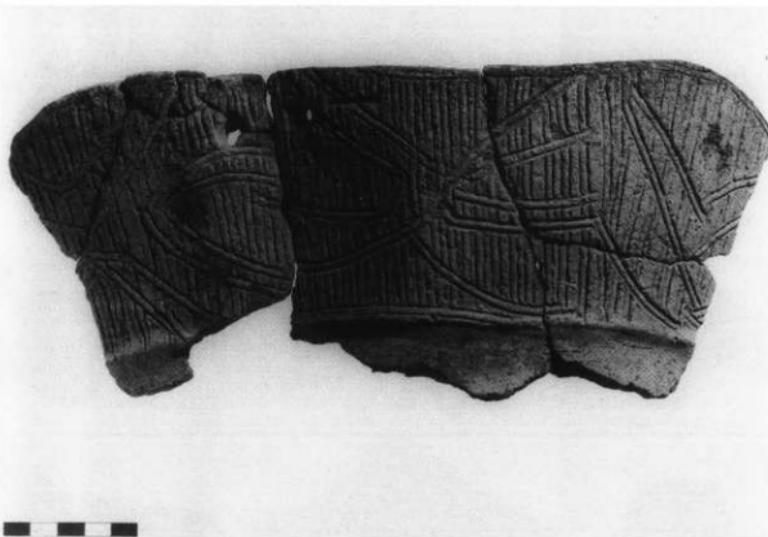
縄文土器 1



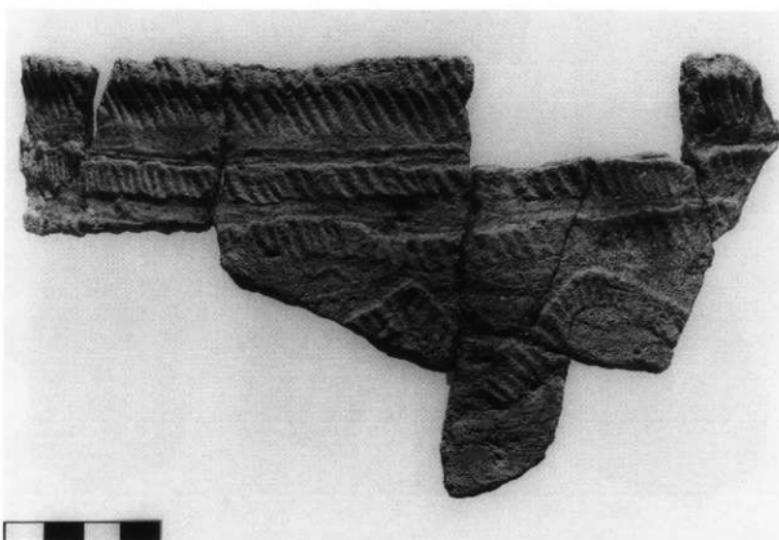
縄文土器 2



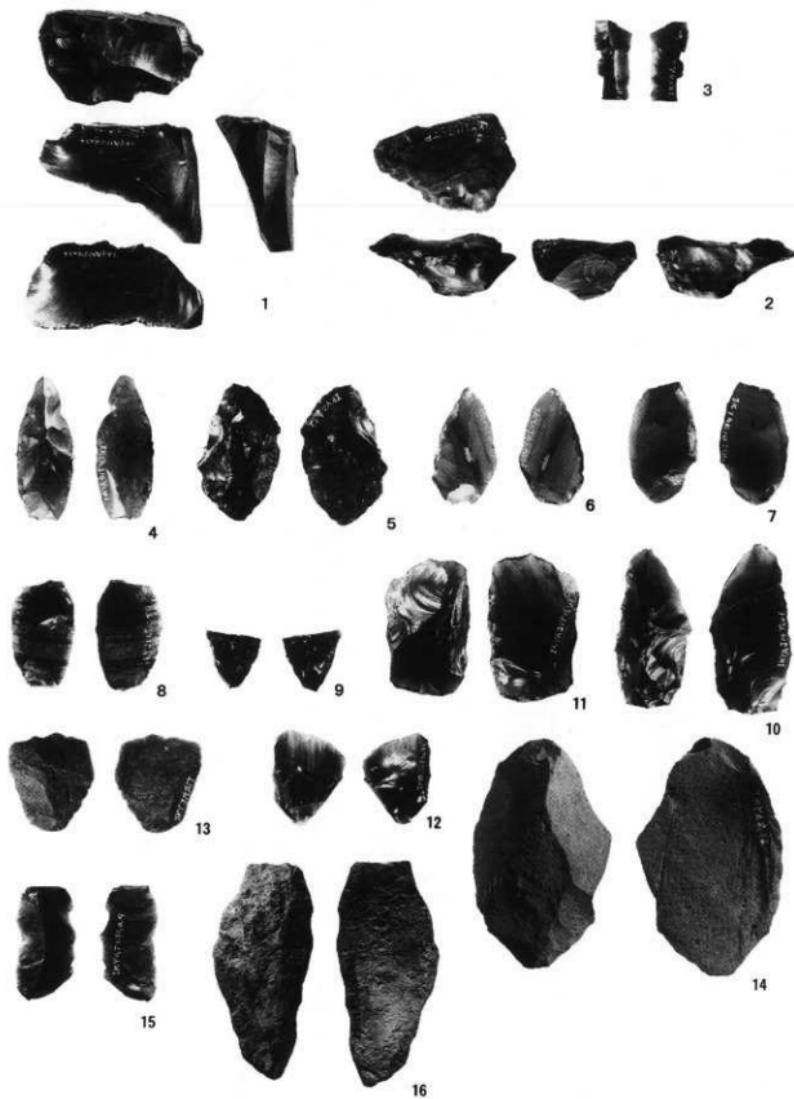
縄文土器 3



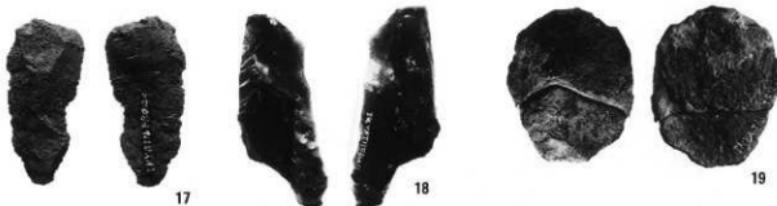
(1) 2群1類土器



(2) 3群4類土器



休場上層の石器 1



17

18

19

21

20



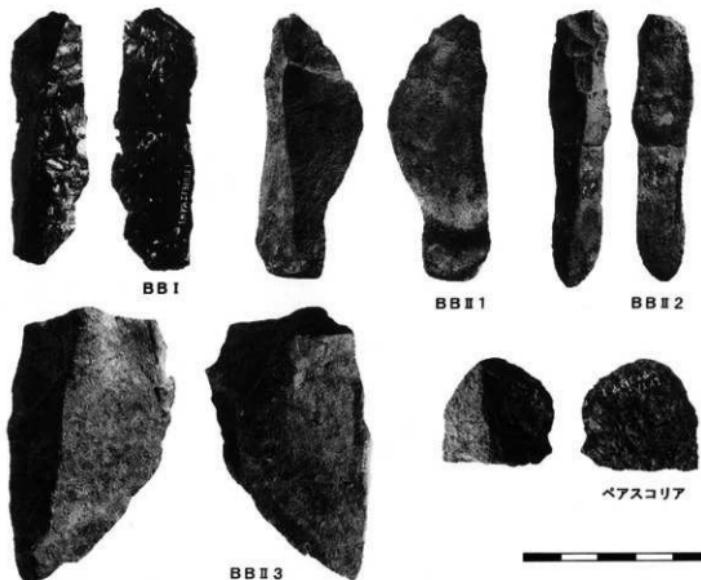
22



23

休場上層の石器 2





(1)旧石器時代の石器



(2)調査風景

報告書抄録

ふりがな	やきばいせきAちてん							
書名	焼場遺跡A地点							
副書名	平成4・5年度東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第55集							
編著者名	笹原芳郎							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒424 静岡県清水市江尻台町18-5 TEL 0543-67-1171							
発行年月日	西暦1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
焼場	静岡県 三島市 川原ヶ谷	市町村 22206	遺跡番号 155	35度 8分 12秒	138度 56分 27秒	1992年 12月1日 ～ 1993年 3月31日	3,500m ²	東駿河湾 環状道路 建設に伴 う事前調 査
所収遺跡名	種 別	主な年代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
焼場 A地点	散布地 道 路 墓	旧石器時代 縄文時代 中・近世	旧石器時代土坑 石器集中地点 縄文時代土坑 集落 道路状遺構 中・近世土坑	尖頭器、ナイフ形石 器、搔器、削器、楔 形石器、石刃、石核、 剥片、有舌尖頭器、 石鏃、石匕、磨製石 斧、打製石斧、磨石、 敲石、凹石、石皿、 土器 胸磁器、キセル			後期旧石器時代初め の土坑2基 「平安・鎌倉古道」 と推定される道路状 遺構	

静岡県埋蔵文化財調査研究報告 第55集
焼場遺跡 A地点

平成4・5年度東駿河湾環状道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994年3月31日

発行所 財團法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
TEL (0543) 67-1171㈹

印刷所 みどり美術印刷株式会社
沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL (0559) 21-1839㈹